EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03148 6020

昭和六年八月廿五日印刷
昭和六年九月二十日發行
昭和十四年四月十日再版發行

不許複製

國譯一切經 經集部 十

【定價金一圓二十五錢】

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
株式會社 大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝(三三)九四四番
(三〇)四〇番

兩角製本所 製本所

索　引

（頁數は通頁を表す）

—ア—

阿修羅 (Asura) 120
阿僧祇 (Asaṁkhyeya) 215
阿那波那 (Ana-apāna) 169
阿羅漢 (Arhān) 144
阿蘭若 (Āraṇya) 260
安浮陀 (Arbuda) 114

—イ—

一相 39
因陀尼羅(Indranīlamuktā) 6

—ウ—

有 (Bhava) 113
有爲法 (Saṃskṛta) 10
烏狗戒 65
優婆塞 (Upāsaka) 100
優婆夷 (Upāsika) 100
憂鉢羅 (Utpala) 236
優鉢羅 (Utpala) 3
鬱單越 (Uttravatti) 155

—エ—

緣覺 (Pratyekabuddha) 81
閻浮提 (Jambudvipa) 8
閻浮那陀金 140
閻摩羅使 (Yamarāja) 154
閻摩羅人 303

—オ—

應正遍知 212
陰 (Shandha) 112

—カ—

歌羅邏 (Kalala) 114
加趺 65
伽那山 (Gajasirśa) 27
伽羅 (Tagara) 83
迦迦村陀世尊 129
迦鷄檀那寶 216
迦奢 (Kāśa) 261
迦葉佛 (Kaśyapa) 164
迦曇波羅 251
迦那迦牟尼佛 140
迦那那洲 228
迦卑他 (Kapittha) 137
我所 91

戒 (Sila) 107
餓鬼 (Preta) 43
界 (Dhātu) 112
界•入•陰 13
學 169
活 117

—キ—

佉殊羅 (Khadira) 137
叫喚地獄 155
境界 5
憍薩羅 (Kosala) 261
憍奢耶 (Koseya) 236
憍慢 284
行 (Saṁskāra) 161
金波迦 123

—ク—

拘婆羅耶 224
拘物頭 (Kumuda) 236
拘物頭華 (Kumuda) 224
倶翅羅 (Kokila) 227
倶耆羅 (Kokila) 14
鳩婆羅華 (Utpala) 221
瞿耶尼 (Godhanya) 21, 157

—ケ—

袈裟 (Kasāya) 137
偈 (Gātha) 7
解脫 (Vīmuktī) 7
結跏趺坐 207
見諦 169
乾陀婆離師迦 236
乾闥婆城 (Gandharva) 232

—コ—

居戸奢 266
居奢 150
五戒 95
五種の力 57
五取陰 186
五聚陰 28
五處 122
五塵 201
五道 38
五欒 23

俟離多 (Kṛta) 187
劫 (Kalpa) 15
劫貝 125
黑繩 117
轂 59
金舒迦樹 (Kiṁśuka) 141
根 (Mūla) 7,110
根塵 18

—サ—

三惡趣 241
三有 (Toyobhavā) 35
三戒 95
三歸 95
三時 88
三種 4
三衆 133
三寶 (Tri-ratna) 102, 243
三摩提 (Samādhi) 207
三摩跋提 (Samāpatti) 10
三明 88
蹟 54

—シ—

尸棄佛 (Sikhin) 272
四取 (Gatur-prāmarśa) 40
四聖諦 107, 151
四禪 (Catur-dhyāna) 180
四大 102
思 (Cint) 144
師子國 (Siṁhala) 208
自相 168
色 (Rūpa) 113, 161
色界 (Rūpahātu) 199. 320
識 (Vijnāna) 161
實諦 101
沙門 (Samaṇaparisā) 101
奢彌 (Śamī) 137
須陀洹果 (Srota-āpanna)153
受 (Vedanā) 161
十善業道(Daśa-kuśalani) 298
十六種行 180
諸有 12
舒摩羅 (Śiśumāra) 146

正覺 (Sambodhi) 107
正見 99
正遍正智 8
正遍智 107
衆衆 (Saṃgha) 57
聲聞 (Śrāvaka) 192
淨居處 81
常想 83
心・心數 108
神通 121

—セ—

施等の三 160
刹利 161
栴檀 (Candana) 236
瞻波迦華 (Campaka) 236
善逝 (Sugata) 53

—ソ—

酥陀 (Sudhā) 143
蘇陀 (Sudhā) 42
想 (Saṃjña) 161

—タ—

大胡盧 227
斷見 278
檀越 (Dānapati) 69, 136

—チ—

癡 160
地獄 (Naraka) 43
中有 7
畜生 (Tirayagyoni) 43
沈水香 (Agarus) 236

—ツ—

頭陀 (Dhūta) 138

—テ—

泥盧槃 227
天 (Deva-sura) 122
天狗 (Ulkā) 21
轉輪王 (Cakravartirāja) 81, 159

—ト—

兜率 (Tuṣita) 8
兜羅綿 (Tūla) 21
同相 168

—ナ—

那由他 (Nayuta) 4

—ニ—

二相 39
二十八宿 (Nakṣatra) 186
尼居私帝蘇摩那華 236
尼朱羅 (Nicula) 236
膩潤 189
入 112
如來 165
忍 (Kṣānti) 56

—ネ—

涅槃 (Nirvāṇa) 101
然燈佛 (Dīpaṃkara) 159

—ハ—

波那娑 (Paṇasa) 137
波羅門 149
波梨耶多 (Paricitra) 146
波留沙 (Phalasa) 137
八功德水 55
八分道 57, 15
鉢頭摩 (Padma) 35

—ヒ—

毘葉婆如來 129
毘尼 (Vinaya) 206
毘羅 (Bimba) 137
臂釧 3
比丘 (Bhikṣu) 101
比丘尼 (Bhikṣuni) 101

—フ—

福田 227

—ホ—

菩提 (Bodhi) 192
法 (Dharma) 7
弗婆提 159
梵 (Brahmā) 56

—マ—

摩伽羅 (Makara) 146
摩鳩羅 227
曼陀羅 (Mandārava) 142
末香 236
曼陀羅華 (Mandārava) 224

—ミ—

彌那魚 47
彌勒 (Maitreya) 161
名 (Nāmān) 113
名色 (Nāmarupa) 260
命々 (Jivajivaka) 222

—ム—

無記 187
無色界(Ārūpadhatu) 31
牟修樓陀 3
無明 166

—モ—

妄語 299

—ヤ—

夜摩天 3

—ユ—

由旬 (Yojana) 3

—ヨ—

欲 (Rajas) 43

—ラ—

羅睺 186
羅睺羅 120
羅刹 (Rakṣasa) 104

—レ—

棟樹 87

—ロ—

漏 (Aśrava) 81
六時 62
六識 29
六天 285
六波羅蜜 215
六欲天 120

—經集部十索引終—

40

國譯一切經

大東出版社藏版

LIBRARY
MAY 27 1995
UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

經集部十

山邊習學譯

目次

（本丁）（通頁）
正法念處經國譯に際して（略解題）……（一―二）……一
正法念處經（至七十卷中自卷第四十至卷第五十五）（一―三〇八）……五
卷の第四十……（一―二二）……三
觀天品之十九 夜摩天之五……三
卷の第四十一……（二三―四二）……二四
觀天品之二十 夜摩天之六……二四
卷の第四十二……（四三―六〇）……四四
觀天品之二十一 夜摩天之七……四四
卷の第四十三……（六一―七九）……六三
觀天品之二十二 夜摩天之八……六三
卷の第四十四……（八〇―九八）……八三
觀天品之二十三 夜摩天之九……八三
卷の第四十五……（九九―一一七）……一〇一
觀天品之二十四 夜摩天之十……一〇一
卷の第四十六……（一一八―一三七）……一二〇
觀天品之二十五 夜摩天之十一……一二〇

巻の第四十七……〔一三八——一五六〕……一四〇
觀天品之二十六 夜摩天之十二……一四〇
巻の第四十八……〔一五七——一七五〕……一五九
觀天品之二十七 夜摩天之十三……一五九
巻の第四十九……〔一七六——一九五〕……一七八
觀天品之二十八 夜摩天之十四……一七八
巻の第五十……〔一九六——二一三〕……一九八
觀天品之二十九 夜摩天之十五……一九八
巻の第五十一……〔二一四——二三一〕……二一六
觀天品之三十 夜摩天之十六……二一六
巻の第五十二……〔二三二——二五〇〕……二三四
觀天品之三十一 夜摩天之十七……二三四
巻の第五十三……〔二五一——二六九〕……二五三
觀天品之三十二 夜摩天之十八……二五三
巻の第五十四……〔二七〇——二八八〕……二七三
觀天品之三十三 夜摩天之十九……二七三
巻の第五十五……〔二八九——三〇八〕……二九一
觀天品之三十四 夜摩天之二十……二九一

◇ ◇

索引……卷末

正法念處經國譯に際して（略解題）

一、解題を造る便利上「正法念處經」七十卷を四册に纒めた中、第二、第三、第四、第一の順序にて刊行することゝした。第一册は一卷より二十一卷までを含み、地獄、餓鬼、畜生の三道を描き、天帝釋と阿修羅との戰鬪記事に終りを告げてゐるが、本經の特色を尤も發揮してゐる部分である。第二册は第二十二卷から第三十九卷を含み、四王天（第二十卷より第二十四卷）と三十三天（第二十五卷より第三十五卷）と夜摩天（第三十六卷より第三十九卷）を廣說し、第三册は本書で、第四十卷より第五十五卷（前册には第五十五卷の五を脫し第五十卷となつてゐる。校正の誤りである。）を含み、全部を夜摩天に費してゐる。第四册は第五十六卷より終りの第七十卷までにて、夜摩天に加へて、身念處を詳述してゐる。

一、本經の思想的立場は全く小乘教であるが、その文體が豐麗と雄渾を極めてゐるので、その表現の生彩潑剌たる、描寫の深刻なる、全體的に、その表現樣式に於いて、小乘の「華嚴經」と云つても差支へはないであらう。之が爲めに針の袋を脫する如く、時には小乘の殼を破つて大乘の壘を摩せんとするの觀がある。（その例證に就いては第二册の略解題を參照せよ）。

一、今少しく本册に表はれた注意すべき諸項をあぐれば

第一に、天上界と人間界との修善者の相互思慕を述べることである。「天中は乃ち是れ人の善道にして、人中は乃ち是れ天の善道なり。」それ故に「天の退く時は、人の善道を悕ひ、人の死する時は、天の善道を悕ふ」（第四十四の半頃）（第四十七卷初の部分天人互に相願ふ文あり）のであるといふ。同じ輪廻の巷とは云へ、他趣にありては佛道を學ぶことは出來ないが、此二界はいつも佛法を聞思することが出來るからである。かやうにして生天の因としては「深く佛法を信じ、心を攝めて寂靜なるものは天上に生れる」等（四十一卷の終りに近い長偈中）をあげ、又婬欲のことを聞いても心に止めないものは夜摩天に生ずるこ

とを説く(五十三卷の半ば過ぎ)。

第二に比丘の墮落の原因として十三をあげ、第四十八、第四十九卷に亘りて詳述しゐるが、多語の言說を喜ぶこと、病を治めること、畫をかくこと、讃詠、占相、權力者(王等)に近づくこと等であるが、これ等の比丘の所行に關しては修道上の立場から痛切にその世俗化を批判し、純一なる修道と反省に還らしめんと椽大の筆を振つてゐる。そして是は其儘當時の佛教界の現狀の描寫であると云ふべきであらう。

第三に第五十四卷の初めから夜摩天王となるべき地上の王者の三十七法をあげ、一、軍衆の淨潔、二、法に依る賦稅、三、忍を懷くこと、等であるが、所謂帝王道を廣說したのである。尙ほそれにつゞいて種々なる王道を說いて佛教より見たる政治の根本を示してゐる。

其他天の九種退相(五衰の廣說)(第四十卷初)、次に同じやうなものとして天の五羞恥(第四十四卷の初の部分)、又佛塔に表はるゝ地獄相(第四十七卷初)及び彌勒佛の教化を受くる記錄(第四十八卷初)等は特色とする所である。

卽ち本經のテーマとする所は、存在に卽する愛欲相を描いて、そこに內容として盛らるゝ變異と苦惱相を描き、佛陀在世の弟子達の如き修道を勸めてゐるのであるが、夫にも係らず上述の如き王道を詳說すること等から察すると、比丘の隱遁的修道と佛教の世間化との關係に於いて未だ消化し切れないものがあることを示してゐると思ふ。

昭和六年七月中旬

譯者　山邊習學　識

正法念處經

卷の第四十

觀天品之十九

夜摩天之五

牟修樓陀[一]夜摩天王[二]は是の如く呵責し、既に呵責し已はりて、復無量百千の天衆と共に皆悉く彼の赤優鉢羅[三]より相ひ隨ひて出で、餘の山峰に向ふ。其の峰を名けて一切觀察と曰ひ、五百由旬[四]なり。七寶もて流水・河池を莊嚴り、園林の衆華を鳥の衆もて莊嚴り、無量種の功德ありて具足す。牟修樓陀夜摩天王は遊戲して快樂を受けんと欲するが爲の故に、彼の山峰に上るに、一切觀察の妙寶の山峰は種々に愛すべし。所謂、其の根に妙へなる水池にありて名けて愛見と爲す、山峰を圍遶り。彼の池の中に於て角峰と名くるありて水中に出在たり。七寶もて節と爲し、節は臂釧[五]の如く彼の七寶の節には勝れし光明ありて、狀豎き臂の如く、五百由旬なり。又其の頭上に七節の拘欄周匝てあり。所謂七とは、一に金の拘欄、二に銀の拘欄、第三の拘欄は是れ毗瑠璃、第四の拘欄は則ち是れ青寶、第五の拘欄は則ち是れ硨磲、第六の拘欄は赤蓮華寶、第七の拘欄は金剛妙寶なり。是の如く諸の寶以て間錯を爲す、是の如き等の妙へなる寶の拘欄ありて之れを圍遶く。周匝の端嚴にして甚だ愛すべき處には、多くの天衆あり、天女の衆多し。第一の妙へなる色にて愛すべき音聲なり。是の如くに莊嚴り、是の如くに殊妙なり。爾の時、天王牟修樓陀は多くの天衆、多くの天女の衆乃至無量百千の衆と共に、是くの如きと共に一切觀察の山峰の所に到り、既に往き到り已り、彼の山峰の諸の天衆を見已はりて、偈を說きて言はく。

【一】牟修樓陀。夜摩天主なり。
【二】夜摩天(Yama, puvama deva)。欲界の第三天にして、又焔天と云ひ、時分と譯す。能く時分を知りて五欲の樂を受くるに由る。
【三】優鉢羅(Utpala)。青蓮華と譯す。
【四】由旬(Yojana)。俞旬・揄旬・由延・踰闍那とも書く。新譯には踰繕那とあり。里程を計る稱目なり。帝王一日の行軍の里程にして、或は四十里と云ひ、或は三十里と云ふ、(唐の里法にては六町を一里とす)。他說には四里・五里・九里又は十八里とも云はれる。
【五】臂釧。臂の環、らでわなり。

夜摩の一切處の此の高さ皆を擧げしが如くにて、恒に一切の時に、諸の天衆多饒し。光明端正なる山は七寶の莊嚴する所にして、清淨なる流水あり、蓮華の池ありて遶る。園林甚だ愛すべく、諸の鳥、鹿多饒く、此の峰池中より出でて、極めて高く虚空を穿てり。此處の天常に樂しみて、天鬘にて自ら莊嚴り、歌舞して心に歡喜び、天女極めて甚だ多し。五樂の音は愛すべくして、觀る者心に樂見む。此の峰は甚だ樂しむべくして、周匝は光明にて圍まる。作せし所の善業の[六]三種の持戒の因を以て、天衆此の峰に依りて遊戲し快樂を受く。我れ久しく此の峰に依りて遊戲して諸の樂しみを受く。此れは是れ欲樂の地にて、善業の化せし所なり。此處の凡ての癡なる天は、已に退き今生まることあり。放逸を行ふ衆生は、羊の屠者に殺さるゝ如く自ら死して覺知らず。羊の如くに怖畏れず。若し天、死を覺知らんとせば、應に放逸を行ふべからず。

牟修樓陀夜摩天王是の如く既に一切觀察の妙へなる山峰を見已はり、多くの無量百千億數[七]那由他の天・諸の天女の衆の種々の境界を見て心意に樂しみを受く。諦かに諸天の業の果報を見已はり、復諸天の放逸なる行ひを行ふを觀るに、愛の爲に漂はされて未だ厭足ことを知らず。諸欲の熾火に燒然せらる。既に是の如く愚癡なる天を見已はり憐愍を生じ已はりて、爲に偈を說く。復更に前みて一切觀察の山峰の中に入りて、自らの業にて樂しみを受く。定まりし業に牽かされて、心搖らぎ動くが故に、復百千の諸の天女の衆と是くの如く相ひ共に彼の樂しき處に入る。彼處の舊天、既に天王牟修樓陀を見、即便ち奉迎す。空に住する者あり、衆の香を以て自ら身を塗る者あり、鳥の背の堂の中に在りて住する者あり。天子と共に前みて牟修樓陀夜摩天王を奉迎するに、空に乘りて行く者あり、五樂の音聲を作して迎ふる者あり。是の如く種々に異異て莊嚴り、各々牟修樓陀夜摩天王を奉迎す。爾の時、是の如き一切の天等は上空の中に在り、諸の華・香を以て皆悉

【六】三種。身・口・意の三種の善業なり。

【七】那由他(Nayuta)。大なる數名にして、約一億に當ると云ふ。

く牟修樓陀夜摩天王に下し散く。散き已はりて前みて近づく。復た餘天ありて金の樂器を以て妙へなる音聲を出し、幷びに復歌にて讚へ亦復前みて牟修樓陀夜摩天王に近づく。復餘天ありて、手に華鬘を執る。彼の華の香を聞く者は發せんことを欲し、住みて空中に在り、天の風に吹かれて其の衣は搖れ動き、漸漸に前みて牟修樓陀夜摩天王に近づく。復餘天ありて虚空の中に住み、妙へなる聲にて牟修樓陀夜摩天王を讚歎して漸漸に前みて近づく。是の如き等の無量の異天ありて、種々に異り殊勝て莊嚴り、種々の色あり。業を作せし時に下・中・上ありしを以て、色の莊嚴等も亦復是の如くに下・中・上あり。一切皆牟修樓陀夜摩天王に向ひ、各々奉迎す。爾の時、是の如き一切の天衆皆悉く牟修樓陀夜摩天王を讚歎し、迎かへ已はりて倶もに一切觀察の山峰の上に到り已はり、天王の力の故に、諸の欲の功德と五境界の樂に無量種ありて、一切增長す。善業を以ての故なればなり。

爾の時、天主牟修樓陀は諸の天衆と共に園林の妙へなる蓮華の池に在りて、無量種々なる諸の欲を成就し、漸次に更に一切觀察の山峰の上の其の餘の地處に上り、既に彼こに到り已はりて、善業の力の故に、即便ち惡道の門の開らかれしを見るを得、天女の時至りて退ぞかんとするものあるを見る。彼れ退ぞかんとするが故に、先づ九の相現はる。所謂、一に皮緩て太だ輭し。其の皺を以ての故なり。二に身動く。身動くを以ての故に、頭上に著けし華離散して墮落す。復第三に退く相ありて已に現はる。謂はく、著けし赤き華、頭に在れば則ち黄ばむ。復第四の退く相ありて已に現はる。謂はく、風ありて來り、其の衣服を吹くに、縷なき衣も則ち縷にて成りしが如く、人の衣に觸れしが如し。復第五の退く相ありて已に現はる。謂はく、空中に飛べば則ち疲倦を生じ、地を行くも亦爾り。復、第六の退く相ありて已に現はる。謂はく、汗水は本と淸かりしも今は濁れり。復第七の退く相ありて已に現はる。謂はく、樹の下に至りて華を取らんとし、果を取らんとす

【八】境界(Viṣaya)。自家勢力の及ぶ境土。又、我の得たる果報の界域を境界と云ふ。五境界とは色・聲・香・味・觸の五境にして、即ち眼等の五根に對するものなり。

【九】縷は絲條、いとすぢなり。

れば、樹の枝則ち擧がり、高くして得べからず、則ち取ること能はず。復第八の退く相ありて已に現はる。謂はく、天子の來りて共に欲を行ぜば、則ち天女の色醜く媚なきことを見る。復第九の退く相ありて已に現はる。謂はく、風あり、來りて其の頭の髮を散らして柔輭ならしめず、觸るれば則ち麁澀なり。此の退かんとする相た現はれては、天の數十日なり。人中の數に於ては二千年を經るとも猶故退ぞかず。

彼の退ぞかんとする天女に復二種の退く相ありて、現はれ已はれば則ち退ぞく時到らん。所謂、一に欲心則ち多くして蹔くも住むこと能はず。所謂、二に遊行する地に在るとも、地は柔輭ならずして、足を下ろすも容れず、足を擧ぐるも起らず。獨り住むこと能はずして、餘の天女に喚びて言はく『我れ煩悶せり。我れと共に此こに住めよ』と。彼の退かんとする天女に又復更に退相ありて、已に現はる。所謂、相とは肩動きて住まらず、語の因緣なくして動いて止まず。彼の退かんとする天女に又復更に退相ありて已でに現はる。所謂相とは先より來たの歌舞・音聲を皆忘る。本と始めて生まれし時は歌舞・音聲を敎ふる者あることなく、他より學ばず。善業を以ての故に、自然に皆知る。是の如きは、退く時に、善業盡きしが故に一切皆忘る。彼の退ぞかんとする天女に又復更に、退相ありて、已でに現はる。所謂、相とは若しは前み往きて蓮華の池水、若しは河流の水に近づけば、水中に於て生まれんと欲する處を見、何なる道なるかに隨ひて生まれんと欲する處に彼の身の像を見る。彼の退ぞかんとする天女に又復更に退相ありて、已でに現はる。所謂相とは、身に著けし莊嚴の若しは是れ瓔珞、若しは是れ釧等の一切皆重し彼の退ぞかんとする天女に又復更に退相ありて、已でに現はる。所謂、相とは何處に隨ひて坐するも、坐する處皆變はり、若しは金の處に、若しは毗瑠璃・[一〇]因陀尼羅に坐するに、是の如き等の處の彼の一切の寶は皆變じて木と爲る。彼の退かんとする天女には又復更らに退相ありて、已に現はる。所謂、相とは本と見し地等は、今見るに

【一〇】因陀尼羅（Indranila-mukta）。因陀羅尼羅目多、因陀羅尼羅とも書く。帝釋の青寶のこと。

皆異なる。彼の退ぞかんとする天女に又復更らに退相ありて、已に現はる。所謂、相とは普く身の一切に皆悉く汗出づ。此くの如き人の中にて又復更に退相ありて、已でに現はる。所謂、相とは、眼に天衆を見るとも一切旋轉りて輪轉を見るが如くにして、天身を見ず。身の一切の諸の[一一]根は境界を樂まずして、心に是の念を作さく『我れ今救ひなくして命盡きんとするが故に、生まれんとする處に於て、生まれし處の如くに見る』と。彼の色の如くに見ることは前に說きし所の如し。彼の退ぞかんとする天女、命盡きて退かんとする時の、後念に命盡くれば、心、[一二]中有に生まる。牟修樓陀夜摩天王は是くの如くに彼の天女の退ぞくを見已はりて、厭離の心を生ず。既に天女の是の如くに退ぞくを見已はりて、[一三]偈を說きて言はく。

婦女は世間を縛り、誑らかし長く諍はしめて慰ましむ。非法は能く[一四]法を壞はし、是の一切は過の處なり。女の欲の爲に使はれて、此の天處に縛らる。彼の死軍の來り到れば破壞されて將き去らる。女は種々の戲れを以て巧みに男子を誑惑し、能く後時には退ぞかしめ、自らの業の如くに去る。蓮華・園林・山・若しは河・若しは谷の中にて多種に戲はむれ、樂み已はりて、天女は然る後に退ぞく。天女は必定して退き、必定して愛するものと離別す。丈夫は是くの如きを見るとも猶ほ欲を行ひて止まず。能く[一五]世間をして失はしめ、能く多く愛を增長しむ。此の婦女の爲に縛られては[一六]解脫を得べからず。欲染の縛は最も大にして、能く此の世間を縛り、種々の異る思量も、更に是の如く縛ることとなし。無量種の欲の箭、天を傷くれば、何ぞ去なんや(免れんやの意か)。女欲は汝を使令ふ。女を破り已らんには勝つことを得ん。

牟修樓陀夜摩天王是の如く觀察し、退くことに於て畏れを生ず。退ぞかんとする天女は、方便し救ひ脫れ令むべきことあることとなし。普遍く無量種の門を觀察するに決定して退ぞき已はる。復

【一一】根(Mūla)。根性根機のこと。根性は性質なり。根機は能力なり。

【一二】中有。中陰に同じ。死して後、未だ次の生を受けざる間をいふ。生死の果報を指して有と云ふ。

【一三】偈(Gāthā)。頌と譯す。字數を定めて四句を結びしもの。三言四言乃至多言を問はざれども、必ず四句を要す、頌とは美はしき歌なり。

【一四】法(Dharma)。今の場合は、正しい法則又は正義の意。

【一五】世間。世は遷流の義。破壞の義覆眞の義なり。間は中の義。世の中に墮する事物を世間と云ふ。又、間隔の義にして、世の事物箇々間隔して、界畔を爲すを世間と云ふ。即ち世間と云ふに同じ。二種ありて、一、に有情世間(生あるもの)、二に器世間(國土)なり。

【一六】解脫(Vimukti)。涅槃と同じく佛敎の理想を示す語にして、三界を輪廻する苦の繫縛を脫し得たる當體を云ふ。我欲を捨て去りし悟の境界なり。

餘天を觀るに、五欲の功德もて種々の樂みを受け、退ぞくことを畏れざること童の如く、相ひ似たり。是の思惟を作さく『云何して彼の天の死せんとする時に臨み到りても、而かも怖畏れざるや』と。是の如く念じ已はりて、自らの心に怖れを生ずるも亦た他天の爲に說くこと能はず。何を以ての故に、時に非らざるに法を說くは、法をして輕からしむるが故なり。而も餘天の境界は樂みを受く。樂しみの境界の故なり。是の如く時に非らずしては爲めに說くべからず。牟修樓陀夜摩天王、死の畏れを念じ已はりて、彼の天に隨順して猶ほ共に戯はむれ樂しむ。復無量種に遊戲して樂みを受けて、是の如き一切觀察の山峰の中に在り。種々の妙好なる園林及び蓮華池ありて、諸の天衆と共に遊戲して樂みを受く。六種に身を愛し、境界を喜樂み、彼の園林の蓮華池等の無量種の處に於て、迭互に歌舞し、共に飲み、共に食し、若しは觸れ、香ぎ、味ふ。是の如くに樂みを受け、歌の音聲を聞くに甚だ愛すべしと爲す。是の如くに樂みを受く。彼の山峰の枸欄の所に到るに、遊戲して行く。彼の枸欄とは是れ毗瑠璃にて、諸天、中に入るに其の光明の一切皆失す。彼の寶の莊嚴は彼の毗瑠璃寶の光明の故に、皆同一の色なり。所謂青き色にて、諸天既に見るに皆同じく青き色にて、希有の心を生ず。迭互に各々是の如き言を說く『如しは我れ、先きに多種の殿を見來り、百千の殿より來りしも、初め未だ曾て此くの如き山峰の毗瑠璃寶の是くの如き光明を見ず』と。

爾の時、此の天是の如く說き已はる。即ち諸天の中に一の舊天あり、餘の一切の後に生まれし諸天に向ひて、是の如くに說きて言はく『如しは我れ次第に、聞きたる所を傳へ來れり。今汝い爲に說かん。何かなる因緣を以てなりや。是の如きの光明、曾つて過去久遠の世の時に [一七]兜率天王 [一八]閻浮提に下りて、誠の心にて [一九]正遍正智を供養し、佛を供養し已はり、來りて此處の一切觀察の山峰の中を過ぎ、心に夜摩天を憐愍むを以ての故に、故に一珠を留たり。此の夜摩天は珠の光明を見る。諸の夜摩天は業の果報の輕きあり、重きものあるを知り、則ち慢心を離る。若し夜摩天非法を

【一七】兜率。(Tuṣita)天の名なり。都史多、とも作る。上足、妙足、知足などと譯す。欲界の天處にして、夜摩天と樂變化天との中間に在て下より第四重に當れり。

【一八】閻浮提(Jambudvipa)。又は贍部洲とも云ふ。須彌山の南部に當れる大洲にして、即ち吾人の住む地球の事なり。此の洲に廣大なる閻浮樹あるに由つてかく名くと云ふ。

【一九】正遍正智。正遍智とも云ふ。眞正に遍く一切法を知るを云ふ。梵語の三藐三佛陀(Samyak-sambuddha)の譯なり。佛の十號の一なり。

行ひて、此の珠を見已はれば、夜摩天の兜率天に勝つことあり、負くることあるを知る。心に是の如く知る『我れ今に於て何なる樂みを成就せしや。我が樂む光明・色量・形相は兜率陀より則ち微劣なり。壽命も亦劣り、地處も亦劣り、業果も亦劣れり』と。彼の諸天等彼の寶珠の勝れし光明を見れば則ち第一の勝れし歡喜の心を生ず。若しは放逸を行ひしものは則ち慢心を離れ、若しは法に隨ひて行ふものは彼の法を增長す。此の因緣を以て、兜率天王は珠は留めて此こに在り』と。

爾の時、諸天宿舊き天從り是の語を聞き已りて、則ち第一の勝れし歡喜の心を生じ、彼の寶珠に希有の心を生ず。意に樂みて見んことを欲す。彼の一切の天相ひ共に、彼の一切觀察の山峰の中に在りて彼の珠を求覓む。求覓るを以ての故に、一處にて之れを見るに、一百倍の勝ぐれし光明有りて出づ。能く餘の珠を覆ふて現はれざらしむ。覆はれて未だ開かれずとも猶尙是の如し。何に況んや覆はれざるに於てをや。所謂、覆はるとは夜摩天珠の是の如き大光明の珠を覆蓋するなり。彼の夜摩天の餘の寶珠を却きて此の一珠を出す時、夜摩天は此の一珠の有する所の光明を見、心に則ち慢を離る。又、夜摩天の自身に有する所の一切の光明皆悉く現はれず。復彼の珠を觀るに、其の中には則ち金にて書ける文字ありて、字に偈ありて言はく。

清淨して垢濁なく、常に法に隨順して行ふ。彼れ放逸ならざるが故に恒常に快樂を受く。

若しは樂み、若しは苦惱し、若しは老、若しは少年、若しは大姓、小姓なるも、死王は皆能く殺さん。若しは端正、若しは醜、若しは大力、小力、若しは獨り、若しは主あるとも、死王は皆能く殺さん。若しは王、若しは僮僕、若しは俗、若しは出家、若しは堅き、若しは輭かき者も、死王は皆能く殺さん。若しは富み、若しは貧窮、若しは功德あり、若しは無く、若しは男、若しは女等も、死王は皆能く殺さん。若しは行き、若しは家に在り、若しは水中、若しは陸、若しは山峰に在りて住むとも、死王は皆能く殺さん。若しは睡り、若しは〔二〇〕覺悟

【二〇】覺悟は元、明二本及び宮內省圖書寮本に依る。

し、若しは食し、若しは食せずとも、能く世間を歴亂して、死王は皆能く殺さん。若しは下に在り、上に在り、若しは傍の廂に在りて住むとも、時の輪は障礙なくして、死王は皆能く殺さん。若しは吉、若しは吉ならず、若しは法、法に非らざるを行ひ、若しは病、若しは病ならざるも、死王は皆能く殺さん。若しは惡き者、善き者、若しは慳み、若しは慳まず、若しは放逸し、若しはせずとも、死王は皆能く殺さん。若しは地獄、餓鬼、若しは畜生、若しは人を、大力にて休息せざる死王は皆能く殺さん。若しは欲界の諸天、若しは色界の天等、彼の天は悉く大力なりとも、死王は皆能く殺さん。若しは無色界の天、[二]三摩跋提に生まれ、彼の天は悉く大力なるも、死王は皆能く殺さん。生あるものは皆な無常にして、一切は必らず破壞す。一切の[三]有爲法の破壞することは則ち疑はざれ。死力の是の如きを見、若しは欲の過患を見、愛染の語を見已はれば、則ち生死の海を離れん。初めの時味ありて堅く、欲の境界に貪著し、之れに由つて地獄に入る。猶ほし蛇の舌の舐むるが如し。此處より退ぞくを見已はりて、死王の大力を知れば、心則ち善く調伏し、心に此の過あることを知らん。園林・山等の中、若しは堂の中に在りて住むとも、一切の天は皆退ぞく。時の火に燒かるが爲なり。若しは境界の爲に覆はれ、癡なる故に放逸を行ひ、愛の羂は此の天を縛りて、將さに惡道に入らしめて去らんとす。

時に、彼の諸天大毗瑠璃寶珠の中にて、彼の金にて書ける偈句の字を見已はり、讀み已はり、聞き已はれり。若しは天の心に善き種子のある者は是の偈を見聞して、蹔く厭離を生ず。若しは境界に迷ひし愚癡なる天は、亦見聞すと雖も猶ほ境界に著して嬉戲れ、遊行りて、五欲の樂みを受け、心に厭ことを生ぜず。時に、彼の諸天既に寶珠の是の如き光明、珠の内の偈の一切世間の諸の過患多きを說くを見、既に見聞し已はりて、希有の心を生ず。此の勝れし寶珠の是の如き光明は甚だ希

【二】三摩跋提。(Samāpatti)。禪定の一種なり。又三摩鉢底とも書く。

【三】有爲法(Saṃskṛta)は無爲法(Asaṃskṛta)に對し、生滅變化に亘る法なり。而も其の生滅變化は因果の法則に依る。故に、有爲法は同時に因果法の束縛を離るゝ能はず。かくしてこの有爲因果の一切の法はその作せる業に從ひ、此の生を終り、又た他の世界に生れ出で、遂に苦の三界を出づることなきなり。

有と爲す。而も彼の諸天の自らの性は放逸にて、種々に遊戲して種々に樂しみを受け、無量に分別して多くの無量の境界の樂しみを受く。彼の樂みの深く勝れしは譬喩すべからず。

爾の時、彼の天復放逸を行ひて、多く種々の歌樂の音聲を擊ちて一の水河に向ふ。河を速流と名く。堅く放逸に著し、諸の境界を見ては其の心堅く著し、無始より集め來りし愛の羂に繫がれ、牽かれて彼の河に向ふ。種々の樂の聲其の心を繫縛して、彼れと此れと迭ひに共に遊戲して樂みを受く。彼の速流の河には多くの樹林ありて、蓮の花に覆はれ、種々なる鳥の聲甚だ愛樂すべし。蓮華の香を以て其の水に熏じ、彼の河の兩岸には歡喜べる天饒くして、若しは歌ひ、若しは舞ふ。彼の天迭ひに共に勝れし歡喜の心にて彼の河の岸に在りて諸の快樂を受け、五樂の音聲平等にして美妙なり。無量種の五欲の功德ありて快樂を受く。彼の河水は速かなるが故に、速流と名く。其の河の兩岸の樹の枝の〔三三〕奇しき間に、鳥中に在りて住めり。彼の鳥を卽ち樹奇間住と名く。鳥善業の故に、彼れと此れと迭ひに共に勝れし歡喜の心にて天を利益するが故に、偈を說いて言はく。

山の河は是の如く速かにて、天は是くの如くに樂みを失ふも、癡かなるが故に覺知ずして、是の如くに放逸を行ふ。　一切の諸の衆生の命と樂しみとは速かにして停まらざるも、癡かなる者は覺知らず、生盲の道に於けるが如し。　寧ろ盲は眼目なくして、欲に著せず。　愚癡なるは樂しみて欲に隨ひて行ふが爲めに、地獄に趣き向ひて去らん。　盲の故に地獄なるに非らず。　法を知らざるを以ての故なり。　是の故に寧ろ自ら盲なるは欲の爲めに使はれず。　欲を行へば利益をせず、常に癡なる者を誑惑し、自らの心の癡かなるを以ての故に、欲を厭離せず。　若し欲を行ふ者は、智なく亦知ることなく、欲の生ずる苦しみを數へずして、常に欲を樂ふ。　欲の怨を見ること友の如く、〔三四〕今波迦果の如く能く將に死處に向はんとして、數々惡道に至らん。　一切の諸の河の水流の迴者なきが如く、天の樂みも亦是の如くにして、已でに去

〔三三〕奇の字は宋・元・明三本及び宮本に依れり。

〔三四〕今波迦果。又は金波迦、毒ある果物らしい、不詳

りては復還へらざらん。

彼の鳥は是の如く住みて樹の中に在り、業の實なるが如くに已に此の偈を說けり。時に、彼の諸天の善業にて心を修めしものは、偈を說くを聞き已りて、心に極めて厭離し、是の如く思惟すらく、『我れ今乃ち畜生の所に於て、是の如くに法を聞けり。是の故に、我が放逸なる行は定めて惡道に入ることを知るを得たり』と。爾の時、彼の天既に是の心を生じ、思惟し、念ひ已はれり。其の中に天ありて、彼の河の岸を離れて、一處に在りて住し、偈を說きて言はく。

一切衆生の命は、水の沫の如くにて異ならず。　河流の波動するが如くにて、少年も亦是の如し。　一切の諸の衆生は　盡く皆老死に屬すとも、汝等心意なくして、念はず、知慮せず、[二五]諸有の身未だ壞はれず、諸有の世間淨なりと。若しは心に皆法を作さば則ち惡道に入らざらん。

彼の天是の如くに迭互に各各法に隨順して、是の如くに偈を說き、是の如く法を念ひて、未だ久しき時を經ざるに、根羸り、力なく、復た思惟せずして、無量種の愛すべく、樂むべき五欲の境界を見、心の隨に樂み已はりて、樂しみを受けんが爲の故に、行きて餘天に向ふ。彼の天是の如くに境界に迷ひ、五境界の因は常に天の欲を增す。彼處に在りて天の快樂を受け、第一の愛すべき五欲の境界に相應せる樂みを受く。乃至此く善業を[二六]受け盡くし已はりて、復業の爲めに使はれて、地獄・餓鬼・畜生に生まる。若しは餘天退ぞき、若しは人中の第一の樂しき處に生まる。諸の衰惱なく、第一の富樂なり。第一の大種姓の中に生まれて、一切に敬愛せられ、一切に供養せられ、怖れず、病まずして聰明し、若しは他の餘人、若しは奴、若しは婢、若しは、諸の作人の一切は皆愛し、常に其の人を供養する心あり、第一の善き國土の中に生まることを得、邊地に在らず。生まれて法を知り、法に非らざるを知る處に在りて、五根を具足し、智慧自在なり。彼の善業を以て作し、復集

【二五】諸有。衆生の果報は、因あり、果あれば之れを有と云ふ。三有、四有、七有、九有、二十五等の別あれば總じて諸有と云ふ。

【二六】受の字は、元・明二本に依る。

め、聖人に愛され、三の功德の業を決定して天に生まる。餘業を以ての故なればなり。

又、彼の比丘業の果報を知りて、夜摩天の有する地處を觀る。彼れ見聞して知るに、彼の夜摩天には復た地處ありて、彼處を名づけて山樹具足と爲す。衆生は何なる業にて、彼の地處に生まるや。彼れ見聞して知るに、謂はく、人ありて善業を修行し、直心・正心にて法行に隨順し、威儀を壞さず、威儀を缺かず、惡知識を遠ざけて、常に善心を生じ、微塵等の惡を見れば則ち深く畏る。正見にて邪まならず、常に正見を行ひ、常に一切の時に業の果報を信じ、心意は正直にて、身に善業を行ひ、口意の善業もて三種の戒を護る。所謂、殺さず、盜まず、婬せざるなり。殺さず、盜まざることは前に說きし所の如し。邪行をせずとは、若しは晝の中に於て、婦女の像を見ても心に念ひを生ぜず。白日に見已はりて、夜に念ひを生ぜず。心に足るを知ることを生じ、晝行く時に於て善く其の心を攝め、足ることを知る繩を以て、諸の根を繋縛り、身を念ひて行ひ、善く其の心を護り、常に樂しみて諸の[27]界・入・陰を觀察して、多くの語を樂まず。時に非らざるに於ては他の舍の內に入らず、惡しき肆に行かず。一切の處に於て時に非らずしては行かず、惡しき狗に近よらず。常に村に入ることをせず。常に城に入ることをせず。若しは、[28]四出の巷にて常に見るを樂むことをせず。親舊・知識を心に常に念ふことをせず。常に勤めて智の境界を修行し、常に正しく觀察し、恒常に正しく念ひ、尊長を敬重し、常に近づきて彼の善き行ひの人に奉侍す。是の如くに持戒せんには、身壞はれ、命終はりては善道の夜摩天の中の山樹具足の地處の中に生まれん。彼こに於て生まれ已はりて、無量の樂しみを受け、印の相ひ似たるが如くに、無量種の樂みを皆悉く具[29]足す。

二の妙へなる山ありて彼の地を圍遶けり。彼の山中に於て四の樹林あり。一を膩青影と名け、二を無量負と名け、三を一切上と名け、四を清淨負と名く。膩青影林は青色の妙なる寶にて、青色の樹は金銀を葉と爲し、皆悉く具足して端嚴・勝妙にして譬喩すべからず。林中の殿舍は青光の影を

【二七】界、入、陰。入は卽ち十二處にして、六根、六境互に涉入して識を生ずるに由つて入と名く。陰とは色、受、想、行、識の五蘊のこと、界(Dhātu)は差別の義にして彼此の事物の各、差別して混亂なきを謂ふ。今玆に謂ふ界とは六根、六境、六識の十八界を云ふ。何づれも、精神、物質の兩界を便宜上、精粗に分類せる者なり。
【二八】四出。町の四辻を云ふ。
【二九】足の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

出し、遠く去りて五百由旬に遍滿し、色は靑雲の如し。彼の後の三林なる無量負林、一切上林、淸淨負林は、一一に皆無量種の樹、無量種の色、無量種の形、無量種の相、無量種の葉、無量種の鳥ありて、彼の林に近し。彼の林の中に於て、是くの如き等の無量種の樹あり、復其の餘の種々の諸樹あり。所謂、多くの金樹にして銀葉なるあり、復た銀樹にして毘瑠璃葉なるあり、珊瑚樹ありて白銀を葉と爲し、雜寶の樹ありて雜寶を葉と爲し、樹は雜はれるを以ての故に、其の影も亦雜はる。其の枝の普く地分を覆ふ處々には皆悉く水あり、彼彼の地處極めて嚴好を爲し、蜂の衆にて莊嚴りて、妙へなる音聲あり、多くの天鳥ありて地處を莊嚴れり。彼の第二林の嚴好なること是の如し。

又、第三林には多くの無量の流れ、河池あり、其の河には多くの無量の諸の鳥の種々なる音聲あり。所謂、孔雀・俱耆羅等の音聲愛すべくして、愛すべき處に住せり。

又第四の林には多くの種々の雜色の寶樹あり、園林の池水には種々の蓮華あり、林の影と光明とにて、彼の諸の樹林の一切皆雲母、瑠璃の如し。若しは天、中に入りて皆自身を見るに、猶し雲母・瑠璃の色の如し。

又彼處の山に異なる勢力あり。若しは天の退ぞかんとし、死する時の將に至らんとして、業に隨ひて去る處を一切皆見る。彼れ既に見已はつて有を厭離し、放逸なる行をせず。自身の異なる生處を、見るが故なり。彼の福天子の、彼の是の如き功德の地に生まるは、無量種の善業の力を以ての故なり。爾の時、彼處に生まることを得し天子は、生まれて山の中に在り。山を伽那と名く。是くの如き天子の初めて生まれし時は放逸なる行を行ふも、既に退き已はりて惡處に生まるを見るが故に、始めて生まれし天子放逸なる行をせず。是の如く心を攝めて未だ久しき時を經ずして、更に境界の五欲の樂みに著し、園林の蓮華池の中の極めて愛すべき處に在りて、五欲の功德皆悉く具足し、五樂の音聲あり、多くの無量の諸の天女の衆ありて圍遶まき、無量種の無量に分別せる無量

【○】俱耆羅（kokila）。俱枳羅、俱翅羅と同じ。鳥の名なり。譯して好眼鳥・好聲鳥・美音鳥・鵶鵑とす。

の諸の念あり。彼の山林の中前に說きし所の如し。彼の天子の前の善業を以ての故に、是の如く種々に五欲の樂みを受く。彼れ既に是の如くに欲樂を受け已はりて、善業の力の故に、彼の山中に於て則ち五種の希有なる色相を見る。何等を五と爲すや。謂く何れが生處にして、而して此こに來り生れしや、彼れの來りし處を見。何かなる業因に乘りて此こに來り生れしや、彼の業因を見。何かなる時に於て退くや、彼の退く時を見。其の退くを見已はりて、何處に於て生るるや、彼の生まる處を見。彼處に生まれ已はりて苦樂を成就するや、彼の苦樂を見、他身の事に於て亦是の如くに見る。彼の天衆生まれて復た異なる時を見、或は百劫[三二]を見、或は億劫を見、自身の事は是の如くに知る事を作す。『我れ曾つて此の天中に於て生まれ、生まれし數を知ると雖も、時の數を知らず。何を以ての故に、智少きを以ての故に、彼の山の勢力を思量すること能はず』と。善業の勢力の故に、是くの如く見る。

然るに、彼の天子無量種の希有なる事を見已はりて、生死の過を畏れ、善業を厭離す。況んや福業に非らざるに於てをや。厭離せざるとも亦雜業を離る。其は皆苦惱の過あるを以ての故に、彼の雜業は多くの過惡あるを以ての故なり。是の如く見已りて、彼の山中の希有なる事を見已はり、生死の過惡ある處を、怖畏て厭離す。一切の時に於て、無量種々の衰惱を增長す。梁の繩を見已はれば則ち餘の樂しみに心離れて樂します。所謂、樂しみとは天中の欲愛・觸味・色香なり。是の如く既に觸味・色香を見ては毒飯を見るが如く、以て樂しみを爲さず。彼既でに是の如く、無量種の天の境界の樂しみを見、憎惡して樂まず。彼れ已に是の如く欲を厭離し已はり、餘天に向ひ說きて、利益し、安樂する事を作さしむ。彼の天是の如くに則ち善く身・口・意等を修行し、善業を行ふ。所謂、法師、若しくは能く他の爲めに正法を說く者は、彼の放逸なる諸の衆生等に於て佛語を具足し爲に法を說く。『放逸なる行を畏れよ。放逸なる衆生は無量の境界の惡處に入らん』と。彼の衆生の爲に、五

【三二】劫(Kalpa)。劫簸の略 分別時節と譯す。通常の年月日時を以て算し能はざる遠大の時節を分別する稱なり。故に又大時と譯す。

種の畏れを說く。所謂、五とは生の畏、老の畏、病の畏、死の畏、自業の畏等なり。此の諸の衆生是の如く業を作すが故に、是の如く愛樂の境界を得て、離別することを怖畏す。此等の諸の畏を、若しは能く他に示す。物を貪るが爲めに非らず、諂曲の心に非らず、亦供養を悕望む因緣に非らずして、能く他の爲めに正しく佛法を說くなり。

復他の爲に雜へて佛法を說くことあり。已に聞きし所の譬喩に相應し、佛の語を自ら少しく聞き、少しく讀むことを畏る。時に推されて後に在りて、異なる因の譬喩を他より聞き來りて、自ら思量して說く。內心に多くの種々なる雜語を貪り、時に推されて後に在りて。是の如くに法を說き、是の如き因緣にて生死の畏れを作し、彼れ山中に於て、諸の業あるを見る。

是の如き等の一切の法の中に於て、復勝れし者あり、謂く父母尊者の爲に法を說く。復病める者の爲に法を說き、邪見なる者をして正見を生ぜしめんが爲に說法を爲すものあり、死を欲する者の爲に佛の法を說き、若しは生死を見ては因なく、緣なく、自然にあるとする者に、是れ則ち、之れが爲め因緣の法を說く。若しは生來未だ法を聞かざる者に於て、之れが爲に法を說く。若しは曠野を行き、若しは海中を大船にて行く者、放逸を行ふ者、若しは諸の國王、若しは王大臣、若しは諸の年少きものの、欲を行ふと、放逸と、種々なる慢等を離ることを得せしむる故に、爲に法を說く。若しは勇健なる者は能く多く殺害す。若しは多く殺生し、放逸を行ふ者の爲に罪の過を說き、彼の殺生することを遮る。若しは諍鬪を樂ひて、天に生まれんことを望むが故に鬪ひて死を取らんと欲する、顚倒せし見の者に、之れが爲に法を說き、遮へて作さしめず。若しは常に獵する者に、之れが爲に法を說きて、捨離するを得せしめ、若しは諸の婦女の妬嫉する者に之れが爲めに法を說きて其の妬嫉を遮ふるなり。

此の是の如き等の十二種の人にして、若しは能く爲に之に法を說くもの、彼の人是の如くに眞實

に法を說かば、身壞はれ、命終りては夜摩天の山樹具足の地處の中に生まれ、既に彼こに生まれ已はれば則ち彼處の山の壁等の中に於て、生死の業を見ん。見已はれば則ち一切の生死に於て、厭離の心を生ず。若しは、他の爲に是の如く法を說かずして、彼こに生まれし者は、一切の作せし業を皆悉く見ずして、則ち後時に諸の欲樂を受け、遊行て嬉戲れ、五欲の功德を種々に具足す。彼の地處に在りて歌の音聲、衆鳥の聲の音を聞き、種々に異異りたる色香を具足せる蓮華の中には無量の蜂ありて、百千の音聲、諸の雜はりたる音聲あり。

既に彼處に於て、諸の樂しみを受け已りて、復山中に向ふに、山上の平なる處の中に在りて樂しみを受く。第一に端正にして、種々の功德を具足し、天女は天の歌音を詠じ、甚だ愛樂すべし。色・味・香等皆悉く具足して大歡喜を生ず。復天の酒を飲み、既に酒を飲み已りて、轉復放逸の樂みに增長す。久しく放逸を行ひて、諸の樂しみを受け已り、復彼の山に向ふに、遊戲林と名く。普く毗瑠璃を以て拘欄と爲し、堂舍を莊嚴りて、火洋金の如くに莊嚴を爲し、種々の七寶にて莊嚴れる處ありて、彼處に到り已るに、其處に衆鳥多饒して、第一に端嚴なり。既に彼處に到り、五欲の功德にて遊戲して樂しみを受け、未だ厭足ことを知らず、心に常に悕望みて厭足べからず。火の薪を得ては風の爲に吹かるゝが如く、愛に染まりし凡夫未だ厭足するを知らざることも亦復是くの如し。何を以ての故に、愚癡の凡夫は、無始よりこの來より、是の如くに流轉して、愛の爲に誑らかされ、自らの境界の中にて根は足ることを知らず、本より已來未だ曾て足ることを知らず。彼の堂は第一に愛すべくして、拘欄の功德を具足す。天其の中に於て、五欲の功德にて共に樂しみを受け、若干種の無量に分別することあり、無量種の憶念を成就することあり。爾の時、彼の天の放逸なる行をせずして、謹愼て行ふ者、既に是の如き放逸なる行を見し者は、心に憐愍を生じ、偈を說きて言はく。

心の作せし所の如くに、還へりて是の如くに受得く。善き念は愛欲を斷ち、不善なるは增長しむ。若し寂靜なる欲の者は、欲を見ること刀の毒の如し。・癡なる者は靜かなる意ならずして、欲を見ては愛染を生ず。若しは根、若しは[三二]根塵、此の因緣にて、心に於て煩惱心に熏ずるが故に、相ひ似て流轉して行ふ。是くの如き染淨なるに於ても、勇健なる者は染まらずして、畢竟して常に色を見る。云何にして別異あらんや。一切皆是の如くにして、境界は心の[三三]因緣なり。心を調ふを第一と爲す。雜の過甚だ鄙しと爲す。譬へば稻の一種の色と相とは各差別し、和合種より雜生するが如し。心も亦是の如く轉じて、機關の水輪の如し。轉ずるが故に作す所あり、心の因緣の故に語る。此の世間は流轉し、放逸は衆生を壞はす。心欲味に貪著し、亦常に色を喜樂び、相續して轉ずるを覺らず。影中の山林の色にて、業の故に亦身を見る。天云何んが見已りて、欲の境界に貪著するや。若しは恒常に欲あらば、終には則ち愛するものと別離す。是の如きの欲愛を智者は則ち樂しまず。何に況んや無常にして空なるに於てをや。自らの身も是の如くに空なり。彼の苦しみの報の中に於て、癡者は云何んが樂むや。天既でに天を退き已はりて、惡業の爲めに將き去られん。境界に誑らかされて、寂靜は得べからず。

若しは天是の如くに放逸を行はず、放逸なる行をせず、放逸ならざる天は、放逸なる天の爲に、是の如くに說き竟る。自らの業を以ての故に、實の色を見已はり、業に於て畏れを生ず。復憐愍むが故に、是の如くに已でに說きて、是の如くに彼の山樹具足の地處の天に住して、無量種に諸の快樂を受くる毗瑠璃の處にあり、影像の中に[三四]自らの身の色を見る。

又復彼の山樹具足の地處に住する天に、更に其の餘の毗瑠璃の林あり、或は銀林あり。彼の林に名ありて、常影と名くるものあり、無影と名くるものあり。彼の常影林は是れ毗瑠璃にて、是くの

【三二】根塵。根は眼等の六根。眼等の所對の色等の六境を塵と云ふ。

【三三】因の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

【三四】「見自身色」は、宋・元・明三本及び宮本に依れり。

如き林の中の地分は柔輭にして、衆鳥の音聲あり。百の蓮華池を以て莊嚴を爲し、流水の池ありて其處を莊嚴れり。天彼處を遊行り、嬉戲れて種々なる樂しみを受く。彼の常影林に五大池あり、池に蓮華あり、鵝鴨・鴛鴦多くして種々なる跋求の音あり。迭ひに共に聲を出し、聲甚だ愛すべく、種々の樂しみを受く。彼の水中に風あり、吹き來り種々の波ありて、彼の鳥の身をして相ひ觸れ相ひ離れしむ。其の水清淨にして塵濁を離る。是の如き衆鳥蓮華の葉の中に、迭ひに共に遊行りて、種々の樂しみを受く。五の華池とは一を樂見と名け、二を水足と名づけ、三を鳥樂と名け、四を常喜と
三五 名け、五を天樂と名く。彼の華池の中には多くの衆蜂あり、無量の形色にて、無量種・百千の雜色あり。蓮華の汁の無量の美まき味を飲む。衆蜂飲み已はれば則ち第一の勝妙し音聲を出す。山樹具足の地處の天其の聲を聞き已り走りて蜂の所に向ふ。蓮華池の中にて彼の華池の水は第一清淨、第一の色香なり。彼の諸の天衆、天女の衆と共に、彼の水を見已はり彼の池の中に入りて、遊戲して樂しみを受く。既に池に入り已りては諸の天女と共に水に在りて遊戲し、五欲の功德を種々に具足す。復欲樂を行ひ、彼處にて是の如くに種々に戲むれ樂しむ。

又復更に第一の勝れたる聲・種々の雜聲あり。所謂歌ふ聲なり。復樂の聲あり、復水の聲、種々の諸の鳥の種々の音聲あり。此の種々の聲は迭互に相ひ離れ、迭互に相ひ順じ、相けて句を壞はさず、合して一音を爲す。是の如くに愛すべし。是の如き天衆天女の衆と共に是の如くに樂しみを受け、是の如き雜雜たる音聲を既に出す。異りたる山中の天の遊戲して樂みを受くること則ち此れに如かず。餘處の鹿鳥は飲食の時に臨み、若しは此の聲を聞けば卽便ち食ふことを止めて耳に住して動かず。此の雜聲を聽けば、飲む時も亦爾く、停めて住し、飲まずして彼の聲を聽聞す。餘の異りたる地處の有する所の天衆、是の聲を聞き已り希有なる心を生ず。況んや餘の畜生に於てをや。是の如く五の處にて種々に樂しみを受く。爾の時、是の如き山樹具足の地處に住する天は長久き時

【三五】名の字は明本に依る。

に於て、五の蓮華池に樂しみを成就し已はり酒を飮まんが爲の故に、欲樂を受けんが故に、餘の園林に向ふ。園林を飮と名け、多くの天酒ありて彼の園林を滿せり。是の如き義を以て、飮園林と名く。彼の諸の天衆善業の力の故に、飮園林に到るに、諸有の水池の清淨に滿てる者一切皆失し、第一の香・色・味等を具足する天酒、出生して彼の河の中に滿てり。彼の酒の香は乃至五由旬の內に遍滿て、逆順來去すること天の憶念するが如し。是の如くに酒を生ず。此の世間の中の第一の樂しみとは謂く念ひの隨に樂しむことなり。心に憶念するが如くに自在を得るを、是れを最も樂しみと爲す。唯此れのみを樂しみとなして、更に樂しみあることなし。此の心に念ずるに隨ふ、是れ第一の樂なり。何かに況んや、復五欲の功德を具足する樂しみ有るに於てをや。五樂の音聲にて天女の衆と共に快樂を受く。復意に隨ふ自在の樂しみありて、種々に遊戲し、種々の樂しみを受く。彼れ是の如き酒の、酒の過を離れしを飮み已り、極めて適して說くことを得べからず。

彼の天是の如くに種々に樂しみを受け、放逸を行ひ、天女の衆と共に同じく天酒を飮み、長久き時に於て、愛は其の心を覆ひ、無始より集め來り、是の如くに復た集めて、捨離すること能はず。愛の爲に誑らかされ、彼の天是の如くに厭足ことを知らざるは、火の薪を獲るが如し。是の如く彼この中に山樹具足の地處の天、是の如くに思惟すらく。『我れ今此の山の頂きに上らん』と。彼の天、是の如くに迭ひに相ひ憶念し、同じく一心を生ず。是の如く同心にて、一切皆共に和合し、心を喜ばして、去りて彼の山に向ふ。到り已はりては卽ち上る。自らの善業の故に第一の光焰にて、彼の山の頂きに向ひ虛空を飛昇して、彼の山に上る。第一の神通にて彼の山に上り已はりては、五樂の音聲皆悉く相應し、一切の所有る歌樂の聲普く山上に遍し。復勝れし香ありて、普く山上に熏り虛空の中に滿てり。妙へなる光明ありて虛空の中に在り、勝れたる耀きと等しき光なり。彼の山の上に上るに天の神通を以てし、彼の山に上り已はりて、彼の山の頂きを見るに、無量種の流水・河池

ありて、蓮華中に滿てり。園林衆華を種々に具足し、彼處に多くの衆鳥の音聲・第一の天の香りあり。

彼の山の頂の上は普く皆平等にして、光明遍く天衆の上を照らし已はる、天女の衆と共に第一に樂しみを受く。山上の天に百の天女あり、二百の者あり、復餘天の三百の天女あるものあり。自業の作せしが故に少・中・多あり。復餘天ありて少・中・多あり、一千の者あり、二千の者あり、三千の者あり。是の如く乃至二萬の者あり。種々に歌舞し、遊戯して樂みを受け、一一の園林の處々に遊行り、嬉戯れて樂しみを受く。是の如き蓮華の勝妙なる林中は、衆蜂もて莊嚴れり。彼の林の中に在り、五樂の音聲にて遊戯して樂しみを受く。彼の山に多くの種々の妙へなる寶ありて莊嚴と爲す。彼の山中の處々に於て遊戯し、樂しみを受けて行く。彼の山の石の一切は是れ寶にて、殊妙に間錯り、光明は日より勝れ、其の地柔輭にして、閻浮提の〔三六〕瞿耶尼中の第一に柔輭なる劫貝・敷具・綿等の輭きが如し。若しは〔三七〕兜羅綿、若しは復餘の綿、是の如き等の綿、又復餘の柔輭き綿の如くにて、足を下せば則ち容れ、足を擧ぐれば則ち平かなり。彼の山の頂の上是の如くに柔輭し。若しは寶、若しは地、若しは樹、若しは林、若しは山の峰、彼の一切の處は第一に柔輭にて、極めて樂しき觸あり。眼の見る所に隨ひて、皆愛樂すべく、是の如き山上は甚だ愛樂むべし。天衆と天女上に在りて遊戯し、彼れと此れと迭ひに共に種々の樂しみを受け、諸の欲の功德の一切を具足して、天の快樂を受く。

彼處にて是の如くに、久時く樂しみを受け、彼の天和合せる第一の音聲にて、歌舞し、遊戯して種々に樂しみを受く。虚空の中に大光明あり、猶し〔三八〕天狗の如し。彼の一切の天皆悉く同じく見る。彼の勝れし天大光明を見るに、未だ曾つて見聞せずして希有の心を生ず。中なる天之れを見るとも、眼に看ること能はず、手を以て眼を掩ひて樹の下に入る。下なる天は之れを見るとも忍耐す

〔三六〕 瞿耶尼 (Godhanya)。又、倶耶尼と書く。西大洲の名。即須彌山の西方にある大洲の名。義譯して牛貨と云ふ。此の洲は牛を以て物を買ふことは我々が錢を用ふるが如しと。

〔三七〕 兜羅綿(Tūla)。又妬羅、堵羅蠹羅と音譯す。意譯して綿、揚華、野蠶繭とす。兜羅綿、兜羅毦と熟して用ふ。

〔三八〕 天狗(Ulkā)。憂流迦と音譯す。慧星の名なり。本經第十九卷を見よ。

ること能はずして、怖畏を生ずるが故に、諸の天女と共に自らの寶の窟に入る。又復更に、大威德天ありて、眼に既に見已はれば則ち能く忍耐し、諦かに之れを觀察して希有の心を生じ、是の如く意に念ひらく『此れは是れ何なる光にて、誰にか是の如き勝妙なる光明ありや。此の山是の如く妙寶の光明ありて、是の如く山中に光明を具足するも、此の異光は照らして復現はれざらしむ。空に在りて焔の如し、我れ昔より來た、初にして未だ曾つて見ず』と。彼れ更に審に看、大天狗を見るに、是の如く下に向つて大光明ありて、虛空中に遍くして光の焔の[三九]然たるが如く、是の如くに下に墮つ。彼の天上觀ずるに、大天狗の如く天より墮つ。其の量の長短・大小是の如し。是の如く思量し、然る後に說きて言はく『彼の天狗の量五千由旬にして、一切の虛空皆悉く焔、然えて、譬喩すべからず』と。

是の如く、是の如くに、次第に下り來り、漸漸に近き下る。彼の大勇の天も亦看ること能はず。何を以ての故に、彼の天の眼の境界に非ざるを以ての故に彼の勝れし大光明を看ること能はず。亦復手を以て自ら其の眼を掩ひ。久しからざる間に希有の心を生ず。[四〇]退きて、復手を却りて眼を開き之れを看る。虛空を上觀して、彼の天狗の漸く更に近き下るを見る。一切の天衆皆疑慮を生じ、彼れと此れと迭互ひに相ひ向ひて、說きて言はく『上の虛空の中なるは是れ何物なりや。甚だ希有なり。空に在りて墮つ』と。時に彼の天衆決斷すること能はずして、是の言を作さく『此れは是れ何物なりや』と。爾の時、是の如くに未だ久しからざる間に、是の如き天狗空中より滅沒れて、在る所を知らず。

爾の時、怯し天彼の滅びしを知り已はりて、窟より出づ。諸の天女と共に怖畏を離れ、彼れと此れと迭互ひに相ひ向ひて、說きて言はく『此の希有なる物は、是れ何なる物と爲すや。我が心甚だ疑ふ。我をして之れを見せしめば、心に怖畏を生ぜん』と。是の如く說き已はりて、彼れと此れ

【三九】然の字は宮內省圖書寮本に依れり。

【四〇】退の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

と迭互ひに皆決すること能はず。是の如くに久しき時に、彼れと此れと迭互ひに相ひ向ひて、說きて言はく『彼れは是れ何物なりや。希有なる心を生じ、怖畏れを生ず』と。是の如くに山上にて遊戲して樂しみを受く。復心動き已はりて、猶更に樂を受け、境界の樂しみを受け、種々の樂しみを受く、無量種の無量に分別せる[四一]五樂の音聲あり、園林の中に多くの天衆あり、天女の衆と共に無量百千の天衆樂しみを受く。

【四一】五樂。五欲の快樂なり。五欲とは、色・聲・香・味・觸の五境なり。

卷の第四十一

觀天品之二十

夜摩天之六

爾の時、天王牟修樓陀夜摩天、諸の天衆、諸の天女の衆と共なりき。無量百千那由他千の諸天の大衆、諸の天女の衆の一切皆山樹具足の地處の中の伽那山の所に向へり。一切の天衆蓮華の座に坐し、普く虚空に遍ねし。彼の山の上に上りて、彼の天衆を見るに、無量種の形服ありて莊嚴り、無量種の色、無量なる功德を具足す。天女は圍遶を爲し、彼の山中の天五欲の功德もて諸の快樂を受く。爾の時、天王牟修樓陀是の如くに見已はりて、心に甚だ歡喜びて、天女の衆と共に卽便ち速かに山樹具足の地處の天衆に向ふ。彼處の天衆既に天王牟修樓陀を見、卽爾に速疾に天女の衆と共に一切奉迎す。鼓樂の音聲にて種々に歌舞し歡喜びの心を生じ、迭互ひに相ひ近づきて、彼れと此れと和合す。遍く山の頂きの上にて、種々に歌舞し、天王牟修樓陀を讃歎して、共に山上に到る。彼の山上に於て、彼れと此れと迭互ひに種々の音聲にて娯樂して樂しみを受く。彼の諸の天衆是の如くに樂しみを受け、長久き時に於て、上の虚空の中に、天狗の下るを見る。是の如き天狗の光明等の事前に說きし所の如し。爾の時、天衆既に是の如き希有き事を見已はりて、復更に疑慮の心を生じて大なる怖畏あり。卽爾に前みて牟修樓陀夜摩天王に近づき、附近に依止す。虚空に向ひて直視して觀る者あり、先に曾つて彼の天狗を聞きし者ありて、放逸なる行を離れ、彼の天主牟修樓陀と共に、誠の心にて佛を禮し奉る。復怖畏て金の窟に入る者あり、樹に依る者あり。此の二種の天勇なく、力なし。天あり走りて牟修樓陀夜摩天王に趣き、歸ることを望みて救ひを求む。此れ、是の如く、第一の希有なるを見て、疑慮の心を生ぜしなり。爾の時、天主牟修樓陀是の如きを見已はり

て、天衆に告げて言く『汝等天衆知ると爲すや、知らざるや。此くの如き光明は虛空の中に在りて、地に墮ちんとするに臨めり。汝等皆來れ』と。其の中にて天の先に知らざる者あり、則ち天王牟修樓陀に白して、是の言を作さく。『我れ實に知らず。今是の如き希有き事を見たり。我れ實に知らず』と。爾の時、天王牟修樓陀一切の天を喚び、之れに告げて言はく『汝等天衆の一切皆聽け。我れ今爲に說かん。虛空の中にて光の焰地に墮つるを以て、汝等天衆に怖畏れし者、希有しき心の者あり』と。

爾の時、是の如き一切の天衆に、夜摩天王牟修樓陀之れが爲に說きて言はく『汝等皆聽け。我が此處より上に在りて極めて遠くに、復天衆ありて、彼の一切種の量色・形相・長き命の業の因は、百倍して我より勝れり。是れ菩薩の處にして、第一に勝れて淨し。人中に在りし時に、五種に持戒して孔さず、穿たず。堅固にして犯さず。無量種の勝れし修行ありしが故に、身壞はれ、命終りて善道の天世界中に生まれしなり。彼の天世界を兜率陀と名く。兜率陀の中には、若しは受くる所の樂、若しは諸の園林、若しは諸の天女、若しは諸の光明、若しは色、若しは力、若しは利き智慧、若しは長壽、若しは無量の樂、或は身、或は心、若しは受用する所の資生の具、若しは天女の色、彼の十六分しても此の夜摩天は其の一にも及ばず。彼の天の功德を我れ能く說かず。彼の天の光明、我が此處の夜摩天の光を形りて、螢火蟲の日に於けるが如くにして、異なることなし。若しは諸の光明、若しは受用する所の資生の具の一切、彼の天に及ばず。久しき時に、無量種に諸の快樂を受く。彼の天の樂しみは第一に愛す可く、種々の諸の物を、五欲の功德もて、種々の境界にて受けて快樂し、此處の夜摩天の樂しみより勝れり。長久き時に於て、善業乃ち盡くれば、無常の金剛は、打ちて、碎壞けしむ。彼の無常の法は一切の衆生に必定して皆有り。必定の種子、不定の種子は一切の衆生に皆悉く具有す。無常到り已はらんには其の命則ち盡かんのみ。善業盡くるが故に即便ち

彼の兜率天の處より退ぞく。一切の有爲は流動すること燈の如し。謂く生じ、住し、滅するなり。一切の三界には物として動かざることなく、是れ常なる者なし。一切皆動き、一切は終ひに盡く。是れ常の法に非らず、處是れ常なること無し。諸の有爲の法は必定して退失く。是の故に彼處の兜率陀天も必らず當さに退失ぞくべきこと、燈の油の盡き、炷等の盡くるが如し。其の燈則ち滅す。燈の旣に滅し已はれば則ち闇の生ずることあり。燈生ずれば闇滅し、燈滅すれば闇生ず。種滅し已はれば則ち芽の生ずることあるが如く、是の如く、是の如き彼の業盡くるが故に、其の命則ち盡く。彼處の諸天も兜率陀の中にて、是の如く退くが故に、汝等今彼の天の已に死するを見る。業力を以ての故に、是の如き相あり、身は是れ無記にて死すと雖も而も是の如き光明あり。何かに況んや、復無量の善業の化する所の光明・第一の勝上にて決定せる善業の化する所の光明あるに於てをや。汝、夜摩天。今より應に知るべし、彼の相是の如し。彼れ若しは未だ死せざれば、何なる光明あり、何なる威德あり、何なる莊嚴あり、何等の業あるやは、彼れを說くべからず、譬喩あること無し。彼の天是の如くに四倍の善業の化作する所なるも、是の如く終に盡く。何かに況んや、我が此の三倍に持戒すること少き業の、化せる所なるものに於てをや。汝等は皆夜摩天の處に生るとも、坏脆く、無常にして、有爲の滓濁なり。是の故に此の天彼れに殊絕せり。彼の天是くの如きも、猶ほ尙ほ破壞す。何に況んや汝等にして破壞せざらんや』と。爾の時、天王牟修樓陀偈を說きて言はく。

無常にも、天狗は瞬くまに兜率陀天を燒きて、自在ならざるが故に滅し、燈の油と炷の盡くるが如し。　業力に推され、大力なる十二輻の業の輪に轉ぜられて、上下して停住らず。　種々なる境界を取り、無量の門にて莊嚴せらるゝも、時の滿足を以ての故に、闇に退いて自在ならず。　時節自在なるが故に、艸木は是の如くに生ずるとも、彼れ旣に時到り已はれば還へり

復乾はき枯燥る。天も是の如く時到れば則ち天の樂しみを成就し、是の如く復時到れば、還り退きて自在ならず。業は時より時に到り、世間に流轉し、時自在なるを以ての故に、樂しむ者も還りて苦を受く。若しは樂を受け、苦を受くるとも、境界の常なることを信ずること勿れ。此の一切の因緣にて、苦と樂は則ち差別あるも、一切皆樂しみなく、一切の業は自在にして、苦も亦爾く無常なり。皆是れ業の因の故に、異異たる諸の果を生ずる也。有爲法は流轉す。此の因緣を知らんと欲せば、應に四聖諦を知るべし。若し四聖諦を知らば、彼れ必らず解脫を得ん。癡にて境界を樂しむ者は、世間に轉ずること、輪の如し。善く義を知り、諦を知れば、彼れ則ち解脫を得ん。義と諦を知らざる者則ち解脫の期なからん。彼れ若し是の如くに世間の無常なるを知り已はれば則ち解脫の意を起し、善業ならざる心を遮へん。

彼の夜摩天是の如くに怖畏る。須夜摩天には無量種の無量の分別あり。彼の夜摩天王牟修樓陀法と相應して、是の如くに道を說けり。爾の時、天王智者の語を聞き已はりて、心各差別し、厭離せる者、生死を厭ふ者、生死を畏る者ありしも、又復心喜樂の境界に轉ぜり。[一]伽那山中の種々の園林、種々の戲ぶ處には多くの流水・蓮華池等にて莊嚴れる處ありて、樹枝に覆はれ、寶藏にて莊嚴り、種々の鳥ありて音聲愛すべく、蓮華池ありて、種々に莊嚴り、大なる七寶ありて山を莊嚴れり。多くの無量の愛すべき聲・觸・味・色・香等の種々の境界あり。天女の衆と共に境界に喜樂び、愛樂を成就して、前に厭離せしを忘れて、復憶念せず。

又諸の境界は初め樂しくして後苦なり。天女の衆と共に、是の如き境界にて諸の樂を受け、彼の山の處の故に、心の獮猴自在なる力を以て、中に於て樂しみを受く。又復天衆皆天主牟修樓陀と共に相ひ隨ひて還へる。空に乘る者、蓮華に坐する者あり、無量に莊嚴れる處に乘る者あり、所謂、

【一】伽那山。(Gajasirśa)。又羯闍尸利沙山、伽闍山、伽種山とも書く。譯して象頭山と云ふ。二處ありて、一は靈鷲山の近にあり、一は菩提道場の近にあり。

天の孔雀に乘る者、白象に乘る者あり、鵝に乘る者、鴛鴦に乘る者あり。是くの如き等の種々の異なりたるに乘る天女ありて圍遶き、若しは歌ひ、若しは舞ふに、種々の樂音天と相應するが如く、其の天主なる牟修樓陀天王の前に在り。戲樂林の牟修樓陀天王の住處に向ふに、種々なる深心生じ、意覺知りて厭離する者あり、放逸なる者ありて、是の如く種々の遊戲の境界にて快樂を受く。戲樂林の中の地處の諸天は是の如く差別して、種々に同じからず。若しは復彼處の山樹具足の地處に住する天伽那山頂の上に在りて住す。彼れ種々の意にて嬉戲れて樂しみを受く。其の中にて、天の厭離を生ずる者あり。是の如く、種々無量に分別せる無量の境界にて快樂を受く。是の如くに無量の境界にて樂みを受るも、心に厭足せず。是の如くにて、乃至善業の樂因盡き爛れ、壞失ひて、彼の天の處より業盡きて退ぞく。是くの如く退き已はり、種々の業の繩に繫縛せられ、地獄・餓鬼・畜生に生まる。若し人中に生れなば、常に樂しき處に在り、諸根を具足して善き智慧有り。第一の大心、第一の大富にて、一切の人の爲に供養せられ、端正にして好き色なり。若しは人の王と爲り、若しは大臣と爲る。餘業を以ての故なればなり。

又、彼の比丘業の果報を知りて、夜摩天の有する所の地處を觀ず。彼れ卽ち聞知するに、復地處ありて、廣博行と名く。衆生何なる業にて彼の地處に生るるや。彼れ見聞して知るに、若しは善男子善知識に近づき、業の果報を信じ、心意正直にて法行に隨順し、禁戒を受持し、正見にて邪ならず。正見の行を修さめて、常に耆宿に近づき、佛・法・僧に清淨の信を生ず。生死を信じ、常に一切の時に善く諸根を攝さめ、境界に著せず、生死を怖畏る。愛別離を知り、生老病死、恩愛聚會、恩愛離別の一切皆知る。〔二〕五聚の陰に於て、其の過を識知し、常に勤めて精進し、善業に順じて行ひ、惡知識を離る。常に一切の時に樂しみて正法を聞き、聞き已はりて思惟し、思ひ已はりて義を知り、攝持て心に在り。欲を離れし味を知り、常に殺生せず、常に偸盜せざること、前に說きし所の如し。

【二】 五聚陰。色・受・想・行・識の五陰のこと。五蘊を見よ。

復邪なる行を捨て、婦女の根を眼にて見るを樂ます。其の歌舞の莊嚴れる音聲を、聞き已はりても味はず。畫きし婦女を若しは見、若しは聞くも、善からぬ念なし。夢に婦女を見、覺め已はりても樂します、愛念を生ぜず、多く欲を行はず。常に正しく觀察して邪婬を捨離し、欲事を棄つること毒の如くにて異なること無し。彼の人是の功德に相應して、常に善業を行ひ、恒に善き念ありて、垢染し心を離れ、持戒して普く淨く、善く禁戒を護る。彼の人是の如くにして、身壞はれ、命終りては善道の天世界の中に生まれ、夜摩天の廣博行の處に在り。彼れ三の功德にて樂しみて修さめ、多く作し、淨戒を愛樂み、持戒して果を得ては彼處に生まる。纔に彼こに生まれては卽ち天鳥の種々なる音聲を聞くに、第一に愛す可くして跋求の聲の如し。鼻に齅ぐ所の香は、本未だ曾つてあらざる第一の天香なり。彼の香を齅ぎ已はりて、第一の樂しみを生ず。身に覺觸る所本未だ曾つて得ざるものなり。心意淸淨にして濁亂せず。心の廻轉するが如く、正しく相應するが故に則ち歡喜を生ず。味も亦是の如し。種々の味ありて、本より未だ曾つて得ず。彼の天是の如き六識の身に前みて樂を受け已はり、是の如く思念せり。『此れ何なる世間にて、我れ何處に住するや。此處の一切皆悉く愛すべく、皆悉く樂むべくして、本と皆異る』と。此處の世間にて一切の色を見るに、無量の好色なり。復自身に有する所の光明を見るに、日の光明より勝ぐれ、肉骨の汚を離れ、諸の不淨を離る。影を離れ、眹を離れ、脉を離れ、筋を離れ、大小の節を離れ、堅き觸を離れ、身體柔輭にして、普く身の諸の分の一切皆輭く、疲倦ることを離る。自ら念ふ所に行き、若しは來り、若しは去るに、皆障礙なし。求索ことを離れ、身の傴曲るを離る。彼れと此れと迭互ひに相ひ憎嫉せず。身體の雜毛、頭髮皆旋り、一一の毛は旋れり。眼に對矚する所妨礙あることなく、境界劣ることなく、諸の障りを離れ、聲・觸・味・香・身增減せず、變らず、老ず、恒常に力ありて、天女の妬嫉・怖畏・怯弱一切皆離る。身に自ら具足して莊嚴を求むることを離れ、財物を求むることを離れ、諸の

【三】六識。識（Parijñāna）は了別の義にして心境に對して了別するを識と名く。六識とは眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識なり。六根が次第の如く、色聲香味觸法の六境に對して、見、聞、嗅、覺、知の了別の作用を生ずるものを云ふ。

天女に於て攝取の過を離る。復何に離る所なりや。園林の中に於て、處々に遊行りて怖畏所なく、怨家の畏を離れ、不淨の畏を離れ、足るを知ることを離る。自己の身を見れば則ち愛樂を生じ、念々に天の無量種の諸の境界の樂しみを增長して、悕望む所の如くに樂しみありて皆得。樂しみを悕望み已はり、少智を以ての故に、心に是の如く疑ふらく。『我れ何處より來りしや。我が此の身は是れ何なる身と爲すや。此れは是れ何なる處にて、此處は何かに名くるや』と。彼れ是くの如くに疑ひ、心中にて思量すること、譬へば醉ひし人の如く、或は睡れる人ありて、夜に四分あるに、三分を已に過ぎ、睡りよりして寤め、良久しき時に於て、彼れ心に疑念ふらく『我れは是れ何なる人にて、我れは何處に住するや』と。少時思念して爾乃ち知ることを得。是の如く、是の如くに始めて生まれし天子は良久しき時に於て、心に思惟し已はりて、然る後に乃ち我が人中に死し、來りて此處に生まれしを知る。彼の天、是の如くに、人中の時に於て持戒し、熏思し、是の如くに相似して天中に生れり。

若しは閻浮提にて境界を樂まずんば、彼の天の處に在りて、初めて生まれし時も亦喜樂ばず。何を以ての故に、本と熏思せしが故なり。時に彼の是の如くに始めて生まれし天子、良久しき時に於て、是の如く覺知すらく『我れ天處に在りて、善業を以ての故に、天世間に生まる』と。若しは人、是の如くに人中にて死して、天中に生まれ、彼れ持戒し來りて、猶ほ故、是の如くに境界に著せず。是の如くんば、後時に天上より退き已はりて、人中に生まるに、本と天上の時の所習の熏の故に、相ひ似たる相あり。是の如くに、人中にて熏思するを以ての故に、後時に死し已はりて天中に生まるるも、境界を樂しまず、婬欲に近よらず。時に、彼の是の如く始めて生まれし天子、持戒せるを以ての故に、彼の天に生まると雖も、境界に近よらず。餘業を以ての故に、心をして是の如くに境界を樂まざらしむ。

若しは地獄を出でて天中に生まれし者、彼の生業の故に、地獄の中に在りて、出づるを得べきに難し。餘の善業の故に、少しの願を以ての故に、地獄を出でて天中に生まるを得。是の如く苦惱の處に在りて、來り生まれ天の中に在るを以て、樂しみを得ば、即ち著して、心に歡喜を生ず。又多く瞋恚り、園林・流水・河池の種々の蓮華を喜樂びて、勝れし愛樂しむ心あり、喜戯れ、遊行ぶ。彼れ飲食に於て愛樂む心強し。彼れの意の相續の熏ぜられしが故なり。

若しは餓鬼を出で、餘業有るが故に天中に生まれし者は、意の相續の熏にて、食を樂む心強く、飲食を愛して、常に冷に處り、多く婦女を樂しむ。彼れ意に熏ぜしが故なり。

若しは畜生を出で、餘業あるが故に天中に生まれし者則ち飲食多し。畜生の中にて多く食し、多く飲むが如く、天中に生まれても亦復是の如く、多く食し、多く飲む。少飲多食を心に愛欲すること強し。意の相續に熏ぜしを以ての故に是の如し。

若しは[四]無色界の四處を退ぞき已はりて、彼の天に生まれし者は、本と三摩跋提を修得せしを以て、是の故に彼の無色界中に生れ四地の處に生まれ、業盡きしが故に彼の天中に生まる。是の如きは本との意の相續の熏の故に、是の如く觸・味・色・香等を愛し、是の如く得已はりて復樂しまず。心寂靜にして多く亂れざるを以ての故なり。彼の熏ぜし心の故に、若しは色界に於て初禪に依止し、是の如く乃至四禪に依止し、彼の禪盡くるが故に退きて欲界に生まる。是の如くに本の意の相續の熏の故に下・中・上あり。心坐禪を樂しみて、境界を樂しむ心少くして多からず。

若しは欲界の天欲界の中より退き、還へりて欲界に生まる。生業を以ての故なり。是の如く二道にて衆の善業を作さば若しは天、若しは人、是の如き二種は欲天の中より退ぞき、還へりて欲天に生まる。善業を作るが故なり。唯だ欲界の中の一切の諸天は二種の業熟す。淨居天を除く。彼の淨居天は生まる業熟すに非らず、餘業熟すに非らず。是の如き業風常に一切の世間の衆生を吹き、其

【四】無色界(Ārūpadhātu)。色法即ち物質は全く無く、唯微妙なる精神のみにて生活する者を云ふ。此の界は其の禪定壽命の優劣に由つて四天に分ち、生死界の最上位の果報なりとす。

れをして流轉せしむ。心の羂に繫がれ、亦た種々の業の羂の爲に縛られ、無量百千の異りたる心に信解し、無量に分別し、次第に相續して、五道中に於て、流轉して常に行ふ。

爾の時、是の如く始めて生まれし天子、是の如くに觀察し、是の如くに思念し、然る後乃ち『我れ某道に於て退き來りて此こに生まれ、我れ人中にて退き來りて此こに生まれり。生まる業を受けしが故に』と知る。彼れ是の如くに知るなり。彼の業の故に生まれ、若しは餘業にて生まれたりと是の如くに亦知れり。何なる因緣を以て此の天子餘業にて生まれしに非らずと知るや。若しは餘業は久しき時に因緣して、或は一百劫にて能く果報を與ふ。一千劫、或は百千劫なるものあり。少き天眼の者は自ら見ても、本との過去に生ぜし久遠の業の因緣にて此こに生まれしを知らず。生まる業にて生まれし者は則ち來りし處を知る。彼れ是の如くに生まるる因緣を觀じ已はりて、心に憍慢を生ず。未だ久しからざる間に、善業の熏ぜしが故に、境界の中に於て愛著心を生ず。無量種あり。彼の天爾乃ち是の如く念知すらく『我れ夜摩天の中の廣博行と名くる地處に在り。生まれ已はりて卽ち心を生ずる時、諸の天女の衆現に前に在り。善業を以ての故に、彼の天女の衆速かに來りて圍遶けり』彼の天子の善業の力を以ての故に、天女來至せり。若しは彼の天女の生まれ來りて久しき者は則ち羞恥せずして近づき、之れを抱かんと欲す。彼の天子を遶りて、共に園林の中にて諸の樂しみを受く。善業の價を以て、彼の天女の種々の功德を得て、第一に愛すべくして、共に樂しみを受く。彼の地處に於て、好き山林・蓮華・河池・澗谷・流水あり、好き平地あり、好き金の窟、樹の枝の舍あり。無量百千の種々の諸の鳥には種々の音聲あり、無量百千の天女の衆迭ひに相ひ圍遶き、是くの如き處に在りて歌舞し、遊戲す。彼處の園中に七寶の鹿ありて處々に遊行り、是の如く種々に眼に見し所の者皆悉く愛すべし。彼處に山あり、名けて廣少と爲す。彼の山峰は七寶の光明もて種種に莊嚴り、種々の寶石雜々はり、間錯れり。蓮華林ありて皆是れ七寶なり。園林の中に在りて、

多く河池あり。是の如く、種々に莊嚴れる處は、善業を以ての故に、妙へなる色にて莊嚴れり。是の如き處に於て、歌舞し、遊戲して、種々に樂しみを受く。

彼の天は是の如くに同じく樂を受け已はりて、水中に於て遊戲する者あり。是の如く種々に地獄・餓鬼・畜生に到らんと欲し、善業を以ての故に、戲むれ樂しみて止ます。彼の諸の天等自らの身中に於て、一切の天の業の相と名字を示す。若しは天前きの世にて何なる善業を作せしや。何かに心に業を作りしや。何なる時に於て作せしや。何かなる因緣を作りしや。何かに生まる處を作せしやを。此の是の如き等を、下・中・上の福田に於て具足し、財物に具足して、善業を作す。彼の一切の相は自身の中に於て、其の名字を見す。譬へば明了に善く書畫せる者の如きは、各々處を別にし、其の作す所に隨ひて、歷然として分明なること、彼の名字の如し。此の天是の如く善業の畫師にて、業の地處に於て、一切の善業を皆悉く普く畫く。善業の彩色は、善淨なる光明にして、見れば則ち極めて愛すべし。彼の天の一切の樂見を畫作することは、彼の善業の巧みなる畫の色の如し。是の如くにして生まれて、彼の天の身は、是の如くに畫字して相ひ現はすことあるを以て、百倍に嚴勝たり。譬へば第一の百煉せる眞金の如し。或は復其の餘の赤蓮華寶、或は青色の寶、是の如き種種の勝れし寶は、端嚴にして愛すべきも、彼の天の身相百倍端嚴なり。是の如くに畫きし相は自らの眼見ず。何を以ての故に、額の下咽の上に在る相なるを以ての故なり。是れを以て見ず。若しは彼の天子心に未だ放逸せずんば則便ち更に互相に此の相を見る。又善業の因にて、是の如く更に互相に此の相を見る。彼の廣博行の地處の天是の如くに希有なり。

彼の天復希有の相あり、咽の相の如くに額の上も亦爾り。善業を以ての故に、是の如き相、種々の業の畫きし種々の色の相あり。所謂相とは云何にして退ぞき、何れの時に退ぞき、是の如く退ぞき已はりて當に何處に生ずべきやなり。彼の種々の色、種々の畫の相は、彼の天の額の中に皆悉く

具に見はる。此の希有き相は是れ業の作る所なり。彼の天の身の上に是の如き[五]華鬘種々に雜々り、是の如く端嚴にして、餘の異處に有る所の諸天の種々なる華鬘にて身の首を莊嚴り、端嚴、殊妙なるが如し。此の相の莊嚴も亦復是の如し。

又彼の諸天に復善業の果報の成熟せるものありて、自らの業を身に畫き、諸の天女の種々に身を畫いて勝れて莊嚴る者と共に、諸の快樂を受け、無量種々なる園林の內、廣博行の地處の中に於て遊戲して樂しみを受く。既に樂しみを受け已はりて復一河に向ふ。河を善雜と名く。彼の河は雜愛の山峰より流出して來るが故に、善雜と名く。種々の寶ありて彼の河を莊嚴り、無量の鳥の衆には種々の音聲あり。多くの無量種々なる異なれる樹ありて、彼の河を莊嚴れり。種々の華ありて、共の華雜色にて、百千分の異なる色あり同じからずして、河岸を莊嚴れり。無量の天女彼の河岸に近づき、遊戲して樂しみを受く。又復更に、殊妙なる河水あり名けて雜河と爲す。此の河雜色の崖岸の山峰より流出するが故に雜河と名く。是の如き雜河は、若しは天の之れに近づけば、本との生まれし處を則ち能く憶知す。彼の天若しは地獄の中より來りて、彼の河岸に到れば則便ち憶知す。既に憶知し已はりて、極めて愛すべき五欲の功德あり、皆悉く具足す。諸の天女ありて、心に甚だ歡喜び、遊戲して樂しみを受く。心を以て憶知するに、會つて苦惱を受けしが故に、樂しき事を一切皆忘れ、是の如くに欲を厭ひて偈を說いて言はく。

地獄の熾火の中の苦しみは切に、甚だ大苦なり。　我等の惡業盡きて、皆來りて此處に在り。
業善ければ果も亦善く、諸の功德にて莊嚴らる。　業惡なるが故に果苦みに、必定して是の如く受けん。
我れ苦樂の中に於て、生死の處に輪轉し、業風吹きて轉ぜしむること、猶し海中の波の如し。
若し心ありて惡を作し、惡事を喜樂する者は、彼れ善行ならざるが故の　因緣にて地獄に墮つ。
彼の地獄を脫するを得て、此の天處に來生せしも、彼處の苦しみを忘れ已

【五】華の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

はりて、復欲樂を行ふ。此の境界に流轉し、苦樂は梁の繩の如く、心は堅き鞠[六]にて、苦を受けて厭惓はず。此彼の岸和合し、諸根に誑らかされ、愛の羂の爲めに縛られ、一切生死に流る。地獄を出でて鬼に生まれ、鬼を出で畜生に生まれ、餘の畜を出てて龍と作り、龍を出ては三處に生まる。業は是の如く常に行ひ、世間は轉ずること輪の如し。久しく習ひ來りしを以ての故に、猶ほ疲惓れず。龍宮の殿を愛樂みて、地獄の苦しみを樂ます。有の獄に流轉す。有樂、不樂の處に、千の鉢頭摩の苦、百億の[七]鉢頭摩、是の如く時に苦しみを受け、癡なるが故に厭惓はず。三界皆樂しみなく、普遍く一切は苦なり。衆生癡の爲めに誑かされ、而も厭惓を生ぜず。是の如く苦を受け已はりて、癡なるが故に、苦の因を造り、因に由るが故に果あり、果の種子に從ふが如し。境界に心迷はさるも、勇健にして大力ある衆生は彼の心を調へ、彼をして時に寂靜ならしめ、彼の心を調伏し已はる。一切の界に轉行し、[八]三有に輪廻して、眞諦を見ること能はず。風の因緣を以て、海水をして波動せしむるが如く、是の如き因緣の心世間をして常に轉ぜしむ。衆生は婦女に著し、苦樂の爲に執へられ、善地の苦惱なき處に到らず。若しは苦を憶知する時則ち厭離の心を生ず。既して彼の苦惱を忘れ、還りて著し放逸を樂しむ。若し能く地獄の苦惱を憶知する者あらば、是くの如き天中の樂しみも、猶ほ小微塵の如からん。

彼の天皆本と曾つて生まれし諸有を憶ふ。彼の雜色なる崖岸の山峰より出る所の雜河の岸に近く者、皆本と曾つて生まれし處を憶知す。若しは離れ去りし者本の生まれし處を一切皆忘る。彼れ復苦に於て心既に忘れ已はり、本の生まれし處を忘れ、本の生を忘れ已はりて、復樂しみて種々の境界に著す。無量種あるも異ることなく、相ひ似て愛すべき、聲・觸・味・色香、等天の妙なる境界にて、是の如く樂しみを受く。

【六】鞠は玉篇によれば絲の履なり。

【七】鉢頭摩(Padma)。又鉢特摩、波頭摩と書く。八寒地獄の第七。此の地獄の衆生は寒苦の爲めに肉割けて紅蓮に似たるが故に此の名あり。又紅蓮華とも云ふ。

【八】三有(Toyobhavā)。欲、色、無色界の三界の生死の果報を謂ひ卽ち三界と同じ。

既に樂しみを受け已はりて、復更に久欲と名くる山に向ふ。彼の久欲山は普く皆愛すべく、第一の河あり、蓮華の水池ありて、其の水清淨にして彼の山を圍遶けり。鵝鴨、鴛鴦は彼の河池に在りて莊嚴を爲せり。種々の金寶は河の兩岸を爲し、水流の聲に種々の音あり。彼の山の中には、是の如き等の河ありて、其の數一萬なり。種々の樹林は種々の衆鳥もて莊嚴を爲せり。彼の諸の河の中にて四の河最も勝れたり。所謂四とは、一を速流と名け、二を金鬘と名け、三を毗瑠璃水と名け、四を樂漂と名く。是れを名けて四となす。

爾の時、天衆自らの業果熟して、一切是の如くに歡喜の心を生ぜり。種々の衣服にて其の身を莊嚴り、遊戲して樂しみを受け、速流河に向ふ。彼の河の岸に近づくに、長き妙へなる華の極めて大なる樹林あり、無量樂と名く。其の華開敷き、其の枝密に覆ひて、間に空處なし。無量百千の種々の色の花なり。流水の池あり、種々の諸鳥ありて、鳥の身は皆是れ種々の雜寶なり。衆鳥の音聲處處に遍滿く、彼の速流河の第二の岸邊に蓮華池あり。彼の池を名けて醉蜂巡行と曰ふ。日の初めて出づるが如き、赤色の蓮華は彼の池の中に在り以て莊嚴を爲す。是の如き蓮華には第一の香ありて、普く池水を覆へり。彼の河の二岸の一に樹林あり、一には華池あり。彼の河の長さの量五百由旬にして、廣さ五由旬なり。其の水普く清くして、水の中に華を生じ遍く其の水を覆へり。華葉雜色にて、若干種々第一の香あり、彼の是の如き香五由旬に遍ねし。爾の時、彼處の是の如き諸天心の念ふ所に隨ひて、天の園林の中に在る者あり、天の蓮華の中に在る者あり。心の念ふ所の如くに遊戲して樂しみを受け、彼れと此れと迭ひに共に歡喜て樂しみを受く。自らに光明あり、善業の力を以て彼處に在りて生ず。彼の速流河の兩岸の邊に於て、廣博行の天種々に遊戲して快樂を受く。是の如き一の河は彼の金鬘河にて、山峰より出づ。彼の山を衣と名け、又衣山の峰より復此の河を出す。此の金鬘河甚だ愛すべきと爲す。河衣山に在りて、猶し金の鬘の如きが故に、此

の河を名けて以て金鬘と爲す。彼の金鬘河は是の如き功德ありて、所謂其の水悉く是れ天酒にして、酒の過を遠離れ、第一の善き香・味・色・觸等皆心意の如くに一切具足し、憶念する所有りても、妨げず、亂さず。爾の時、彼の天諸の天女と共に是の如き酒を飲み、復勝れし樂しみを受く。彼の一一の天皆無量の諸の天女の衆に圍遶れることありて、心意樂しみて五欲の境界に著し、五樂の音聲情に稱ひて美妙なり。諸の天女と共に、心に念ふ所に隨ひ、意の如くに自在に、金鬘河の邊に無量種種の勝れし樂を成就し、境界の中に於て、心厭足ことなし。又復歌舞し、種々に遊戲して諸の快樂を受け、一の山口より一の山口に至り、一の山峰より一の山峰に至り、一の河岸より一の河岸に至り、蓮華池より蓮華池に至り、園林の處より園林の處に至り、樹根の下より樹根の下に至り、是くの如くに種々の諸處に樂しみを受く。既に樂を受け已はり、次に復往きて毗瑠璃水の第三河の所に向ふ。毗瑠璃水の第三の河中の其の水清淨にして、毗瑠璃の如し。彼處には多くの毗瑠璃の樹あり、又復多くの毗瑠璃の鳥ありて、彼の水の中に在り。其の水波の鬘、其の沫は笑ふが如く、淨潔き清水徐ろに流れて急ならず。其の水極めて深くして、妙へなる音聲のあるは、善業の故なり。毗瑠璃の水是くの如くに緩かに流れ、天樂を受けんと欲して、心に念ふことある時、彼の河中に到るに、境界に渴せるが故に、種々に愛して貪れり。彼の天樂を受けて一處に在らず。河の岸にありて樂しみを受くる者あり、水中に在りて樂しみを受くる者あり、諸の天女と共に第一に嬉戲して快樂を受く。彼の諸の天衆皆悉く鳥に乘りて、一の水波より一の水波に到り、處々に遊行して、一の水旋[九]より一の水旋に入り、一廻波より一廻波に入り、水に入る者あり、入り已はりて復出で、更に急處に入る。又復彼の天一蓮華より一蓮華に入り、又復一優鉢羅林より更に其の餘の優鉢羅林に入り、是くの如くに遊行して、百たび到り、千たび到り、樂受を成就して、譬喩すべからず。

又復彼の天善業の力の故に、境界寂靜にして、毗瑠璃水の清淨なる處に、業の果報を見る。若し

【九】旋は說文に依れば回泉なり、漩と同じ、水のうづまき。

は其こに天あり、持戒して淨く勝れ、若しは智慧勝れたれば、彼れ則ち能く本何なる因緣にて、是の如き業を作し、彼の天の毗瑠璃水の清淨なる處に生まるることを得しやを見、一切皆見る。何なる因緣を以て是の如き心を生じて往事を憶念するや。前世の時に、福田の中に於て清淨の心ありて、深く信を生ぜしを以ての故に。彼の一切の天の一一各各是の如き心を作さく『我れ境界の力にて是の如く動轉し、五欲の水愛河の中に在りて、是の如くに我を漂はし、我れをして覺らざらしめしも、無常にして退くこと至らん。我れ此處より必定して當に退くべし。過去の世に作せし所の業の相の如く、此に生まれし因は自らの咽の上に現る。』と。彼の天既に是の如き相を見るが故に、過去世に是の如き等の善業の因緣を作り、來りて此處に生まれしを知り、是の如くに樂しみを受く。若し彼の業盡くれば、此の天上より必定して當に退くべし。是の如くに念ひ已はりて、彼れと此れと迭互ひに相ひ向ひて說けり。復〔一〇〕五道の怖畏の處を見、見て怖畏し已はりて、彼の一切の天各厭離を生じ、毘瑠璃水の河岸の邊處にて、偈を說きて言はく。

若しは過去に善を修さめ、善人の爲めに愛せられ、今此の天處を受けしも、念々に盡くることに向つて去る。彼れ盡き已はれば則ち退ぞく。天中の善き報の處の一切の樂しみの因緣も、皆是の如くに盡き滅せん。既に無常の手に入れば、一切皆破壞せん。若し法無常ならば、一切をして皆貪らしむ。是の如く無常法は、能く一切の食を與へ、愚癡にして少智の者欲味に貪著す。癡の過を覺知らざること、波迦果を〔一一〕食するが如く、色・聲等に繫縛され、愛するが故に苦惱を受く。惡業は衆生を迷はして、自在を得ざらしむ。惡業に迷ふを以ての故に、則ち惡業果を受く。諸の欲味に著する者は欲の害は、毒果の如きも、欲に著して足ることを知らず。故に地獄の中に墮つ。常に樂しみて施・戒を行ひ、施・戒の福を成就し、若し常に是の如く行へば、彼れ則ち天上に生まれん。持戒して常に修行し、不善業を捨離て、

【一〇】五道。又五惡趣とも云ふ。地獄、餓鬼、畜生、人、天を謂ふ。

【一一】食の字は宋・元・明三本、及び宮內省圖書寮本に依る。

恭敬して威儀を修さめなば、彼れ則ち天上に生まれん。衆生を愍れみ安慰め、深く佛法を信じ、心を攝さめて寂靜なる者は、彼れ則ち天上に生まれん。若し怨家の所にて、慈心にて瞋垢を離れ、常に寂靜なる心の者は、彼れ則ち天上に生まれん。若し心中に瞋なく、彼れ善にて惱みなく、勇しく善く調伏する者は、彼れ則ち天上に生まれん。常に實を語り、戒を持して多く言說せず、堅を知り不堅を知らば、彼れ則ち天上に生まれん。若し世間を樂しまず、老死の法を厭離し、常に涅槃を樂しめば、彼れ則ち天上に生まれん。若し樹下、塚間、是の如き山、谷等にて、常に一心に禪をする者は、彼れ則ち天上に生まれん。時を知り、父母を敬ひ、惡知識に近づかず、常に慈心を行ふ者、彼れ則ち天上に生まれん。聚落の城、及び戲ぶ處の道を行くことを樂まずして、一處に住し足ることを知らば、彼れ則ち天上に生まれん。

若し善く自ら身を觀じて、常に其の淨からざることを見、自らの身を知ること是の如くんば、彼れ則ち天上に生まれん。若し能く法の網を知り、種々の法の網を知り、生死を喜樂まずんば、彼れ則ち天上に生まれん。若し諸法を覺知り、無量種々の生を見ると雖も、喜樂まずんば、彼れ則ち天上に生まれん。心念々にして幻の如く、乾闥婆城の如し、若し此の心を調伏せば、彼れ則ち天上に生まれん。若し諦に[一]一相を知り、或は善く[二]二相を知り、心欲を厭離せば、彼れ則ち天上に生まれん。他の妻を母の如く、一切を父の如くし、若し是の如く平等なれば、彼れ則ち天上に生まれん。若し恒に兩舌を離れ、常に樂しみて他と和合し、心慳かならずして直なれば、彼れ則ち天上に生まれん。他の一切の物に於て、皆土塊等の如く、自ら足ることを知る樂を生ずれば、彼れ則ち天上に生まれん。若し夜に於て晝に於て常に能く懈怠を離れ、勤行め精進む者は、彼れ則ち天上に生まれん。若し慢・貪・瞋を離れ、復懈怠を離れ、是の如くに捨離する者は、彼れ則ち天上に生まれん。恒に五塵を樂しまず、五塵に

【一】一相。物の一樣なる相なり。眞如は一實一相なり。
【二】二相。總相と別相となり。一切世間の有爲法は皆無常なりと斷ずるは總相にして、一方より、五大に就て水の濕相、火の熱相を是認せざる能はざるは別相なり。(智度論、三十一の說なり。)

て破戒せず、常に戒、智を護る者は、彼れ則ち天上に生まれん。若し能く[一四]四取を知り、四諦をも亦是の如く、智者是の如く知れば、彼れ則ち天上に生まれん。若し苦・苦報を知り、亦復苦の沒するを知り、是くの如くに諦かに見る者、彼れ則ち天上に生まれん。若し衰惱を得已はりても、法を捨てず是く法を攝受る者、彼れ則ち天上に生まれん。若し壞色衣を著し、及び糞掃衣を著し、善心にて惡を行はずんば、彼れ則ち天上に生まれん。若し一切の時に禪をし、常に出世の心ありて、恒に空閑處を樂しまば、彼れ則ち天上に生まれん。若しは美、若しは不美なるも、他の得る所に隨ひて、心に喜ばす、瞋らずんば、彼れ則ち天上に生まれん。若し麁鄙[一五]衣・塵土・糞掃衣を著し、是の如き衣にて足るを知れば、彼れ則ち天上に生まれん。若し牀、若しは[一六]池樓、或は復餘處に在りて、苦樂の心を生ぜずんば、彼れ則ち天上に生まれん。眼に見る所の色の青・黄・赤・白等に於て、若し實の如く諦かに見れば、彼れ則ち天上に生まれん。若し愛・不愛の二種の聲を聞くとも樂まず、心正しく、動亂せずんば、彼れ則ち天上に生まれん。六根を調伏して境界を樂まず、心を攝して動亂せずんば、彼則ち天上に生まれん。是の如く大饒益し、恒常に快樂を受け、若し一切を皆作さば、彼れ則ち天上に生まれん。[一七]是の如くに功業を作さば、是れを則ち最勝と爲し、無垢の法を行ふ者、彼れ則ち天上に生まれん。若し業報を知り、能く業報を作し、苦を常に怖畏れなば、彼れ則ち天上に生まれん。

彼の天是の如く領の下咽の中に、諸の相を見已はり、極めて大いに怖畏れ已はりて、此の偈を說き、河の岸邊にて諸の天衆と共なり。本との性放逸にして、本との業を以ての故に、咽の中に現はれり。若し餘處に至れば則ち復見ず。若し因緣あれば則便ち之れを見るも、若し因緣なくんばありと雖も見ず。何を以ての故に、一切の法は因緣を以て生ずるが故なり。

【一四】四取（Catur-Prāmar-ṣa）。一に欲取（色聲香味等五塵の境に於て貪欲取着するを云ふ。）二に見取（五蘊の法に於て我見・邊見等を妄計取着するを云ふ。）三に戒取（外道の狗戒牛戒の如き非理の戒禁を取着修行するを云ふ。）四に我語取（我語とは我見我慢等の我見より發する所設の法に名く、此の我見我慢に取着するを我語取と云ふ）。

【一五】衣は明本に依れり。

【一六】池の字は宋・元・明三本に依る。

【一七】如是功業作は宮內省圖書寮本に依れり。

又復彼の天の本性放逸にて、性放逸行なり。久欲山を離れ、復餘山に向ふ。山を寶園と名け、歡喜心の故に種々に莊嚴り、現在に生ぜるは欲、能く其の心を牽く。未來に有する所の諸の畏を計らず。根搖動て寂靜ならざるを以ての故なり。彼の天中に於て第一の樂しみを受け、歌舞し、喜笑し、種々に遊戲す。河の岸邊に於ける種々の樹枝は諸の華を具足す。彼處に多くの常歡喜鳥あり。

復寶山ありて、勝れし寶山を圍み、無量百千分分の處に皆悉く具有する雜寶、間錯れり。彼の諸天樂しみを悕望むが故に、往きて之れを見んと欲す。時に、彼の天衆遙かに彼の山を見るに、光燄圍遶きて、虛空を穿つが如く、光燄上り出で、天曾つて見ざるに忽爾ちに之れを見る。彼の山の光明靑・黃・赤・紫にして、萬由旬を普ねし。

又復、是の如き雜寶の光明、其の餘の無量の寶山の有する所の光明より出勝ること、須彌山に有する所の光明の能く一切の其の餘の諸の山の有する所の光明を壞はすが如く、此の寶園山の有する所の光明能く其の餘の寶山の光明を壞ふこと、亦復是の如し。彼の寶園山を眼にて若し看る者は、能く眼をして樂ましむ。

又復第二に能く耳の樂しみを與ふ。所謂、種々の河池の聲、孔雀等の七寶翅鳥の種々の音聲あり、是の如き等の無量種の鳥の種々の音聲あり。彼こに寶樹ありて、樹に鈴網あり、風吹けば聲を出し、其の聲美妙にして譬喩すべからず。寶園の大山是の如き聲を以て能く耳をして樂ましむ。

彼の寶園山又復能く第三根の樂しみを與ふ。彼の天衆猶ほ未だ山に至らざるに、謂はく、彼の山中に、無量の華より無量の香を出して、天の鼻をして樂しましむ。彼の寶園山は是の如くに能く第三根をして樂しましむ。

彼の寶園山又復能く第四根の樂しみを與ふ。所謂、能く舌根をして樂しみを得せしめ、色・香・味のある酒をして能く豐足ならしめ、種々の美果を皆飽滿せしむ。

【一八】園の字は宮內省圖書寮本に依る。

彼の寶園山又復能く天身をして皆縷なき衣の觸を得せしめ、無量の衣服皆甚だ柔輭なり。復冷風ありて、念ふに隨ひて樂しく觸れ以て其の身を吹く。

彼の大寶山は是くの如く能く天の快樂を與ふ。彼の天の五根是の如くに樂しみを受く。五根の樂しみの如くに意も亦た是くの如き第一の樂しみを得。此の寶園山は一切の根に於て皆樂しみを得せしめ、是の如くに一切の天衆を饒益す。

爾の時、彼の天既に是の如く寶園山に到り已るに、彼の寶園山、光焰もて圍遶き、無量種の焰の光明を出して圍る。多く無量百千の蓮華の流水・河池あり、以て莊嚴を爲せり。金・毘瑠璃・青色の妙寶・白銀の寶等種々に雜雜り百千に莊嚴れり。彼の天既に是の如き山を見已はりて、本性にて自ら樂しむ。彼の山を見るが故に、百倍に樂しみを受け、諸の天女と共に迭互ひに各々更に相ひ樂しみを受け、歡喜の心を生ず。勝勝れて悕望し意甚だ彼の寶園山の窟々谷々を見んと欲す。處々に皆蓮華池林ありて、一の山峰より一の山峰に至り、河より河に至る。[一九]蘇陀の處にて、一寶林より一寶林に至り、處々に遍く種々の鳥の衆を見、復其の聲を聞くに、五樂の音にて、遊戲して樂しみを受く。彼の天の眼・耳・鼻・舌・身等の五種の境界は一切愛すべく、彼の根の聲・觸・味・色・香等は各々勝妙にして、是の如き諸根は、境界の中に於て一一樂しみを受く。是の如き境界にて放逸を愛するが故に現在世の中の、若しは苦しみ、若しは樂しみ、過去世の時の若しは苦み、若しは樂しみしを皆悉く忘失す。前の業果の如きは、種々の字畫の其の咽の中にて失に見し所の者を、一切皆な忘る。是くの如く遊戲して種々に樂しみを受く。是の故に皆本と作せし所の業を忘る。彼の天の勝妙なる寶園の山峰を淨無垢と名け、是の如き無垢して清淨なる處にも行殿の塵を見る。天殿に在りて行ひ、殿の所行處に妙寶の塵あり。彼の清淨なる處にも尙ほ殿の塵を見る。何かに況んや、其の餘の天身等の物に於てをや。種々の莊嚴愛すべく、身の色は業の[二〇]畫の作る所にして異異たる種あり。若し

[一九] 蘇陀(Sudhā)。又、須陀、首陀に作る。天の甘露味なり。蘇の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

[二〇] 畫の字は元・明兩本及び宮內省圖書寮本に依れり。

は此の天衆、命盡くるが故に退く。何なる業の作る所なりや。善業の力を以て、咽の中に字書是の如くに皆見はる。彼れ初めて見已はり厭離を生ぜず。何を以ての故に、愚癡なるを以ての故に。初めて欲味を得ては卽便ち樂しみに著して、厭心を生ぜず。彼の愚鈍なる天若しは他の爲に示され、或は自ら覺知りて、彼の〔二一〕欲の過を見れば卽便ち覺知り、事至りては怖畏る。彼の天是の如くに欲味に貪著し、其の過患を見れば則ち後時に於て、火に燒かるるを悔ゆらく『云何にして我れ本と此の欲を捨てざりしや。毒刀の火の如き此の欲は、乃ち是れ〔二二〕地獄・〔二三〕餓鬼・〔二四〕畜生の因にして、我れ今此の欲の因緣を以ての故に、必らず地獄・餓鬼・畜生の惡趣の中に墮ちん』と。是の如くに後時に、火に燒かるるを悔ゆ。若し心を修さめし者は則ち欲味に於て、味の樂しみを生ぜず。欲の過患を見て則ち彼の欲に於て味はず、著せず。欲の過を知るが故なり。智慧あるを以て、彼の過を見るが故に、後に則ち悔ひず。若しは彼の欲の境界を悕樂せずして、失ふを憂へざる者は、本と心を修さめしが故なり。

【二一】欲(Rajas)。刺者と音譯す。希求の義にして、塵境を希求するなり。

【二二】地獄(Naraka)(Niraya)。那落迦泥梨など書き、不樂・可厭・苦具・苦器・無有など譯す。地獄は地下に在る牢獄なりとの意で義譯なり。

【二三】餓鬼(Preta)。薜荔哆と音譯す。常に飢渴の苦を受くる一種の鬼なり。此の鬼類の中には、藥叉羅刹の大威德を有するものあれば新譯には鬼と云ふて餓と云はず。然るに舊譯の經論中に多く餓鬼と云ふは、鬼類の中餓鬼最も多きが故なり。

【二四】畜生(Tiryagyoni)。底栗車。新譯には傍生とす。畜養する生類の故に畜生と名づく。一切の世人は或ひは噉食の爲に、或は驅使の爲に此の生を畜養す。傍生とは傍行する生類なるを云ふ。

卷の第四十二

觀天品之二十一

夜摩天之七

爾の時、彼の天次第に行きて、彼の山峰の第一に無垢なる鏡の如き地に上る。彼の諸の天衆業地の鏡の中に自ら其の身を見るに、分分として明了なり。彼の諸天等、若しは先に身・口・意を修さめし者ありて、業地の鏡の中に、自身の額の中に現はれし業果の生死を見るを得。彼の某時・某處・某國・某因・某緣・某退相等を一切皆見る。亦他の相の當に退くべき相を見る。何なる者に隨ふも。天の額の中に【一】畫字せる餘業の相あり。或は生まるる業あり。彼の一切の相業地の鏡中にて一切自ら見る。夜摩天を退くに、若しは是れ餘業・或は是れ生業・或は身の惡業・或は口の惡業・或は意の惡業、是の如き因緣にて退ぞき已はりて、當さに某地獄の中・某餓鬼の中・某畜生の中に生まるべく、畜生の處より旣に脫することを得已り、欲を行ひて、放逸に誑らかさるるが故に業風に吹かれ、轉じて某處に生まれ、又復是の如くにして欲の過の中より出づ、と、彼れ額の上の字書畫の中に於て一切を具さに見る。額の畫の中に於て亦是の如くに見る。欲の過の中を出づるに、某欲法の如きは、是の如くに對治す。所謂、欲無光明の觀を修めて彼の欲の能く誑かす所と爲らず。又復彼の欲に異りたる對治あり。謂く、此の色を見れば、是の虛妄なるを見、是の如く色に、隨順して見已はり、心に正しく觀察して、欲を悕ふ心更に增長せず。是の如く是の如く五境界の中にて、欲の過患の如きは、是の如くに諦に觀ず。彼の天是の如くんば則ち喜愛ぶことなし。喜愛ぶ心も妨を爲すこと能はず、礙りを爲すこと能はず。喜愛ぶことは乃ち是れ生死の種子なり。彼の天是の如くに欲の中より出づることを得、と、額の畫字の中に一切皆見る。彼れ旣に見已はりて、若しは勝れて

【一】畫の字は宋・元・明三本、及び宮內省圖書寮本に依れり。

身を修さめ、若しは勝れて意を修さめて、彼れ能く欲を捨つ。欲の過患を見るが故に、欲より出づることを知り、過を出づることを知り已はりて、先に受けし樂しみの境界の過患を見るに、毒の菓を食ひしが如し。今受くる所の欲も亦是の如くに見る。何を以ての故に、境界に於て欲樂を受くるを以ての故に、惡道に墮つ。是の如くに修さむるが故に、境界を捨離す。若し額上の書字畫の中に於ては、惡道の業を見、惡道の地獄・餓鬼・畜生の中に墮ちん。彼の業を見已はりて、彼れ是の如き業を一切皆失ひ、善道に生まるる業を一切皆生ぜり。善業の力の故なり。彼の諸の天子是の如く見已はりて、深く信心を生じ、善業を造作す。是の如くにして乃至涅槃の種子の善業を造作す。若しは更に、餘天の智慧少き者は其の心に欲を樂ふ。彼の前に作りし業・業網は自在にして、既に業の畫文字の相を見已はりて、是の如き心を生ずらく。『若し我れ、此處にて後時に退ぞき已はりては、或は人中に生まれ、或は天中に生まれん』と。彼の天是の如くに生まる處を見已はりて、心に驚怖れず、復更に五境界の波に入り、愛河中に洗はる、放逸なるを以ての故に、放逸なる行ひを行ふ。是の如き天曾つて學び來らず、曾つて聞き來らずして、智慧少きが故に、欲を知らず、欲を離ること能はず。善法則ち滅して、復更に其の餘の生まるる業の地獄・餓鬼・畜生の業を作す。何を以ての故に、一切の善業は皆悉く盡きしが故に、欲に誑らかされしが故なり。復地獄・餓鬼・畜生の中に墮つ。爾の時、鳥あり、名づけて賢語と爲し、放逸なる天の放逸なる行ひを行ふを見ては、天の善業の故に偈を說きて言はく。

若し善に心牽かれし者、是の如くんば則ち善を得ん。　若し不善に隨ひし者、是の如くんば不善を得ん。　一切に多く心を用ひ、地・風・水・火の如きは得し所の因緣に隨ひ、心是の如くに行ひ轉ず。　心能く速疾に行き、亦能く速疾に迴り、速かに將さに天中に至り、速かに惡道に入らしむ。　心速疾に善を行ひ、若しは能く心を防護ぎ、一切法を能く作し、一切の業を能く

斷つ。一切の法を行ふ主は、所謂彼の心是れなり。復是の如き義を以ての故に名けて心と爲すことを得。心は常に人の便を求む。皆應さに之れを信ずべからず。體性甚だ慓動て、大力も持つべからず。須臾の間に善を作し、須臾にして不善を作し、是くの如く無記を作して、其の行ひ測るべからず。心の來るや知るべからず、心の去るや識るべからず、先に無くして後時にあり。已に有りて、還へりては復無し。心の處る所有ること無く、和集りても得べからず。身體なきを以ての故に、捉持ること得べからず。因縁の和合するが故に、念念に是の如く生ず。珠牛の糞の合し、因縁にして火の生ずるが如し。是の如き根・色等の一切心の因縁なり。一にて能く心を生ずるに非らず、和合するが故に心を生ずるなり。是の如く心を知り已はりては心の調伏し難きを知る。意正法に隨ひて行ひ、愼んで欲を喜樂こと勿れ。

彼の天是の如くに既に偈を聞き已はりて、身を修め、心を修さめ、二種にて心を修さめ、既に心を修さめ已はりては境界を樂しまず法に隨順して行ふ。夜摩天を退きては復勝れし處に生まれ、天處を離れずして、若しは人中に生まれ、或は人王と爲り、或は大臣と爲り、或は時に、解脱の種子を種ふることを得、三種の菩提を願ひに隨ひて皆得。或は善業を具へて轉輪王と作らん。

若し彼の諸天是の如く希有しき業の相を見、鏡の中にて見るが如く、心の調はざる彼の天、復地獄・餓鬼・畜生の中に墮つ。

又彼の比丘此の希有しき業の畫文字の果報の相を觀て彼れ則ち觀見すらく、若しは人の精み勤め、意を專らにして、深き心あり、如來の像を畫き、若しは思信寂靜の心あり、是の如くに正法の文典を書寫し、心意寂靜なれば、彼の人天に生まれ、咽の中、額の上を、見れば則ち信を生ぜん、と。

【三】慓は集韻に心動とあり驚くことなり。

又復人あり、心に正信無く、或は王の勅のため、或は他の遣の爲め、或は物を取りて命を活す因緣の爲め、若しは經文を書き、或は佛像を畫けば、亦天中に生まるるも、見るとも則ち信ぜずして、多く放逸を行ふ。彼れ亦善業の種子を造作して、天中に生まることを得れど、見ると雖も信ぜず。信を離れ來り、思を離れ來るを以ての故なり。是の如くに因なければ則ち業の果なし。是の如くに一切皆因緣に從ひて、相ひ似たる業を生ず。

若しは復天あり性放逸を喜び、放逸なる行を行ひて、天境界の五欲の樂しみを受け、常に厭足かず。復無量の欲を增長する山の寶園山の中に於て、長久き時に五欲の功德にて樂みを受け已はり、天女の衆と共に、是の如く種々に遊戲して樂しみを受く。後には是くの如き五欲の功德にて莊嚴れる山を離れ、復第三の珠圍山に向ひて去る。歡喜の心を生じ、五樂の音聲あり、道に在りて遊戲し、普く勝妙たる事を第一に成就し、須臾の間に於て具足して、樂しみを受く。意に念ふ所の如くに、種々の境界にて快樂を受け、既にして山中の河の岸邊に在りて欲樂を受け已はり、方に第三の珠圍の山に至る。是の如く、是の如くに、天愛樂むべき境界にて樂みを受け、是の如く、是の如くに喜愛を增長す、彼の愛を解脫せざるを以ての故に、欲火に燒かれ、彼の聲・觸・味・色・香等を厭足ことを知らず。境界の河の中にて亦厭足ことなきは　彌那魚の如し。是の如き第三を珠圍山と名け、一の廂は則ち是れ青色の珠寶にして、次に第二の廂は赤蓮華寶なり。次の第三の廂は是れ硨磲寶にて、次の第四の廂は是れ白銀寶なり。彼の天見已はりて歡喜の心を生じ、迭互ひに相ひ向ひ是の如くに說きて言はく『天、當に此の無量種々の端嚴にして殊妙なる種々の光明を看るべし。此の寶の光明は百萬由旬にして、皆悉く普遍く彼の光明に入りて、分別すべからず。此の勝れし光明は青・黃・赤・白にして無量種あり』と。

彼の諸の天衆是の如くに說き已はりて、復餘の林に向ふに、林を樹稠と名く。彼の諸の天衆

【三】彌那魚。彌那（Mina）は魚と云ふ意味なり。

と、諸の天女の衆とは歡喜の心を生じ、無量の音樂あり、種々の處に隨ひて皆悉く樂見しむ。次に彼の林に到るに、善業成熟して種々に莊嚴り、是くの如く遊行りて種々に樂しみを受く。乃ち久しき時に放逸なる行を行ひて、愛の爲めに使はる。爾の時、彼の天樹稠林の諸の七寶の樹を見るに、彼の林の中に二の河のあるを見る。第一は香水にて、勝れし味・觸の水、心意に念ふ如くに則ち水ありて滿つ、彼の河の水念ふ隨に轉じ、彼の河の銀の岸には多くの種々に異異たる諸鳥あり。彼の一の河を名けて雜水と爲し、次の第二の河を如意水と名く。彼の雜水、本性の自體は是くの如き雜水にて、第一に清淨なる水流を盈滿たし、彼の種々なる水は醉ふ過を遠離せり。善業の因緣にて其の水則ち無量種の色あり。是の故に彼の河を名けて雜水と爲す。

又第二の河を如意水と名く、彼の天の心の種々の意念の隨に、是の如き水を生ず。若しは蘇陀を念ずれば則ち[四]蘇陀の流第一に白淨にして、第一の香味の蘇陀の流れ滿つ。若しは彼の諸天意に天酒を念ずれば則ち色・香・觸・味を具足せる美妙なる天酒ありて、中に滿ちて流出す。若し山澤の種々に異りたる華を念ずれば則ち色・香・觸等ありて具足する是の如き妙へなる華河に滿ちて流出す。其の華には種々の蜂ありて、以て莊嚴を爲せり。彼の華の名は尙ほ說くべからず。是の如く第二の如意水の河は種々の流れにて滿てり。

彼處には、是の如き樹稠林の中に是の如き華あり、莊嚴愛すべし。彼處の諸天兩河の中に在りて、處々に遊戲して種々に樂しみを受け、愛すべき聲・觸・味・色・香等にて種々に樂しみを受く。善業を以ての故に、共に天酒を飮み種々に樂しみを受け、樂の音聲を聞きて種々に耳を樂しましめ、種々に歡喜び、心の隨に具足して種々の樂しみを受く。憂悲を遠離し、飢儉を遠離し、怖畏を離れて、境界の中に常に足ることを知らざること、鹹水を飮むに隨つて其の渴きを增すが如く、無量種ありて、無量に分別し、無量種の天の樂しみを受くることあり、彼の天是の如くに林河の中にて行ひ、

【四】蘇の字は宋・元・兩本及び宮內省圖書寮本に依れり。

樂みの行ひを受け已はる。彼處に鳥あり、名づけて河行と曰ふ。天の放逸なるを見て、偈を說きて言はく。

猶し此の水の流れのごとく、天の樂しみも亦是の如し、命は念念に住まらざるも、癡なるが故に覺知らず。老・病・死等の故に、能く業をして盡き退ぞかしむ。天此の法を離れず。常に欲に隨逐ひて行ふも、命は是れ常に非らず、三界の樂しみも亦た爾なり。天は癡にして欲の爲に誑らかされて、是の如くに覺知らざるも、空中の水の[五]滴の必ず墮ちて停まらざるが如く、一切の樂しみも是の如くにて、雨滴と異ならず。風の塵土を吹いては、迭互ひに競ひ相ひ推し、虛空中に轉ずるが如く、身の轉ずることも亦是の如し。此の樂しみ勝れし樂しみに非らずして、貪誑にして常に定まらず、愛の毒と和合すること、猶ほし雜毒の食の如し。彼の常に勝れし樂しみとは、所謂不死の處、愛別離のなき處・冷なく熱なき處なり。彼の處常に安隱にして、智者の說き給ふ所なり。何處にも生死なく、彼處は則ち苦しみなし。諸の婦女を因とせる樂しみは、一切皆苦しみあり。彼の愛を種子と爲し、復地獄の中に生まる。彼の樂しみは能く苦を生ず、何云して說きて樂しみと爲さんや。乃ち是れ苦の中の苦にして、後時に則ち毒なるが如し。若し此の衆生、生まれては、衆生業風に吹かれ、業網の癡に覆はれ、生まれし處に隨つて愛樂む。若しは善・不善の業は、常に彼れに隨ひて共に行き、處々に皆逐ふて去ること、香の華を離れざるが如し。汝是の如くに樂しみを受けんも、此の後時には則ち失はん。晝は日の時滿ち、日の沒しては光も隨ひて沒するが如し。

彼の水行鳥、天の善業の故に、已に一切の放逸を行ふ天の爲に、是の如くに說き已はれり。若し天の放逸にて放逸を行ふ者は、水行鳥の是の如くに偈を說くを聞き、是の如き言を作さく『此の鳥善く語り已はりて我れを覺悟らしむ。此の鳥の說くが如くに、我れ必らず當さに得可し。此の鳥は

【五】滴の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

寶を說く。我れ放逸なるが故に、放逸なる行ひを行ひて、猶ほ故に是の如くに捨離ること能はず。我れ後時に必定ず破壞せられ、大怖畏を得ん。我等今より當に善き心意にて放逸を對治し、放逸を捨離すべし』と。彼の天是の如く長久しき時に、專心に善き意にて放逸を捨離し、欲の過患を知り、心に思惟し已はりては、心動くを以ての故に、心の力大なるが故に、或は多くの時に於て、久しく欲を習ひしが故に、還へりて復樂しみに著す。彼の天是の如く無量に分別せる無量の境界にて上〔六〕上に樂しみを受く。種々の諸の欲を具足せる處には、種々の鳥の聲あり、勝妙し園林には蓮華池あり、七寶の山峰には多く無量の妙へなる蓮華池ありて、以て莊嚴を爲せり。多くの無量百千の蜂の衆ありて、種々の聲を出し妙へなる池を莊嚴れり。彼處に河あり、中に飲食を滿たせり。百千の樹ありて、念ずるに隨に枝の網は彼の河を蔭覆し、枝の間に華あり、華は堂舍を爲し、種々に具足す。彼の天の自らの身には妙なる光明ありて、諸の憂惱なく、自らの善業の故に、是くの如き報ひの下・中・上を得。天皆嫉妬を離れ、迭互ひに相ひ愛し、一の心、一の欲にて、彼れと此れとは妨げず、是の如く、是の如くに遊行りて樂しみを受く。

爾の時、彼の天既に樂しみを受け已はり、迭ひに共に籌量て、是の言を作さく。『我れ先に聞くが如んば、此の夜摩の處の一切の諸天に主あり、名けて牟修樓陀と爲し、遊戲して樂しみを受く。我等今相ひ與共に去らん』と。彼處の諸天彼の天主牟修樓陀を離るること五百由旬にして、遙かに歌の聲を聞くに、太だ遠きを以ての故に、聞くとも了了かならず。聲普くして一切の天處に遍ねし、是の故に了かならず。鳥の音聲の如くにして是くの如き歌聲は功德を具足し、彼の歌聲を聞くに了了ならずと雖も極めて愛樂を生じて、厭足くべからず。心の動くを以ての故に決定の意を生じて、一切の天衆卽ち天主牟修樓陀の戲樂の處に向ふに、彼の林一切の功德を具足す。彼の欲を行ふ天は諸の天女と共に種々に莊嚴り、種々の衣服にて、一切の功德を皆悉く具足す。普く身に著く

【六】上の字は、宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

る所纏なき天衣もて、自ら莊嚴れり。其の手には皆種々の樂器を執り、迭ひに相ひ愛念して、歡喜の心を生ぜり。空に乘る者・蓮華に乘る者あり、復優鉢羅に乘る者あり。彼の優鉢羅には第一の香ありて、多くの衆蜂あり。復拘物頭に乘る者あり。彼の拘物頭の形量白色にして、皆月輪の如し。彼の天皆是くの如き天女と共に遊戯し、歌舞して、空に在りて行く。五欲の境界に、種々に樂みを受けて厭足ことを知らず。彼の天の善業にて、自からの心の化する所に自ら是くの如くに乘る。自からの業の化する所に下・中・上あり、色も亦是の如くに下・中・上あり、樂も亦是の如くに下・中・上ありて是の如くに樂しみを受く、智慧も亦爾く下・中・上あり、命も亦是の如くに下・中・上あり、一切是の如くに虛空に遍く滿てり。戯樂林の無量種の欲を具足する處に向ふに、牟修樓陀天王の住する處の堂殿の所に、彼れ是の如くに行くに、道に在りて未だ戯樂の林に到らずして、虛空の中に於て、遙かに燄の如きを見る。復、一處にては青寶の色を見、復異なる處に於ては黃白の色を見、復異なる處に於ては火の如き色を見る。彼の天是の如く空中にて、見已はれば則ち第一の希有なる心を生じ、迭ひに相ひ告げて言はく『天。當に此の虛空の中の希有の事を看るべし。種々の希有き色の衣を著せるが如くに、虛空の中に在りて、我れ未だ曾つて見ず』と。彼の諸の天衆迭互ひに說き已はりて、希有の心を生じ、少時く停住りて、未だ久しき時を經ざるに、復聲あるを聞く。第一の微妙なる美音の歌の聲なり。音聲を聞き已はりて、復喜びの心、希有の心を生ず。始め地に在る從り、乃至空に遍き一切の天衆、諸の天女と共に心に皆樂見み、悉く往きて看んと欲す。此の天是の如くに空中にて見し者は一切皆是れ山樹具足の地處の諸天にして、彼の天も亦爾かく遙に此の天を見るなり。

山樹具足の地處の諸天も亦天王須夜摩天に向ふに、須夜摩天は七寶の座に坐り、七寶の窟に在りて、大青寶の瓔珞を以て莊嚴れり。復勝妙たる蓮華の色の勝大なる妙寶を以て自ら莊嚴れり。又復

更に第一の光明の妙寶の勝れし旛ありて、光明普く一千由旬に遍く、白光の焰ありて虛空中に滿ち、種々の勝妙なる衣服を著するが如く、虛空に在り。旛も亦是の如し。

此の廣博行の地處の諸天是の如くに見已はりて希有の心を生じ、少時く停住り、須臾にして則ち山樹具足の地處の諸天を知り、亦天主牟修樓陀の所住の處の戲樂林の所に向ひ、是の如き心を起さく『彼も是の如くに去りて、亦我去るが如し』と。廣博行處の勝上なる諸天は、籌量りて說いて言く『我今彼の山樹具足の地處の諸天と共に一切和合し、相與俱に去つて、彼の天主牟修樓陀所住の處に向はん』と。是の如き時間に暫く住して須臾なるに、爾時彼處の山樹具足の地處の諸天、廣博行の地處の天衆を見て希有の心を生じ、是の如き言を作さく、『我今、彼の廣博行の處の一切の諸天と共に迭ひに共に和合し、相ひ與に同じく牟修樓陀天王の住む處の戲樂林中に詣らん』と。爾の時、是の如き山樹具足の地處の諸天、廣博行の地處の諸天の一切の天衆と共に、皆共に和合し、遍く虛空に在りて、無量の幢旛もて皆寶殿に乘り、鳥の背の上に在り。五樂の音聲・五欲の功德を皆悉く具足す。戲樂林に向ふに、須夜摩天の遊戲する大林には多くの無量なる諸の欲の功德あり、皆悉く具足して譬喩すべからず。往きて彼の林に向ふに、境界の樂しみを受け、五欲の功德もて厭足ことを知らず。一切の功德、富樂を【七】具へて、皆厭足かず。迭互ひに相ひ近づきて厭足くべからず。是の如くに一切皆欲樂を受けて厭足ことを知らず。然るに、彼の比丘彼の天を見已はりて、無量の業果を皆悉く諦かに知り、偈を說きて言はく。

譬へば天の雨水の如く、是の故に河は增長す。是の如き欲の雨の故に、天は欲の火を增長す。彌那の水中に生まれては、常に枯渴するを患ふ。是の如く樂しみは渴きを增すが故に、天足ることを知らず。虛空無邊にして、亦復盡き滅すること無きが如く、欲も是の如くに無邊にして、界の欲は盡くすべからず。海水の波は旋りて滿ち、髣髴として足るの義あり。欲

【七】具の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

を悕望む者は、畢竟して足ることを知らず。　天未だ境界を得ざれば、愚癡にして足ることを知らず。心常に樂しみを悕望し、得已はりても、足ることを知らず。　既に衰惱を得已はりて、無量に退失するに到るは、境界の熱惱に由る。是の故に應に欲を捨つべし。　既に貪欲に誑らかされ、能く信を壞する欲者は、衰惱を得ば則ち離る、而も天は覺知らず。　境界は足るべきに非らず。　足ることを知らずんば樂しみなし。　是の如くに足ることを知らざるを、智者は能く捨離す。　寂靜なるは樂の根となり、苦は境界に由りて起る。　故に應に寂靜なることを修さめ、境界の地を遠離すべし。　常に煩惱を捨離し、無上智を修行せば、智に從りて解脫することを得ん。　煩惱に由れば繫縛さる。　病・殺の繫縛等は境界にて怖畏れらるゝも、生死の中に流轉するは皆境界に由る。　若しは合し、若しは別離し、或は百たび、或は千たびに到る。　生まれ生まるゝ處は常に爾なり。　唯善逝[八]のみ諦かに知り給ふ。　生死の無量なる樂・生死の無量なる苦の一切は境界に由る。　生まれ生まるゝ處は皆有なり。　是の如き境界は、癡なる心の者を破壞す。　愚癡にて眼なきが故に、復境界を喜樂ぶ。　怨を捨てゝ近よらざるも、名を聞けば亦慮を生ず。　境界は怨家の如きも、癡なるが故に曾つて捨てず。　若し境界の爲に燒かるれば、則ち是れ愚癡なる者にて、自らの業の爲に誑らかされ、癡なるが故に離るゝこと能はず。　火を畏る者ありて、猶ほ故らに火に近くが如く、是の如くに境界に迷はさるとも亦境界に近づくことを樂しむ。　猶し毒を食ひし者の自ら樂しみを受くることを爲さざるが如く、愛癡に近づくことも亦爾くして、永く安隱の事なけん。　渇せる者の鹽に於いて、之れを舐むるも渇を除ぞかざるが如し。　境界の故に、眼を闇まされ、愛に於て足ることを知らず。　天の境界は足ることなくして、欲心に誑らかされ、業風の爲に吹かれて、惡道の處に到らん。

【八】善逝(Sugata)。十號の第五にして、如實に涅槃の彼岸に去りて、復び生死海に還退せざる謂なり。

彼の比丘是の如くに、諦かに無量の道の處に衆生の業にて生まるゝことを知り、次第に皆知りて、彼の天を憐愍して、此の偈を說けり。

又復彼の天迭ひに相ひ和合し、一切同じく行きて心に歡喜を生じて、戲樂林の牟修樓陀天王の住し給ふ處に向ふ。爾の時、彼の天是の如くにして行き、無量の服にて飾り、無量に樂行み、無量の業の化せる無量の園林池等にて樂しみを受け、無量百千の天女に圍遶せられ、是の如くにして行く。復餘天ありて、百千の堂殿の上に在りて坐せり。虛空の中を行くに、光明周遍て、普く虛空を照らす。歌舞し、遊戲し、五樂の音聲ありて、鬘にて身を莊嚴り、香を以て身に塗め、頸には瓔珞を著し、天[九]幘を冠る。風衣裳を吹きて、雲の行くが如し。天女之れを抱きて、心甚だ喜樂ぶ。復餘天あり、天女の歌を詠じ及び箜篌の聲、此の聲を聞きて、心に愛樂を生ず。是の如き等の類、若干種の天種々に樂しみを受け、戲樂林に向ふ。空中に住みて、樂しみを受くることを悕望む。彼の地處の天一切皆牟修樓陀天王の住み給ふ處に向ふ。總じて彼の天を說くに、業の如くに相ひ似て、若しは戲むれ、若しは行き、若しは莊嚴を具し、音聲普遍く十方に充滿せり。皆來り近づきて、王の住し給ふ堂殿に在り。普く彼の一切の夜摩の天衆にて、牟修樓陀夜摩天王は、中に於て最も勝れたり。業の如き身にて、業勝れしを以ての故に、其の果も亦勝れたり。是の如くに因果は相ひ似ざるに非らずして、種子の芽の如し。一切の天衆皆天王牟修樓陀の居る所の堂殿に近づくに、彼の天皆劣れり。唯天王牟修樓陀ありて、中に於て獨り勝れたり。一切の諸天の天の欲の中にて、天王の欲勝れ、皆悉く具足し、譬喩すること無き樂しみなり。且く少分を說かん。

七寶の鳥ありて樹林の上に在り、周匝に遍く有り。嘴は樹心を銜み、身依る所なくして、虛空の中に在り。

又復異なる處には希有しき鈴饒くして、其の聲美妙なり。若しは天の聞きし者皆來りて之れに向

【九】幘は髮をつつむかぶりもの、づきんなり。

ふ。是くの如くに分別し、心快樂するが故に、彼の林に在りて行ふ。

又復更に、七寳の衆鳥ありて間錯り、翅を雜へて、彼の林の外に在りて周匝を圍遶り。嘴の中に蜜を銜み、林を遶て飛行す。又復多く希有き孔雀あり、背の上に皆蓮華の水池ありて、彼の池の中には種々の鳥饒し。百千の蜂ありて、彼の池水の蓮華の中に在り。蜂には音聲ありて、池を清水と名く。彼の蓮華の葉は種々に同じからずして、或は華の葉是れ毗瑠璃なるあり、或は華の葉是れ七寳なる者あり、餘の蓮華の五由旬の香のものあり。是の如く彼の鳥の孔雀の背の上は端嚴・殊妙にして、歌樂し嬉戯する池鳥と相應し、彼の孔雀の背も亦甚だ希有なり。

又復多く大希有なる鳥の孔雀ありて蜜を銜む。謂はく、其の背の上に大蓮華ありて、天子は彼の蓮華の臺の上に坐し、百の天女ありて圍遶を爲し、種々に嬉戯し、美妙なる歌音にて快樂を受く。

又復多く大希有なる鳥の孔雀ありて蜜を銜む。彼の樂しみを受くる天の、自らの業の化せる所の一一の孔雀の頭の上に皆念ふ隨に樹の生ずることあり。種々なる華ありて、其の華甚だ饒し。樹の上には多く七寳の翅の鳥あり。其の諸の天子は既に彼の樹に上りて、天女の衆と共に天酒を飲み、歌舞し、嬉戯して快樂を受く。

又復、大希有なる鳥の孔雀ありて蜜を銜む。一一の孔雀の叢毛の中に、諸の天衆多くして、天女の衆と共に坐し、快樂を受け、迭ひに相ひ愛樂し、嬉戯し、歌舞して天の樂しみを受く。天是の如く孔雀の蜜を銜む希有しき事を見るが故に、希有の心を生ず。

又復更に、第二の希有きことを見る。所謂、蓮華の妙へなる池は蜜を銜む。彼の蓮華池は其の數二萬、泥濁を離れて、金銀の沙あり。【一〇】八功德水彼の池に彌滿ち、鵝鴨・鴛鴦池の中に甚だ饒し。天の善業の故に、鵝は偈を說きて言はく。

久しき時に此の樂しみを受くるも、此の樂しみは常の法に非らずして、一切皆無常なるも、天

【一〇】 八功德水。八の功德とは、一に澄淨、二に清冷、三に甘美、四には輕輭、五には潤澤、六には安和、七には除諸患、八には長養身體なり。但し俱舍論の說には少異あり。今は稱讚淨土經に據る。

覺知らず。此の樂しみは且く相續すとも、必らず當に斷つ時あるべし。欲の爲めに心誑らかされ、失壞ことを覺知らず。此の樂しみは苦樂を雜ふとも、隱覆せるが故に覺とらず。蓮華の鬘の中にて、毒蛇は見るべからざるが如く、猶し毒を雜へし飯を食する者の殺害さるゝが如し。此の樂しみも一切爾かくして、必らず當に地獄に墮つべし。索筋にて羂を爲すに眼に見ては甚だ愛すべきが如く、境界の羂も是の如くに、見て好ましくも實は甚だ惡し。金の波迦果の初甜むるに美味多きも、後時には則ち能く殺すが如し。世間の樂しみも亦た爾り。飛ぶ蟲の燈を見ては、其の心甚だ愛樂み、中に入りては則ち燒かるゝが如く、此の樂しみも亦是の如し。愚かなる凡夫の知らず。戲樂は猶し燈の如く、樂しみを悕ふは火に觸るゝが如く、畢竟して樂みを得ず。鹿の渴を患ふが故に、陽の焰を隨逐て走り、畢竟して渴を除ぞかざるが如くにて、此の樂しみも亦是の如し。過・現に足ることを知らず、未來も亦復然くして、一切の天の境界を、是の如きが故に應に捨つべし。寂なる樂しみは根の樂しみをなすとは、是れ智者の說き給ふ所にて、樂の根に於て心なくんば、彼れ則ち常に苦みを受けん。[一]梵は實に第一に勝れ、[二]忍最も寂靜なり、一の智は是の世を明にし、一の慈は勝れし樂しみを生ず。他を惱まさざるは最も吉にて、正見は第一の善、直心なるを最も良と爲し、惡業を捨つることも亦爾なり。若しは老宿に近づきて、恒常に法を敬重し、師長を供養し、業を信じて則ち善と爲す。常に三寶を供養し、正しき心意にて垢れなく、復父母を供養するは、是れ涅槃の城の道なり。佛は一切の法を說き給ふに、出家は是れ第一にして、梵行は行の中にて勝れ、能く一切の樂しみを得んと。佛の諸の施を說き給ふ中に、法施を最も勝れりと爲し、勤る中にて禪は第一にして則ち能く涅槃に到らん。施・戒・智の中に於て、唯智を以て最と爲す。智は能く涅槃に到り、施と戒とは唯だ樂しみを得ん。眼にて見るを最と爲

【一】梵(Brahmā)。梵摩とも云ふ、清淨、離欲等と譯す。
【二】忍(Kṣānti)。忍は安住の義にして道理に安住して心を動さざるを謂ふ。

すに非らず。智にて見れば則ち勝ると爲す。佛[一三]八分道を說き給ふに、諸道の中にて寂靜を、諦の中にて四諦を勝れりとす。是れ如來の說き給ふ所なり。[一四]五種の力の中、智慧の力を最と爲す。上下八方を說くとも、更に勝れし者あること無く、唯如來のみを最と爲す。能く眞法を示し給ふが故なり。一切衆を說く中に、[一五]聖衆を最も寂靜とす。三寶の福田に依止するを以て、能く樂しみを生ず。等しく父母を供養し、第三次和上、能く法の境界にて眼を開くを以て、覩見せしむ、見るべく、取るべきにも非らざるを。如來は是くの如くに說き給ふ。此れ皆是れ樂しみの地にして、境界に依れば樂しみに非らず。若し能く此の法を行へば則ち垢れなき道を行ふなり。此の道を行ふこと安隱にして、夜摩地は樂しみに非らず。

彼の鳥是の如くに、善業を以ての故に、本と人中の時に、法に因つて命を活かし、法を賣りて物を得、以て自ら存し濟へり。是の如きの業因にて、彼處にて鳥と爲れり。本との善業の故に、鳥の中に生まれしと雖も、法を憶して忘れず、是の如くに偈を說けり。是の故に應さに精勤て讀誦し、常に法を受持すべし。業の因緣を以て畜生を作せりと雖も、本來の習の故に、善く能く法を說き、果を得て空しからず。

又、彼の一切の諸の夜摩天、彼の二萬の蓮華の池に向ふ。種々に異々りて別々に莊嚴り、勝妙し天女圍遶けり。彼の池の中に、先に種々に異異なりて莊嚴りし諸天の衆諸の天女の衆ありて、百百千千那由他の數、那由他數の億々數等にて、樂しみを受く。諸の天女と共に五樂の音聲をなし、或は入りて蓮華の中に在る者あり、或は蓮華の臺に坐せる者あり、或は蓮華の葉に在る者あり、或は蓮華の鬚に在る者あり、心意に念ふに隨ひて、麁細等の身となり、眼の睫く頃の如きに、百千由旬を已に能く來り去り、眼の見る所の如くに、遠きこと無く、近きこと無くして、皆一念の時に

【一三】八分道。八聖道(Ārya-mārga)のこと。中正にして理に契ひ、涅槃に至る道である。(經集部九、通頁二〇一の註七を見よ)

【一四】五種の力。布施・持戒・忍辱・精進・止觀の五行を謂ふ。是れ六度中の禪定・智慧の二度を合して止觀の一つとなせるなり。

【一五】聖衆(Saṃgha)。神聖なる教法を傳得せる者の團體の義。三寶の一。

彼の天來り去る。亦復是の如くに、一指の面を衆の眼の共に看ても妨げず、患はざるが如く、是の如くに彼の天或は一百あり、或は一千あるとも、皆共に聚りて一蓮華の鬚に在りて、同く坐るとも、妨げず、隘からず、[一六]迮らず、善業を以ての故に、自の業の力の故に、彼の蓮華池是の如き勢力、是の如き功德あり。彼の天是の如くに、蓮華の中に於て、或は百、或は千にて是くの如くに嬉戲す。心の如に美味なる天酒を恣に飲む。彼の蓮華の中の舊より住みし諸天、後に來りし天と共に和合して嬉戲し、自ら光明あり百千の日より勝れ、皆欲樂を受く。

是の如き處に於て久しき時に樂しみを受け、爾乃ち前みて牟修樓陀天王の林の所に詣たり、彼の林に入らんと欲するに、彼の林には多く無量種の色ありて、甚だ愛樂すべし。牟修樓陀は、心意に念ふが如くに彼の林を化作し、自らの心中に是の如く、是の如く種々に念ふ所の如くに、是の如く是の如くに、種々に異々りたる樹林を化作す、本より未だ曾つて有らず。夜摩天の善業の力の故なり。爾の時、天衆是の如き林を見るに、本より未だ曾つて有らず、本より未だ曾つて見ずして、希有しき心を生ぜり。是の心を生じ已はりて、彼の林に入らんと欲し、漸時に之れに近づく。彼の天種々に其の身を莊嚴り、天旃檀を塗り、天に應ずる所の、天と相ひ似たる如き種々の衣服を著、蓮華池を過ぎて、彼の樹林に到るに、見已はりては羞慚づ。業是の如きが故なり、是の如き林ありて。種々に勝妙たり。彼の諸の天衆餘林を見來りて、既に彼の林を見、普遍く審に觀ず。既に審に觀已はりて迭ひに相ひ向ひて說き、迭ひに相ひ指示す。然る後に中に入り、既に彼の池を過ぎ、林の中に入り已はりて、鸚鵡の行ふを見るに、皆悉く種々の寶鬘を執持す。一一の鸚鵡は寶珠を咽に繫くるに是くの如き寶珠相續して鬘を爲すなり。彼の林を遶り已はりて、偈を說きて言はく。

此の衆生輪轉し、自らの業に牽き推され、老死の梁の繩の中にて、衆生厭離せず。道[一七]從り道に至りて行ひ、天・人・阿修羅眞諦を知らざるが故に、自らの心の爲に使はる。世間の作る

【一六】迮は迫るなり。せまること。

【一七】從の字は、宋・元・明・三本及び宮内省圖書寮本に依れり。

所の輪の、手にて推すものは疾く轉ぜず。業の手にて衆生の輪、之れを轉じては甚だ速やしと爲す。十二の[一八]輻和合し、聚まりては癡の[一九]轂の中に在り。因緣の輪、迴り轉ずとも、
世間は覺知らず。

彼の天是の如き鸚鵡鳥の說く所の偈を聞き已はりて、一心に、善く念じて、本の業を觀察す。大慇重の心にて、本の業行を念じ、是の如き言は作さく『彼の鸚鵡鳥は則ち我より勝れりと爲す。我れ則ち彼の鸚鵡鳥に如かず。作せし業を思惟するに、我れ愛の爲めに壞はされ、嬉戲して樂しみを受く』と。時に、彼の諸天是の如く說き已はりて、往きて夜摩天王牟修樓陀を見んと欲するが爲に、鸚鵡を過ぎ行き、復名けて險岸鬘林と爲すに向ふ。彼の林の中に復一林ありて、曼陀羅と名く。百千の色の華を以て莊嚴を爲し、彼の林に多くの種々の鳥の衆ありて、林の光明百千の日より勝れ、日の熱の過を離れたり。彼の林の樹には勝れし光明ありて、彼の樹林を見れば則ち眼の樂しみを生じ、鳥の音聲を聞けば則ち耳の樂しみを生ず。藕根の香を齅げば則ち鼻の樂しみを生じ、果の味を嘗め食せば則ち舌の樂みを生ず。縷なき天衣に觸るれば、身の樂しみを生ず。諸の根樂しむが故に、意に喜樂を生ず。五根は心を縛り、意をして隨順はしむ。諸法を思念するに、二種の意隨順するを以て知り、是の如くに曼陀羅林を見る。

曼陀羅樹の一一には皆諸の天女の衆饒くして、是くの如き天女は種々衣服にて莊嚴して微妙なり。口の中にて言說し、種々に歌舞し、種々に樂しみを受く。彼の諸の天衆は本とより未だ曾つて見ず。

是の如く彼處の一切地の中の地を行く諸天は、彼の天女の樹林の中に在るを見るに、譬喩すべからず。無量百千億の衆なる甚だ多き、天衆・天女は林の中に普遍して、心に悕望まざる一天あることなく、一の天女なく、天主牟修樓陀を見んと欲して一切は悕望み皆往き見んと欲し、實に心に喜樂

【一八】輻は車のやなり。車の轂と輪とをささへる本なり。
【一九】轂は車のこしき。車輪の中心となりて輻を集めまとめ、軸を其の中に貫いて居るものなり。

て天王を見んと欲す。是れ天王の福德の力を以ての故なり。爾の時、彼の天は上に說きし所の如くに、和合して來り、彼の林の中を行くに、彼の林には多く流水の河池ありて、蓮華の雜林を皆悉く具足し、地分の處々の一切を莊嚴れり。其の地柔輭にして皆金色を作し、雜寶間錯る。是の如くに見已りて則ち欲樂みを受く。是の如く次第に漸く前に進みて、夜摩天王牟修樓陀に向ふに、一切同じ心に悕望みて見んと欲し、心に皆相ひ愛すること上に說く所の如し。種々の異異なれる乘にて、彼の地處を過ぎ、復異なる地に入る。彼の地の中には愛すべき山あり。是の如き地中の諸の愛すべき山、其の數五百なり。是れ遊戲の處にて、彼の一切の山は是れ毗瑠璃なり。其の樹は皆是れ赤蓮華寶にて、金の葉にて莊嚴れり。復寶樹ありて、銀の葉にて莊嚴れり。彼處には多く珊瑚の諸鳥あり。又復更に異なる法の莊嚴あり、無量の雜寶の鹿鳥にて莊嚴れり。種々の河池は流水にて莊嚴り、枝を交へて舍と爲し、普遍く莊嚴れり。枝を交へし舍は、處處に遍くして、其の果ありて金色なり。金寶樹の枝の其の果皆毗瑠璃を作せり。金寶の葉には百千の蜂あり、蜂には音聲の美妙なるありて、耳を悅ばしめ、種々の味・觸の飲食河に滿てり。多く寶の鳥ありて、彼の河を莊嚴り、彼の中の地處に觸るれば則ち樂しみを生ず。復天衆の諸の寶山を見るものあり。山を遊戲と名け、平地を見るものあり、山峰を見るものあり、窟門を見るものあり。復天の樹枝の堂舍を見るものあり、一切の蓮華池に在るを見るもの有り。天衆と天女とは皆悉く歡喜ぶ。天女と共に歌舞する者あり、或は諸天の天女の衆と共に蓮華林に入りて、遊戲もて樂しむ者あり、心歡喜びて酒を飲む者あり、天華を以て平地に散く者あり、華鬘を結びて身を莊嚴る者あり、寶冠を以て諸の天女と共に迭互ひに莊嚴るものあり、自ら光明ありて、身には垢穢なし。復異天の諸の天女と共に虛空を行く者あり、復異天の手に樂器を執りて口中にて歌を詠じ、住みて平地に在るものあり、或は百、或は千、彼の天の身、是の如く、是の如くに種々に莊嚴れり。種々の光明は青・黃・赤・紫の雜色の光明

にて、身より出づ。

爾の時、彼の天既に是の如き遊戯山中にて、快樂を受け已はり、天王牟修樓陀を見んと欲し、更らに前みて内に入れり。彼の天復夜摩天王を見んとて、集鬘地と名くるに卽ち其の中に入る。山樹具足、廣博行地の彼の一切の天、第一に莊嚴り、幷に集鬘地の三地の諸天皆天王牟修樓陀に敬重心を生ず。是れ彼の天王の善業力の故なり。是れ彼の天王の過去に修さめ集めし無量の善業の感致せる所なり。集鬘地の中に一萬の殿ありて、無量種の色、種々の金柱にて莊嚴を爲し、彼の殿、愛すべし。金寶にて壁を爲し、毗瑠璃寶・青寶の柱雜々はり間錯れり。復異なる殿あり、毗琉璃の壁にて、金寶・青寶の拘欄あり、因陀羅寶を以て窻牖と爲せり。又復多くの種々なる寶の柱あり、雜々り間錯れり。復異なる殿あり、毗瑠璃の壁にて、金寶を門と爲し、毗瑠璃の扉にて種々に間錯れり。復樓殿ありて、甚だ愛樂すべし。謂く赤蓮華の雜金を柱と爲し、金寶を門と爲し、珊瑚を窻と爲して、種々なる雜寶其の地に間錯れり。又復彼處は種々に間錯りて、青寶を壁と爲し、赤金を門と爲し、白銀を柱と爲し、普く彼の殿内光明の焰の鬘あり。

又復彼處の牟修樓陀天王の殿には、種々の業の化せる第一赤色の金寶の殿ありて、金剛間錯り、赤蓮華寶を以て殿の柱と爲し、七寶を窻と爲し、第一の光明迭相に照燿せり。重樓の行殿も、是くの如く、是くの如くに種々に莊嚴れり。彼の天見已はりて、眼を廻して遍く看、復寶山を觀る。彼れと此れと迭ひに共にして、相ひ與に同じ心なり。普く山殿を看て、前て大王須夜摩天に向ふ。然る後に乃ち牟修樓陀天王の殿内に入る。既に是の如くに入るに、勝勝て異なりて見え、種々の愛すべき第一の希有き無量の功德を一切具足す。彼の諸天等集鬘を見已はりて、悕望みて夜摩天主牟修樓陀を見んと欲し、一切の天衆皆悉く同じく行く。復一處の王の所行ふ處に入りて、大天王を見るに、七千の天子圍遶を爲し、悉く皆第一に勝妙て莊嚴れり。身には光明ありて、一一の天子の威德

山の如し、天衣は流動して、頭には寶冠を著け、肘の後臂の上は妙へなる寶にて莊嚴り、勝妙し華鬘は以て其の胸を嚴れり。是の如き七千の天子ありて、天王牟修樓陀を圍遶れること、衆山の須彌山王を周匝り圍遶るが如く、諸河の大海を圍遶るが如く、星曜等の月を圍遶るが如し。是くの如くに、彼の天の一切夜摩天王牟修樓陀を圍遶りて、是くの如くに住めり。夜摩天王端正殊妙にして、光明の威德一切の諸の餘の天衆より勝れたり。

天王の殿には百千の柱ありて、彼の一一の柱は皆是れ七寶を以て殿を莊嚴れり。天の因陀羅の大靑寶座の彼の天王の殿は、是の如き勢力にて、是くの如く、是の如くに天彼の殿に入るに、是の如く、是の如くに轉更に寬博にして、是の如く、是の如くに七寶にて莊嚴れり。殿內に樹ありて、殿嚴樹と名く。彼の是の如き樹は恒常に華あり、[三〇]六時の中に於て具足して闕かさず。又一切の時に常に天の果あり。彼の殿を何に名くるや。謂く、樂見と名け、七寶を壁と爲して種々に間雜れり。

【三〇】六時。晝三時、夜三時、合せて六時なり、晝の三時は長朝日中日沒なり、夜の三時は初夜中夜、後夜なり。

巻の第四十三

観天品之二十二

夜摩天之八

爾の時、彼の天漸く更に前みて牟修樓陀夜摩天王に近づき、若しは歌ひ、若しは舞ひ、種々に嬉戯して、共に第一の勝れし業の果報を受く。彼の一切の天、種々に牟修樓陀夜摩天王に供養し、既に供養し已はりて、坐して一處に在り。一切坐し已はりて、歡喜び、語を說き、既に語を說き已はりて、天王告げて言はく『汝、一切の天樂しみて放逸を行ひ、相隨ひて來れり。今より以後は命を護り、法を護り、勤行め精進めよ。法を護るを以ての故に、常に快樂を受けん。乃至涅槃して身を捨て已はりて後も永く苦惱なく、常に天の樂しみを受けん』と。爾の時、彼處の一切の天衆皆共に和合す。夜摩天王爲に偈を說きて言はく。

　世間の種々の界にては、種々の業自在なり。　天種々の道より來り、善業にて此處に生まれたり。　有中是の如くに來り、有中是の如くに去る。　彼の來りし時の業の如く、來る如くに、去ることも亦爾り。　諸有は和合の事にして、諸有に意亂れされず、皆な是の善業を作り、精進みて放逸すること勿かれ。　長久き時に樂しみを受けん。此の後に必定して退かん。　退くことの第一の苦爲る當に有るべくして疑なし。　彼の是の如き義にて、我れ汝を召して爲めに說けり。　汝等の一切、如來の說き給ふ所の如くに聽け。

夜摩天王是の如くに、普く彼の一切の天を和合し、利益する爲に、已に此の偈を說きて、天衆に告げて言はく『汝等樂行き境界に迷はされて、然も覺知らず。天は則ち滅劣して、增長せず此の境界の樂しみは一切無常にして、當に寂靜ならず、不饒益を得べし。所謂、何なる者ぞ。一切皆聽け

よ。汝の見し所の如きは、六の正覺知者の七寶の塔廟にして、種々なる七寶の莊嚴を成就せり。六とは、一は是れ[一]尸棄正覺知者、二は[二]毗婆尸正覺知者、三は[三]毗舍婆正覺知者、四は[四]迦那迦牟尼如來の正覺知者、五は[五]迦羅迦居村陀佛正覺知者、六は[六]迦葉佛正覺知者なり。此の六佛、塔を天の中にて久しく作る。次第に耳に聞けり。我れ今供養せん。何なる因緣を以て、一切是くの如きや。我れ曾つて見ざるは、我が少心の故なり。彼の諸の世尊は、諸の世間を利益し、安樂にし給ふが故に、世に往き曾つて來り、此の世間に到れり。我れ是の如くに次第に聞き來りしを以て、是の如き法を得たり』と。

『彼の迦羅迦居村陀佛は夜摩天の爲に大利益を作せり。利益と謂ふは、一の佛塔化せり。是れ大希有なる如來の境界にて、此の間に住せしめり。若し此の世界の沙門・婆羅門を敬せずんば、天の朋は則ち減ず。此の減劣の相を、此の佛塔の光焰の中にて、我れ皆現に見たり。若しは減り、若しは退くを、唯だ我れのみ獨り見たり。汝等放逸にて、放逸を行ふこと多し。是の故に見ず。境界に著して欲樂を受くるを以ての故なり。我れ歌の聲を以て、汝等を召し來るは、利益せんが爲の故なり。汝等放逸にて、放逸を行へば卽ち是れ死し退かん。我れ汝等の善業を食ひ盡くして、惡道に墮つるを恐る。故に汝を召し來れり。六佛世尊は無量なる諸の衆生を利益するが故に、已に說き給ふ所の經を、彼の諸の如來は此の塔の中に於て、皆悉く之れを書き給へり。我れ已に誦し得たり。天よ。今善く聽け、我れ汝の爲に說かん。後に退ぞく時に、悔ゆる心を生ずること勿れ』と。爾の時、彼の天第一に敬重し專心に思念す。一切は默して住せり。二重に敬重す。一は天王を敬し、二は法を敬重す。意を諦にし正しく住し、其の心を動かさず。天王は既に天の處の是の如くに善く調伏せるを見るが故に、普く之れに告げて言はく『汝等始めて、初の如來の塔に入れり』と。尸棄如來は壁の上に經を書き給ひて、天衆を饒益し、天衆を利益し、天衆を安樂ならしめ給ふ。

【一】尸棄(Śikhin)。
【二】毘婆尸(Vipaśyin)。
【三】毘舍婆(Viśvabhū)。
【四】迦那迦牟尼(Kanakamuni)。
【五】迦羅迦居村(Krakucchanda)。
【六】迦葉(Kāśyapa)。以上の外に釋迦牟尼佛(Śākyamuni)を加へて過去七佛と云

彼の最勝なる天は、其の天王牟修樓陀と共に、最初塔に入りて、尸棄佛の毗瑠璃の像を見るに、青寶の牀に在りて、加趺して坐せり。其の壁の中に於て、自ら經を書き給ひて言はく『諸の比丘、若しは天、若しは人に、八種の法ありて、善法を障礙す。何等を八と爲すや。諸の比丘よ。所謂一とは、若しは天、若しは人放逸の爲に壞はされて、善を、若しは世間の善を出世間の善を作すこと能はず。世間の法とは、若しは心の懈怠、若しは心の放逸にて、放逸なる行を行へば、彼の世間の法一切皆壞す。若しは放逸なる者は善友の所に於ても看視ること能はずして、則ち中人と爲す。若しは是れ怨家なれば、怨みは則ち增長して、其の便を求覓む。此れは是れ放逸の世間の法を妨ぐるなり。諸有の懈怠にて放逸を行ふ者は、是の如きの業を成就すること能はず。彼の人業盡くれば、知友も盡き、怨家は熾盛にして大力を增長し、室家を皆失ひ、貧窮にて物なく、他の爲めに輕賤められ、第一に凡鄙なり。所謂貧窮とは、諸有の凡鄙なる丈夫は、善友・知識・親舊・兄弟に貪・瞋・邪見を一切增長す、彼の愚癡なる者を最も凡鄙と爲す。何を以ての故に、善行せざるが故なり。天に棄捨られ、一切に侵(八)凌れ、他の爲めに侵され已はりて、或は時に死を致し、或は時に商賈して財物を亡失ふ。其の放逸にて放逸を(九)行ふを以ての故なり。

若しは諸の比丘、若しは比丘尼、若しは優婆塞、若しは優婆夷是の如くに放逸にて、常に勤めて修行するも無記の禪定にて、漏を盡くすことを得ず。唯だ食味を貪り、相を占ひ、食する時其の心を妨亂す。是くの如くに放逸にて放逸を行ふ者は、常に一切の時に清淨ならずして、食味に貪著すること猶し畜生の食吐する者の如く、其の心狗の如く、亦(一〇)烏狗戒を受持する者の如し。是の如きの徒は常に放逸を行ひ、經を讀誦せず。眷屬の中に於て、多聞の中に於て、是の少智の者、是れを凡鄙と爲し、諸の檀越の爲めに輕賤められ無所畏を離る。第一の畏なきことは、所謂多聞にして、能く法を思惟するなり。第一の凡鄙は所謂少聞にして、彼の少聞の者は他の爲めに輕賤られ、自らの

【七】加趺。結跏趺坐の略なり。佛陀の坐法なり。趺を左右の䏶上に結加して坐するを云ふ。

【八】凌の字は、宋・元・明、三本及び宮內省圖書寮本に依る。

【九】行故の二字大正大藏經に缺けたり。

【一〇】烏狗戒。外道の戒なり。例へば狗の死して天上に生るるものあるを見て、狗法は天上の生因なりと邪度し、狗に則りて戸外に臥し、人糞を食ふものあり、之れを狗戒外道と云ふ。かくの如く烏の似をする外道もあり。

過を知らず、他の所に於ては貪・瞋・癡多し。多聞の者にして眞實を知る者に於て、若しは尊長に於て、若しは檀主にして善根ある者に於て、愚癡を以ての故に、放逸多きが故に、瞋の心瘡を生ず。不善の業なるが故に、身壞はれ、命終りては惡道に墮ち、地獄の中に生まる。放逸を行ふ者は、是の如くに人中にて放逸を行ふが故に、世間の義、出世間の義に於て、以て妨礙を爲せり。

諸の比丘よ。云何して天中にて放逸にして破壞するや。此の天自の性にて放逸を行ふ。放逸を行ふ天其の心に觸・味・色・香を愛樂して放逸を行ひ、老の至るを見ず、破壞さるるを見ず、退沒ことを見ず。心に善業の盡滅ることを思惟せず、作法を習はず、佛及び法、衆僧を敬重せず。彼れ善き心を離れて放逸を行ひ、佛の世に出で給ふ時も見ず、知らず、心に信を生ぜず。怖畏近づき至り、衰禍は近づき至り、死の苦近づき至り、離別の苦近づき至りて遠からず、天女に棄捨れ、大怖の近づき至ることは、嶮岸に在りて墮墜する者の如し。先の境界に於て受けし所の樂しき事を、具足せざるを見、異なる世の中に於て、隨順して行かず、死に臨みし時に於て其の樂しみを與へられず、亦安慰せず。是の如き境界皆破壞せられて、氣勢あることなし。諸有の中に於て、異る處に去る時は共に相ひ隨はず。若しは放逸、放逸なる行業を作さば、彼れ有の中に於て則ち隨逐して行く。彼れ境界にて渴し、心未だ厭足ずして、放逸にて死す。一切の天に捨られて、心に驚怖を生ず、境界に迷はされて是の如くにして死するに、彼の時に相應して、或は地獄・餓鬼・畜生の三惡の處に生まる。是の故に天人の一切は應さに放逸を行ふべからず。尸棄如來、當に爾の時にあたりて、偈を說いて言はく。

若しは天一切の時に、境界の樂しみを成就せば、彼の天旣に破壞せられ、諸の業は隨逐して行く。　樂しみ常に保つべからず。　業聚集りて失はず。　樂しみに誑らかせられし癡なる天、業によつて自在ならず。　境界は現に樂しみを生ずるも、後には能く衰惱を作さん。　境

界に染著せし天は、心常に亂れて定まらず。善福の業は是れ生死の病藥なるを知らず。藥の如く燈も亦た爾くして、歸をなして亦た救ひを爲す。有の中の善業は衆生を隨逐す。是の故に黠慧き者は應さに勤めて精進すべし。福德を修さむるを、吉と爲し、境界を捨つるを善と爲す。若しは智の眼ある者は未來世を畏そることを知る。黠慧きは豫め怖を生じ、愚かなるは則ち時至つて畏そる。智者は是の如く知りて、心は常に破壞さることを慮る。若しは意常に愚癡なれば、則ち境界を喜樂び、境界の爲に迷はされて、後には則ち心に悔ひを生ぜん。諸有の身は和合なり。智にて常に濁らざる者、皆福德の業を作す。

福德なければ則ち苦なり。

牟修樓陀夜摩天王、是の如くに彼の一切の天衆に、尸棄如來の說きたまひし所の偈頌の壁の上に書字せるを示せり。最初の法已はりて、次第に復た其の餘の七法を示し、是くの如き言を作さく『我れ復汝の爲に、餘の七法を說かん。次に慠慢と謂ふは、時に[一]惺悟すること無し。慠慢を行ふ者は、常に惺悟せずして、天人の中に於て恒に妨礙を爲し、常に一切の世間の法・出世間の法を妨ぐ。云何んが名けて世間の義・出世間の義を妨ぐと爲すや。身の慠慢なるものは、其の心意を亂し、一切の法義は意の爲に前に導かる、是の故に轉行す。彼の亂れし心意は、善からぬ處、所應に非ざる處にて行ひ、時に非らざるに行ひ、邊嶮の處にて行ひ、惡知識に近づきて、自ら測度ず、亦他を知らず。自力を知らず、他力を知らず。慠慢なるを以ての故に、作業すること能はず、自家の事に於て籌量ことを知らず。狂ひしが如くにて異ならず、正しき行を行はず。一切衆の中にて最も凡鄙と爲り、又諸の親、兄弟の中にて最も下劣と爲る。彼れは作すべからざるに而も便ち之れを作し、作すべき所の者をば則ち作すこと能はず。彼れ作すべき所と作すべからざるとを一切知らず。亦復、作すと作さざるとを知らず、法と法ならざるとを亦た知ること能はず。又亦說くべきと說くべ

【一】惺悟の二字は元・明二本に依る。

からざると、行ふべきと行ふべからざるとを知らず。亦復、是き處と處ならざるとを知らず。是の如くに一切を悉く皆知らず。憍慢なるを以ての故に、持戒の法を知ること能はず。又憍慢なるが故に時節を知らず。方處を知らず、心の住すと及び心の住せざるとを知らず。憍慢なるを以ての故に、樂む時を知らず、輕重を知らず。又、眞を知らず、眞ならざるを知らず。面を戴きて行き、畏れ忌む所なし。又此の憍慢なるは、出世間の法義を妨ぐる者なり。云何して出世間の義を妨ぐることを爲すや。此の憍慢の爲に妨亂せられし者は、業の因を知らず、果報を知らず、善道と及び善道ならざるとを知らず、威儀を知らず、方處を知らず、時節を知らず、足ると足らざるを裁量ることを知らず、大衆を知らず。法を聞くことを得と雖も修行すること能はず。未だ法を聞かざるに心に聞くを欲せず、心に訪問すること無し。凶頑にして畏れず、語理に依らず。心意動亂して風の塵を動かして處々に分散するが如く、彼れの心是くの如くに常に亂れて定まらず。彼の心意の亂れ憍慢に行ふ者は禪定を修さめず、心を攝むること能はず。色を見れば則ち著し、境界を樂しみ、或時は欲に著して、眼常に動轉す。是の如くに慞く者は、正しからざる眼の故に、憍慢を行ひ、或は因つて欲に著し、或は是れ醉亂、或る時は禍に祟られ、或る時は狂病す。一切の時に爾かくして、更に異なるを餘さず。彼れ是の如きが故に諸の世間の爲に詳しく指ささる。是の如くに指ささるが故に則ち一切の爲に輕賤られて、自らの過を知らず。彼れ饒益せず、又利益せず、亦安樂せず。彼れ則ち義に於て皆成就せず。

云何して憍慢は出世間の法律に於て妨を爲し、云何にして復憍慢の者の中に於て以て妨礙を爲すや。謂く、彼の人中にては、出家の人にて憍慢の行あるを最も鄙劣と爲す。此の法は毗尼にして、能く憍慢を離れて、一切は端嚴なり。憍慢を離れずんば則ち端嚴ならず。彼の憍慢なる人は禪を修さむること能はず、住止することを知らずして、常に城邑、聚落等の中に行きて、好き處に行

【三】慞は心の動くなり。驚くこと。

かず。說法して[三]檀越を調伏すること能はず。唯だ飮食・牀臥・敷具を貪り、唯だ不善のみを觀ず。是の如きの人は身壞はれ、命終りては惡道に墮ち、生まれて地獄・餓鬼・畜生に在り。是の如きの人、世間道・出世間道の二處にても安隱ならず。憍慢に七あり。一は色慢、二は財慢、三は生慢、四は服飾の莊嚴等の慢、五は王の爲めに供養するが故の慢、六は婦女親近むが故の慢、七は他の妻心を亂すが故の慢なり。此れを總じて慢と爲す。減句・殘句、或は復滿句。此の一切の法は彼の慢を妨と爲す。是の如きは人中にて少しく富樂なり、微少なる命を行ひ、微しく憍慢を行ふなり、何に況んや、天中にて此れ則ち是の慢なるに於てをや。

彼の天聲・觸・味・香・色を愛し、念々の中に憍慢を增長す。憍慢を行ふが故に、命則ち稍や減じ、命の行ずるを覺らず、命の盡くるを知らず。行ひの盡くるを知らず、善業若しは不善業を知らず。彼れ一切の時に、常恒に是の如くにして、乃至命盡きても憍慢は止まらず。次第に乃至善愛の業盡く。業盡くれば則ち退く、退く時至るに臨んでは爾乃ち覺知て、是くの如き心を起さく。『境界は我れを誑らかし、我れをして染を生ぜしむ』と。是くの如くに慢り、誑らかされ、身壞はれ、命終りては惡道に墮ち、生まれて地獄・餓鬼・畜生に在り。是の如くに憍慢なるは世間道を妨ぐ。

又復、天衆憍慢を以ての故に、出世の道を妨ぐ。彼の一切の天は善業を愛するが故に、正法を以ての故に、此の天處の夜摩の中に生まる。天慢なる行ひを以て、自らの業を知らず、其の餘の少しく慢を行ふ者に近からず、一切の慢を行はざる天に近からず。佛及び法・衆僧を見ることを樂しまず、正法の中を信ぜず、入らず。正法に隨順せざるを以ての故に、惡道を行ひ、十二因緣を觀察すること能はず。尊長を敬せず、亦た智慧ある天に親近まず。欲の爲めに誑らかされ、境界に貪著す。此の天處より退ぞかんとする時に臨みては乃ち悔ゆる心を生ず。是の故に天人は應さに放逸を捨つべし、應さに傲慢を離るべし。若し捨離せずんば則ち熾火の胡麻等を燒くが如し。尸棄如來

【三】檀越（Dānapati）。施主の義なり。

爾の時に當りて、偈を說きて言はく。

放逸なれば則ち破壞され、慢るが爲めに迷惑されて、若しは天、若しは丈夫寂靜の樂しみを得ず。 若しは放逸なる行を樂しむを、是れを則ち名けて死と爲す。 諸の放逸を樂しむ過にて地獄の中に退墮ちん。 正しからざる道を行ふ過を、是れを則ち放逸と名く。 放逸にて心誑らかされし天、則ち地獄に入らん。 實ならざるを喜樂び、實を喜樂ばざるは、放逸の垢にて闇きが故なり。 天欲の爲めに誑らかさる。 欲に迷はされし癡なる天、放逸にて、慢なるも亦た爾く、眞實を見ること能はずして、生盲の道に於けるが如し。

尸棄世尊は是の如くに已に放逸にて慢心なるは世間、出世間の法を妨礙ぐることを說き給ひて、又復第三に破戒の過を示し給へり。是く如き事を彼の佛世尊は悉く知り給ひて餘すこと無し。實の如く諦かに破戒の過患を知り、塔中の壁の上に次第に之れを書き給へり。

爾の時、天王牟修樓陀は、彼の天衆に、塔中の持戒せざりし過を書畫せる文字を示せり。持戒せざる者は是れ諸天の第三の過患なり。是れ利益に非らず、世間道に非らず、出世の道に非らず、世、出世の道にて一切皆非らず。何となれば、人中持戒せざるが故に世間道を妨ぐ。所謂、戒を受けて愚癡なる人は、旣に戒を受け已はりても、應さに作すべきを作さざるを一切知らず。亦復、是處、非處を知らず。過患を作し已はりては、覆藏して心に在り。兄弟の因緣あるも是の如くに破戒し、專ら兄弟、諸の親舊等の爲に、戒を顧念せず、或は戒を取らず、受け已はりては則ち犯し、忌難を生ぜず。是の如きを以ての故に、諸の親舊・兄弟・眷屬一切人等の爲めに皆悉く輕賤せられ、是くの如き言を作さる『此れは持戒せず、精進を勤めず、身・口・意の戒を一切持せず』と。是の如くに諸の親より兄弟等に至るまでに嫌賤れ輕薄らる。輕賤めらるを以ての故に、時節の吉凶等を皆看視ず、與に往還せず。吉凶等に會ふとも、請はず、喚ばず、信ぜず、敬はず、是の如きの人戒を受

けざるを以ての故に、持戒せざるが故に、戒を摂せざるが故に、本との善友の者も則ち中人と爲り、若しは先の怨みし者は則ち其の便を求め、若しは怨むと親しきとに非れば則ち之れを捐めて朋侶と爲さず。是の如きの人は樹の根の斷たれ、風に吹かれて地に倒るるが如し。是の如くに倒れ已はりては一切の物を失ひ、諸の親しきもの等は離る。彼の人の自らの心の本性輕やかに動くなり。輕やかに動くを以ての故に、則ち惡を懷く。一切の人に於て多く貪り、多く瞋る。心邪まにして疑ひの慮にて分別し、悕望す。欲に惱亂されて、其の心常に瞋る。一切衆生面色を好まず、威德あることなし。心亂れては定まらず、恒常に貧窮なり。是の如きの人戒を受けざるが故に、持戒せざるが故に、身壞はれ、命終はりては惡道に墮ちて、地獄の中に生まる。是の故に常に應さに念じて利益を作すべし。戒を受け、戒を持するは世法を妨げず。

是の持戒の人は戒の因緣を以て、心意堅固にして、常に正しく憶念し、善友を信ず。若しは王、大臣彼の人を信ずるが故に、大貴價の金寶・銀寶・種々の寶物を以て、一切之れに委ね、若しは隱密なる語をも信じ向つて說く。若しは王・王等の寄せられたる物を侵かさず。密語を露はさず、戒を護るを以ての故に、人の爲に信ぜらる。又復、諸の親・兄弟・眷屬の一切の時の人に信愛せられ、供養せられ皆悉く敬重して、尊長より過ぎたり。七種の戒を持し、王も亦供養し、知識・親等も皆悉く供養す。是の如きの人は一切の人に信ぜられ、一切の人に愛せられて、財物を具足す。常に貧乏せず。皆與に不饒益を作すこと能はずして、第一の大富なり。大富なるを以ての故に、能く布施を行ふ。能く福德を作し、正しき意にて善く住して、智慧を壞はさず。是の因緣を以て、身壞はれ、命終らんには善道の天世界の中に生まれん。

彼の人は是の如くにて、微少も戒を破れば則ち輕劣めらる。何に況んや出世間の道を修行するものに於てをや。是の如きの人は、意動きて住せず、業の果報に於て盲にて、智の眼なし。或は持戒

せず、或は多く戒を破りて唯だ一戒のみ在り、或は全く戒なし。他は比丘を謂ふとも、彼の人唯だ比丘の形服のみ有りて、猶ほし貝の聲の如し。心常に諂曲にて諸の檀越を誑かし、是の如き言を作さく『我れは佛戒を持せり』と。是の如きの人は實に持戒せず、聖の愛する所の戒を實に成就せず。彼れは是れ誑賊にして諸の世間、諸天及び魔、一切の沙門若しは婆羅門、諸の天人等を誑らかし、自他を倶に誑らかし、說くが如き行ひをせず。是の如きの人內空にして物なく、實なく、堅からず。水沫の聚りの如くにて、一切の人を誑かし、第一に諂曲なり。彼の人多く牀臥・敷具・病藥の須る所を求めて、處々に多く取る。彼の人は常に生死の泥の中に沒し、或は地獄若しは地獄等の諸の惡趣の中に生まる。彼の人戒を破りて、取るべからざるを取り、戒を破るを以ての故に、善分に攝られず。是の如きの人は、乃至、應に僧の地の中を行きて一步も至るべからず。相應せず、所應に非ざるを以ての故なり。何なる因緣にて爾るや。諸の檀越の彼の地を修治して、持戒せる者の諸の比丘等の爲にし、戒なく、戒を破りし比丘の爲にせず、一切の善き心なき者の爲にせざるを以てなり。是の如きの人、彼の地の中を行きて一步を至るとも亦應しからざる所なり。何かに況んや敷具・病藥の所須及び餘の一切の諸の受用る物に於てをや。尸棄如來は當に爾の時に當りて、偈を說きて言はく。

若しは比丘にして戒なきは、是れ賊中の賊にして、內爛れ膿等滿ち、外袈裟を被服けたり。一切は虛くして堅からず、猶ほし水沫の聚りの如し、是の如くに空しくして、戒なく妄に說くは是の比丘なり。　戒を破りて地獄に屬し、僧の寶に攝さめられざる所にして、心の爲に誑らかさるるが故に、身壞はれては地獄に墮つ。　法・毘尼を遠離し、自らの業の故に墮墜し、垢の闇に覆はれて、常に大苦惱を受く。　善法の衣を著せず、裸露にて善人に棄てられ、善業を離るを以ての故に、惡に將かれて地獄に至る。　善からぬ業を聚集めては、苦の門則ち開張

き、生死の縛堅牢し。戒を破りしが故に是の如し。　破戒の火の爲に燒かれて、彼れ則ち極めて燒かるとなす。　是の如くに戒を缺く者、必定して惡道に入る。　意に受けて持戒するが故に、師は則ち能く戒を與ふ。　心なくして諂りて戒を受くれば、必定して地獄に入らん。　彼の人日夜に、常に不善を增長す。　若し能く戒の寶を持せば、則ち能く破戒を壞はさん。　若し人空くして法なく、唯だ闇のみありて和集すれば、彼れ一念の時に、暫くも破壞せざることなし。　戒を破りしが爲に羂にせられ、垢の故に善人に捨てらる。　破戒の羂に常に牽かれ、戒を捨てし、善からぬ者は、戒なく、若しは戒を破り、惡知識に親附み、若しは欲者に習近す。　此れ地獄の因緣なり。　戒なくして愚癡なる人、或は復慢き動く人、惡業に相應する人は、地獄を去ること遠からず。　業には相ひ似たる果あり。　此れを云何して知らざるや。　癡かなる故に自ら患ひを爲して遊戲の樂しみに著す。　日日に常に增長て、惡河は渡るべからず、苦の波其の中に滿ちて、是の如くに衆生を漂ょはす。　彼の人善を生ずるに非らず、彼の人善き心にも非らず、若しは法を捨離する者は、則ち不善の法に攝せられん。　若しは身に善法を攝めば、是れ第一の善き道にして、彼の句を行ふ人は則ち不退の處に到らん。　戒を受持して讀經し、善法を愛樂む者は、正しく行ひ、常に調伏し、彼れ則ち苦惱を離れん。　此の持戒せざる垢は、則ち能く穢汚れしむ。　彼れ學を壞はすを以ての故に、地獄に攝めらる所となる。　是くの如くに一切を知りて應に勤めて心に戒を取るべし、一切の生死海は、戒なきが是の因緣なり。

是の如くに說かる所の一切の人等は、出世間の道にて戒なきが故に妨たぐ。云何して天中にて戒なくして妨げを爲すや。此の世間の中の業果の地にて、若しは此の中にて七種の戒を持し、攝取さめ和集むれば、天中にて樂しみを受く。久しく放逸を行ひ、乃至、樂しみ盡きて、然る後に退き

て墮つ。澄油の盡き、燈の炷盡くるが故に光明も亦盡くるが如し。

云何して出世間道を妨礙るや。謂はく、持戒せざるなり。彼の持戒せし人天の中に生まれ、彼處に生まれ已はりて、是の如く心に念らく『我れ人中に於て七種の戒を持し、此處に生まれて、天と平等なり』と。此の始めて生まれし天境界の愛欲の樂しみに著するを以ての故に、一切を皆忘れたり。若しは其の餘の天の持戒を忘れざるものは則ち此の天に持戒の業果を示し、其の爲に言を說けらく『汝本と人中にて持戒を具足し、生まれて此處に在り』と。彼の始めて生まれし天、心動きしを以ての故に、境界の樂しみに著し、語の聲を聞かず、持戒に入らず、取らず、信ぜざるが故に、善業の果報を取ること能はず。境界の勢力にて、其の意動きしが故に、彼れ持戒せず、法行に隨はず。彼の是の如き天善法を破壞す。是の故に退墮するなり。是の如くに持戒して天中に生まれ、或は世間に、或は出世間に生まる。彼の世間とは持戒せるを以ての故にして、此れは是れ一種なり。出世間とは則ち是れ菩提なり。此れは第三法にて持戒せずして妨ぐるなり。何なるは第四にして天人を妨礙ぐるや。所謂懈怠なり。懈怠を樂しむ人、若しは染に著する人、是の如きの人は、一切普遍く、一切種の一切の世間の有する所の諸法を皆成就せず。彼の懈怠の人は七種の法劣れり。何等を七と爲すや。若し人懈怠なれば增上果なし。則ち是れ二の劣なり。是の劣を以ての故に、供養は則ち劣り、財富も亦劣り、境界の智も劣る。是の如くに劣るが故に、一切の世間の正しき士も近よらず、世間の人情の問訊は則ち劣る。彼の人、是の如き一切世間の諸事皆劣れり。是の故に頑鈍にて、一切の作す所を皆悉く失壞ふ。是の如くに、人中にて世間の法義を懈怠は妨を爲す。云何して人中にて能く出世間の法を妨礙ぐるや。懈怠なるを以ての故なり。此の懈怠の人は、一切の家事の作業を皆畏そる。是の故に出家して、是の如き言を作さく『我れ出家し已はりて、多くの敷具・病藥の須ふべき所のもの有り、飲食豐樂にして、我れ晝夜に於て爲めに作す所なし』と。彼れ懈怠な

るが故に、是の如く出家し、既に出家し已はりて經を讀誦せず、惡を止むること能はず、善法を行はず、禪定を修さめず、禁戒を持せず。常に懈怠の爲に覆蔽せらる。彼の人多く利し、多く供養を得、食用豐足し、持戒するを樂しまず、智慧を樂しまず。少智なる過の故に、身壞はれ、命終はりては惡道に墮ちて、地獄の中に生まる。尸棄如來、爾の時に當りて、偈を說きて言はく。

懈怠なるは少しの福德にて、癡は能く心を破壞し、一切の親しきもの等も薄くなり、善道は得べからず。懈怠及び惡業、或は癡のために覆はるるは、涅槃の道を妨礙げて、善からぬ惡果を得るなり。羞なく慚愧なきと、㥦動と惡知識とは、皆是れ苦惱の因にて、智者は則ち捨離す。邪及び慢・大慢、是くの如き我慢等は常に此の一切を捨てよ。苦惱を受くる因緣なればなり。若しは懈怠の爲に覆はれなば、憶念を發動さずして、氣を出すとも死と等しく、空しく命を得るとも果なし。懈怠に患はされし者は、命あるとも亦死せると同じくして、是の如き懈怠なる人の心念は、死を勝ると爲す。若し懈怠の泥に溺れ、苦海に沒して、出でざるも、若しは人勤めて精進せなば則ち生死の海を渡るなり。少力にて懈怠なる人は飲食を愛する羊の如く、命未だ盡きざるとも死せるが如くにて、若し死せば地獄に入らん。

貧窮にして癡かなるは羊の如く、或は苦の爲に攝めらる。若しは人の他の食を食するは、懈怠是の因緣なり。若しは懈怠ある者は、多く他に依りて命を活かし、多く美味を貪著り、心惑ひて常に欲を樂しむ。彼れ則ち諦むを知らず、唯だ食味のみに貪著し、死の時既に到り已はりては、悔ひの火にて自ら心を燒かん。諸有の寒熱乃至飢渴等を忍べば、是の如くに身に苦しみを受くるも、後時に寂靜なるを得ん。懈怠の意を起すこと莫れ。懈怠なれば則ち怯弱にして、生死を忍ぶこと能はず、苦惱を脫るることを得ざらん。懈怠にて空しく世に在るは、善く人中にて凡鄙、未來世も亦空しくして、曾つて寂靜なることを得じ。

懈怠なる人此の過を除き已はるも、復異なる過あり。所謂、出世間の道を遠離するなり。懈怠なる人は、是不善の人、是れ退沒く人なり。

云何にして諸天は世間及び出世間の法律毘尼を失ふや。云何にして諸天は世間の道を妨ぐるや。謂はく此れ懈怠なり。復餘業ありて、若しは善を緣ずるが故に天中に生まることを得るも、彼の天は復懈怠の爲に壞はされ、一切の聲・觸・味・香・色を愛す。心復樂しまず、園林を樂しまず。天の愛すべき處に飛ばず、走らず、歌の聲を聽かず、自ら亦作さず、虛空を飛ばず。山峰より異なる山峰に至らず。河の中に在らず、波の鬘を涉り鳥に乘りて遊戲せず。是の如く樂しみは、夜摩天王是の如き樂しみあるも、彼の懈怠なる天は亦往きて詣らず。夜摩天王の有する所の一切の諸の境界の樂しみを皆悉く受けず。普く彼の一切は毒の如く怨の如くにて、一切は是れ垢れなり。此れは是れ懈怠の世間を妨礙ぐるなり。

云何して懈怠は復出世間の道を妨礙ぐるや。若しは復餘天常に正法を聞き、正法を愛樂するも、彼れ近づくこと能はず、正法を遠離して、未だ法を聞かず、心に聞かんと欲すること無し。設ひ聞くとも持せず、又亦習はず、尊長に近よらず、智學を學ばず、一切の法を離れ、一切の善を離れ、常に生死を樂しみ、常に苦惱を受く。何を以ての故に、彼れ道を離るるが故なり。則ち有の中に於て脫することを得ず、彼れ懈怠を爲して壞はさるが故に、地獄・餓鬼・畜生に生まる。彼れ則ち常に生・老・死等の爲に、籠に繫がれて、諸の苦惱を受け、世間に流轉す。彼の懈怠なる者の是の如き懈怠は、則ち一切の饒益せざる事にして、亦是れ一切の惡道の本、生死の種子なり。是の故に世間の一切の苦惱之れに由つて生ず。是の故に、世間にて若しは生死の縛めを脫せんと欲する者あれば、則ち應に精勤みて懈怠を捨離すべし。諸有の一切の不饒益の事に皆此れを本と爲す。此の是の如き等の一切の懈怠は則ち苦海に於て渡ることを得べからず。此の懈怠に無量なる過あり。

又復、此の四種の過を除き已はりて第五の過ありて、諸の天人等、世間・出世間の道を妨礙ぐ。所謂、惡貪は一切世間・出世間の法を普く妨礙げを爲す。云何して天、人は世間道・出世間道に於て惡貪に障礙らるるや。所謂、俗人は貪心を以ての故に法に非らざることを行ひ、常に財物を樂み、物を愛する心ありて、河水の旋が如く、亦獼猴の如し。心に物を愛するが故に、物を取らんと欲するが故に、諸の方便を設け、是の如く、是の如くに惡貪を增長し、是の如く思惟すらく『我れ今、當に何等かの方便、何等かの欺詐を設けて他人を誑惑くべし』と。心にて常に是の如くに欺詐り誑惑むく。復他人の爲に是くの如くに、欺詐り、誑惑くことを教示す。是の如き人は多く法に非らざることを作し、是くの如き法を以て、復他人に教ふ。是の如きの人心に貪りて、則ち是の如くに思惟すらく。『他の有する所の物を、皆悉く我れに屬させん』と。彼の人是くの如くに心に思惟し已はりて、復他人を教へ、他人を教へ已はれば卽ち共に相ひ隨ひて欺詐り誑惑き、諸の方便を設けて他人を誑惑して其の財物を取る。是の如くに誑かし已はりては、心に歡喜を生じ、是の如き念を作さく『我れ善く能く作せり。我れ能く欺詐きて、他人を誑惑し、其の財物を得たり、本は是れ他の有にして、今則ち我れに屬せり』と。是の如き心を起し、是の故に歡喜びて、其の滋味を得、是くの如く次第に樂行み、多く作して、他をして苦惱せしめ、惡貪は意を覆ひ、城郭・村邑・聚落・多く人の住む處を破壞し、或は城郭・村邑・聚落多く人の住む處を燒き、一切の人に棄捨てられ、一切の善人に嫌賤めらるる所となる。是れ諸の國土の大[一四]棘刺、城の棘刺、聚落の棘刺にて、國土を破壞し、城を破り、村を破り、屋舍を破壞し、他の種族を壞はして、常に一切の時に是の如くに惡を樂しみて、他をして衰惱せしむ。是の如きの惡人、身壞はれ、命終りては惡道に墮ち生まれて地獄に在り。是れ世間の中にての惡貪の人にして、是の惡貪の人は世間を妨礙ぐ。惡貪は既に集まりて又復增長すること、火の薪を得るが如く、是の如く、是の如くに惡貪增長し、是の如く、是の如く

【一四】棘刺。荊棘の意味にてこれの蔓こる所土地に收穫なく全く荒蕪する故に喩えたのであらう。

に惡貪方便し、是の如く是の如くに他の財物を得、是の如く、是の如くに轉た復增長す。是の故に福德を修行する人は勤めて惡貪を捨つ。何を以ての故に、第一の垢は所謂貪心にて、他の財物を取りて彼の垢に壞はされし者は地獄に入ればなり。尸棄如來爾の時に當りて、偈を說きて言はく。

若しは人欺詐を行ひ、方便して他の物を取れば、則ち是れは大貪の心にて、常に善からぬ行ひを行ふなり。　彼の人晝夜に於て、心常に淸淨ならず、貪の爲に其の心覆はれ、常に他の物を悕望む。　彼の人劫火の如くにて、自體の本性惡なり。　一切に悕畏れらるること、猶ほし惡毒の蛇の如し。　若しは人惡貪の爲に常に其の心を覆はれし者は、恒に地獄に入り、及び餓鬼等に在らん。　大地獄の火中の熱き處を旣に脫れ已はり、若しは生まれて人と爲るを得るとも、五百世に貧窮ならん。　面を毀ちて口に皺し、常に苦惱を受け、貪の爲に心を壞はす者、皆是の如くに苦を受く。　若しは人貪を捨離て、常に智慧を悕求むれば、恒に神通力ありて、則ち善道を行はん。　心中の貪を除却こと、猶ほし蛇の窟を閉すが如く、若しは貪蛇の爲に齧らるれば必定して苦惱を受けん。　若しは貪心を懷く者、念々に轉た增長して、火の乾きたる薪を得て熾然として增長するが如し。　財物を愛樂する人は恒常に物を悕求むとも、死する時旣に到り已はれば、物あるとも皆捨離せん。　若しは惡業を作し已はれば、終竟に捨失ふことなく、彼の人貪の爲めに縛られ、將れて地獄に入りて去らん。　財物は則ち他に屬す。　自らは惡業の汗を得、財に非らざるを見ては財と爲し、樂に非らざるを謂ひて樂しみと爲す。　惡貪心の中に住まば、怨を見ること善き友の如くにて、貪の火能く人を燒く。智者は貪を集めず。　貪の爲に燒かるる人は、後時に地獄に入る。　世間の財は山の如くとも、一切皆無常なり。　云何して財物の爲に、是の如き惡業を作すや。　唯だ愚癡のある者のみ能く是の如き惡を作すなり。

是の如き惡貪を皆自ら作すこと勿れ、他をして作さしむること莫れ。是の如き惡貪世間を妨礙たぐ。惡貪を集むる者の、日日に增長すること、火の薪を得るが如く、是の如く是くの如くに熾然として增長す。是の如き惡貪は財物を得るが故に、是の如くに增長き、貪慳と嫉と共に增長して熾盛なり。是の故に諸の福德ある人は、應に捨離すべし。汝等天衆、當に是の如くに知るべし。生を活むる人ありて、賤く買ひし飲食、若しは餘物等を、若しは齊會を作して、沙門若しは婆羅門に布施し、他をして知らしむることを爲して、謂く『是れは福人にて眞實に信ずべし』と。人の信ずるを知り已はりて、然る後に、自らの物を貴く他に賣る。此れ布施すと雖も清淨なる心に非らず。他をして信ぜしむる爲にして、生を活め、利を求め、賤く買ひて貴く賣り、是の如く方便して、少しの物を以て施し、物を得ること更に多し。或は十倍を得、或は八倍を得。是の如き惡貪を善人は則ち捨つ。

又惡貪を捨つ。惡貪と言ふは、所謂法師の法を說きて物を取り、是の如くに物を得とも三寶の用とせず。此れは是れ惡貪にして則ち應に捨離すべし。又た惡貪あり。惡貪と言ふは、謂はく出家の人、或は白象の牙にて作りし所の佛像、或は刺繡せし像、或は㲲等の上に畫作せし佛像、或は刻りたる木像、或は銅等の像、是の如き像を賣る。彼れは是れ惡貪にして、既に物を得已はりては法の中にて用ふるに非らず。人中にて則ち是の如き惡貪ありて、世間の法、出世の法を妨たぐ。智者は呵め毀ち、智者は捨離す。云何なるを名けて天中の惡貪と爲すや。汝等天中にて、是の如くに大いに樂しみ、猶ほ故惡貪にして、是の如く現に、此の金銀山・毘瑠璃山・靑寶の山・大靑寶山・玻瓈山の中にて、汝等一一遊戲して樂を受くるを見る。一の山中にて既に樂を受け已はりては復餘の山に向ひ、諸の天女と共に種々に樂しみを受け、天衆に圍遶る。是の如き一切は貪に由るが故に爾くして、餘の作す所に非らず。汝等天衆は愛と共に貪に縛られ、惡道に墮ちて而も覺知らず、

怖畏を生ぜず、死の苦しみを畏れず、愛する所の眷屬等に離ることを畏れず、退く時の種々なる衰苦を覺らず。汝等天衆貪心を以ての故に畏れず、覺らず。汝等天衆の是くの如き貪心は無量・無邊にして、魔業の貪心厭足ことを知らず、離別することを畏れず、死の苦を畏れず。是の如くに惡貪は世間道を妨たぐ。

云何して天中にて貪心は出世間の道を妨礙ぐるや。此の聲・觸・味・色・香等を愛し、喜樂て樂しみを受くる貪心の諸天は、其の餘の少貪の天の所に就きて法を聽き、法を聞き、法を求め、法を學ばずして、法を聞きて心をして白淨ならしめんと欲せず。一切の善法の勝れたる根本は、所謂法を覺ることなり。一切の法を覺る要は、法を聞くに由る。若し法を聞かずんば、法を覺らず。何が故に覺らざるや。放逸なるを以ての故なり。復何なる法を以て是の放逸の根とするや。所謂、貪心なり。是の故に應に貪心を捨離すべし。若し貪心を捨つれば則ち涅槃に到らん。貪に覆はるれば生死に流轉す。天衆當に知るべし。出世間の道は天人の中の惡貪に妨礙げらる。是の故に智者は常に應さに精勤めて惡貪を捨離すべし。施に三種あり。一は資生の施、二は無畏の施、三は法の爲の施なり。彼の資生の施とは、報として天の果を生じ、布施すること能はず。此の人は天より勝さる。天人に勝さるに非らず。是の如き人身は第一得難し。若しは人身を得とも布施することを行はずんば則ち虛しき生を爲さん。商賈する人の寶の洲に値ふことを得とも、寶を取ることを知らずして便ち空しく還るが如し。若しは人身を得とも、財を捨て丶布施することを知らざる者は亦復是の如し。

何なるは復是れ無畏の布施なりや。凡そ幾種の無畏の布施ありや。無畏の布施には凡そ三種あり。一は命を救ひて其れに無畏を施す。二は妻子の他の爲に拘執られしを、方便して救ひ攝さめて、其れに無畏を施すなり。三は、物を失ふことを畏そる者を防護して、其れに無畏を施すなり。彼の命を救ふものは人天の中に生まれ、報として長き命を得。物を失ふことを護る者は、生まるれば則ち

大富にして、有する所の財物王賊、水火に奪はれず、壞はされず、若しは國王と爲り、或は大臣と爲る、彼の業を以ての故なり。大力の勢あり、大なる名稱ありて、所生の處に在つて恒常に大富なり。妻子を救ふ者は、若しは人中に生まれては善く妻子を攝め、天上より退く時は天女に捨てられず。是の如き三種は無畏の布施なり。

何なるは法施なりや。法施に二種あり。一は世間の法を用ひて以て布施す。二は出世の法を用ひて以て布施するなり。彼の世間の法を用ひて布施する者は、謂く、四禪、世間の中の智の和集を以て布施し、人天の中に於て世間の樂しみを受け、天、人の中に生まるれば則ち邪見を生ず。

出世間の法にて布施する者は、瞋ざるを以ての故に、天、人の中に生まれ、或は欲界に生まれ、或は色界に生まれ、若しは欲界に生まれ、彼れ或は一百九十八地の上に生まれて在り、願に隨ひて彼こに生まる。若しは色界に生まるれば則ち解脱を得ん。果の勝れしを以ての故に、大智慧の故に、依る處勝れしが故に則ち解脫を得て、[一五]淨居處に生まれん。若しは願力に因つて[一六]轉輪王と爲り、四天下に主となりて金輪の寶あり。寶には十四あり。所謂、七寶、七の相似の寶なり。善き願力の故に、盡く諸の[一七]漏を滅して[一八]緣覺の道を得。願の勝れしを以ての故に、則ち如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と成る。法を以て布施せし因緣の勝れしが故なり。此の三種の施、汝等天衆には一切皆なし。是の如き義の故に人則ち勝るとなす。天は報地をなし、人は業地をなす。業の因緣果にて、是の如くに人中にて天の因緣生じ、業果則ち勝れり。是の如くに人勝れて、天如かずとなす。

【一五】 淨居處。淨居天(Śuddhāvāsa)のこと。色界第四禪天の最頂にして、之に五天あり。

【一六】 轉輪王 (Cakravartirāja)。斫迦羅伐棘底曷羅闍、遮迦越羅と音譯し、轉輪聖王、轉輪聖帝。輪王とも云ふ。此王身に三十二相を具し、位に卽く時、天より輪寶を感得し、其の輪寶を轉じて四方を降伏すれば轉輪王と云ふ。又空中を飛行すれば飛行皇帝と云ふ。

【一七】 漏(Āśrava)。煩惱の異名なり。有情の煩惱は、日夜身心より漏泄流出して止まざるに由つて名く。

【一八】 緣覺(Pratyekabuddha)。舊譯には辟支佛、辟支迦羅と云ふ。新譯には鉢剌翳伽佛陀と云ふ。十二因緣の理を觀じて斷惑證理し、飛花落葉の外緣に因て自ら無常を覺悟するに依つて緣覺と云ふ。或は師なきより獨覺とも云ふ。

卷の第四十四

觀天品之二十三

夜摩天之九

又復、業分にて若しは人、天に生まるゝとも曾つて布施せず、唯だ戒を持してのみ天の中に生まるることを得しは、唯だ一種の功德のみ具足してあり。五欲の功德は餘天より劣れり。是の業の因緣にて、人勝れて、天劣れり。毗婆尸佛當に爾の時にあたりて、偈を說きて言はく。

人中にて布施し已はれば則ち善道に生まれん。　天にて能く布施するに非らず。　是れ果地なるを以ての故なり。　人中は是れ業の地にて、果の地は則ち是れ天なり。　一切の果の因は業なり。　因なければ則ち果なし。　命は念々に住せず、是の如く轉じて迴らず、業果將さに盡きんとす。　應さに福德を作すべし。　一切は是れ心の力なり。　能く命をして流轉せしむ。

是の故に智ある者は、命の爲に惡を作さず。　一切は皆未來の諸の苦惱を畏れずして、是の如くに苦惱する人は、癡の羂に縛らるゝが故なり。　布施・持戒の寶〔一〕誰か心中にあらんには、若しは天、若しは是れ人則ち善道に到らん。　有爲は生じ、住し、滅す。　皆是れ無常なるが故なり。　一切の有爲の樂しみも亦是の如く無常にして壞すと雖も、而も貪を生ず。　念々に動いて住せず、樂しみと命は皆な是の如し。　是の故に應に捨離すべし。

是の如く此の法は一切有爲にして、悉く皆無常・苦・空・無我なり。一切の世間の無量の衰惱處々に普遍く、五種の縛ありて、天を縛り、人を縛る。愚癡にして、目は盲し、惡欲心を壞はし、唯だ愛樂を生ずるのみなり。一切の愚癡なる毛道の凡夫は迭ひに相愛して縛り、鳥の籠に在るが如くにて、一切の人、天は生死の中にて流轉し常に行ふ。是の義を以ての故に、若しは人、若しは天、

【一】誰の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依る。

或は命、或は樂しみに[二]常想を生ずること勿れ。應に世間の一切の諸法に於て常想を生ぜず、無量種々に分別を作さざるべし。又復十二種の施を具す。是の如き布施は天の中には無き所にして、唯だ人の中のみに有り。天は唯だ果を食ふのみ、若し果を食し盡くれば、爛失ひ、破壞して、彼の天處より退く。何等十二の布施の具足なりや。一は方處具足、二は時節具足、三は功德具足、四は愛すべきものを具足す。謂はく愛せらるゝ物なり。五は福田具足、六は飢渴の者に施す。七は信心にて施與す。八は求めずして施する功德を具足す。九は歡喜の心ありて妻子等に施す。十は簡擇の心にて敬重する所に勝富なる[三]伽羅を之れに施與す。十一は世間の輕賤ならざる者に施す。十二は施して報を望まず。此の是の如き等の十二種の施なり。復、持戒の功德有りて具足せば天中に生まることを得、盡き已はれば則ち退く。是の故に天應に放逸なる行を捨つべし。是の如き十二の垢を離れし布施は、轉輪王と爲りて、財寶富み足れり。或は天に生まれ、或は天と相ひ似る。

復十二の垢を雜へし布施あり。何等を名けて十二種の垢と爲すや。一は多くの人の聚まりて和合せる衆の中に於て、或は僧の中に於て、平等に皆戒・智及び行の功德を具足すること有るとも、不平等に施す。此れは是れ垢の施にて少しの果報を得ん。二は若しは男、若しは女、欲の因緣を以て、或は男は女に施し、或は女は男に施す。此れは是れ第二の垢惡の布施なり。又復第三の垢の布施とは、怖畏を以ての故に、物を捨て、王家の門師に施與す。謂はく、是れ沙門・婆羅門等にして、是の如き心あり。『若しは我れ王に於て衰惱を得ば則ち能く我れを救はん』と。此れ思を修むる因緣の故に與ふるに非らず。名けて垢施と爲す。又復第四の垢の布施とは所謂、癡なる心にて物を捨てゝ布施す。彼の外道の婆羅門等の如くにて、齊會等にて施す。此れは是れ第四の垢惡の布施なり。又復第五の垢の布施とは、謂はく、他人の布施する所の者を見るに、彼の人は持戒を以てするや不やを知らず、彼の人の智慧あるや不や、寂靜あるや不や、禪ありと爲すや不やを知らずして、他人

【二】常想。諸法は無常なるも凡夫は之を知らずして常住と思ふこと。

【三】伽羅(Tagara)。多伽羅の略。香木の名なり。

の是の如くに布施するを見、他の因緣の故に、內に自ら思なくして、是の如く物を捨てゝ之れに施與す。此れは是れ第五の垢惡の布施なり。又復第六の垢惡の布施とは、謂はく、前に乞ひし者の苦しみ求めば乃ち與ふ。此れは是れ第六の垢惡の布施なり。又復第七の垢たる布施とは、他の物あることを知りて、他をして信ぜしめんが爲に、方便して偷まんと欲し、物を捨てゝ之れに與へ、後に惡を作して種々に侵し損なはんと欲す。其の便を覓むるが爲に、是の故に物を與ふ。此れは是れ第七の垢惡の布施なり。又復第八の垢惡の布施とは、他の和合せる事を破壞せんが爲に、物を捨てゝ之れに施し、他の二人の共に一友を爲すを別離せしめ、後に其の便を覓めては則ち衰惱を與ふ。此れは是れ第八の垢惡の布施なり。又復第九の垢たる布施とは親みを成す爲に、物を捨てゝ他に與ふ。或は男は女に施し、或は女は男に施す。此れは是れ第九の垢惡の布施なり。又復第十の垢たる布施とは、所謂、生を治めて、多く食具の種々なる諸の物、粟、豆、果、菜、一切の雜物を買ひ、齋會日を待つて貴く賣り、利を邀めて物を得、自らは微少を用ひて之れを饒にす。此れは是れ第十の垢惡の布施なり。又第十一の垢たる布施とは、名稱の爲の故に物を捨てゝ布施す。此れは第十一の垢惡の布施なり。又第十二の垢たる布施とは妻子の飢え貧しきに、物を以て之れに與へ、內に善き思なし。此れは第十二の垢惡の布施なり。此の一切の施は思を離れ、思なく、思なきを以ての故に、空くして果報なし。若し思を增長すれば則ち能く垢れを離れん。譬へば垢れたる衣の灰汁にて洗浣へば則便ち清淨となるが如く、是の如くに思を熏ずれば布施を成就す。毗婆尸佛は當に爾の時にあたりて、偈を說きて言はく。

十二の功德を具へては、十二種の垢を離れ、清淨なる施を成就するも、相違せば則ち垢濁なり。　或は天、或は男子、布施すれば大力を得ん。　施を離るれば惡趣に墮ち、布施しては善道に生まる。　貪心、嫉妬にて垢れ、唯だ妻子にのみ親愛なれば、此の人餓鬼に墮ちて、唯だ

飲食のみ悕望まん。若しは貪心の縛めを解き、慢心の樹を斫伐りて、闇の聚を除滅する者、此の人は布施の故なり。布施は前に在りて行き、施主は其の後に隨ふ。布施は能く道を示し、行きて他世に到り去る。施しの水にて澡浴せし人持戒の香を以て塗り、智慧廣く垢なくして、苦しみの彼岸に度ることを得ん。丈夫に三燈あり、利益する爲の故に然くして、所謂、施・戒・智にして、此等は能く過を除く。愛は極めて深廣なるが爲に、疑ひの波は極めて動亂す。持戒して智を修むるが故に、是の如くに苦の海を過ぎる。心調はずして、而も速なり。一切の處に皆著すとも、布施・持戒の法は則ち能く此の心を縛る。此等の三の藥師は能く煩惱の病を除く。布施・持戒・智は恒常に安樂を與ふ。心に放逸の過あれば、分別して曲がりて輕かなり。布施・持戒・智の此の三は能く心を縛る。三種は熾火の一切世間を燒くに過ぎて、智の水は火を滅し已はりて、寂滅涅槃を得しむ。

彼の毗婆尸如來世尊の是の如き書經は彼の塔の中に在り。此の布施を行ふは唯だ人のみ能く行ひて、天則ち能はず。此の因緣を以て、人は勝れ、天は劣るなり。汝等旣に是の如き布施を知りて、諸の境界に於て、心放逸すること莫かれ。當に善く心を持つべし。善く心を持ち已はるが故に、煩惱の大惡の過患をして心の中に生ぜしめず。若しは其の生ぜし者は智の火能く燒き、智の火に燒かれ已はれば則ち第一の不退の處に到る。生まれず、老ひず、死せず、盡きず、是の如きの處なり。應に怨の如き放逸を捨離すべし。又復天衆に更に餘の事あり、意則ち劣減り損辱されて羞恥す。所謂、食ふ時に現に見るが故に羞づ。業の勢力に下・中・上あるを以て、果も亦是の如くに下・中・上あり。彼の天は乃至少しの物を以て他天に施すこと能はず、自らの業を以て迴轉して他に與ふるに非らず。所謂、人中にて食時に捨て施し、或は時に持戒して是の如くに食を得。天は他の食の勝れし色・勝れし香・勝れし味を具足せるを見、是の如く見已はりて、心則ち羞恥す。若しは園林の蓮華

の池水に在りて、遊戯する時一切の樂しみを受け、業の如く相似して樂しき事を成就し、餘天の面を見ては、快樂を受け已はり、內心に自身の低減なるを羞慚す。天の中には則ち五種の羞恥あり。何等を五と爲すや。一は謂く食する時に、他天の白須陀の色を見ることありて、自らの食は則ち垢にて、或る時の色は赤なり。相ひ近づきて食し、食することを見れば則ち極めて羞ず。此れは是れ初めの羞なり。第二の羞とは謂く、他天は端正にして好色なる形服にて莊嚴り、多くの天女は妙色にて殊絕れ、餘天を供養することあるを見、見已はれば則ち羞ず。第三の羞とは謂く、他天を見るに蓮華の中に在りて、空中に飛行し、園林・山峰の蓮華の池水は金毗瑠璃にて、戯はむれ樂しむ處に行くに、業勝れしを以ての故に飛行すること則ち疾し。若し少き業の天は、行くとも則ち速ならずして、彼と共に同じき處に遊行すること能はず。常に他の後に在りて天女の衆に羞ず。第四の羞とは謂く、天の入りて蓮華池に在る者は、天本と是くの如き業ありしを以ての故に、則ち是の如き蓮華池ありて、色・香・觸・量を生ぜり。劣りし天見已はりて眷屬の中に於て則ち羞恥を生ず。第五の羞とは天の業の如く、是の如くに報を得、業の如き坐に處る。若しは本の時に於て大善業を作さば則ち妙好なる毗瑠璃の座・或は青寶の座あり、或時は復、赤蓮華色の勝れたる座處ありて坐せり。若しは餘の劣りたる天彼處に在りて坐し、業少きが故に、是くの如き妙れし座は或は變じて金と爲り、或は變じて銀となり、或は玻瓈となる。彼の天既に坐處の變はりしを見已はり、種々なる雜業、輕重等の業を既に見知り已はれば則ち羞恥を生ず。既に羞を生ずるが故に、威德は劣減なり。彼の天是の如くに面色減劣り、餘天は威德あつて面色を增上す。自らの天女の衆は是くの如くに之れを見れば則ち捨てゝ去り、是の如き少き業の天子を捨離して、其の餘の大いなる業の天に依止して去り、遊戯して樂しみを受く。天女は同じ心にて一切皆共に餘の天子に詣る。彼の少き業の天は極めて羞恥を生ず。此れは是れ天中の眷屬の所に於ける第五の羞恥なり。是の如くに有爲の法を樂し

ます。彼の有爲の法能く誑惑を爲して貪心を生ぜしむ。[一]楝樹の葉は其の味甚だ苦くして、餘の甜味を和らぐが如く、天の樂しみも亦爾くして、苦を雜へ、樂を雜ふ。何に況んや復異道の衆生の地獄・餓鬼・畜生の中に在る者に於てをや。或は定業にて生まれ、不定業にて生まれ、常に苦しみて止まず、無量種の大力の苦を生ずることあり。譬へば海中の如きは種々の雜水にて、異異たる河入り、種々の水入る。衆生の心も亦復是の如し。相續せる河流は、種々の諸の業あつて、業に依りて河起り、大力を成就し、諸の苦惱を生ず。汝等天衆、此の量是の如し。一切種の異りたる苦を說けり。應に知るべし。總じて一切の苦に三種の因あり、和合し相應して諸の苦は滿足す。此の三種の苦に三の對治ありて則ち能く之れを除く。何等を三と爲すや。謂く智・戒・施なり。毗婆尸佛爾の時に當りて偈を說きて言はく。

若し心、智・戒・施等の三に依止せずんば、彼の衆生は常に苦みて、樂みは則ち得べからざらん。種々の因緣の如く、何等の業にて幾種なりとも、衆生の作す所の業にて、是の如くに果を成就す。一切皆因緣なり。因緣ならざる者はなし。有爲破壞せざれば因緣は見るべからず、心の爲に誑らかされしが故に。布施して面に羞慚ず。是の如くに布施する者は則ち樂しき果を得ず。和合せる布施は勝れ、慳・嫉妬を捨離す。天常に樂しみを受くるが故に則ち是の如き心なし。飢渇は大火を爲して能く諸の餓鬼を燒く。一切の慳・嫉の果にして實に智者の說き給ふ所なり。若しは常に布施を行へば、彼れ必定して樂しみを得、施を以て樂しき果を得ん。是の故に布施は勝れたり。世間に光明を作して恒常に自ら隨逐ひ、布施は則ち天に到り、天も供養すること僕の如し。是の誑かされざる處を施さん。如來是の如くに說き給へり。其の是く實なるを以ての故に、常に應に布施を行ふべし。慳・嫉・怨を捨て已はりては善く心を修さめ、若し能く布施を行へば、生死の海を渡ることを得ん。三寶に福

【一】楝樹。楝の字は宋・元兩本に依れり。あふちと云ふ木なり。高さ丈餘にして、葉は槐の如くにして其の端尖れる一種の木、春紅紫色の花を開き、實の形は小さき鈴の如く秋熟して黃となる。

田を施し、三種皆清淨ならば、決定して[五]三時に於て[六]三明にて彼の果を見る。初め布施を行ひ、次に精勤みて戒を護り、智は則ち能く愛を割く。此れを大樂の道となす。若し愛を除斷せず、世間を饒益せずんば、彼れ則ち生死せざる勝れし處に到ること能はず。常に施こさざる心を離れ、恒に樂しみて布施を行へ。施なきが故に飢渇にて、餓鬼の中にて身を燒く。布施は大富を得、天乾闥婆の中にて、施に因りて王となるを得、善法の轉輪王は布施の地に依止す。智者は能く戒を持し、持戒する者は時を知り、智に因つて解脱を得るは苦を出づるの要道にして、一切の佛の譬へ給ふ所、勇健なる者知り已はりて、則ち常に布施を行はん。布施せずして天に生まるゝは、天の中にて樂を受くること少し。施の故に人中に生まれ、生まるゝに從ひて富樂を受く。若しは生まれて畜生に在りても亦常に樂しき果を受く。一切布施の樂しみは是れ智者の說き給ふ所にして若しは餓鬼の中に在りても、彼れに亦飲食あり。本少き施を以ての故に則ち是の如き果を得るなり。若しは地獄の中に生まれては飢渇も燒くこと能はず。一切は施を以ての故に、是の如くに皆果を得。泥道の中に生まれし者は、是れ衆生の自らの業にして、布施して安樂を得ること、父母を見るが如し。是の如くに施の地に住して、常に布施を行ひ、恒に施を樂しみて持戒せば、諸の惡しき處を脫るゝことを得ん。

牟修樓陀夜摩天王是の如くに已に放逸なる天衆に示し給へり。天衆知り已はりて一切現に戒の果報に住し、持戒を攝取せるを見る。

又彼の天衆に復羞慚あり。所謂業の故に現前に羞恥し、食を見るが故に羞づ。園林の蓮華の處々に遊行し、多くの天女の衆圍遶を爲し、種々の樂音天の中に在り、地の上を行く、心境界の五欲の樂を樂しむに、第一の勝れし樂しみにて譬喩すべからず。樂しき事を成就して、是の如くに轉じて飲

【五】三時。印度にては、春夏冬にして秋なし、故に三時と云ふ。

【六】三明。明の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依る。智能く明瞭に證知するを明と云ふ。自他身の過去世の事を知るを宿命明、自他身の未來世の事を知るを天眼明、自他身の現在の苦相を知つて煩惱を斷ずる智を漏盡明と云ひ羅漢の所持の智なり。佛に在つてはこれを三達と稱す。

食の地處に行き、次第に往きて種々に莊嚴る端正の天女に到る。是の如き天女に圍遶れし彼の天は歌舞し、五樂の音聲にて遊戲して樂しみを受く。彼の天の耳識は厭足ことを知らず。境界は愛すべし、是の故に樂しみを受けて厭足べからず。

又復彼の天種々なる色を見るに皆悉く愛すべく、端嚴にして殊妙なり。意に念ふが如き色にして見れば則ち樂しみを生ず。種々なる光明ある種々の異りたる色の、種々なる形相は或は遠くに在り、或は近くに在りて住し、或は中間に住せり。彼の天見已はりて、是の如き念ひあり。『彼の遠く住する色は前に近づき來るべし』と。心に念ふ時に隨ひて、彼の愛すべき色卽ち來りて近くに在り、或は中に住する色は意に念ふ如くに來る。若し近き者を念へば近き者則ち來り、若し中なる者を念へば中の者則ち來り、若し遠き者を念へば遠き者則ち來る。業の果勝るが故に、是の如くに意の隨なり。彼の業の因に下・中・上あるを以て、天の報も是の如くに下・中・上あり。是の如く彼の天愛の毒に齧らるゝも厭足ことを知らず。火の薪を得ては足る時のあること無きが如く、愛心の者則ち境界に於て厭足くべからず。是の如き天中の無量種の樂しみも皆足るべからず。

又復天衆は鼻識に香を齅ぐに無量種あり。謂く園林の中の天の妙華の香なり。又復彼の華は樹の枝の中に生じ、枝は垂れて地に至り、種々の色、種々の形相ありて、種々に分分れ、雜雜り、異異りて、一切の時に華同時に開敷く。彼の是くの如き華を天女之れを取りて、天子に送り之れを齅ぐことを得せしめ、或は風の爲に吹かれて香は天子に至り、天子之れを齅ぎ、齅ぎ已はりては欲を發し、則ち欲樂を受く。

又復天身は是の如くに天の中にて莊嚴り、殊妙にて天と相應せり。頭上の莊嚴は寶瓔珞等にて、天の意に念ふ隨に一切の種々なる衣服を出生し、種々なる香の縷なき天衣ありて、其の量相應せり。彼の天是くの如くに愛心を生ぜしが故に厭足ことを知らず。

又復彼の天、若しは心意に念はゞ、自らの業を以ての故に、一切の須ふる所を具足して皆得、則ち第一の愛すべき飲食あり、天の上の地の中には須陀の食ありて、本施せし時に下・中・上ありしを以て、須陀にも亦爾く下・中・上あり。

又復具さに種々の天飲ありて、下・中・上あり、業是の如きが故なり。自らの業は印の如く、猶し人中にて人身に長短あり、日に從つて在る所の影も亦是の如く長短あつて身に似るが如し。是の如く是の如く、彼の天は、本人中の時に於て、是の如き業を作して是の如き食を生ぜり。彼の食を食ふ時天女現前るれば則ち羞恥を生じ是の如くに天の中にて勝ぐれし天女を見、大に苦惱を生ず。是の如き有の中は一切無常にして、一の樂みとして破壞せざる者あることなし。現に見る一切の有爲皆爾くして、是の如し。應に知るべし。

又復彼の天本の善業盡きて退く時に苦を生ず。若しは放逸なる天天の欲樂を樂しみ、退く時に愛と離れ、膩に潤されて、盡くる時餘道に向はんと欲して則ち相の現はることあり、退かんとするが故に、身心大に苦しむ。若し大苦を生ずれば、彼の苦は是の如くにて譬喩すべからず。毗婆尸佛爾の時に當りて偈を說きて言はく。

種々の放逸を樂しみ境界の爲めに誑らかされ、食欲の盡きて退く時與に同伴する者なし。　天
前に放逸を行ひて、布施等を行はずんば、後に於て死し退く時、悔の熱にて自ら心を燒かん。
初・中・後等の時に、心常に利益を作し、利益して常に調ふ者は、死する時にも怯怖せざら
ん。生あれば必らず死あり。　亦愛別離あるも、愚者は思惟せずして、境界の爲に誑らかさ
る。　死は次第に念念に、境界は天を破壞して、來り至るとも、天覺らず。　欲に著せる意を
以ての故に。　若し天能く此れを知れば、愛別離苦を生じ、乃至須臾の間も欲に於て心住せ
ず。　欲は無常にして畏るべし、常に不利益を作す。　是の如き愚癡なる者は而も猶ほ欲に近

づく。癡かなる天、常に是の如くに欲の火の爲に燒かれ、既に欲に燒かれ已はりては、欲を習ふて休息せず。若し眞諦を思念せば、境界を喜樂せざらん。若し欲を喜樂する者、是れ則ち常に啼哭ん。此の一切の三界の轉行すること猶し輪の如く、一切の業の羂に縛らるるも、天其の實を見ず。種々の道の中の處々に數々生死し、衆生愛の爲めに迷はされ、常に諸の苦惱を受く。欲は電の火輪の如く、暫く住せんことも得べからず。夢の乾闥婆の如く、衆生虛妄に取らる。欲は是の如き等の如くにて、欲を畏るれば復是れに勝つ。無常・苦・空の中にて、我所の心を生ずること勿れ。此の老死の輪は極惡にして、調伏しがたし。譬へば、救なき衆生、眼なくして覺知ず。牟尼は說き給へり。五根は空にして自體なく、多く無常の苦ありて、自體是れ病の處なりと。是の如くに見、知り已はれば則ち應に欲を捨離すべし。彼の寂靜なる智慧は則ち近く涅槃に住す。彼の天を退かんとする者、根・心皆動亂れ、爾の時苦しみ生じて譬喩すること得べからず。是の如くに大樂を受け、是の如くに愛憎する心あり、彼の天の退かんとする時、是の如き大苦を受く。諸有の死の未だ來らざるに、諸有の八難を離れて、皆利益を作すべし。此の道は能く樂しみを得ん。天中の地處より退き、人地の中に死亡す。何人か是くの如く知りては生死を厭離せざらんや。

是の如くに天中にて業盡きて退く時、業の繩に繫縛せられ、牽かれ退かしめられ、將に餘處に向はんとして大いに怖畏を生ず。是の故に天あり、同じくして畜生の如し。若しは天心に境界の樂行を樂しめば、自ら利益するに非らず。是の故に天衆、放逸を行ふこと勿れ、後時に心に悔ひの熱を生ずること莫れ』と。夜摩天王牟修樓陀是の如くに彼の山樹具足の地處の行天の爲に、毗婆尸佛の作り給ひし所の佛塔、彼の塔を見已はりて、天衆を調伏し、利益を作す爲に欲の過患を示し、顚倒せる天の四顚倒の者の爲に、正法を說けり。死の未だ來らざる間に則ち其の死を示し、其れに怖畏を

【七】我所。我所有の略にして、事物を自らのものとするを。所有觀念の對象。

與ふ。彼の死の畏れの處、無量なる苦の處にて、平等の道を示し、寂靜の心を以て他の利益を作し、天衆を調伏せり。六經中に於て、毗婆尸佛の作りし所の經文の第二は已に竟れり。又彼の天主牟修樓陀夜摩天王彼の天衆の山樹具足の地處より來りし者と共に、心を修めし者、心を修めざる者も、皆之れを攝取し、精勤し、修習し、他の行を利益して、其の放逸を除き、諦に業の果を見て心をして柔輭ならしめ、心柔輭なるが故に、大信心を生じ、信心を生じ已はりては其れに欲の過を示し、欲の過を示し已はりては、命の無常を說き、無常を說き已はりて生死の苦を說く。彼の天聞き已はりて、心則ち柔輭なり。心柔輭なるが故に、天王告げて言はく『汝等天衆の一切。皆此の大佛塔、迦迦村陀如來の塔を看よ。應正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊の妙寶の佛塔にてまします。光明遍滿く、金珠の拘欄は虛空を穿つが如く、高く上に出で、一切皆甚だ愛樂すべくして、第一清淨なるを見る。一切天衆の見る者は心に樂しむ』此の諸天の中に高く出でて幢の如く、堅牢にして動かざること猶し禪に住するが如し。種々の善寶の光明勝妙にして、正法を說くが如く第一に愛すべし。天是くの如くに見るなり。汝等天衆。我と共に相ひ隨ひて彼の塔の所に往き、供養し、禮拜し、或は香を以て塗り、散華して供養せよ。此の大僊の塔に、何なる希有のこと有るや。今共に往きて看ん。若しは我れ利益あり、乃至涅槃し、或は身・或は命に皆安樂を得ん。何を以ての故に、如來世尊は少しく說法すと雖も則ち能く衆生を利益し、安樂にし、一切の衆生必ず利益を得ること則ち疑あることなし。我等今自らを利益する爲に皆共に往き去らん』と。爾の時、天衆既に天王の是の如き語を聞き已はりて、心清淨にして、天王の語を信じ、天王に白して言はく『我等は皆去りて供養し、禮拜して自らの利益をなし、自らの安樂を爲さん』と。爾の時、是の如き山樹具足の地處の諸天は、天王前に在りて天衆後に在り、世尊の塔に向ひ、皆共に往き到り、到り已はれば則ち迦迦村陀如來の塔を見て敬重心を生じ、禮拜し、供養して周匝を旋

遶れり。

爾の時、塔中の衆寶の光明日の光明を形りて、螢光の蟲の如し。彼の寶の光明の勝妙なること是くの如し。彼の佛塔の中に垂れし寶の板を見る。第一の光明にして、板に經字あり。是れ天の神通の爲作する所なり。是の故に失はず、破れず、壞はれず、拭ひても滅すべからず。何なる故に失はざるや。迦々村陀牟尼如來は諸の天人を利益せんが爲を以ての故に、此の經典を説き給ひて、天人の中に於て是の如くに法を說き給ひき。何を以ての故に、天中は乃ち是れ人の善道にして、人中は乃ち是れ天の善道なればなり。天の退く時は人の善道を悕ひ、人の死する時は天の善道を悕ふ。是くの如くに天と人とは迭ひに善道をなし、天と人とは迭ひに相ひ愛樂む。持戒して壞はさずんば則ち天の中に生まれん。五戒を持つ者に則ち二種あり。彼の持戒の者は愚癡なるを以ての故に、生まれても熟せず。唯だ癡なる者は作して、癡なりと雖も信じ、心に信ずるを以ての故に佛等を信じ、身の善・口の善・意の善を修行す。是れ邪見に非らず、乃至命盡きては業の果報を信じ、法に依つて物を得、自存して活るを以て他人を惱まさず、父母を敬重し、沙門若しは婆羅門に親近み、恒に正法を聞く。是の如き癡なる人は唯だ信と相應し、彼れ癡鈍なりと雖も、身・口・意等に相應する善業を具足し修行して、自性是の如くに禁戒を受けず。是の如きの人身壞はれ、命終りては善道の天世界の處に生まれ、終ひに心善きが故に天の中に生まることを得。若しは夜摩天の處に生まることを得ば餘天より劣り、身の色・形服・及び莊嚴の具、諸の天女の衆、若しは行、若しは食一切皆劣れり。則ち羞慚を生じ、光明も亦た少く、一切の欲事を具足することも皆劣れり。彼れ智なきが故に戒を取ることを知らず。戒ある天の智慧ある者、戒を取るを知る者よりは則ち減劣と爲す。

又彼れ癡かなるが故に、戒を取りて戒行を修することを知らず。佛等の中に於て清淨なる信を生ずるも、乃至一日の戒をも取ること能はず。身に善行を行ひ、口に善行を行ひ、意に善行を行ふも、

身・口・意中に具足すること能はず。一切の身[八]行の善行を修行すとは、謂はく殺生せず、及び邪行せず、偸盗を行はざるなり。此れは是れ一切の口行の善行を修行すること能はず。唯だ妄語せざるのみにて口の餘の垢は一切避けず。是の如くに唯だ一分の善行のみを行ひて、一切の善行を具足すること能はず。若しは意の善行とは唯だ命の盡き、或は餘業あるを信じ、或は時に唯だ信ずるのみにして、夜摩天に生まるも、次前の者より轉た更に劣減れり。餘の修行して戒を受け、戒を持して具足せる天より、形量・身色・勝れし莊嚴の具・若しは食・若しは行・若しは天女の衆、壽命の長短・聲・觸・色・香の一切皆劣れり。自ら劣れることを見るが故に、極めて羞恥を生じ、餘天の持戒を受けし者に慚づ。

復愚癡なることありて、戒を取り持戒と相應することを知らず。唯心正見にて佛法を聞くことを得、三寶の佛・法・衆僧を敬信するも、乃至一日の戒をも取らず。持戒を聞き來り、或は知識の教示を聞き來り、或は所畏に於て忌難を生ずるが故に、偸盗を作さず。次第に聞き來り、若しは佛說を聞き、餘業を以ての故に貧窮に生まる。是の如きの人は現在世を畏れ、未來世を畏るるが故に偸盗せず。口中に破壞の語を說かず、迭ひに相ひ破らず、破壞する者を和合せしめ、善業を愛するが故に或る時は佛の說き給ふ所の語を傳聞す。彼の破壞する語は、餘業の緣の故に親舊・知識・妻子・奴婢の一切を破壞し、是の業因を以て、身壞はれ、命終りては惡道に墮ち、地獄の中に生まるるなり。是の如きの人は二種の因緣の故に兩舌せず。彼の人是の業の因緣を以ての故に、身壞はれ命終はりては、心に信あるが故に、或は餘業の故に、或は生まるる業の故に、福田を信ずるが故に、夜摩天に生ずれども、量色・形相一切劣減り、天女の衆も劣れり。若しは處々に行、飲食等は劣り、聲・觸も亦劣り、味・色・香・命も一切皆劣り、光明も亦劣りて、他天の所に於て則ち羞恥を生ず。是の如く放逸にして、戒を取らざるが故なり。是の如き三種は各天中に生まるるとも而も優劣あり。

【八】行の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本によりて補へり。

唯だ佛を信ずるが故に、或は是の如き思の功德の勝れしが故に、或る時に本性是の如くに勝れしが故に、或は心の體柔輭にて勝れしを以ての故に、或は正見の勝れ、深心の信勝れて、諂はらず、曲らず、他を熱惱せず、是くの如くに勝れしが故に、父母を供養し、敬重の心を生じ、是の如く勝れしが故に、或は願の勝れしが故に、彼の人是の如くに、業の如き心を恒常に相續す。福田の中に於て、深心の勢力・意思の功德に下・中・上あり。是の如き勝れし業にて上りて天の中に生まれ、業と相似せる果を決定して受得くること、終に虛妄ならず。得ざらんことを疑はざれ、是の如くに定めて得ん。何かに況んや、戒を取りしに於てをや。乃至涅槃も決定して必らず得んこと、終ひに虛妄なることなし。

　幾種に戒を取るや。略して之を言へば、四衆の眷屬は四種に戒を受くれば、彼れ皆果を攝る。何等を四と爲すや。所謂、比丘・諸の比丘尼・諸の優婆塞・諸の優婆夷の四衆戒を受く。彼の是の如き人には幾種に別々に戒を受くることあるべきや、彼の優婆塞に略して四種あり。何等を四種とするや。一は一分行、二は半分行、三は數々行、四は一切行なり。一分行とは唯だ一戒のみを持し、半分行とは謂はく[九]三戒を取り三戒を行ふ。數々行とは常には戒を受けず。一切行とは[一〇]五戒を受持す。

　又復更らに四種の持戒あり。何等を四と爲すや。一は希持戒、二は半持戒、三は悔持戒、四は合持戒なり。彼の優婆塞は學句の海に於て次第に漸く取り、初め[一一]三歸を取りて優婆塞を作し、彼の人心を修さめ、復久しき時に於て、善く觀察し已はりて一學句を取り、彼の學句を堅く持して缺かさず、穿たず、孔けず。

　何に缺かず、何かに穿たず、何かに孔けざるや。彼の缺かずとは、乃至命盡くるとの受持して捨てず、一念の破戒の心をも起さず。他の作せし者に於て、心に隨喜ばず、他人の作すことを遮へ、

【九】三戒。一に在家戒（八戒なり）、二に出家戒（十戒、具足戒なり）三に道俗共戒（五戒なり）。
【一〇】五戒、在家修道者の守るべき道德的德目。不殺生戒、不偸盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒を云ふ。
【一一】三歸。三歸依の略。歸依佛、歸依法、歸依僧是れなり。

或は他人をして法の中に安住せしむ。故に缺かずと名く。彼の穿たずとは、彼の受けし所の一學句の戒の如きは、乃ち後時に於ては彼の學句を捨て、次に後時に於ては復更に攝取し、數捨て、數取る。是の如きを穿つと名く。彼の人是の如くに學句を穿たず、是の如きを離れて持す。

何かに孔けざるや。云何なるを孔と爲すや。此の學句に於て、初めは清淨なる心にて知識を邊取し、取り已はりては後時ちに其の心則ち悔やみて護持すること能はず。心に疑惑を生じ、彼の疑に心牽かれ、心濁りて行ひ、多く思ひし行に非らず。彼の人後業時に悔の火に燒かれ、是の如くに燒かれ已はれば則ち學句を捨つ。是の如く捨て已はりては更に復取らず。此れを名けて孔と爲す。若しは人、是の如きに住することを作さざる者は則ち孔けずと名く。

又、彼の希行の優婆塞とは缺け、穿ち、孔せる學句の戒に住せり。云何にして缺くことを爲せしや。此の心は滅せず、破れず、壞はれず。善心、生じ已はれば則ち學句を取り、芭蕉の葉の如く、電の如く相ひ似て、是の如くに心を動かし、歡喜びて戒を取り、信心して敬重するも、後時には復外道の法を聞き已はりて、心には則ち悔を生じ、癡かにて心を垢濁す。是の故に戒を捨て、復後時には正法を聞き已はり、還へりて復攝取す。此れを名けて缺くと爲す。

又復缺くとは、此の優婆塞は學句を疑ひて、是の如くに持戒して天を供養し、正法を憶念して是の如き心を作さく『我れ今佛語に於て清淨なることを得たり、天の所に於て[三]思の力を得たり』と。是の如き心の故に、二を皆供養し、是の如き疑心にて法に依り戒を持す。此れを名けて穿つと爲す。又復孔とは內心に孔あるも、外は則ち善行なり。他に見せるが爲めの故に、供養の爲めの故に、學句を受持す。此れを名けて孔と爲す。智者は是の如き一切を皆捨つ。希持戒行の優婆塞とは、云何んが名けて希持戒行の優婆塞と爲すや。此の優婆塞は、一學句を取り、多時の中に於て爾乃ち復餘の學句を取る。是の如くに次第して、是れ一時ならず、一心を生ぜず、一師に從はず。是

【三】思の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

の如くに久しき時に、希に學句を取る。此れを則ち名けて希行の學句の優婆塞と爲す。

又復第二の半の優婆塞とは半半に行ひを取り、或は二を取り已はりて、然る後に三を取る。或は三を取り已はりて然る後に二を取り、或は後時に於て爾乃ち三を取り、或は久しき時に於て方に乃ち二を取る。此れを半行と名け、半半の中に於て、下より增して行じ、增より下して行ず。何を以ての故に。半半の學句を幷らべ合せて取り、是の如くに合して行ひ受持する者を、之れを第二の半半の合行の優婆塞と名く。

云何なるは第三の悔の優婆塞なりや。前に戒を取らずして、唯だ癡なる心なるが故に、但だに佛等に於て深信の心を生ず。彼の優婆塞、或は比丘の所にて持戒の果の功德無量にして乃至涅槃なりと聞き、既に聞き已はりて、悔の火心を燒き、方に敬重を生じ、乃至命盡きても持戒を捨てず。此れを第三の悔の優婆塞と名く。

又復第四の合の優婆塞とは、彼の持戒行の一切を具足す。云何が名けて合の持戒行の優婆塞と爲すや。此の優婆塞正法を聞き已はりて則ち正法の句句・處々を得、經々中十二因緣あらば十二因緣を以て是の如き十二の因の法を知り、心の中に念を生ず。是の如く信じ已はりて唯だ舌根を以てのみ一切の持戒を攝取し、滿足す。一時の中に於て五戒を攝取し、堅く持ちて缺かず、穿たず、孔けず。乃至命盡くるとも常に是くの如く持つ。四優婆塞は前に說きし所の如し。

又下・中・上と是の如く次第し、一切の中に勝れしは五戒を具持し一切の中に於て最も下劣なる者は、謂はく希持戒にして、最下の持戒せる優婆塞者なり。唯一念の中に持戒を攝取するもの天は則ち及ばず、天・魔王等も悉く皆及ばず。何を以ての故に涅槃の城の法を能く攝取するが故なり。此の一切の天は涅槃の城を悕はず、求めず。

彼の地の夜叉持戒せる者を見て供養し禮拜す。虛空夜叉是の如く見已はりて供養し禮拜す。是の

如きの人法行に隨順を以て、能く恩に報ゆるが故に、能く調順ふが故に、是の如き夜叉、或は天に向ひて說く。『是の如きの人は現世に果を得、若しは王大臣、或は土田の主は之れに供養し、或は財物を施す。後に天に行くに隨ひて、神通を增長して大勢力あり。諸の法行に非らざる惡夜叉等も惱亂すること能はず。破壞すること能はず。心に須る所に隨ひて、種々の意念を皆具足することを得、情に稱ふて樂しみを受く。諸の作す所の業皆悉く成就し、多く病患せず。面色清淨にして、睡眠安隱なり。覺めし時には喜樂び、妻子・奴婢及び餘の客等を攝取して離れず。身壞はれ命終はりては善道に生まれ、彼の天の中に在りては、量色・形相一切皆勝れり。持戒勝れしが故に、是の如く勝れて生まれ、是の如き業力なり。持戒せるを以ての故に、是の大果を得たり。本との人中の時に集めし所の善業は、夜摩天の中にて放逸を行ひしが故に、一切皆盡く。衆生の心業の網に縛られしが故に、復後時に地獄・餓鬼・畜生に墮つ。是の故に皆應に勤行め、精進べし。乃至、未だ聖印を得ざるにより、是の如くに精進するも若し心自在に放逸を行へば、彼の天の退く時心に則ち悔ひを生じて、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。善業の盡きしが故なり。是れを以て應に放逸を捨離すべし。是の如くして第四の善を優婆塞は、現に樂しみを生ずることを得たり。若し能く次第に精進を斷たずんば則ち涅槃に到らん』と。是の如き一種は是れ優婆塞にして佛の眷屬なり。次に復云何が是の優婆夷は佛の眷屬なりや。凡そ幾種の佛、優婆夷ありや。優婆夷に則ち四種あり。一は是れ有信、二は是れ種姓は次第に隨順す、三は調伏行、四は近住行なり。信ありと言ふは、彼の優婆夷種姓を心に熏じ、其の心柔輭にして善く其の心を修さむ。彼の優婆夷は少しく佛語を聞き、聞き已はりては能く知り、知り已はりて味を得、味ひ已はりては則ち入る。謂く法律に入るなり。彼の優婆夷善心に住し已はり、然る後に戒を受け、婦女の心も拘執ること能はず。外道の語を聞くも、心に則ち受けず、佛法を捨てず、乃至外道と共に語らず。唯だ佛等に於て清淨心を生じ、具さに五戒を受く。

此れを有信の優婆夷と名づくるなり。云何が種姓に次第に隨順せる優婆夷なりや。種姓は賢善にして、法行に隨順し、法に入り、法を信じ、法に救はれ、法に歸し、法に性ひ、法に堅くして、惡業を行はず。他道の論師も破壞すること能はず。常に優婆塞の種姓の中に生まれ、佛等の中に於て極めて信心を生ず。彼の種姓の中にて若し女に生まるれば、彼の女則ち能く次第に隨順し、自から生まれしより來かた常に佛語を聞き、沙門を供養す。此の優婆夷恒常に義を聞く。此の優婆夷は常に一切の時に相續して心に熏じ、戒を受け、戒を持つ。此れは是れ種姓にて次第に隨順せる優婆夷なり。

彼の調伏行の優婆夷とは、謂はく本佛・法・僧等を信ぜず、彼れ若しは善知識に近づくことを得しが故に、佛等を信ぜり。他に近づきし因緣にて、他に信ぜしめられ、他の功德を見て持戒を具足し、數々戒を取る。彼の優婆夷を則ち調伏と名く。彼の近住行の優婆夷とは若しは女人ありて、常に外道に近づき、外道の法を知り、其の威儀を見て威儀を知り已はり、爾乃ち後時に佛弟子の沙門の所に近づき、其の威儀を見、其れより法を聞くに形相・行食・擧動・進止、身には袈裟を著し、去來寂靜にして、是の如きを見已はりて、然る後に次第に外道を棄捨して佛等を信ず。相ひ近づきしを以ての故に、是れを以て調順し、其れより戒を受くるを、近住行の優婆夷と名くるなり。

是の如きは四種の優婆夷の衆、是の如きは四種の優婆塞の衆にして略說するに是の如し。信解あるが故に、心に相續するが故に、他の因緣の故に、次第に近づくが故にとは前に說きし所の如く、優婆塞の衆の有する所の因緣なり。優婆夷の衆も亦皆是の如くに法律に入る。優婆夷の有する所の因緣の如く、優婆塞の衆も亦是の如くに入る。心に相續するが故に、優婆塞の衆、優婆夷の衆は〔一三〕已に行ひて別れず、一切の善を攝りて〔一四〕正見・正行なり。彼の心に皆下・中・上あるが故に、身壞はれ命終はりては皆悉く善道の天の中に生まれ、彼の夜摩天に生まる者あり。集めし所の戒の如くに正

〔一三〕已の字は宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依る。
〔一四〕正見（Sammaditthi, Samyagdṛṣṭi）八正道の一にして諸の邪見を離れたる正しき直觀又は認識のことなり。

行同じからず、是の如くにして餘天の中に生まる。善く持戒し、和集し、相應せるを以て、天に生まるることを得已はれり。放逸を行ひて精進を勤めずんば、諸の未だ聖なるを得ざるものは、皆福業の盡きて、復地獄・餓鬼・畜生に生まる。福徳盡きしが故、放逸の過の故なり。若しは其の天にありて、放逸を行はずんば、彼れ則ち樂みの中の樂しき處に到らん。彼れ持戒して善く修行せるを以ての故に。是の故に應さに放逸の心を起さざれ。此の放逸は、毒の如くにして異なることなし。一切世間の愚癡なる凡夫は貪なる爲に誑かされて、一切の饒益せざる行ひを行ひて、一切の生死の繋縛を離れず。是の故に天・人應に放逸を捨つべし。若しは天、若しは人、是の如く持戒するが故に、第一の好き處に生まることを得。放逸の過の故に、福徳は則ち盡く。彼の是の如きの人は自ら誑かすこと太甚しくして、或は惡道に墮ち、或は長久き時に生死に流轉せん。牟修樓陀夜摩天王是の如くに善き心にて、其の天衆に彼の佛塔中の板上の經字を示して、是の如き言を作さく『彼の佛世尊は衆生を憐愍み、天を利益するが故に、神通にて化す所なり』と。彼の天聞き已はりて、第一の勝れし心にて生死を厭離し、放逸なる行を捨つること毒の如く、異なることなし。此く[一五]優婆塞及び[一六]優婆夷の眷屬を已に說き給へり。

【一五】優婆塞(Upāsaka)。清信士、近事男などと譯す。在家の男子にして、三寶に親近して五戒を受けたるものなり。

【一六】優婆夷(Upāsikā)。清信女、近善女、近事女と譯す。三寶に近き事ふる義にして、五戒を受けたる女子の稱なり。

巻の第四十五

観天品之二十四

夜摩天之十

云何なるは〔一〕比丘及〔二〕比丘尼の二種の眷屬にして、彼れに幾種有り、何なる功德有り、何等の行有り、云何に持戒し、幾種の持戒なりや。是の如き〔三〕沙門は世尊の弟子にして、或は是れ比丘、或は比丘尼にして、〔四〕涅槃を求めて行ひ、勤行め精進て、若しは晝・若しは夜、能く魔衆の眷屬をして怖畏せしむ。幾ど比丘尼は黠慧く正しく行ひ、法律の如く行ひ、心に畏る所無きにちかし。涅槃の城に向ひて〔五〕實諦を求め、實諦を求むるが故に、持戒して越はず。是の如くんば則ち能く涅槃の城に入らん。何等の行を修めて功德と相應するや。一切の女人には愛欲と近欲の二は是れ功德にして、一切の善とは最初に是の如く眞實に男身・自身を觀察するなり。彼の男身の或は身と等しく、或は身より大なるを見、是の如く見已りて、兄弟・父母等の想を生じ、是の如くにして心を修さむるなり。此の婦女の人は欲樂を本と爲す。若し相近づくとは、意は常に悕望み、若しは晝、若しは夜、若しは坐、若しは臥、若しは睡、若しは寤、若しは餘の作す所あり、若しは少、若しは老、若は是れ中年、若しは平處に住し、若しは惡處に住し、若しは苦、若しは樂、若しは病、無病、若しは護、護らず、若しは禁、禁ならず、若しは大姓に生れ、若しは小姓に生れ、若しは媚、若しは醜、若しは道邊に住し、若しは家中に住し、若しは聚落の中、或は空處に於て、若しは或は莊嚴り、若しは莊嚴らず、若しは繫れて獄に在り、若しは獄に在らず、若しは夫愛樂し、若しは愛樂せざるも、若しは尊長に近きて尊長の前に在り、若しは卑賤に近き、若しは年少に近き、若しは老年に近く、一切の婦女は一切の時に於て、一切の處に於て、欲常に心を縛り、欲、心中に在り。譬へば火の熱の如

【一】比丘(Bhikṣu)。乞士と譯す。如來に法を乞ひ、俗人に食を乞ふ謂なり。男子出家して二百五十の具足戒を受けたる者の稱なり。

【二】比丘尼(Bhikṣuṇī)。女子の出家して具足戒を受けし者の通稱なり。

【三】沙門(Samaṇaparisā)。勤息と譯す。善法を勤修して、惡法を止息すればなり。

【四】涅槃(Nirvāṇa)。滅度又は圓寂と譯す。佛教の理想の境地にして、生死界の因果を滅却して、空寂安穩なる義なり。

【五】實諦。假諦に對して實諦を云ひ、理諦に對して實諦と云ふ。聖者の證りし眞理は眞實なる滅諦なるを云ふ。

き、地の堅の如き、風の輕動の如き、水の濕潤の如き、四大[六]の中に有する所の自相の如きは、皆顚倒ならずして、一切の時に於て皆自ら離れず。女の欲は是の如く常に隨ひ繫縛して、曾暫くも離れず。是の如き女人に復二垢有り、所謂、妬と嫉となり。是の如き二垢に復餘垢有りて共に生じて離れず。所謂、諛と諂となり。彼れに復垢有り、隨逐して離れず。所謂、欺誑なり。彼れに復垢有り、隨逐して離れず。所謂、憍慢なり。彼れに復垢有り、隨逐して離れず。謂く衰惱の處なり。衰惱の處とは富める男に近きて共に欲を行ふなり。彼れに復垢有り、隨逐して離れず。所謂、躁擾にして心常に住せず。彼れに復垢有り隨逐して離れず。所謂、親舊・知識・兄弟・眷屬を誣枉するなり。彼れに復垢有り、隨逐して離れず。所謂、能く大會の中に於て威儀を損壞するなり。彼れに復垢有り隨逐して離れず。所謂、兩舌なり。彼れに復垢有り、隨逐して離れず。所謂、私語なり。彼れに復垢有り、隨逐して離れず。所謂、貪食なり。彼れに復垢有り、隨逐して離れず。所謂、能く行ふべからざる欲を行ふなり。彼れに復垢有り隨逐して離れず。所謂、信叵し。彼れに復垢有り、隨逐して離れず。所謂、能く他の婦女、威儀を壞はす事を說くなり。彼れに復垢有り、隨逐して離れず。所謂、愛鬪なり。彼れに復垢有り隨逐して離れず。所謂、人を辱むるなり。彼れに復垢有り、隨逐して離れず。所謂、壞亂なり。能く村柵・聚落をして、壞亂せしむ。彼れに復垢有り、隨逐して離れず。所謂、此の婦女に近づきし因緣にて、地獄に墮るなり。是の如く婦女は屎の如く、毒の如く、亦利刀の如く、險岸に墮ち、大火の曠野の如し。惡毒蛇等の一切に相ひ似たる婦女の心は悉く皆是の如し。

是の如き等の心なる婦女の人、既に[七]三寶を見、讚歎し、稱說して佛語を聽聞せんには、婦女の心は則ち柔輭なるべし。彼れに復更に希有の法有りて、是の如く對治す。是の如き堅き[八]鞕にて、垢惡の心を對治するに二種なり。謂く、自ら心を生じ、或は他に教へられて信を以て出家するなり。

【六】四大。地・水・火・風の四なり。万有は此の四の要素よりなると云ふ。

【七】三寶（Tri-ratna）。卽、佛（Buddha）法（Dharma）僧（Saṅgha）をいふ。此等の三は一切世間の尊重すべきものなればこれを三寶と云ふ。

【八】鞕の字は宋・元・明三本及宮內省圖書寮本に依れり。原本鞆に作れり。

自ら心を生ずるとは、善く心を熏ずるが故に。他に教へらるるとは善知識に近くなり。彼れ說き給ふ所の如くに、諸の過の闇の聚りの無始從り來た心に依止せるを能く散失せしむ。彼れ初め是の如く出家して比丘尼を悕望めるは善知識に近づきしなり。何を以ての故に、此の說く所の如きは、諸の垢を對治し、說くを知りて說を爲して、其れをして善く住せしめ、善能く苦惱の結縛を解くことを爲し、解脱を得せしめ、安隱にして樂しく住せしむ。善知識は安慰め、示導して無始より來の闇を能く失滅せしめ、其れに善き道を示して無始より來の惡欲等の刺を拔き、愛の惡處より則ち能く救ひて免れしめ、常に不生・不死・不老・安隱の處を示す。彼の是の如き垢を對治する處を我れ今之れを說き、次第の如く說きて、垢を隨逐する如きに彼を對治するが如くして、寂靜を得せしめん。一切の是の如き婦女の妬嫉は男子より多し。是の如きは彼此を逆順して對治し、生死を出離す。

女に欲多きが故に、不淨にて對治す。身を實に見る如くんば、身は是れ病の藏、不善の聚、一切不淨にて糞・屎等の處なり。彼れ此の身に於て、或は自、或は他を其の自相の如く、是の如く觀察して其の本藏を見るなり。此の身は本何處從り出生せしや。彼れ精血の不淨和合し集聚して汁の如きを見る。二家の惡汁合して一身と爲り、是の如き身は不淨の種子此身を生ず。

又復、彼女は是の如くに身を觀ず。『此身若し不淨なる種子よりして生を得しならんには、此の身中の如きは少しの淨法も無けん』と。彼の比丘尼、復更に諦に求めて身の九種の惡瘡の不淨、身より流出するを觀ず。婦女身の如く、男身も亦爾り。婦女と男子より九種の瘡流る。婦女の身に三種の大過あり、何等を三と爲すや。所謂、婦女の尿門寬大にして、兩乳より汁流る。是れを三種と名く。

又復、男女平等に瘡流る。鼻の兩孔中より竝に皆涕を流し、兩目より涙出で、兩耳の孔中或は垢有りて出で、或は血有りて出で、或は膿有りて出づ。口中の氣臭く、或は噉ふ故に臭く、唾沫流出し、

下分の中に於ては、若しは屎、若しは尿、血等の不淨なり。是の如く如實に此の身の諸の不淨を觀察し已りて、是の如くに憶念すらく『此の身の聚りの中に、淨物の微塵許の流も有ること無く、一切は皆是れ不淨の物なり』と。

此の如き身に何なる物中に住し、何なる者依止するや。若し淨物有りて來り此の身に近づくも、身は猶不淨にて、身不淨なるが故に、是の如き淨物も亦同く不淨なり。何等の物に隨ふも、本清淨なる者も若し來りて身に觸れんには則ち不淨となる。所謂、彼の物、本清淨なる者なれど、若し第一清淨の食を食し、彼れ食して身に入れんには則ち糞屎と成る。此の身、是の如き清淨なる物を飲みて身に入れんには尿と成る。外物身に觸れんに、此の身に由るが故に、一切の淨物皆不淨と爲る。所謂、淨なる者なる一切の香衣も、若し身に著して、汗出でんには則ち臭し。又復、華の如きは、本一切香なるも、身に與へて相著せんには萎み、蔫みし氣臭し。彼の比丘尼、復身を觀察すらく。『此の如き身は何處に往來するや。謂く、本、母の身藏中に在り。母身は云何。淨とせんや不淨とせんや』彼の比丘尼、是の如く觀察すらく『我が母の本性も亦復是の如く一種の不淨なり』と。

彼の比丘尼、又、身を觀察すらく。『此の如き身は何處に住し、何處に行くや。彼の是の如き處は淨とせんや不淨とせんや』と。是の如く觀已り、如實に見て、一切所有の清淨なる處は何等の處に隨ふも、此の如きの身、若しは死し、若しは活き、若しは彼處に在らば、彼の是の如き處には則ち蟲・垢・髮毛・骨等有りて、能く彼處をして悉く皆大臭ならしむることを知る。是の如き身の彼處に在るを以ての故なり。

彼の比丘尼、欲を斷たんが爲めの故に、復、身を觀察すらく『是の如き身は誰の食する所と爲るや』と。云何に觀察するや。如實に之れを見るに、所謂、羅刹、諸の惡鬼等の諸の不淨なる者に食噉はる。是れ鵄鴨及鴛鴦等の淨潔なる衆生に食噉はる所に非らず。

【九】羅刹(Rākṣasa)。精しくは羅刹斯と書き、暴惡可畏の義にして、人の血肉を食ひ飛空、地行自在なる惡鬼の總名とせらる。

彼の比丘尼、復、實に是の如き身を觀察し已りて、則ち此身の唯だ邪に攝めらるるを見る。顚倒して分別して正しく觀察せず、闇は眼に現前れ、男子に相近き、欲・心を繫縛して不淨を見ず。彼れ是の如く決定して觀察するを以て、此の無始より來た久しく習ひし堅き欲も皆斷滅するを得、或は微少ならしむ。一切の垢の中にて、癡の垢は最惡にして、一切の婦女の欲を最惡と爲す。欲の垢の因緣は更に餘垢を生ず。若し對治を以て欲垢を除かんには、餘の一切の垢も皆滅して餘無けん。日の沒する時に光明も盡き沒するが如し。是の如く垢の根たる欲を斷除するが故に、餘垢も盡く滅す。

彼の比丘尼の此の道は欲を滅す。彼の欲滅するが故に、餘の共に生ぜし垢も一切皆滅す。何なる者共に生ぜしや。所謂、妬嫉なり。若しは男、若しは女の有する所の妬嫉は皆欲を因とするが故にして、妬嫉の二垢欲は是れ其の根なり。彼の欲を斷つが故に、或は微薄なるが故に、彼の二は則ち滅す。

又、彼の二垢に餘垢有りて、隨逐して繫縛す。何なるは餘垢なりや。所謂、諛諂にして、妬嫉より生ず。妬嫉滅するが故に、諛諂も亦滅す。諛諂より復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。所謂、欺誑にして、諛諂滅するが故に、則ち欺誑無し。欺誑の垢より復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。所謂、憍慢なり。欺誑滅するが故に則ち憍慢無し。憍慢の垢より復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。謂く、衰惱の處なり。憍慢滅するが故に、衰惱の處無し。衰惱の處より復餘の垢を生じ、隨逐して繫縛す。所謂、躁擾なり。衰惱の處滅すれば則ち躁擾無し。躁擾の垢より復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。所謂、誣枉にして、躁擾滅するが故に、則ち誣枉ならず。誣枉の垢より復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。謂く、威儀を壞はすなり。誣枉無きが故に、威儀を壞はさず。威儀を壞はすことより復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。所謂、兩舌にして、一切の婦女は兩舌にて破壞す。威儀を壞はさざれば

則ち兩舌無し。兩舌の垢より復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。所謂、私語にして、屏處にて他に說くなり。兩舌滅するが故に則ち私語せず。私語の垢より復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。所謂、貪食なり。婦女の腹內に飲食は則ち多く、一切の婦女常に飲食を貪り、多く腹中に置き自ら其の身を養ふ。私語せざるが故に則ち貪食せず。貪食の垢より復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。所謂、能く相應からざる欲を行ふなり。一切の婦女〔一〕飲食を貪るが故に則ち相應せざる惡邪の欲發り、彼の貪りて餮を飲食する垢滅するが故に、彼の相應せざる邪欲則ち無し。彼の惡邪にして相應しからざる欲より復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。所謂、信叵きなり。若し婦女に相應せざる欲有らんには、一切の諸人、彼の婦女に於て皆疑慮を生じ、一切人の愛せざる所と爲らん。彼の相應せざる邪欲の垢滅すれば、信叵きことも則ち滅す。信叵き垢より復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。所謂、能く他の婦女に威儀を壞はす事を說くなり。信叵きこと滅するが故に、則ち他に威儀を壞はす事を說かず。他に說く垢より復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。所謂、愛鬪なり。他に說くこと滅するが故に、愛鬪則ち滅す。愛鬪の垢より復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。所謂、人を辱むるなり。愛鬪滅するが故に則ち人を辱めず。人を辱むる垢より復餘垢を生じ、隨逐して繫縛す。所謂、壞亂にして、能く村舍・聚落をして壞亂せしむるなり。人を辱むること滅するが故に則ち壞亂せず。此の一切の垢を上上次第に相ひ住持つ者は一切を皆滅す。是の如く自體の根本は繫縛にして、婦女の心を更に法として能く柔輭ならしむるもの有ること無し。唯、佛語・知識の口說を除く。其れより聞くことを得て彼の婦女人、是の如く聞き已りて、是の如き捨て難き住處・家業を捨てて出家す。若し其れ諸の漏を盡く滅すること能はずんば、則ち能く專心に持戒し、修行せよ。初に、不殺・不盜・不婬を修め、妄語を作さず、破壞の語をせず、惡口を作さず、綺語を作さず、一切を善く修め、常に數々修め、樂みて修め、多く作さんには、是の如き婦女の身壞はれ命終りて、善道の欲界の天中に生れん。若

【一】飲の字、宋・元・明、三本及び宮內省圖書寮本に依れり、原本欲に作れり。

し欲を厭はずして、業心自在ならんには、夜摩天の山樹具足の地處の中に生まれて、丈夫身を得ん。善能く是の如く持戒して缺かさざりしも、是の如く既に彼の天身を得已りては則ち放逸を行ん。放逸なる行にて、天の善業を盡すが故に、復、地獄・餓鬼・畜生に墮ち、復、是の如く上上に垢惡の婦女の身を生ぜん。爾の時、世尊、偈を說きて言はく。

欲は妬嫉の地と爲り、心は電の火輪の如く、是れ貪・慢の藏にして、智者は則ち信ぜず。　心の體は是れ欲の羂にして、利刀・火等の如く、心は險しき岸に墮ちし如く、測り難きこと海よりも深し。　心常に緣ずること綱の如く、他人を誑惑くことは金剛なる火の燒くが如く、亦毒の能く殺すが如し。　諸の過惡を滿足して無量種に和集し、婦女は則ち心無くして、少分に持戒を修むるのみ。　欲の勢力を以ての故に、婦女は持戒せず、若し欲の勢力を離れば、[一]戒を則ち能く持せん。

牟修樓陀夜摩天王は是の如く本生の持戒を說くことを爲し、之を語りて言さく『汝等男天。是の如き人中にては女身にて持戒し、此の天處に生れたり。本婦女身なりしも、持戒せる善業にて、汝の身は男にて生ぜり。是の如く生まれ已りて、放逸の故に盡く。汝等天衆は是の如く自ら欺く。今より以後愼みて、是の如き放逸を行ふこと勿れ』と。

世尊、是の如く已に天を調伏して爲めに利益を作せり。彼の是の如き等は一切[二]正覺・[三]正遍知者の四種の眷屬にして、彼の眷屬の中第二の眷屬は婦女の姊妹にて、次第に比丘の眷屬に隨順す。彼の次第の如く、比丘の持戒し、第一勝上にして善く心意を修む。是の如き比丘、自他の惱亂するを見れば則ち畏を生じ、世間中の生死の道に於て則ち厭離を生ず。其の心、一切の生死を怖畏し、乃至、微少の塵許の小惡をも見れば則ち畏を生じ、諦に行を觀察し、悕望する所無く、第一の深心、第一の種姓にして、正しく行ひ、持戒し、布施して心に熏し、[四]四聖諦に於て正念に思惟す。幾種の比丘

【一】戒(Sīla)。尸羅。身心の過を防禁することなり。

【二】正覺(Saṃbodhi)。三菩提と音譯す。如來の眞實の智を云ふ。一切諸法を證悟する眞の智なり。

【三】正遍智(Samyak-Saṃbuddha)。三藐三佛陀と音譯す。佛の十號の一なり。眞正に遍く一切法を知るを云ふ。

【四】四聖諦(Catvāri-ārya Satyāni)。四眞諦とも云ふ。四諦のことにして、卽苦・集・滅・道なり。聖者の得る所の眞理なり。（經集部九、通頁十七註九八を參照）

にして、幾種の法行なりや。比丘は四種の正法を越はず。何等を四と爲すや。所謂、一は獨にて道を行かず。是れ初の比丘なり。何を以ての故に。獨り行く比丘、聚落中に行けば則ち輕賤せられ、或ひは復自在なり。自在を以ての故に則ち學句を破り、若しは村中、若しは城等の中の人の處に於て、意念の隨に行ふとも餘の比丘に於て忌難を生ぜず。多の婦女を見れば則ち疑慮を生じ、其の心は躁擾にて彼姉女を看る。俗人之を見れば則ち譏嫌を生じ、他の譏嫌するを見れば則ち瞋忿を生ず。是の如き比丘は心中に此の第二の瞋の過を生ず。是の如き比丘は瞋欲に覆はるるが故に、心則ち愚癡なり。是の如く出家して獨り行く沙門は人中に三の過を行ひて增長す。是の故に、應に獨り人中を行くべからず。此れは是れ一種なり。」

又復、第二に比丘を越はず。是の如き比丘、身を念じて行く。此の比丘の行いて道に在りて行かんと欲すれば、專ら自身を念じ、謂く是の如くに念ず『我れの此の足を擧ぐるは、心及心數なり。其の足を觀察せん』と。是の如き比丘は足より頭に至るまで一切身分を皆悉く觀察し、或は右足を擧げ、或は左足を擧げて常に此の身を觀ずるに、脈網にて繫縛し、脂・骨・皮・筋は足踝を繫縛し、業風に吹かれて行き、心則ち不斷にして、若しは擧げ、若しは下し、若しは舒し、若しは屈し、足を擧ぐれば則ち攝め、足を下ぐれば則寬し。是の如き脚は筋の網にて繫縛し、大小の五指和合して脚を爲し、舊爪・新爪合して足趺を爲す。

足趺を觀じ已り、次に足脛を觀るに猶し汁を合せし甘蔗の莖の如く、肉泥封塗し、筋を以て繫縛し、骨中の孔長く、筋其外に纏り、前の因緣にて生じて、毛有りて皮を覆ひ、外に毛の聚有り、皮は蠅の翅の如く、以て脛の外を覆へり、彼れ是の如き脛を一擧一下して、如實に之れを觀じ、行を經、行に處して、身をして來り去らしむ。

次に復、此の身の二髀を觀察するに、筋・血・脂・肉・骨等の合成なりと、是の如くに觀察す。[一五]心及

【一五】心・心數。心と心所なり。心とは身識等の心王なり。心數とは新譯には心所と云ふ。心王が有する所の貪瞋等の數多の別作用なり。

心數は業風に吹かれて是の故に動き行く。

又復、此の身の二脾を觀察するに、脛に於て麁と爲り、多く筋肉有り、迭に相纏縛し、肉を以て上を塗り、肉を以て上に傅き、血爛れて汁と爲り、汁脂內に滿ち、唯、外皮を見ては心に愛染を生ず。若しは一脚を擧げ下して之れを踏む時、如實に觀察す。復、第二を擧げ、第二脚を擧げて亦是の如く觀ず。足を擧ぐれば則ち攝し、地に著すれば則ち寬にして、或は伸、或は屈し、是の如く次第に堅き處、孔の處の一切を觀察す。行かんと欲し、動かんと欲し、或は餘の種々なるは皆是の風に吹かれてなり。兩脚已上に瓶等の有るが如く、中に熟せる藏有り、所謂、屎・尿・不淨の惡汁にて、一切見る所の堅からずして不淨なるものなり。二脚行く故に、彼の瓶隨ひ去り、幷に其の盛る所の一切の諸物も皆悉く隨ひ行く。彼れ行く時に於て、是の如く、是の如くに隨順して念を繫く。

又、彼の比丘、彼の上の瓶に於て其の身を搖動し、觀察して行き、是の如き心を作さく『我れ云何に行きて上身動き行くや』と。大小の腸を觀ずるに、彼れ脚を擧ぐるに氣腸と共に動き、大腸・小腸一切動轉するを見る。或は左廂より去りて右廂に至り、或は右廂より去りて左廂に至る。是の如くに腸中に風・黃・冷有りて、屎・尿・蟲滿ち、幷に膓轉動す。

又、彼の比丘、動くを觀察し已り、如實に彼の腸已上を觀察するに、有する所の生藏は筋の羂にて繫縛し、下・上・傍・廂は脈網之に纒はり、內に爛れたる沫有り、水汁を飲食し、彼の食は猶し新に吐ける冷き沫の如く、生藏に覆はれ、生藏中に滿ちて第一の大臭なり。上咽と連り、筋・脈・骨持して、唯業風有りて心、心數と共に相隨ひて持し行く。

比丘、是の如くに身を觀察し已り、身の動き行くを觀ずるに、我身の上の面は、頰骨・齒骨・髑髏骨等和合して頭を爲し、二眼の塊有り幷に集りて頭を成す。眼中脂多く、常に睫にして停らず。

我れ今、此の婦女の身を觀ずるに、筋皮の羂にて縛りて、繩の木に纒はるが如く、念々に生滅し、

退沒し、出生して、聚落の城邑中に在りて乞食を行ひ、以て身の瘡を養ふことは蛇の瘡を養ふが如し。是の如く身を養ふは欲の爲の故ならず、飮食を貪に非らず、味に貪著するに非らず。是の如き比丘、是の如くにして行き、是の如き第二の精進する比丘は法を越はず。又、彼の比丘、村城・聚落・多人の住する處の人中にて乞食し、旣に乞食し已りて是の如くに身を觀じ、是の如く一切の婦女・男子を普く皆觀察す。彼れ能く是の如く善く行を修習し、勤めて精進を發し、欲等は心を離れて、其の心に入らず。是の如き比丘は善く[一六]根を調伏して勝れ、劣らず。是の如き比丘は利益を悕望みて法行を越はず。

又復、第三の修行する比丘とは、所謂、比丘常に正念を修むるなり。正念の比丘は心に散亂せず、是の善知識は常に善意有りて亂れざる意有り。是の如き比丘に天常に隨ひ行き、天魔も與に妨亂を作すこと能はず。云何なるは正念なりや。謂く、欲の行を知り、心・心數法已に生じて欲生ず。是の如く能く知り、放逸ならざる意、緣ずべきと緣ぜざるべきとを一切皆知り、心に是の如くに念ずらく『我れ諸の善法の因緣の故に生ぜん。所謂、我れ當に利益し安樂にすべく、乃ち涅槃に至らん。我れ今餘の不善法を破壞し、我が善法を以て、心・心數法生ぜし因緣の故に則ち不善を破らん。此の不善法を若し破壞せずんば、我をして後時に當に利益せしめず、安樂ならしめざるべし』と。是の如き善法及不善法を如實に知り、知り已りて思量す。是の如き等の法の心意の所知を分々に觀察するに五種の念有りて、味はず、著せず、心に分別せず、先に作せし所の者を念はず、樂まず。何なるは五念なりや。謂く、眼色を念ずるなり。若し前の境界に愛すべき者來り、眼の境界の色の、若しは近く、若しは遠く、善き色、惡しき色にて、本曾て見來り、或は他の用ひ來りし種々の諸の色を、是の如き比丘は見已りても味はず、心に思惟せず。何なる因緣にて來るとも、彼の因緣を捨つることは、人の燒かるるを畏れて火を避くるが如くにして異らず。是の如き比丘は欲火に燒かる

【一六】根。根性、根機のこと。根性は性質なり。根機は能力なり。

るを畏る。初め染りし時は歡喜し愛多ければ、後時に苦多し。本味ひし所の色を心則ち念ぜず、心に分別せず、心に住せず。本より愛せし色を今復念ぜず、亦分別せず、亦、他身に於ける憎愛の色を心に則ち念ぜず、他他の念ずる所の色を念ぜず、心に亦求めず。是の如くに自身或は弟子等の自他を倶に遮へて、味に著せざらしめ、隨喜を生ぜず、正道に住せしむ。是の如き比丘を名けて清淨と爲し、正念にして貪らず、不染の法に相應して正しく行ず。是の如き比丘は眼色に著せず。

又復、比丘の第二の念とは、謂く、耳聲を念ずるなり。是の如き比丘は正しく念じて觀察す。若しは耳に聞きし所の極めて愛すべき聲、若しは歌、若しは舞、鼓を打ち、拍手する戲樂等の聲の曾て聞きし所を若しは念ぜず、味はず、心樂みて著せず、亦分別せず、何なる因縁にて聞くとも、彼の因縁を捨つることは、燒かるるを畏るる者の火を捨つるが如くにして異らず。是の如き比丘は彼の聲を捨離し、或は他人を遮へ、或は自の兄弟の聞く所の聲を一切皆遮へて善道に住せしめ、心、隨喜せず。是の如き比丘、自他を利益し、音聲を貪らず、勝れし念を以ての故に、聲に著せず、是れを比丘の第二の正念と名く。是の如き比丘は耳、聲に著せず。

又復、比丘の第三念とは謂く、精進を發し、意を正くし、寂靜にて梵行し、持戒するなり。是の如き比丘は念ぜず、味はず、意に念を生ぜず。若しは本用ひし香、若しは復、熏香、若しは香、若しは臭、若しは淨、若しは不淨、若しは遠、若しは近を一切念ぜず。香に於て心無く、何なる因縁にて來るとも、彼の因縁を捨つ。若しは是れ他人、若しは自らの弟子若し鼻に香を齅ぎて味に著することを生ぜし者を、是の如き比丘は則便ち之れを遮へ、心に隨喜せず、自ら善業を行ひ、亦他人をして善法に住せしめ、心常に善念にして、正しく行ひて貪らず、鼻に香を貪らず。是の如き比丘は垢を除きしと名くるを得、善く持戒を修めて、心に善念を生ず。又復、比丘の第四念とは先に曾て得し所の愛す可き諸の味、若しは愛するもの、愛せざるもの、若しは久時の味、若しは近時の味、

彼の味を念ぜず、彼の味を味はず、心に分別せず、何なる因緣にて來るとも、彼の因緣を捨つることは、燒かるるを畏る者の火を捨つるが如くにして異ならず。若しは他人或は自の弟子に於て、若し味に貪著すれば、是の如き比丘は則便ち之れを遮へて、心に隨喜せず。此れを比丘の味に貪著せず、善く正行を念じ、諸の惡を捨離し、善戒を修行して自他を利益すと名く。

又復、比丘の第五念とは曾て得し所の觸、先に已に觸れ來りし彼の觸の染樂・輭滑にして垢を生ずるも、彼の欲法に於て、染らず、味はず、心に分別せず、何なる因緣來るとも彼の因緣を捨つることは、燒かるるを畏る者の、火を捨つるが如くにして異らず。若し他人、身に觸を貪りて染著するとも、隨喜を生ぜずして、善く觸法を觀ず。此れを比丘の觸を離れて清淨なりと名け、善く戒を持して善法を修行すと名け、善く住すと名くるを得、次第に乃至、涅槃に到らん。

又、彼の比丘に復、五念有りて、應當に修行すべし。何等を五と爲すや。一は時節を念ずるなり。二は少年を念ずるなり。三は生死を念ずるなり。四は亡失・散壞を具足することを念ずるなり。五は涅槃を念じて、涅槃に到らんと欲するなり。是の如き比丘は云何に時を念ずるや。謂く、彼の比丘常に一切の時に繫念して修行し、境界に迷はず、境界の破壞する所と爲らず、失はず、散らさず。此の比丘は此れは晝、此れは夜なるを念せず、是の如くに時節を念ぜず、知らず、覺悟の時に於ては出息・入息は意と相應して、常に意と離れず、出入の息の如きは、乃至一念に皆決定して、出入の二息の我が腹內に在るを知り、是の故に、我が腹の若しは起り、若しは滅ず。二息を以ての故に、我が陰[一七]・入[一八]・界[一九]は存立することを得。諸の有爲法は一念も住せず。陰・界・入等は煗氣を出す。此れ氣と共に生じ、氣と共に倶に滅し、破壞し、爛れ盡く。復、後時に於て因緣にて異りて生じ、氣と共に生滅し、一念も住せず。彼の念ずる比丘、是の如く時を念じ、繫念し、相應す。比丘、是の如く自ら此の身の界・陰・入等の和合し聚集するを觀ずるに、一念にして住せず、唯苦惱のみ有り。

【一七】陰（Skandha）。色・聲等の有爲法を云ふ。陰と云ふは、蔭覆の義、積聚の義なり。舊譯の義は色聲等の有爲法は眞理を蔭覆するを云ふ、後者は色聲等の有爲法は生死の苦果を積聚するを云ふ。新譯には蘊と云ふ。積聚の義なり、今は色・受・想・行・識のこと。

【一八】入。根境互に涉入して識を生ずるを入と云ふ。今は十二入のことなり、新譯には十二處と云ふ。五根・五境に意根、法境を加ふ。

【一九】界。（Dhatu）。差別の義なり。今は十八界を云ふ。即ち五根・五境・意根・法境に六識を加ふ。

一切の身分は作者有るに非らず、受者有るに非らず、迭に相ひ因緣し、平等に共に生ず。是の如き身は念々に流轉し、念々の中に於て生死し、老退する諸行の聚集なり。是の如き比丘は修行して空からず。是の如くに修行して時を念じ、比丘時を念ずるを以ての故に、決定して必らず四種の清淨を得、一心淸淨なり。心淸淨なるが故に、面色淸淨、善業淸淨にして、未來に利益し、次第に乃至涅槃に至らん。

或は復、他人其の持戒を見、彼れの檀越主第一に歡喜して、淸淨心を生ず。是の如く四種を持戒する比丘は、是の如く實義を思惟して淸淨なり。是の如く一切普く淸淨なるが故に則ち安眠を得、臥して善き夢を見、法に隨順し、彼れ常に是の如く放逸の行をせず、放逸ならざるが故に、七種の法を得。何等を七と爲すや。一に法礙へること無く、善法を思惟し、彼の善業の者は心に則ち歡喜び、歡喜を增長す。歡喜の因緣にて、身則ち肥盛し、身肥盛するが故に、〔二〇〕名・〔二一〕色の二法迭互に因緣す。此の因緣の故に、身則ち肥盛し、身に病患無く、身と心と迭互に相依れば則ち善く聰明し。聰明しと言ふは本作せし業を念ずるなり。是の如く念ずるが故に、聰明を增長す。善法を念ずるが故に、是の如く增長す。既に思惟し已りて樂も亦增長す。樂增長するが故に、力も亦增長す。是の如く七種の法增長するが故に、夜則ち安眠し、夜安眠するが故に、身を修め、心を修む。比丘、是の如くに夜時を念ず。

云何に比丘晝時を念ずるや。是の如き比丘、眼の開合を念ずらく『我れ眼の合する時節を念ずるに、已に過ぐれば則ち已に過ぎしを念ず。是の如く時節は心・心數と共に相ひ與り、倶に滅し、皆悉く散壞す。是の如く時節は次第に失滅し、或は滅し、或は生じ、出息の頃に於て命已に盡き滅す。我れに今、老時次第に到らんと欲せり。我が少已に盡き餘の〔二二〕有に到らんと欲し、漸次に決定して死時到らんと欲せり。我が一切の命の當に失ふべきことは久しからざらん。一切の方便も離ることを

〔二〇〕名(Nāman)。能く音聲に隨つて物體に赴き、以て體を詮はして、人をして想を起さしむるもの、名を聞けば必ず其の物體の相を心に浮ぶればなり。

〔二一〕色(Rūpa)、顯色(Varṇa rūpa)と形色(Saṃsthāna rūpa)との二義あるが、要するに物質は、いろと形とを其の全質的特徴とするが故に、廣く物質一般を指して色と云ふ。

〔二二〕有(Bhava)。愛・取の煩惱に由つて種々の業を造り當來の生をうく。三界の生のことなり。

得べからず。一切衆生に因縁は怨無くして來り、命を壞はさんと欲す。譬へば然燈の如くにて、火蘇汁を食して念々に盡き滅す。是の如く、是の如くに老死の火、命の蘇油を燒きて念々に盡き滅す』と。是の如く繋念して無常を知り已り、勤めて善法を修む。此の內法は是の如く速疾に念々に無常にして、念々に盡き滅し、食を生ぜし者を誑して念々に盡くし壞す。此の內法の如く、外も亦是の如く、一切世間の有爲の法も速疾・無常にして、念々に盡き滅し、是の如き山河・城邑・聚落・藥艸・園林は、一切の人中、一切の天中に必らず當に失壞すべし。

是の如き園林・蓮華の河池にて一切の天は放逸を行ふを以て、先に已に曾て失ひ、今失ひ、當に失ふべし。彼れ放逸の爲めに壞はさるゝが故に、地獄・餓鬼・畜生に墮ち、自業成熟す。是の如き比丘は、此の是の如き等の一切世間の無量に動轉し、破壞し、無常なるも、其の意を亂さず、乃至、一念も意常に亂れず、堅固に憶念し、正念にて亂れず、一心に諦觀し、正しき心にて亂れず。又、彼の比丘、正しく彼の時を念ずらく『我れ是の如き威儀にて、是の如く正行し、此の時に應に起きべく、此の時に禪を行ひ、是の如き時中に尊者に親近み、此の時に我れ食し、此の時に衣を著し、此の時に我れ去りて檀越の家に到り、其の爲に說法し、我れ此の時に於て檀越の家を離れ、是の如く行き去らん』と。是の如く比丘は念じて行ふ時を知る。

云何に比丘は少年を念ずるや。謂く、此の比丘自身を念じ、乃至、胞胎中に在る時の是の如き少を念ずるに、次第に相續し、是の如き少身も念々に停らずして、歌羅邏[二三]と謂ひ、次に安浮陀[二四]、次に肉團の時、次に身分の時、次に嬰孩の時、次に童子の時、次に中年の時、次に老年の時にして、是の如き法體は念々に停らず。少身の次第する此の念々の時を、愚癡の凡夫は覺らず、知らず。放逸に破壞され、癡[二五]水に漂はされて愛河中に在り、是の如く漂はされ已りて、餘處の同業の衆中に墮ち、業の鎖に繫縛され、相續して流轉し、復、餘處に生まる。又、自の業行は、自の身心に隨順し、

【二三】 歌羅邏（Kalala）。凝滑、雜穢と譯す。父母の兩精初て和合凝結せしもの。受生の初より七日間の位。胎內五位の一なり。

【二四】 安浮陀（Arbuda）。頞部曇、阿部曇とも書く。胎內五位の第二。託胎後第二の七日間を云ふ。卽ち凝酪の中に於て皰結を生ずる位なり。皰・腫物と譯す。

【二五】 癡の字は、宋・元・明三本及宮內省圖書寮本に依る。原本疑に作れり。

繫縛し、母の精血中に安浮陀を作り、次に肉團の時、次第に開張して身分を具足し、人道中に生まれ、嬰孩・童子・少年・中年及老年時となり次第に死に至る。是の如き一人は是の如く展轉す。一切の欲界の一切の道中各々差別あり。皆業風彼の衆生を吹くを以て、少年等從り次第して得、身の自業の如く、是の如くに差別あり。是の如くに比丘は少年を念ず。

又復、比丘の第三念とは精勤て修行し、必定して當に得べし。何なる法を念ずるや。所謂、生死にして、若しは晝、若しは夜恒常に修行す。一切衆生、乃至、終に盡き、命有る(もの)皆死し、三界の衆生は一切無常にして生死の法なり。有爲は衰惱し、恩愛別離す。天中より退き已りて地獄に墮ち、地獄中より出でて天上に生まれ、若しは人中に死して地獄・餓鬼・畜生及天・人中に生まれ、餓鬼中に死して地獄・餓鬼・畜生・人天の中に生る。是の如く下・上・傍・廂にて生死の業風に吹かれて旋轉して行き、白業を成就し、流轉して生死海中に在り。是の如き比丘、若しは晝、若しは夜、生死の念を修め、是の如く修め已る。彼れ若し慢を念ぜんには常に人をして迷はしめて、虛妄を樂しまん。正念を以ての故に、此の慢或は薄く、或は皆盡き滅し、第一に勝れし念にして、謂く生まれ退くを念ずるなり。是の故に涅槃の城に入らんと欲する者は此の念を修行す。何を以ての故に。我慢を以ての故に、心常に虛妄、顚倒にして、求めて常に生死の中に在り、流轉して常に行ひ、愛の羂に縛らるゝが故に、彼の常處を則ち得べからず。爾の時、世尊、偈を說きて言はく。

愛の畏を脫することを得んには、諸の悕望有ること無く、勇健にて疑を離れし者は則ち能く常處を得ん。　若し有の水に沒し、心常に欲を喜樂べば、彼人の心虛妄にして、何にか能く常處を得んや。　若し人、虛妄心にて境界中に喜樂まんには、　彼人法の道に迷ひて、則ち地獄の中に生れん。　放逸は心を妨亂し、眞實を見ること能はず。　放逸は猶し火の如し。　是の故に、應に捨離すべし。　放逸の故に能く一切の善き法藏を失ひ、一切の方便を盡くして　八分[二六]

【二六】八分道。八正道(Ārya-amārga)のこと。中正にして理に契ひ、涅槃に至る道である。正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の八を云ふ。經集部九通頁二〇一の註を見よ)

道を見ず。十法を皆失壞して、放逸の毒を樂み、亦、放逸を以ての故に、四禪を盡く失ふ。

放逸は衆生を縛りて、能く縛り、色に非らざる常處は則ち是れ樂にして、放逸を離れんには則ち得ん。若し人意に迷はず、常に生死を畏れんには、彼れ則ち惡道を脫れて、安隱にして寂靜なるを得ん。

是の如く修行して生退の念を念じ、是の如く修行して生死を念じ已はらんには則ち常に迷はざらん。彼れ世間の一切の有爲の生・退する法を觀じ已り、生死を厭離し、種々に觀じ已りて、生死の苦を觀ずるに無量種有り。此の無量種の世間の衆生、一切放逸にして、何等の時に隨ひて放逸を捨離すべきや。能く一切時に無常を觀察し、盡く滅するを觀察し、盡く滅するを見已りて佛を觀察して念ず。是の如きの人は則ち能く苦を盡くさん。

又復、比丘の第四念とは所謂、一切の具足せるもの悉く皆失壞するを修行し、彼の具足せる一切の失壞することを念ずるなり。此の念ずる比丘は利養を樂まず、檀越に貪りて往返し來去せず、亦王若しは大臣を見るを樂まず、若しは王を見るとも樂しき心を生ぜず、愛も妨ぐる能はず。又、晝夜に於て分別を生ぜず、他の具足する若しは臥具等に於て心に分別を生ぜず、悕求を生じて以て已が物と爲さず。是の如きを見已りて嫉妬を生ぜず。心に是の如く念ずらく『是の如き衆生は決定して死亡し、一切の具足は必定して失壞せん。是の如く、是の如くに具足增長せば、是の如く、是の如くに愛も亦增長し、又復、是の如くに具足を失ふが故に、更に得んことを悕望み、無量種・無量の分別有りて、心に苦惱を生じ、彼の苦惱は譬喩すべからず』と。是の如き比丘、是の如く觀じて具足の失壞するを見、既に觀見し已れば則ち後時に於て、天王を悕はず、況んや復、人王、若しは轉輪王に於てをや。何を以ての故に、無量種の失壞の苦を見るが故に。若しは王・大臣・或は大長者・刹利の大姓の種々に具足せるより更に、大力有りて能く之れを破壞す。種々の具足を一切皆失ひ、

妻子・奴婢・客等を捨離し、財物を失ふが故に、大衰惱を得、他强く勝るが故に則ち劣減を爲し、四出の巷中の處々に行き、手足壞裂し、脣乾き、衣破れ、飢渇・羸瘦し、身體枯燥て、城從り、城に至り、村より村に至り、山より山に至り、邊地處より邊地處に至りて、是の如き等の無量種の苦を受く。比丘、是の如く既に觀察し已りて、復更に、無量の險岸の惡處に墮つるを思惟し、生死の處に厭離の心を生ず。

是の如き比丘、復、人中にて種々の具足の失壞するを見る。是の如く見るが故に、是の如く比丘[二七]は天處を思惟す。若しは此の人中にては、是の如く無量・多種に怖畏れて自在を得ず、刀・賊・水・火にて王種も衰惱し、財寶を具足せる富樂も失壞す。何に況んや、肉・骨・汗を離れし天の樂しき處に生れしに於てをや。天華の鬘有り、頭に在りて莊嚴り、無量百千の天衆を圍遶きて、多くの無量の諸の天女の衆有りて、遊戲し、歌舞し、喜笑して樂を受け、天の園林に蓮華の水池に在り、山峰には則ち七寶の光明有り、聚集し、樂行し、五樂の音聲、種々の天歌あり、七寶の間雜れる堂殿の光明ありて、常に一切時に、身の無量に勝々れし妙へなる事は譬喩すべからず。天、境界の中にて樂を受け、成就し、迭互に相ひ愛して鬪諍有ること無く、須んと念ずる所に隨ひて、一切を皆得、五樂の音聲にて心に快樂を受く。若し是の如き樂を具足せんも失壞すれば則ち苦惱を得ん。業盡くるを以ての故に、復、地獄・餓鬼・畜生に墮ち、墮んとする時に臨めば、是の如き生處次第に隔無く、已に久しき來た無量種に作りしに於て、皆苦惱を得ん。復、異處に生るゝも、種々に苦惱す。是の如き彼天、若し地獄に生れんに、彼の地獄の中の大力の熾火周匝て身を燒き、甚だ飢渇を爲すことは、譬喩すべからずして、大苦惱を受く。地獄の業を作し、業道を作り已りては、自身の活[二八]・黑[二九]繩・合喚・大喚熱・大熱等の是の如き七種の大地獄の中に墮つ。唯、阿鼻の最大地獄を除くのみ。資生と離別し、大苦惱を生ず。苦惱の事を見るに、彼の苦惱の事は說くことを得べからず。是の如くに

【二七】丘の字、明本に依れり、原本、知に作れり。

【二八】活。等活地獄のこと、八熱地獄の第一なり。第一卷を見よ。

【二九】黑繩は黑繩地獄のこと八熱地獄の第二なり第一卷を見よ。

比丘は常に一切時の晝夜に是の如き正念を修行す。

又復、比丘、彼の是の如き財物、具足せる資生の失壞するを念じ、此の念を修行す。天人中に是の如き事有るを念じ、自餘の三道は則ち財物、資生の具無し。何んぞ失ふこと有らんや。所謂、地獄・餓鬼・畜生・人中に少しくあるに相似せる樂を受くるも、是れ彼人處より自在なるに非らず。則ち五種に具足して失壞すること有り。何等を五と爲すや。謂く、眼・色を若しは愛し若しは樂み、見れば則ち悕求み、悕求みて味に著し、樂しみて攝取をなす。此の顚倒して利益せざる者の如きは則ち愛樂せず、不淨の色を見、彼の色中に於て心則ち之を惡まん。是の故に、樂無し。是の如く具足すると彼の失壞とは同一根本なり。

又、彼の比丘は具足し失壞するに隨順して繫念す。何なるは具足にして、云何に失壞するや。謂く、耳に聲を聞き、耳に聲を聞き已りて、彼聲に隨順し、愛樂と相應して心に歡喜を生じ、是の如く具足す。又、聞く所の聲に異なる因緣有り、所謂、四大にて、四大の聲を心に愛樂せず、歡喜を生ぜず、心と相違し、心を利益せず。是れを失壞と名く。

又、彼の比丘、好き華香、和合せる末香、種々の雜香を聞き、香等の種々の諸香を聞齅し、順心にて樂を受く。彼の香の因緣にて則ち樂心を生じ、能く欲をして發せしむ。又、彼の比丘、繫念して思惟し、彼の香を念ずる者、彼人の諸香を鼻齅するを思惟するに、彼の一一の香に無量種有り、所謂、爛臭にして心と違逆し、糞・屎等の無量の臭氣を聞き、心に喜樂せず。彼人、是の如く此の物を失壞す。

又、彼の比丘、專心に繫念す。復、異種有りて、世間の中にて具足して失壞す。云何に繫念するや。人世間に於て、舌に味を愛樂み、順心にて喜樂す。食の味は消へ易しく、消へ已れば則ち適して命・色・力を得、辯才等を樂み、心に喜樂を生ず。若しは復、餘の味は愛樂すべからずして、心と

違ひ、樂まず、之を食しても消し難く、心に則ち適せず、命・色力・安樂・辯才に於て資甲則ち微にして、唯苦惱を生ず。彼人、是の如く此の物を失壞す。

又、彼の比丘、復、身の觸の愛すべく、樂むべきを念ず。寒時には溫を得、熱時には涼を得ば、心に順じて樂を生じ、人世間中に是の如く具足す。若しは異なる因緣にて復、身をして觸せしむるに、愛せず、樂まず、心に樂を生ぜず。熱時に涼ならず、寒時に溫ならざれば、心に違ひて苦を受け、喜ばず、樂まず、唯、苦惱を生ず。世間の人中は是の如く五種に具足して失壞す。比丘、是の如く若しは晝、若しは夜、繫念して修行す。

卷の第四十六

觀天品之二十五

夜摩天之十一

又、彼の比丘、復、天中の愛す可き境界を念ずるに、根と和合して生じ、分別の風に吹かれ、數々增長し、愛火に燒かれ、諸の世間人は彼處の樂を貪り、是の如き心を起さく『天中は甚樂なり』と。是の如き比丘、念を繫けて彼の天の失壞するを思惟し、比丘、彼の愛す可き境界に於て貪樂を生ぜず、熱惱の意を離る。是の如き比丘、第一の善き意にて[一]六欲天を見るに、皆悉く失壞す。彼の四天處に十二種の失壞の事有り、一に謂く、力劣る。二に謂く、常に[二]阿修羅と鬪ふに、彼の阿修羅、忽然として闇より至りて其の軍中に入る。三に謂く、鬪ふ時、阿修羅彼の天身の著る所の鎧鉀を打つことをなす。四に謂く、鬪ふ時、其の頭上に著る所の兜鉾を撥ちて海中に墮せしむ。五に謂く、壞はれ已れば則ち羞慚を生ず。六に謂く、鬪ふ時、[三]羅睺羅を見れば則ち驚怖を生ず。七に謂く、退く時に、彼の天女の衆之れを捨て去りて餘の天子に向ふ。八に謂く、食する時、自の業を以ての故に、食の劣りしを見れば則ち羞慚を生ず。九に謂く、軍衆の量色・形相・莊嚴の具等は自の業に相似し、他より劣りし者は則ち羞慚を生ず。十に謂く、彼の天の遊戲する時、彼の天中に生ずる所の鳥より彼劣りしを見れば、亦輕賤を生ず。十一に、劣りし天は遊戲の處に向ひ歩行して往く。十二に、劣りし天の受る所の欲觸は自らの業に相似し、他の莊嚴の具は則ち勝妙を爲し、他の勝れしを見るが故に則ち慚恥を生ず。四天王の處は是の如き等の十二の失壞有り。是の如く比丘の善く心を修めし者は、天樂を貪らず、無垢の意を以て、彼の天を觀察し、既に觀察し已りて心に厭離を生じ、天欲を毀呰つ。若し其れ、人有りて天を悕求むが故に、梵行を行んには、是の如き梵行は梵

【一】六欲天。欲界に六重の天あり、是れを六欲天と云ふ。一、四王天、二、忉利天、三、夜摩天、四、兜率天、五、樂變化天、六、他化自在天の六の總稱なり。(經集部九通頁四の註を見よ)

【二】阿修羅(Asura)。阿素洛とも書く。無酒又は非天の義なり。其の生活に酒なく、又、果報勝れて天に似たれども天に非るに由る。男子は容貌醜陋にして、性獰猛、常に戰鬪を好むと云はる。

【三】羅睺羅。羅睺羅阿修羅(Rahu asura)の略。四種阿修羅の一。羅睺羅(Rahu)は執月と譯し。此の阿修羅王は帝釋と戰ふとき、能く其の手を以て日を執りて、其の光を障蔽する故に名く。

行の因に非らず。是の如き等の人は彼の比丘に輕賤めらる。何を以ての故なれば、自在無きが故なり。

又、彼の比丘、三十三天の失壞を觀察するに、彼れ三十三天の中に八種の失壞を見る。何等を八と爲すや。一に鉀劣り、阿修羅と共に闘戰する時、不淨を雨墮す。二に闘ふ時、彼の敵主の勇しき阿修羅を見れば、其の心退き弱る。三に食する時、劣れば羞慚す。四に劣りし天は天王帝釋の識る所と爲らず。五は劣りし天の色力・形相の一切下劣なり。六に劣りし天の聲・觸・色・味・香等皆劣り、他と齊しからず。七に劣りし天の天を退く時は天女捨離す。八は劣りし天、若し遊戲の殿堂に昇る時、神通[四]は則ち劣りて速に進む能はず。此れは是れ八種の三十三天の失壞の事なり。夜摩天の中に六の失壞あり。何等を六と爲すや。一に、食時に劣れば羞慚す。二に、劣りし天の所有る教勅を天女受けず。三に、劣りし天は少の福業の故に、彼の天女の衆之に供養すると雖も、多き福德の者を供養するに如かず。四に、劣りし天は牟修樓陀夜摩天王の說法する時、心に愛樂まず。此れは是れ彼の中の最大の失壞なり。五に、劣りし天、本の業少き故に、光明則ち變り、若し天の前世の行に善業多ければ彼天則ち大青寶の座に坐し、坐し已りて復起つ。下劣なる業の天は彼處に在りて、坐れば、座變じて銀と爲る。業種々なる故に、是の如く失壞す。六は量短し。是の如き六種は是れ夜摩天の失壞の事なり。兜率陀天に四の失壞有り。何等を四と爲すや。一に、劣りし天、兜率陀中にて法を聞く時、心に喜樂ばず、鵝王の法を說く聲を樂まず。是れを失壞と名く。兜率陀中の鵝王は常に無漏の樂地に在り。彼の鵝王は則ち是れ菩薩にして意の隨に生ぜしを以ての故に、鵝王となりて意の如き色を作し、鵝の身は七寶にして、光明遍滿し、色は喩ふべからず、身の光五千由旬に周遍く、種々の色有り。兜率陀天の光明は、鵝王の[五]光の勝れしに如かず、彼の諸天をして心に希有を生ぜしむ。彼の鵝王菩薩、彼れをして希有の心を生ずるを得せしめ已りて、即ち彼天の爲めに法を說き

【四】神通。神とは不測の義にして、通とは無碍の義なり。測るべからざる無碍の力用を云ふ。

【五】光の字宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり。

て偈にて言へらく

福徳の業既に盡んには、命則ち速に滅損せん。勤めて精進して法を攝めんには、兜率常に爾る應し。若し法を捨離し、放逸に壞はされし天、福徳の業を集めずんば、後時に則ち悔を生ぜん。乃至、老未だ來らず、亦未だ病死有らざるに、皆應に福徳を作すべし。後時に悔を生ずること莫れ。若し福徳を攝めずして、放逸の爲に壞はされし者は、放逸に壞はされしを以ての故に、地獄に在りて苦を受けん。既に根を具足することを得て、而も非法を行ふ者は、何んぞ、命と財とを用んや。親舊・兄弟等に、常に數福徳を作し、心意に法を攝受り、或は復、惡業を止め、或時は善人に近き、智慧の利刀を以て、惡の枝葉を割去し、過惡の衆を破壞し、過の相續するを斷除す。智・戒の福徳を重ね、心に物を悕望まず、常に善男子に近き、眞實の道を示す者、若し持戒せんには[六]天に生まれん。欲の爲めに迷惑せられ、福業を修めざる者は、常に有の中に在りて行はん。若し常に智を樂しみ、持戒の寶にて莊嚴られ、若し欲の蛇を畏れん者は則ち是れ天中の天なり。若し常に法を行ふ者は、彼れに則ち天應に禮すべし。若し顚倒を行ふ者は、則ち惡道に入らん。此岸と彼岸と遠し、既に法の橋を得已りて、若し速に度らざる者は有に於て、脫ることを得ざらん。智慧の火は能く無量の煩惱の薪を燒く。何なる義なりや煩惱は縛るとは、彼の愛の境界に著し、厚く染欲の垢を重ぬれば、智眼を障礙すればなり。佛語は良藥の如くに能く彼の障礙を除く。正法の大將能く欲の賊軍を破り、口に善き法語を說き給ふ。汝、應に勤めて聽受すべし。四種の顚倒有りて、常に能く誑惑を爲し、世間に八法有りて、能く一切をして失はしむ。大力なる愛河の中は、百の疑にて度る可からず、若し智の筏に上らん者は、度り已りて、寂靜に到らん。若し天、欲に近づかんには、欲能く心をして癡ならしめて、常に[七]五處に在りて、未だ解脫の

【六】天(Deva-sura)。光明・自然・清淨・自在・最勝の義にして、音譯して、提婆素羅とす。人間以上の勝妙なる果報を受くる所にして、其の一分は須彌山の中に在り、其の一分は遠く蒼空に在り、六趣の一なり。

【七】五處。人・天・地獄・餓鬼・畜生の五處なり。

期有らざらん。欲は得難く、壞れ易く、雹の如し、何んぞ用ふことを爲さんや。欲は苦を生ずること、刀・金波迦・火・毒の如し。是の如く、是の如くに近づけば、亦、是の如く增長せん。欲は足る可からざることは、猶し火の薪を燒くが如し。癡なる天は欲樂を悕ひ、過に燒かるゝを畏ることを知らず、若し不善なる欲を離れんには、後時に大樂を得ん。癡者は欲に染り已りて、欲の爲めに堅く繫縛さる。欲は雹の如くにて異らず、然る後には異處に去らん。若し習ひて欲に近かんには、欲は則ち上上に勝れて、彼れ欲火の爲めに燒かれ、燒かれ已りて、燒く處に到らん。若し、天、欲に近かんには、此の心大癡と爲り、體無き法なる樂中の大樂を悕はざらん。欲には涅槃無く、樂無く、解脱無し。是の故に欲に近くこと莫れ、欲に近くは甚だ惡と爲す。若し欲の境界に近んには、根は則ち足ることを知らず、足ることを知らずんば、樂無く、寂靜を得べからざらん。應に有爲の處を畏るべし。生死の大海は、大惡なる欲愛を以て、常に衆生に與ふが故なり。此の如き山峰上の種々の愛す可き樹、之に依りて禪を修さめ、欲の生滅するを思惟し、四種の諦寂靜にして、智者善と修行して生老死を怖畏せば、脫れて善の彼岸に到らん。愚なる意は思惟せず、樂欲の故に縛有り、欲樂既に盡き已らんには、生・老・死を脫れ[九]ず。若し此の大苦を念ぜんに、有の海に於て倦まざらん。癡なる故に、欲の箭に射られ、地獄の惡處に墮ちん。癡の樂欲の樂の故に、畢竟して安樂を捨てゝ惡を畏るゝことを知らず、死時到れば火の如し。乃至、死の到らん時は、能く一切を破壞せん。此れは能く破壞するが故に、命の種子を破壞す。皆利益して安隱なる丈夫は應に精勤すべし。樂を得、憂悲を離れ、恒常に善業を作し、若し欲の藏を除かんには、熱を離れて淸凉なるを得ん。是の如き智は癡ならずして、則ち欲を悕望まざらん。

是の如く、鵝王は天を調伏するが故に、是の如き偈を說けり。若し天放逸にて、放逸を行ふ者は、

【八】金波迦。毒ある果實らしい。不詳。

【九】不の字。宋・元・明・三本に依れり。

聞くと雖も念ぜず、心に思惟せず。若し天、樂みて彼の鵝の說く所の調伏の偈句を聞かんには、無漏地に向ひて速疾に行く。正法を聞んと欲し、正法を聞き已りて敬重心を生ず。是の如き天衆は正法を聞くを得て、心に敬重し已り、速速に疾走して、復、行堂に向ふ。彼の行堂中に有る所の諸天は、正法を聞き、心に敬重するを以ての故に、光明增長すること百倍・千倍にして、餘の放逸なる天の光明は則ち劣れり。是の如く天中にて現世の果を得、天欲を樂しみし者は、彼天少の色にて形服・莊嚴の一切皆劣れり。此の是の如き等は兜率陀天の最初の失壞なり。

又、率兜天の第二の失壞とは、衆く集りて法を聽くに、無量百千億數の衆會・五百の菩薩の住する所の地處にして、兜率天王を名けて寂靜と曰ひ、衆の爲めに法を說き給ふ。所謂、無明因緣の行等なり。彼の諸の天衆、正法を聽く時、一心專意にして、諦に聽き、諦に聞く。是の如くに聞くが故に、威德・莊嚴皆悉く勝上にして、百千倍ありて轉た更に增長す。若し天、心を動さんには、心則ち電の如く、亦、大風の大海水を吹きて、種々の波動くが如く、愛の因緣を以て、是の如く心動き、境界を愛樂む。彼天の威德・形服の莊嚴は本の如きと異ならずして、更に增長せず、他の勝れしを見るが故に、內心に慚恥す。此れを則ち名けて兜率陀天の第二の失壞と爲す。

又、兜率天の第三の失壞とは、若し天、法を聞かんには、心に敬重を生じ、說くが如く知り、法の相の如くに知り、是の如く知り已りて、心に正しく住することを念ず。彼天の威德・形服の莊嚴は皆悉く勝上にして、百千倍ありて轉た更に增長す。若し、彼の諸天、法を念ぜざれば、彼天の威德・形服の莊嚴則ち增長せず。此れを則ち名けて兜率陀天の第三の失壞と爲す。

又、兜率天の第四の失壞とは、若し彼の諸天、正法を聞く時に、心に敬重を生じ、專心に憶念し、法の如く攝取し、專心に受持し、是の如く修行し、久しく思惟し已り、然る後に修行せんに、彼天、是の如く法を敬し、法を重んぜし勝れし因緣の故に、法を聞きし力の故に、威德の光明・形服の莊

嚴は轉た更に勝上にして、百千倍あり、轉た勝れて增長す。若し、天聞き已りて、修行すること能はずんば、彼天、他の威德の光明・形服の莊嚴の勝れて增長せるを見已り、自ら已が身の威德の光明・形服の莊嚴を見るに、則ち增長せず。彼天、他の威德の光明・形服の莊嚴の轉た勝れて增長せるを見ては則ち慚恥を生ず。此れを則ち名けて兜率陀天の第四の失壞を爲す。

又、彼の比丘、是の如く兜率陀天の四種の失壞を觀察し、失壞することを見已りて、化樂天を觀ずるに、復、失壞を見る。彼れ是の如き天の勝妙なる樂にも、猶故、四種の失壞有ることを見る。何等を四と爲すや。所謂、一に善業盡くるが故に、脚に則ち影有り、普く餘の身分皆光明有り、脚の上は則ち無し。是の故に、彼天の脚に則ち影有り、自餘の諸天の有する所の光明は山の如く圍遶り。彼の少き光明を劣れる天見已れば則ち避けて去り、光明の勝れし者、之れを見れば則ち笑ひて是の如き言を作さく『此の天の鄙劣なるは、善業盡くるが故なり』と。彼の脚に影ある天聞き已りて羞慚て、心に愁惱を生じ、是の如き心にて言へらく『我が業盡きしが故に、今則ち是の如し。一切の具足も終ひに必らず失壞せん。人世間に日有るを以ての故に、終ひに必らず夜有るが如く、是の如き此の中の一切の具足も終ひに必らす失壞せん。若し人命有らんには終ひに必ず死有らん。是の如き具足は終ひに必らず失壞す。是の如く世間に、具足しては失壞せざること有る無し。此の失壞は是れ化樂天の最初の失壞なり。又、化樂天の第二の失壞とは、閻浮提中に有する所の【一〇】劫貝等の綿の甚、柔輭を爲して、足蹈みなば則ち下り、擧れば則ち還へり起るが如く、化樂天中の地處も柔輭なること亦復、是の如し。若し天報を受け、善業盡くる時、地、柔輭ならずして、脚蹈みても下らず、脚を擧ぐとも起たず。餘天之れを見んには其の業の盡きしを知り、天の之を見るもの有りて、餘天に語りて言へらく『彼天の業盡きて、退く時將に到らんとせり』と。此れ化樂天の第二の失壞なり。

【一〇】劫貝(Karpāsa)。時分樹と譯す。この樹より取れる白氎を亦た劫貝と名く。

又、化樂天の第三の失壞とは、彼の化樂天の遊戲する時、若し樹下に至りて遊戲して樂を受けんに、樹則ち華を雨ふらして彼天の上に在り、此華は遍く遊戲の處地に在り、若し、天の善業盡きんとする時は、樹の華墮ちず、地處に散らず、餘天其の樹の華の墮ちず、地處に散らざるを見れば則便ち說きて言へらく『此れ天の業盡きて、退く時將に至らんとせり』と。彼天聞き已りて羞慚て愁み、惱みて、是の如き心にて言へらく『我れ今退かんとす』と。是の如く失壞す。此れは化樂天の第三の失壞なり。

又、化樂天の第四の失壞とは、彼の化樂天は必定して失壞す、天中の具足は必定して失壞す。彼の化樂天の何なるは第四の具足の失壞なりや。謂く、一一の天は寶の地處に住し、是の如き寶地は清淨・無垢にして、鏡の如きと異らず、一天の身、無量の處に現はれ、種々の影・種々の形服・種々の莊嚴を見ることは、人界中の日輪は是れ一なるも、無量處の蓮華の水池に於て、無量百千種々の處に現はるるが如し。是の如く天身は無量百千の寶地の中の處々に皆現はれて身の如くに見る。若し、其の天の善業の盡きし者有れば、彼天の身は一の寶地の中に影を現ずるのみにして、處々に現はれず。是の如く失壞す。是の如く見已り、餘の智慧き天既に是の如く見れば卽便ち說きて言へらく『是の如き天は善業盡きしが故に、將に退き壞はれんとす』と。此れ化樂天の第四の失壞なり。

爾の時、世尊、偈を說きて言はく

世間は樂しみて具足し、失壞するを覺知ず。　具足すれば必ず失ふこと有るは、日出でて夜有るが如し。　是の如く具足して樂むも、是の如きは必ず失壞せん。　欲に於て足ることを知らず、是の故に、愛は少時くなり。　若しは心に具足することを愛し、或は常に樂を悕望み、彼れ若し愛を捨離せんに、是の如きは常に樂しみを得ん。　天の欲樂未だ足らず、以て地獄の中に入る。一切皆愛に由るなり。　是く、如來は說き給ふ所、若し人、地獄に入りて百たび到

り、若しは千たび到るも、亦、愛の網に誑かさるるを以ての故に　是の如き悪を得ん。

彼の化楽天に是の如き等の四種の破壊あり。

又、彼の比丘、復、他化自在天中の四種の失壊を観ず。若し彼の諸天の善業将に盡きんとして、退かんとする時に臨めば則ち失壊すること有り。彼處の天中に多く種々なる妙へなる鬘の荘厳有り、天の華は萎まず、處々に地を覆ひ、第一の善き香にて譬喩すべからず。彼の鬘の荘厳に種々の色の勝妙し光明有り、若しは寳の光明は十六分に於て其の一にも及ばず。彼の鬘に多く七寳の翅蜂有りて、常の一切の時に天の歌聲を出す。是の如き他化自在天中の天業、若し盡きて失壊せんとする時は、彼の寳の翅の蜂は美しからざる聲を出し、是の如き天の種々なる華、香を捨てて、餘處に到り去らん。餘の智慧き天は、彼の天の退かんとせるに臨みしを知るを以ての故に、之れに向ひて説きて言へらく『汝、今や、放逸を以ての故に、退く時、到らんとせるも而も覺知らず』と。彼の業盡きし天、是の如く聞き已りて、復、彼の蜂の捨てて餘處に至るを見、彼天自ら知りて、是の如き心有り。『我が福業盡く』と。是の如き天子心に愁苦を生ずることは譬喩すべからず。自らの楽将に盡んとせるを見しを以ての故に、是の如くに心熱して、地獄の火を等しくして、異有ること無し。唯、地獄を除きては更らに此の火無し。此れは是れ、他化自在天中の最初の失壊なり。

又復、他化自在天中の第二の失壊とは、彼天の身は第一の滑かなる觸にて、周匝の光明、人中の日を形りて螢火の蟲の如くし、彼天の身に著する所の瓔珞及び餘の種々の荘厳の具等の有する所の光明は、寳の壁・山峰を皆中に在りて現はし、鏡中に於て現はれしを見るが如きと異らず。若し彼の天子の退くことの到らんとする時は、彼天の身の上に著する所の瓔珞・荘厳の具等に山峰若しは壁は中に於て現はれず。餘の黠慧き天は是の如きを見已りて、彼の退かんとして業盡きし天に語りて言へらく『汝、放逸を行ひ、退く時到らんとせり。汝の身に著する所の瓔珞の荘厳に光明有るこ

と無く、寳の壁・山峰は中に現はれず』と。彼の黠慧き天、曾つて餘天の退かんとせるに臨みし時を見るに、是の如き相有りき。此れは是れ、他化自在天中の第二の失壞なり。

又復、他化自在天中の第三の失壞とは、所謂、彼天の退く時將に到らんとして、彼處の諸天の業未だ盡きざる者は、種々なる寳の妙へなる光明の殿に乘りて、三處に能く行く。所謂、虚空・陸・地水の中にして、行くに則ち速疾にして、障礙する所無く、搖がず、動かず。若し、天の業盡きて、將に退んとせる時は、彼の殿搖動て、行けば則ち速ならず。自餘の諸天其の殿の動くを見て、之れに語りて言へらく『汝、今や、退く時到らんとせり、我れ先に曾つて餘天の退く時、是の如き相有りしを見たりき』と。彼の業盡きし天、是の如く聞き已りて、天の境界と將に離別せんとして愁の火の心を燒くことは、地獄の火に燒かるるが如きと異らず。此れは是れ他化自在天中の第三の失壞なり。

又復、他化自在天中の第四の失壞とは、若し彼の諸天の善業未だ盡きざれば、五樂の音聲・莊嚴の具の聲・皆悉く美妙にして、有する所の歌聲も美妙にて愛す可く、聞き已れば心喜ぶ。若し其れ天の善業盡きし者有れば、彼天の五樂の音聲は妙へならず、歌聲も亦爾くして、瘂の如きと異らず。彼天聞き已りて心に喜を生ぜず。自の業を以ての故に、莊嚴の具の中に聲を出して、說きて言へらく『汝、今や善業盡き滅し、汝放逸にして放逸を行ひしを以ての故に、汝今や將に異る世間に到り去らんとせり、業に縛らるるを以ての故に』と。彼天是の如く自の業を以ての故に、莊嚴の聲を聞きて、其心極めて愁へ、是の如き言を作さく『我れ今や、境界の樂・福德の業盡きて、彼の種種なる寳にて莊嚴りし所の幘は即時に墮落す』と。是の如く見已りて、大苦惱を生ず。此れは是れ他化自在天中の第四の失壞なり。三界中に於ては更に處あり物ありて是れ常たることなく、一切無常なり。是の如く六天は是れ失壞の處にして、彼の是の如き天は、善業盡くるが故に、必定して當

に退くべし。此の失壊せし天の、此天を悕望て持戒して生まれし者にても、善業の盡くる時は必定して當に爾らん。是の如く第五の山樹具足の地處の諸天に、牟修樓陀夜摩天王、[二]迦迦村陀世尊の塔中に有する所の經の字を、彼の天衆に示して、是の如くに說きて言はく『汝等天衆、放逸を捨離し、放逸を行ふこと勿れ。放逸の味は苦にて地獄の中にて受けん。一切の欲の味も悉く皆是の如し』と。彼の諸の天衆第三佛の說き給ひし所の經を聞き已り、若し天の放逸して放逸を樂む者は、放逸を則ち滅す。

六經中に於て迦々村陀如來の說き給ふ所の第三經は竟んぬ。

爾の時、彼處の夜摩天主は彼の天衆の心に厭離を生ぜしを知りて、之れに告げて言はく『汝等、天衆已に大僊の說き給ふ所の正法の、能く諸の苦を盡くし、放逸を除捨き、天・人の爲に寂靜の法を說くを聞けり。汝等天衆、已に第三如來の法を聞けり。汝今や、法律を聞き已り、精勤て修行して、復、餘佛の說き給ふ所の法を聽き、聞き已りて攝取すれば則ち利益を得ん。此の天より退き已るとも地獄・餓鬼・畜生に墮ちざらん』と。牟修樓陀夜摩天王、是の如く說き已はりしに、一切の天衆は皆天主牟修樓陀に白して是の言を作さく『唯、願くは天王我等を利益し、我等を安樂ならしめ給へ』と。爾の時、天主牟修樓陀、天衆に告げて言はく『汝等天衆の一切皆此の第四の如來の塔を看よ。種々の珍寶にて莊嚴を爲し、無量百千の光明照耀き、種々なる寶有り間錯りて奇麗なり。無量の功德に莊嚴られ、光明は普く覆ひて、此の天世間の一切に遍滿す。爾の時、天衆、天王に白して言さく『我れ今已に見たり』と。爾の時、天主牟修樓陀、天衆に告げて言はく『汝等、今や一切我と共に如來の塔に詣でん』と。天衆、答へて言さく『是の如し、天王』と。爾の時、天主牟修樓陀、幷に天衆等相隨ひて去り、佛塔に到り已り、其の心清淨にして、頭面にて如來の塔を敬禮し、心は則ち清涼なり。禮し已れば則ち起ちて[三]毘葉婆如來の塔を看るに、彼の如來の塔は種々の妙寶

【二】迦迦村陀世尊。過去七佛中の拘樓孫佛(Krakuccha-nda)の事。

【三】毘葉婆如來（Visvab-hū）。過去七佛中の毘舍婆如來のこと。

の光明にて、照耀くことは前に說きし所の如し。

彼の佛塔中の寶壁の上に經法の字有りて、天人を利益す。所謂、說きて言へらく『若し人有りて能く七法を成就すれば則ち天上に生れん』と。何等を七と爲すや。一は所謂、善男子有りて、法を聞き、義を聞き、法を聞きて修行し、法を聞きて善意、聞きし所の法に隨ひて、心に則ち攝取し、聞き已りて堅固、聞き已りて受持し、聞き已りて愛樂み、心に喜樂を生ず。此の善男子、七の功德を具足せる知識に近づく。何なるは七種の知識の功德にして皆悉く具足するや。所謂、一は說く如くに行ふなり。二は他の說くが如くに行ふ者に近づくなり。三は則ち能く說く如く行ひ、堅固に攝取するなり。四は法を得て堅固に思惟す。五は意に住す。六は謂く、同き善業の者に近づくなり。七は他に敎へて他の惡を取らず。是の如き等の七種の功德を具足する知識に近づくなり。云何なるを名けて說く如く修行すと爲すや。是の如き知識は善く行ひ、善く作し、若しは說く所有らば量を知りて、少しく說きて能く利益を爲し、時に相應して說き、方に相應して說きて疾ならず、遲からず、多の義にて少しの語にて、美妙にして解し易すく、法と相應して、自他を利益す。是の如く說き、彼の說く所の如く、是の如く行ふ。云何に他の說く如く行ふ者に近づくや。常に正しく身・口・意等を修行し、意の內外の淨きこと猶し眞金の如し。彼人、是の如く說くが如くに修行す。云何なるを名けて、說く如くに行ひ、堅固に攝取すと爲すや。若し作す所有れば普く清淨を作し、三種作業は彼の業を觀察するに善く清淨なり。已に天人中に生れ、乃至、涅槃す。是の如きの人、或は自ら思惟し、或は他より聞き、此の業の報は樂にして、堅固に喜樂び、堅固に攝取す。是の如き知識は堅固に攝取するなり。彼の善男子は云何にして法を得て、堅固に思惟するや。所謂、善淨にして、堅固に攝取せば二世を利益す。是の如く見已りて堅固に思惟す。是の如く堅固に思惟する意の者は、或は他の得し所より、堅固なる善業の果を聞き已り、或は自ら思ひ已りて眞諦を喜樂ぶ。是の如くに眞諦

を喜樂ぶ知識なり。云何に意に住するや。此の多く聞き已りて意則ち亂れざるを、此れを名けて意に住すと名く。云何なるを同き善業の者に近づくと爲すや。謂く、他人、己れの功德と同きを見、是の如く見已りて則ち彼人に近づく。云何に他に教へて、他の惡を取らざるや。餘人の法にして善法に似し者は牽く能はざる所なり。是の如く七種の功德を具足する知識に親近する善男子は、或は人間に生れ、或は天中に生る。此れは初法を說きしなり。

何等は復、是れ自餘の六法にて、彼法を成就して天上に生ることを得るや。所謂、多く聞き、攝取修行し、懈怠ならず、念じ、他を熱惱さず、誑かさざる等の六なり。此等の七法を是の如くに已に說けり。是の如き七種の法を成就する者は身壞はれ、命終らんには、善道の天世界中に生まれん。七大殿の如きは、若しは王、若しは大臣の是の如き殿に乘るものにして、五樂の音聲にて歌舞し、喜笑し、妙へなる臺にて莊嚴り、是の如くに行きて、遊戲の處に向ふ。是の如き七法を若し人成就せんには行きて天處に向ん。

何なるは多聞にして、多聞と名くるや。謂く、眞の法を聞き、聞き已りて調伏し、憍慢を生ぜず、其の聞きし所の如く、多く聞き增長して、放逸なる行をせず、智厭足ず、常に他に諮問し、自己の功德を他に向ひて說かず。己が名を誦せず、此の多聞の者は、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れん。此れ第二の法にして、隨順して正しく入り修行して成就するなり。

云何なるは第三の攝取修行なりや。謂く、法を聞き已り、攝取して修行す。若しは復、人有りて法を聞くことを得已り、法律に非ざるを攝取して修行す。唯だ法を聞き已り、法の重擔を荷ひて、修めず、行はず、法の果を取らず。若し復、人有りて智慧の鉤を以て調伏して持戒す。若し智、靜ならずんば則ち彼の持戒は猶し晝の燈の如くにて、光明有ること無く、堅からず、實ならざらん。若し持戒の中に智有りて和合せんには、彼人は猶し火燈の光明の如くにて、堅にして復實にして、

果を得て虚からざらん。若し法を修めし者は、言を説きて堅なることを得。唯に口中の言説堅きを爲すのみに非らず、彼人の身業・口業・意業は皆悉く寂静にして、身壞はれ命終らんには善道の天世界中に生まれん。此れは第三法なり。

云何なるは第四の懈怠ならずと名くるものなりや。懈怠と言ふは、所謂作さざるなり。何なるを作さざると名くるや。作すべき所の法に隨ひて、發し已りて作さず、究竟すること能はざるなり。彼れ是の如き法を精勤みて斷たずんば則ち能く究竟せん。若し是く懈怠にして精勤せざる者は究竟すること能はざらん。少しく發起する者は、世間法・出世間の義に於て、行を具足せず。若し懈怠なる者は、一切の作す所皆悉く羸劣にして、一切人の爲めに輕賤・毀呰・嫌薄せられ、自ら苦惱を受け、身壞はれ命終らんには、惡道に墮ち、地獄の中に生まれ、是の如き人は懈怠に壞されん。是の如き懈怠を應に捨離すべし。火の如く、刀の如く、險岸に墮ちしが如く、惡毒蛇の如し。若し懈怠の爲に破壞せられし者は則ち精勤たらず、威德有ること無く、羊の如きと異らず。彼れは則ち無智にして種々の所作の一切を知らず。若しは智と非智、若しは法と非法、應に行ふべきと行ふべからざるとの一切を知らず。何を以ての故に、經を讀まず、法を聞かざるを以ての故に、懈怠なるを以ての故なり。若し復、人有りて、論心意を開けば智の所知に於て、若しは法と非法の一切を皆知り、應に作すべきと作さざると、應に行ふべきと、行はざるとの一切を皆知り、是の如き等の法の智慧の所知を一切皆知り、智及び精進にて、懈怠の者無からん。彼の懈怠の者は盲の如きと異ならざらん。身壞はれ命終らんには、惡道に墮ち、地獄の中に生れん。是の如きの人は出世間の義の一切皆劣り、第一の苦を受け、他の舍にて乞ひ、常に他の門に依りて悕望し、乞丐し、常に他の面を看、第一の惡色にして、頭髮は眼を覆ひ、眼目乾燥き、脚・爪・皮等は一切燋枯て、四出の巷の中の家家に乞ひ行き、辛苦して命を活し、一切に輕毀めらる。此の因緣の故に、應當に一切の懈怠を捨離す

べし。

此れと相違して精進する者は、一切の作す所を皆悉く成就して乃至涅槃せん。何に況んや、其の餘の世間の法に於てをや。身壞はれ命終らんには、善道の天世界の中に生まれん。是れ等を以ての故に、若しは天・若しは人、一切皆應に懈怠を捨離し、勤めて精進を發すべし。時に、彼の世尊毗葉婆佛は偈を說き給ひて言はく、

懈怠の意及び幻、或は慢・或は惡口、或は智等を捨離するは、此れは是れ失壞の地なり。惡知識に親近みて、善知識を捨離し、或は復、邪見等は、此れは是れ失ふ因緣なり。善と不善とを知らず、非時に語言し、或は婦女等を信ずるは、此れ饒益せざる地なり。何なる人、何なる人にも近づき、何處、何處にても食し、身自らを利益せずんば、此の法は人をして輕んぜしめ、勇を壞はし、若しは失念し、或は王の爲めに惛まれ、或は心の堅く强き等は、此の法は未だ時ならずして死せん。諦に業果及以び法・非法を知らずして、善知識を離るる者は則ち惡道に墮ちん。懈怠にして、若しは多く睡り、或は諸の味に貪著し、瞋及び妄語、若しは惡口の言說、多くの貪・若しは憍慢、心動きて法を捨離し、若しは習ひて婬欲に近づき、或は婬欲の法を讃ふ。是の如きは三の過有りて、懈怠は是れ根本なり。若し勤めて精進する者は則ち諸の使過無し。一切の精進する者は必定して果を成就し、所應きが如くに精進し、業は必定して果を得ん。是の如き三種の業は能く三種の果を得、[一三]三聚の三根本は決定して三の[一四]行有り。

彼の佛世尊毗葉婆塔の壁上の書字の是の如き偈は說きて懈怠を毀呰つ。天衆、見已りて、是の如き言を作さく『我等決定して懈怠を捨離せん』と。此の懈怠より枝條の過有り。佛の說き給ふ所の如く、懈怠の者は、若しは天、若しは人、一切の作業、一切の時に於て、一切減劣なり。若しは天、

【一三】三聚。一切衆生を三種に攝む。一、は正定聚必ず證悟するに定まるもの。二、に邪定聚、畢竟證悟することなきもの。三、に不定聚。二者の中間に在て緣あれば證悟し、緣なければ證悟せざるものを云ふ。

【一四】有三。明本に依りて「決定有三行」と讀めり。原文「決定三有行」とあり。

若しは人、懈怠ならざる者は次第に乃至涅槃に到らん。此れは第四法にして、人天の中にて多く作す所有りて多く利益あり。

又、第五法は多く作す所有りて多く利益有り。所謂、念ずるなり。一切の法中能く妨ぐる者は、所謂、懈怠なり。是の如き一切世間の法にして、涅槃を攝むる者は、念則ち是の根なり。若しは出家の者・若しは在家の者、念じて放逸ならず、放逸を行はずんば、一切の作す所皆悉く成就せん。是の如きの人は數々業を作るとも、法の如く、業を作り、勤めて精進を發し、悕望む所に隨ひて、心に正行を念ず、彼人の五根は五境界を護り、心に迷惑せず。眼に色を見已りて、彼の色中に於て欲染を生ぜず、心喜樂ばず、色の如く實に見て其の根本を知り、是の如き色の根本の因緣を見、何なる因緣にて生ぜしやを見る。彼人、是の如く色を知見し已り、心濁亂せず、是の如くんば彼色も則ち牽くこと能はず、實の如く是の如き色を見るを以ての故なり。若しは出家の者、若しは在家の者、若しは天・人等、色を生ずる過、欲の色を生ずる過を知り、已に色の過を滅し、是の如く念知すらく、某方・某處は、心に彼色を緣じ、是の如き境界の因緣の故に、眼と共に識を生じ、彼の境界に由りて已に我の畏を生ず。此の垢無き念は能く煩惱を除く。我れ此の念を以て已に是の如き境界の怖畏を除けり』と。是の如き怖畏の因緣にして、諸の境界に生ず。第一に悕望して、心に正しく念ずるが故に、則ち能く無量種の色の境界の怖畏を除遣り、念の緣にて能く除き、念々の中に於て稍除き、漸く除く。譬へば、世間の善巧なる銅師の如きは好き銅器を以て火中に置き已り、然る後に之を治し、是の如くにて數々火に入れ、復治し、勤めて休息まず。漸々に垢を除き、其をして滑淨ならしむ。是の如くに善く念じて數々垢を除かんには爾乃ち清淨なり。又、瓶師の如きは、因緣合集し、久しく習ひしを以ての故に、泥團を瓶と成す。是の如き人、勤心に念を發し、因緣を修集して、緣の瓶を生ずるが如くにし、正念に觀察して、著る所の衣の如く、初より次第に念念に至り盡くし、

是の如く、是の如くに、始に善き念を發し、次第に乃至、一切の過を盡して、眞諦を見るを得、聖印心に印し、彼の過の相盡き、過の相盡きしが故に人則ち之れを知る。是の故に若し善を得んと欲する者有れば、當に一切の時に如實に正しく念ずべし。若し眼に色を緣ぜんには、念の繩心を縛りて動轉せざらしめ、惡馬を調ふが如し。是の如き善き念は先に住持せる過去の境界を攀緣して念じ已り、是の如くにして復、現に眼の境界を遮ふ。念は九十八なり。云何に念に住するや。謂く、生じたる欲染、不正なる觀風も、動かしむること能はず、是の如き念に住し、實の如く思惟す。此の色、彼の色、無量種に、無量の形相有るも、四聖諦の苦・集・滅・道を觀じて、彼の欲染の一切をして寂靜ならしめ、或は欲染の一切をして盡く滅せしめ、或は皆微薄ならしむ。此れは是れ何なる善法の勢力なりや。所謂、念を繫くるは、是れ其の根本にして、一切の善法は皆念に住するに依る。是の如く轉行するは是れ現在を念ずるなり。

云何に復、未來世の法を念ずるや。未來は未だ有らず、未だ生ぜず、未だ見ず、彼の境界の相を云何にして念ずるや。若し境界を得んには、是れ則ち念ず可し、未來世中の境界は未だ有らず、當に云何にして念ずべきや。彼の念ずる所の者は、復、未來なりと雖も、因緣の相を見て、未來に攀緣し、是の如くに念ずるを得。謂く、人有りて、身・口・意を修め、善業を行ふ者を見、見已らんには則ち是の如き人は決定して天に生れんことを念ず。若し天有りて惡業を行ふ者を見、見已らんには則ち是の如き天は必らず地獄に墮せんことを念ず。是の如くに念知す。此れは第五法にして、人・天中に於て多く作す所有りて多くの利益あり。

又、第六法とは天人中に於て多く作す所有りて多くの利益有り。謂く、第六は他を熱惱さず、若しは他を惱まさざれば其の心寂靜にして、此れは梵行有り、此れは梵行無しと、分別を生ぜず。他の敷具・病藥の須ふる所を見て譏嫌を生ぜず。自ら是れを言はず、亦說きて、我れ能く持戒し、若

しは少しく持戒すと言はず、少しく經を讀誦して、檀越の所に於て自ら稱說せず、怨・親に等心にして、常に三寶を念じ、破戒を朋とせず、持戒を惱まさず、諸の一五檀越に數參り、承けて資用を取らず、其の心柔潤にして、數々說法を師長に諮請し、常に空閑に住し、常に一切時に梵行の者に近づく。是の如く功德と相應する人は他を熱惱さず、是の如く他を熱惱さざるが故に、多く作す所有りて多くの利益あり。

又、第七法とは天・人中に於て多く作す所有りて多くの利益有り、所謂、誑さざるなり。自らの功德を隱し、惡業を除去き、心意正直にして、衣鉢は足ることを知り、恒常に乞食し、山谷・巖窟・樹林の中に住し、食に一六於て足るを知り、其の心平等にして高下有ること無く、因緣無くして人中に遊行するに非らず、蟲有るやを疑ふ處には、彼に行かず、澤中・水岸・河坎を壞はさず、蟲を殺すを畏るるが故に。霹靂・電雨等を呪ひ、墮ちて傷殺せしめず。星宿・日月の薄蝕・諸曜の吉凶を說きて財物・飲食の供養を求め以て、自らの命に資せず、常に一檀越の家に往返せず。亦、戴面・仰頭して行かず、亦、脣を動かし詐りて習を誦することを作さず、高聲にて語らず、亦、語かに竊まず、閙雜りし一七靴・鞋・履等を著けず、雜繩を以て用ひて身體を繫がず、自らの身に雜色の香囊を著けず、敷具等に至るまで皆悉く畜へず、戒の功德無くしては、大衆の會處に則ち中に入らず、他人をして城邑・聚落等の處に到り、已れの持戒を說きて利養を求望せしめず。種々の處にて心意を妨亂せしめず、貪らず、求めず、村に近づきて住せず、舊の知識・親眷等の舍に自在に入り、攝めて已に屬せしめず、他の惡を彰さず、他の德を隱さず、他の實の過を見て屛處にて說かず、婦女を捨棄することは惡蛇を遠ざくが如し。諸の婦女と共に語說ず、與に同行せず、華饒き樹の一切に往かず、愛すべき園林に亦遊行せず、愛すべき衆鳥の聲を聞くを畏るるが故に、彼の聲を聞きて欲心動く。畏るが故に、是の故に、彼鳥の聲を聞くことを欲せず。聲饒き水河の近くに坐禪せず、彼の聲を聞きて

【一五】檀越（Danapati）。施主を云ふ。越とは施の功德をなして、已が貧窮の海を越ゆる義なり。

【一六】於の字。宋・元・二本及宮內省圖書寮本に依る。明本は于に作り、原本、行に作れり。

【一七】靴の字、宮內省圖書寮本に依れり、原文、鞾の字に作れり。

心動亂するを畏るるが故に。熏香多き華の近くに坐禪せず、亦近づき行かず、何を以の故に、鼻に香を聞きて心意動くを畏るるが故に、亦、種々の諸鳥の種々の色鳥を觀看せず、鵝鴨・命々、若しは孔雀等の多欲の諸鳥を看ず、見ず、彼に近づき行かず、心動くを畏るるが故に、畜生の婦女の因緣を見て欲心發るを畏るるが故なり。

椰子の果樹・[一八]波那娑樹・[一九]母柘果樹・[二〇]菴婆果樹・[二一]毗羅果樹・[二二]迦卑他樹・[二三]波留沙樹・[二四]佉殊羅等の種々の林樹の近くに坐禪せず、心生じて其味を貪るを恐畏るるが故に、果樹を捨離して寂靜なる林に在り、味の貪る可き(もの)無く、多くの人衆無くして、安樂に行ふ園林の中に在り、是の如く坐禪し、勤めて精進を發し、過怨と共に鬪ひ、心恒に亂れず、乃至、寺の因緣の爲に犂地の土を取らず、是の如くに愛を斷ち、朽壞せる鐵鉢を繩を以て連綴し、用ひて飮食を受け、心に銅銀等の鉢を念ぜず、三椀を畜へず、所有の[二五]袈裟は[二六]被著せるを夏天の時に曬ひさず、大小便を除き更に餘に行き乃至一歩もせず、蟲を殺すを畏るるが故に。[二七]奢彌果を食す時、好き果を食して爛れる果を食せず、小棗等を食せんには看ず、食せず。若しは梨果・佉殊羅果・軟棗・豌豆を食し、若しは朽ちたる豆等を看ず、食せず、其の内に諸の蟲有るを恐畏るるが故に。自らの屋壁に生ずる所の諸の蟲を総ひに除却せず、傷損するを畏るるが故に、其の死を畏るるが故に。坐處は[二八]一坐にて、他の鉢を觀ず、貪りて食ふを畏るるが故に。若し道を行く時は他に近づきて行かず、妨を爲すを恐るるが故に。饑くの蟲の地に大小便せず、蟲を傷くるを畏るるが故に、蟲を殺すを畏るるが故にして、乞食して行く時は一[二九]身の地を看る。心を直くするを以ての故に、恒常に正直なる心の者に親近す。是の如き比丘は諸の物を集めず、一切の物を皆悕望まず、希有の物を心に見るを樂しまず、常に勤めて坐禪す。彼の善き比丘、是の如く誑かさず、彼の善き比丘、是の如く持戒清淨にして犯さず、是の如く淨き命にて、是の如くに內心清淨・善淨なり。是の如き比丘は說くが如くに學句を堅く持ちて犯

【一八】波那娑(Panasa)。半娜娑と音譯す。果の名にして、形は冬瓜の如く、其の味は甚だ甘しと。
【一九】母柘果樹。不詳
【二〇】菴婆果樹(Āmra)。菴婆羅、菴羅とも書く。果の名。
【二一】毗羅(Bimba)。避邏、頻螺頻羅婆と書く。赤色の果實なり。
【二二】迦卑他(Kapittha)。劫比他とも譯す。植物にして西域記二に「花卉果雜種異名。所謂菴沒羅果乃至劫比他果」とあり。
【二三】波留沙(Phalasa)。婆羅奢とも書く。赤花樹の名。
【二四】佉殊羅(Khadira)。軻地羅佉陀羅とも書く。木の名なり。
【二五】袈裟(Kaṣāya)。濁染と譯す。青・黃・赤・白・黑ノ五正色を避けて健陀色(Kantaka)(本蘭色又は香染)を用ふるに由る。
【二六】被の字は元・明二本に依る、原本披に作れり。
【二七】奢彌(Śami)。賒彌、奢弭とも書く。木の名にして、譯して枸杞と云ふ。
【二八】一坐、一食の制に從ふこと。
【二九】身の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり、原本尋に作れり。

さず。彼の善き比丘、心に念ぜし所の如き、是の如き道に生まる。常に淨き命の故に。善き意有りて生まれ、劣れる生を樂はず、善道に生まれんことを願ふ。時に、彼の世尊毗葉婆佛、偈を說きて言さく。

清淨なる命の人は、寂靜なる身・口・意にて、坐禪して愛を離れ、涅槃を去ること遠からず。
〔三〇〕頭陀して放逸ならず、冢間の樹林中、常に是の如き處に住せんには、涅槃を去ること遠からざらん。塵土の物を敷具とし、一鉢亦、破壞し、根・果を食して足ることを知らんには、彼人安樂を行ん。欲を解脫する人は、常に足るを知ることを樂しみ、善き意にて勇健なる者は涅槃を去ること遠からざらん。諂誑ならざる人は塵垢を遠離し、其の心虛空の如くにして、涅槃を去ること遠からざらん。

彼の佛世尊は是の如くに善行の比丘、諂誑ならざる者を讃歎し給へり。

是の如く七法を成就せる人は是れ善男子にして、若し欲を行ひし者は生死の海に沒す。則ち是れ畜生にして、形は是れ人なりと雖も、而も實に人に非らず。若し能く七法を成就せし者は則ち善人の爲めに讃歎せられ、身壞れ命終らんには、善道の天世界中に生まれて天樂を受けん。已に退きて人中に生まれんには則ち涅槃を得ん、餘業を以ての故に。第一善とは此れ七種の法にして、所謂、初め善知識に近づきし從り、次第に多く聞き、攝取して修行し、懈怠せず、念じ、他を熱惱さず、誑かさざる等の法なり。是の如き七法は諂曲の法に非らず。是の如き等の七法は寶藏の因緣なるを以ての故に、天中に生まることを得ん。若し天等の中にて七法を得已らんには放逸を行ひて、福德をして盡きせしめること莫れ。天中より退き已りて地獄・餓鬼・畜生に墮つる故に天應に放逸なる行を行ふべからず。自ら破壞するを以て、諸有の中に於て、放逸し、放逸なる行を行ひて樂を得る者有ること無し。人中にて是の如き七法を成就せんには則ち天上に生まれん。三の因緣有りて天中よ

【三〇】頭陀(Dhūta)。抖擻と譯す、拂ひ擧ぐる義にして、衣食住の貪著を離れ去るを云ふ。即ち最極限の簡易生活を云ふ。其の行法として十二を擧げ、之れを十二頭陀と稱す。(經集部九、通頁二三三頁註、三六を見よ)

り退き已りて地獄・餓鬼・畜生に墮ちん。所謂、三とは、正法を聞かず、惡知識に近づき、業の果を信ぜざるなり。若し此の七種の法を成就せずんば地獄・餓鬼・畜生に墮ちん。爾の時、天主牟修樓陀は天衆に告て言さく『此れ等の一切を汝等已に聞けり。彼の佛世尊は憐愍の心を以て、衆生を利益し、已に是の如く説き給へり』と。時に、彼の天衆の一切皆共に天王に白して言さく『我等今や已に如來の此の説き給へる所の經を聞けり。彼の佛・世尊は世間を憐愍み、[三]以て利益をなし、放逸を除かんが爲の故に、是の如くに説き給へり』と。牟修樓陀夜摩天王は天衆に告て言はく『汝、此の經を聞きて放逸を行ふこと勿れ。天、放逸なるが故に、地獄・餓鬼・畜生に生まる。何を以ての故に、汝、大價なる貴重の物を以て貿へて、此の間の天中に生る處を得たり。今や、應に放逸を以ての故に其れをして空盡せしむべからず。佛の説き給ふ所の如く、是の如き經法を攝取し、正しく行ひて放逸を捨離てよ』と。

六　經中に於て、毘葉婆佛の所説の經典の第四已に竟んぬ。

【三】以の字明本に依れり。原本已の字に作れり。

卷の第四十七

觀天品之二十六

夜摩天之十二

爾の時、第三に、夜摩天王牟修樓陀、其の天衆に佛塔の經文を示して、彼の天衆の心をして純熟せしめ已り、復、生死の衰惱の處を示し給ふ。無量百千の諸の過充滿て、恩愛別離し、愛せざる者に近づき、所謂、老死・憂悲・啼哭の衆の過を、皆滿ち具足し、失壞し、生れては死し、乃ち是れ一切の諸の衰惱を具足せる處なり。爾の時、天王旣に天衆の心善く調伏せるを見、然る後、復、憐愍の心を以ての故に、衆生を利益し、是の如く告て言はく『汝等天衆、今や應に知るべし。一切の諸天、放逸を行ふが故に、必らず衰惱を致し、後、死の到る時に心則ち悔を生じ、極めて大に熱惱み、大なる殃禍を得ん。彼の時に當りては方便して脫るるを得せしむるべきは有ること無し。業の繩繫縛して是の如く將き去り、獨りにて伴無し。若しは人、若しは龍、或は地獄人、將に地獄に入んとしては、死の羂に縛られ、同侶有ること無し。唯善法を除のみ、若し不善の法ならんには、一切諸の衆生海に在らん』と。時に、彼の天衆、復、天主牟修樓陀に白して是の言を作さく『是の如し、是の如し、當に爾の時にあたりては、一の同き侶無し。法・非法を除く』と。爾の時、天主牟修樓陀、天衆に告て言はく『汝等天衆、應に是の如く知るべし、更に同き伴無し』と。

又復、告て言はく『汝等天衆、若し信心の種子を增長せんと欲し、安樂を得て畢竟して苦を除んと欲せんには、今此の天中に又復、更に、[一]閻浮那陀金寶の妙へなる塔有りて、眞珠の網にて覆ひ、七寶の柱有りて莊嚴をなし、種々の雜寶・種々の光明あり。是れ[二]迦那迦牟尼佛の塔にして、今や、汝一切の天衆と共に往きて彼塔に詣でん。彼塔に到り已り、禮拜し、供養して彼の佛塔に入り、彼

【一】閻浮那陀金(Jambunada-svarna)。閻浮樹林を流るる河に產する金。
【二】迦那迦牟尼佛(Kanakamuni)。拘那含とも書く。過去七佛の第五。

塔に入り已りて、彼の塔中に有する所の諸法に隨ひ、一切を遍く看、見已りて攝取し、已に修行するを得ては、自ら利益せるを以て生死を出で、次第に乃至涅槃に到らん』と。

爾の時、天衆既に天主牟修樓陀の是の如き語を聞き已り、心に敬重を生じ、放逸心を離れ、諸根寂靜にして、倶に大僊に向ふ。迦那迦牟尼の佛塔と名くる塔の光明は、前に說きし所の如し。爾の時、天衆の一切は皆、牟修樓陀夜摩天王と共に彼の佛塔に詣で、佛塔に到已りしに、夜摩天王牟修樓陀、天衆とに告て言はく『彼の迦那迦牟尼如來、一切法は皆悉く無常なりと說き給ひ、世間を利益し、衆生を憐愍みて、此の佛塔内に化して壁上に在り。汝等天衆の若し見ることを得し者は則ち厭離を生じ、無常の法を見て必らず厭離を生ぜん。彼の佛世尊の說き給ふ所、化し給ふ所は、此の佛塔中の壁上に化し現はれたり』と。時に、彼の天王は是の如く說き已りて彼の天衆と共に佛塔中に入る。彼の佛塔の量は、廣さ十由旬にして、彼の佛塔内の一切は生死して皆悉く無常なり。一切の具足は失壞せざる無し。自らの業行の故に、自在なるを得ず、異異りて同からず、五道差別し、各々化して佛塔の壁中に現るることは、鏡の如く相ひ似、彼色の明了なることも亦正しく見るが如く、處々は各々了々に分別され、雜色の畫の如し。

彼處の一廂に、八地獄を見る。謂く、活・黑繩・合・喚・大喚・熱及大熱・阿鼻等に至りて、天中に墮ちるを見るに、自らの業風に吹かれて、首の下、足の上の普き身は焔然たり、一切身上の火の色は猶し[三]金舒迦樹の如し。上、天處從り下に墮ちて、次第に地獄の中に至り、高聲にて唱喚び、自らの心に誑かされ、善業盡くるが故に、放逸の怨に誑かさるるが故に、天中にて第一の樂を成就し已りて、地獄の大苦惱の處に入る。唯、獨にして伴無く、知識・親舊・弟兄を離れたり。地獄に墮ちては能く救ふ者無けん。

彼の諸の天衆、最初に、是の如き塔中の壁上に了了として見るに、四天王天は地獄に墮つ。四

【三】金舒迦樹(kiṃśuka)。又、堅叔迦、緊祝迦と書く。樹の名にして、慧琳音義十一に「西國花樹也。此方無二此樹一」とあり。其の花は赤色なりと。

天王天に殺生の過有り、偸盗の過有り。四天王天は云何にして殺生するや。謂く、彼の天衆、阿修羅と共に戰鬪する時に、阿修羅を殺す。天の勝を得し時に阿修羅壞はし、其の頭の冠を取り、其の鐵刀を取り、彼の有する所に隨ひて一切皆取る。此の業の因緣或は復、更に、餘業の因緣有りて地獄に墮つ。心の爲に誑らかされ、是の如き業を作すなり。彼の天中に於て、何なる時に隨ひて退くや。彼の退く時に於て、陰盡く滅する時に、中陰に攀緣じて地獄の中に生まれ、彼の樂處に續きて、中陰の身を受け、甚だ大苦惱す。彼れ是の如き中陰の中に於て苦惱に耐ること叵し。何に況んや、已に地獄の中に入りて、無量に極めて大苦惱を受くるに於てをや。此の大業のために、是の如くに戲弄されし此の諸の衆生、天處より退き已りて地獄の中に生まる。彼の諸の天衆、佛塔内に於て、是の如く皆世尊の化し給ひし所を見る。

又、彼の天衆、彼の塔中の異る處に於て、復、四天王天の天處より退き已りて餓鬼の中に生るるを見る。彼天、是の如く樂を食し失已りて曠野の中に生まれ、復、是の如き飢渴の苦惱を得。是の如く天衣を久しき時に著已り、後、復、頭髮面を覆ひ、身を覆ふ。闇眼の處に生れ、彼身は猶し燒かるる樹の相の如く、裸露にして衣無く、或は身に火焰の衣を著る者有り、曠野の中に在りて、飢渴に身を燒かれ、唱聲し叫喚す。乃至、少の水の露の滴許りの如きをも、亦得べからず。三十六の餓鬼の地に生まる。夜摩の天衆を彼の佛塔内の壁中にて見るに、烏鳥・燻狐は、其の面若しは眼、口等を嘴啄み、是の如き處を見る。是の如き天處の地の觸は軟滑にして、遊戲を行ひ已り、後時に、復、餓鬼の地に生まる。熱火・堅地・熱惱する土塵・和合して地を爲し、多饒の黑蟲に金剛の嘴有り。夜摩の天衆を彼の佛塔内の壁中にて見るに、彼の鬼、叫喚び、天處より退き來り、又復、天中にて好き香を齅ぎ來り、或は[四]曼陀羅・[五]尼世香等の異異し勝れし香・百千種の香を一切齅ぎ來り、復、後時には、不淨なる屎尿の氣臭ある、死屍、塚墓の穢惡の處に在りて行く。是の如き餓鬼無量種

【四】曼陀羅(Mandārava)、又漫陀維とも書く。花の名なり。圓華・適華・悅意華・白團華とも譯す。

【五】尼世香。不詳。尼の字は宋・元・明三本及宮内省圖書寮本に依れり、原本、居に作れり。

の不淨の物の穢惡なる臭氣を齅ぎ、彼の鼻中には焰の蟻子有り、彼の焰の蟻子其の鼻中に滿ち、彼の諸の餓鬼、餓鬼中に生まる。彼塔の內の一處の壁中に於て、是の如くに見る。

又復、是の如き前生の天中にて、無量種々の[六]酥陀の食、愛す可き色・味・香・觸を具足し、復、戲弄されて餓鬼の身を受け、是の如く生れ已らんには、第一の不淨なる、第一の臭氣の屎の味も得難く、百年中に於て、曾て一も是の如き屎の食を得ざらん。彼の佛塔內の一處の壁中にて是の如く、彼の屎を食するが如きを見る。塔內の壁中にて是の如くして見るに、又、彼天の身に著る所の衣は第一に柔軟く、第一に滑觸にして、無量の諸の寶間錯りて成り、天に所應しき如く、甚だ愛す可しと爲せり。已に天中に於て、是の如き衣を著し、復、天風有りて種々の華を吹き、以て其身に坌る。復、後時に、善業盡くるが故に、餓鬼の中に生まれ、裸形にして衣無く、自の身に毛を生じ、毛は甚だ稠穊にして、堅き[七]鞕なり。色黃にて其の身を覆へり。百千の黑蟲、遍き體之れを食し、多饑の是の如き種々の火蟲其の身體を食めり。餓鬼中に生れて、飢渴に身を燒かれ、恒常に羸瘦へ、啼哭くを以ての故に、眼面皆爛れ、久しく無量なる餓鬼の苦を受く。放逸に誑かされ、天處從り退きて、餓鬼の地に墮つ。

又、夜摩天中の山樹具足の地處の天衆、彼の塔中の壁上の異る處に於て、次第に復、四天王天の種々の諸の畜生道に退墮するを見る。種々の方處を略して之れを言はんには、三處に生まる。水・陸・空を行き、彼の水を行く者は迭に相食噉して、大苦惱を受け、或は寒の苦を受け、或は熱の苦を受く。彼の陸を行く者は日に炙かれ、焦然として大苦惱を受け、飢渴に身を燒かれ、迭に相殺害し、或は繫縛さるるを畏れ、大苦惱を受け、百千種に受けて說くを得べからず。是の如く畜生は業風に吹かれて諸の苦惱を受く。彼の空を行く者は、若しは細、若しは麁、若しは大身の鳥にて、常に相殺すことを樂みて大苦惱を受く。彼天、退き已りて畜生中に生まる。放逸の怨に誑かさるる

【六】酥陀(Sudhā)。首陀須陀、修陀と音譯し、天の飲食にして、甘露味なり。

【七】鞕の字。宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依れり、原本鞭に作れり。

を以ての故なり。

是の如き餘天、若し放逸せず、放逸なる行をせず、勝れし善業を作し、福德を修めし者は、天從り退き已りて人中に生まる。自らの善業の如く、是の如くに報を受く。若し不善業にて人中に生れし者は、一切是の如く種々に爲作し、衰惱に入りて下・中・上有り、貧有り、富有り、方・時・法に依りて、若しは醜、若しは美、好惡等の色なり。彼の佛塔內の壁中を見るに、若し善業有り、樂みて修め、多く作し、若しは持戒を修め、八聖道を穿ず、孔せず、堅固にして犯さず、善く心意を調ふれば、三業は大力にして善業の力勢もて決定して愛すべき果報を受得せん。三寶に歸依する因緣力の故に、或る時は衆生に無畏を布施し、或ひは法を以て施せし、因緣の勢力にて、或は復、其餘の更に異たる、相似せる、諸の善業を作し、淨き法にて思を熏じ、寂靜なる心の力にて、次に口業を動かし、或ひは清淨の心にて父母を諫勸め、施・戒・智を修め、自の身に先に善業の力有るが故に、能く父母に勸め、或ひは病人、貧窮の人に施し、或ひは飲食を以て病人に供給し、或ひは藥艸を以て病人・醫師無き者・病にて藥を須ふる所に施與し、布施力の故に、或は殺生せず、或ひは偷盜せず、或ひは邪婬せず、飮酒等をせず。或ひは、曠野の險遠の處に於て、善心にて、井若しは水池等を造り、須ふべき所の者に施す。此の業の勢力にて或時は佛・法・僧寶に供養す。此の業力の故に、禮拜し合掌す。善業を作すが故に、或ひは饒くの人、國土を破壞するに於て多人の處を畏れ、曠野にて死を畏れ、或は力を畏るる者に、其れに無畏を施し、或は、緣覺・阿羅漢人に牀敷・臥具・病藥の須ふべき所を施す。是の如き業の故に、或ひは妻子を正しく護りて樂を與へ、或ひは儉時に於て、飢者に飲食を布施して之れを養ふ。此の業は最善にして、乃至涅槃せん。三種の菩提、願の如き果を得ん。何に況んや天に生るるに(於てをや)。若し天上より退き還へりて天中に生れんに、彼れ復、更に、天中にて轉行するを見る。是の如く、彼天、佛塔內に在りて壁中にて彼處の天中の種々

【八】思(Cint)。指底と音譯す。心所法の名にして、心をして造作せしむる作用に名く。

【九】阿羅漢(Arhān)。應供と譯す。一切世間の供養に應ずるに堪ふべき聖人を云ふ。聲聞位の最高。

の業網・無量の因緣を見るに、業の網、無量の衆生を縛取し、生死の中に施し設けて之れを張り、衆生中に入らんには則ち爲に縛られん。

爾の時、彼處の夜摩の天衆、彼の佛塔內の壁中にて旣に四天王天の無量種に退き、大衰惱を得るを見る。彼の世尊の如き、迦那迦牟尼如來と名づくるの化せし所を見已り、復、更に、三十三天を觀察す。彼の佛塔內の壁中に旣に四天王天の是の如き衰惱を見、次に復、三十三天の是の如しと爲んや、不やを思惟す。時に夜摩天、彼の佛塔內にて復、異處に至りて、淨き壁中に於て、彼の世尊を見る。彼の世間の生死の實の如く、業の鎖に繫れて、若しは樂み、若しは苦むを、化するが如くに見る。是の如くにして、次に、三十三天を見るに、亦復、是の如し。業の如くに樂を受け、自らの業行の如く、若しは善業を行ひ、不善業を行ふ。彼天、業の如く樂しみを受け、苦を受け、或ひは地獄・餓鬼・畜生に墮ち、或は人、或は天、種々に差別し、無量の業の羂に繫縛され已り、復、三十三天の中に於て流轉して行ひ、生死の處に在りて、業風に吹かる。三界中に於て、業有りて果報を受けざる處無し。何に況んや、三十三天の處に(於てをや)。

彼の夜摩天、彼の佛塔內の淸淨なる壁中にて、復、五道にて自らの業の作せし所を見るに、自らの業の羂に縛られ、復、後時に、活・黑繩・合喚・大喚・熱及び大熱の七大地獄に入る。唯、阿鼻の最大地獄を除くのみ。何を以ての故に、天中にては阿鼻の業を作さず、此の因緣の故に、天は則ち阿鼻地獄に生まれず。天は唯、生れて七大地獄に在り。三十三天退き已りて、若し活地獄に生まる者は、殺生するを以ての故に。或は餘業の故なり。天、阿修羅と戰鬪する時、阿修羅を殺す、則ち是れ殺生地の境界に住す。一切の諸天、皆殺生有り、四天王天・三十三天の二皆殺生し、二皆偸盜す。自り上の四天は則ち是の如からず。彼の地界に住する四天王天・三十三天は是の如くに業を作す。三十三天は是れ微細の業にして、餘天は爾らず。是の如く三十三に生ずる微細の業・及び生れ

退く等を、山樹具足の地處の天衆は彼の佛塔内の壁中にて之れを見る。三十三天、歡喜園中の【一〇】波梨耶多光明林中の雜殿堂中にて種々に嬉戯し、境界の樂を受け、善業盡くるが故に、足るを知らざる羂に繫縛されて地獄の中に入る。四天王天退きて地獄に墮ち、受くる所の苦惱は三十三天の地獄に墮ちる苦の十倍して更に多し。何を以ての故に。諸有の天中の境界にて樂しみ、若し樂の勝れし者は離別の苦も亦是の如く勝れ、極めて大苦を爲し、相續して流轉し、是の如き業を以て轉々して上勝れり。天の身中の如きは、一切の身分處々柔軟にして、彼の眼等の中、柔軟なるを以ての故に、受る所の苦惱も亦多くして勝れり。是の如く、彼處の四天王天の受くる所の樂は三十三天の樂則ち彼より勝れ、三十三天の境界失壞して、有する所の憂苦も亦、多く亦勝り、心の苦惱大にして、心の苦惱多し。苦、樂の二種甚だ多く甚だ勝りて譬喩すべからず。天中は甚だ樂にして、地獄は極めて苦なり。業の羂に縛られ、險岸に墮ちし如く、無量種の勝れて重き苦惱を受く。夜摩の天衆、彼の佛塔内の壁中にて、三十三天の放逸に壞はさるるを見る。彼の夜摩天、是の如く見已りて心極めて愁惱む。

又、夜摩天、彼の佛塔内の異る處の壁中にて復、更に、三十三天の彼天より退き已りて、餓鬼中に墮ちるを見るに、歡喜林、光明林中の間雜殿の處、遊戯の處に在りて、天の快樂を受け、天の酥陀の食を具足して身に資し、充飽して樂を受く。是の如く、久しき時に、勝れし樂を受け已り、復、不淨なる糞、尿の食を食し、諸の不淨なる蟲、其の身體に遍し。是の如く觀じて、放逸を行ふ天を見るに、三十三天は餓鬼中に墮つ、夜摩の諸天、是の如く見已りて、心に極めて愁惱む。

又、夜摩天、彼の佛塔内の異處の壁中にて、復、更に、三十三天を見るに、或ひは天より退き已りて、畜生道に生まれ大海中に在りて、彌那魚を作し、或ひは貝蟲を作し、【一一】摩伽羅魚・【一二】舒摩羅魚、是の如き等の惡蟲の中に在り、生れては迭に相殺害す。飢渴に身を燒かれ、無量の苦を受け、是の

【一〇】波梨耶多(Pariciitra)。波利質多羅とも書く。精しくは波利耶恒羅拘陀羅と云ふ。忉利天上の樹の名にして、譯して香遍樹・天樹王と稱す。

【一一】摩伽羅(Makara)。又、摩竭摩迦羅とも書く。海中の大魚なり。譯して鯨魚、巨鼇とす。

【一二】舒摩羅(Siśumāra)。梵語の接頭字のśi—を略せしなり。即、室獸摩羅、失守摩羅失收摩羅のことなり。鰐魚の類なり。

如き空行く鳥等の畜生は迭に相殺害し、常に怖畏有り、心恒に死を畏れて、諸の苦惱を受く。是の如き澤中の種々の獸等は相殺し、相食みて諸の苦惱を受く。

是の如く説き已り、四天王天は善業を以ての故に人中に生まる。是の如く次第に三十三天、善業の如きが故に、若しは人中の同業の處に生まれて諸の苦惱を受け、生死に縛らる。若し天退く時は、無量種の天中の苦惱を受けん。是の如き苦惱は説くを得べからず。何に況んや人中にて胎藏の内に在りて有する所の苦惱に於てをや。人世界中にて、胎を出んとする時に、諸の苦惱を受け、嬰孩時の苦・胎を出でて地に在りて未だ行く能はざる時の地等に倒る苦・匍匐時の苦・身體力無くして作すと作さざるとに於て一切知らず、愚癡にて啼哭す。是の如き苦惱、是の如き種々の苦惱の事は具に説く可からず。彼の佛塔内の壁上にて見ることは、鏡中にて見るが如く、山樹具足の地處の天衆は一切皆見るなり。

彼の諸の餓鬼は是の如く飢渴し、他に繫屬して、自在を得ず、寒有り、熱有り、風に吹かれ、日に曝され、處々に行きて、曠野に在り、是の如き等の苦は無量種有りて、皆悉く具に受け、盡くは説く可からず。是の如きを天中の山樹具足の地處の天衆は、彼の佛塔内の壁中にて見、是の如く已に種々の苦惱を見るに、無量種有り。世間の生死は彼の壁中に在りて、善巧なる畫の如し。彼の諸の天衆、希有なるを見已り、心に厭離を生じ、是の如き心を生ずらく『天人より勝れり』と。人の第一道は所謂、是れ天にして、天の第一道は所謂、人中なり。人死せんとする時則ち天に生れんことを願ひ、天の退かんとする時、人中に生まれんことを願ふ。人は天を樂しみ、天は人を樂しむ。此く天・人は二道の中に生れ、是の如く苦惱す。何に況んや、其餘の惡道の中にて、業に戲弄せらるるに於てをや。

又復、是の如き山樹具足の地處の天衆、彼の佛塔内の異處の壁中にて、善法堂の三十三天を見る

に、彼の天處より退き、業の如く行ふが故に、五道の中に生まる。彼天より退きし者は、前に說きし所の如し。業の因緣の故に、若し天中より退かんには亦天中に生まれて、猶、苦を離れず、本生れし如く退き、若しは愛別離し、退き生ることを畏れ、是の如くに、退ぞく無量種の苦を畏る。彼天、既に無量の苦惱を見、次に復、彼の佛塔內の異處の壁中を觀察して、帝釋身の彼の天處より退くを見る。妙寶の天鬘・天衣・莊嚴れる種々の光明、彼の莊嚴の具は火鍊金色にして、勝れし光明有りて、譬喩す可からず、勝れし欲を具足し、五欲を具足す。一切を捨離し、自らの業に牽かれ、惡道の門開き、放逸に使はれ、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。自らの業の作る所の或ひは善業に牽かれ、不善業に牽かるるが故に、是の如くに退く。彼の佛塔內の淨き寶の壁中にて、往世先に退きし帝釋を見る。彼の諸の帝釋に三十二有り。

初の帝釋を菴舒摩と名づけ、既に三十三天王と作り已り、自らの福盡きしが故に、大海中に生まれて、摩伽羅大身の魚と作る。本、人中に在りて、獵魚師と作り、常に多く魚を殺し、亦、常に佛を禮せり。佛を禮せし業を以て、是の故に、三十三天に生ることを得て、帝釋王と爲れり。殺生せし因緣にて海中にて魚と作り、餘業を以ての故に、畜生中に生まる。

又、夜摩中の山樹具足の地處の天衆、彼の佛塔內の異處の壁中にて次第に復、第二の帝釋を見るに、三浮提と名づけ、本、人中に在りて、曾て善業を作し、病者に食を與へ、或ひは淸淨なる心にて比丘に食を與ふ。彼の業の因緣にて、是の故に、三十三天に生まることを得て、帝釋王と爲れり。後時に、福盡き、餘業の因緣の不善業の故に、蜥蜴蟲と作る。彼れ前世の時に、邪見なる心の故に、外道の齊中に蜥蜴蟲を殺せり。彼の因緣を以て、地獄の中に生れ、地獄を出で已り、餘業の因緣にて蜥蜴蟲と作る。

又、夜摩中の山樹具足の地處の天衆、彼の佛塔內の異處の壁中にて次第に復、第三の帝釋を見

る。波羅迦著は是れ其の名字にして、天の境界を受け、五欲を樂しみ已り、彼より退かんとす。本と人中の時に、父母に供養し、病時に瞻視せり。彼業の因縁にて、是の故に三十三天に生るるを得て帝釋王と爲れり。本の業盡くるが故に、彼の天處より退き、餓鬼中に生る。彼れ過去の時、異處に生れ、時世饑儉なるとも、多く穀等を儲へ、[一三]貴糴にて他に與へ、他を誑惑し已り、心更に、悕望み後時に大いに儉す。彼の因縁を以て、是の故に、黑繩地獄に生まる。彼の餘業の故に生まれて針咽餓鬼の中に在り。

又、夜摩中の山樹具足の地處の天衆、彼の佛塔内の異處の壁中にて、無量種の生死の衰惱するを見て、希有の心を生ず。是の如く、無量種々に見已り、次第に復、第四の帝釋を見るに、名けて作愛と曰ふ。天處より退き已りて猪の中に生まる。是の如く見已りて、彼の善業を觀ず。何なる業の因縁にて帝釋王と爲りしや。彼れ前世の時に、他の邪見なる[一四]婆羅門の人、病困して死せんとするに、藥を與へて服せしめ、憐愍の心にて言はく『當に此の藥を服すべし』と。是の業の縁を以て、善道の三十三天に生れて、帝釋王と爲れり。善業盡きしが故に、地獄の中に墮ち、彼處より既に出で、餘業を以ての故に、生れて猪の中に在り。彼天、復、是の如く業の果を觀ず。何なる因縁を以て、復、猪中に生まるるや。彼れ前世の時に、恒常に、獵を喜びて多く衆生を殺し、或ひは多く鹿を殺し、或ひは多く猪を殺せり。彼の業の因縁にて、命終りては活地獄中に生まる。彼の業既に盡き、餘業を以ての故に、生れて猪中に在り。

又、夜摩中の山樹具足の地處の天衆、彼の佛塔内の異處の壁中にて次第に、復。第五の帝釋を見るに、名づけて善意と爲す。何なる業を以ての故に、彼處に生れて、帝釋王と爲りしや。彼れ前世の時に、曾て他人の師子に殺されんとするを見、救うて脱るるを得しめ、憐愍の心を以て將來て家に歸らしめ、多くの日に種々の飲食を供養せり。彼の業の因縁にて、是の故に、三十三天に生れて帝

【一三】 貴糴。價たかく米を賣り出すこと。

【一四】 婆羅門(Brahmana)。淨行と譯す。印度四姓の最高位にあるもの、或は他姓にも、淨行を勸修して嘉納せられたるものにいふ智慧のこと。

釋王と爲り名づけて善意と爲せり。彼處より退き已りて、[一五]焦熱大地獄の中に生る。何なる因緣を以て、彼の地獄に生るるや。本、前生の時、王、衆中に於て妄語にて言を說けり。是の業の因緣にて、彼の地獄に墮つ。善意帝釋、彼處を退き已りて、復、帝釋有り、次第に生まれ、憍尸迦と名づく。彼の夜摩中の山樹具足の地處の天衆、彼の佛塔內の異處の壁中にて、之れを見るを得。彼れ何なる善業なりや。謂く、前世の時、是れ多の財寶の富める婆羅門にて、一[一六]居舍內に婆羅門を置き、大齊會を設け、尊重人を集め、飮食を供養して、其れに財物を施せり。彼の業の因緣にて、是の故に、當來して帝釋王と作り、憍尸迦と名づく。又、本、復、無量の福德を作り、當に帝釋と作りて憍尸迦と名づく。

又、夜摩中の山樹具足の地處の天衆、彼の佛塔內の異處の壁中にて、彼の天處を見るに、帝釋王の處に、佛世尊、釋迦牟尼の說法の勢力有りて、彼の帝釋をして惡道を閉塞せしめて、天中より退き已りて人中に生まれ、是の如きを七返し、是の如き道を行ふ。諸の夜摩天、是の如きを見已りて、希有の心を生ず。

一切の諸の餘の帝釋天王、彼の佛塔內の異處の壁中に皆悉く、其の生る處の惡道を見れども、唯獨り、彼の憍尸迦帝釋の惡道を見ず。此れ何なる因緣なりや。爾の時、彼處の一切の天衆、其の天主牟修樓陀に白して是の言を作さく『一切の諸の餘の帝釋の惡道を、是の如く皆見るに、何を以ての故に、彼の憍尸迦帝釋の惡道を見ざるや。何なる因緣を以て、其の七返するを見て、第八無きや』と。

爾の時、天主牟修樓陀、聞き已りて告げて言はく『汝等、今や聽け。汝の爲に、彼の憍尸迦の道を說かん。此の因緣を以て、我れ今、汝等の爲に說かんと欲す。故に汝等を將れ來りて此の佛塔に入らしめ、此の塔に入り已りて、我れ、汝等の爲に、正法を說かん。何を以ての故に。汝等、一切皆

【一五】焦熱地獄。八大地獄の中の第六なり。

【一六】居舍。又は居除。大樹の名、枝葉五十由旬を覆ふと云はる。梵名不明。經集部九、通頁二七四の脚註を參照せよ

悉く、是の如き放逸を行ひ、天欲に誑かさるるが故に、心癡に迷惑して、正法を聞かず。是の故に、我れ汝等を利益するが爲に、汝等を將れ來りて、佛塔中に入り、汝等の輩をして現に憍慢を離れしむ。汝、放逸を行んには、此身空しく過ぎ、後、退く時に、心則ち悔を生ぜん。是の如き因縁にて、我れ今や汝等の輩を勸めて正法を聽聞せしむ。何なる因縁にて、此中にて惟、彼の憍尸迦の二道に生るる處を見、惡道に生れず、又亦、更に第八返に生ること無きや。此の佛塔內にて是の如きを見ず。彼の憍尸迦、先に放逸を行ひ、大放逸を行ひて、命盡きんとする時、善業の盡く相・退く相、出現す。善知識有りて、之れに語りて言く「汝、憍尸迦、退く相已に現はれたり。今、汝を破壞せんとす。清淨心を以て自ら利益せよ」と。是の如く說き已り、憍尸迦言く「我が爲めに道を示せ、我れをして法を聞かしめて、此處を退かざらしめよ」と。爾の時、僊人の善友の知識、憍尸迦の爲に、是の如く說きて言はく「憍尸迦よ聽け、善方便有りて憍尸迦をして此處を退かざらしむ。此の閻浮提に佛有りて出世し給ひ、甘蔗と名づくる胤の種姓中に生れ、一切を悉く知り、一切を悉く見、一切の業果を皆悉く普く證し、一切衆生に正道を示導し給ふ無上法王なり。汝の爲に說法し、汝をして此處を當に退失せざらしめん」と。彼の知識の所にて、是の如く聞くことを得、既に聞くことを得已り、法を聞くが爲の故に、速疾速疾に閻浮提に向ひて、世尊の所に到る。時に、憍尸迦、一念の頃に於て、世尊の所に到り、佛に見ゆ。世尊、爲めに正法を說き、安慰めて說を爲す。聞き已りて益を得、涅槃城を示せり。彼の說き給ふ所の法は初・中・後善く、義善く、語善く、獨り法を具足して清淨鮮白なり。謂く、苦・苦の報・苦の滅・苦の證、四聖諦[一七]の苦・集・滅・道を說き給ふ。彼の憍尸迦、既に聞くことを得已り、復、世尊釋迦牟尼に問ふて、是の言を作さく「大僊、瞿曇、今、我れに妨有りて、退く相已に現れり。我れ、此處を久からずして、當に退くべし」と。是の如くに問ひ已り、彼の佛世尊、言はく「憍尸迦、是の如く、是の如く、汝の意念の如く、汝の退く相現は

【一七】四聖諦(Catvāri-ārya-satyāni)。四眞諦とも云ひ、四諦のことなり。苦・集・滅・道のことなり。苦諦は三界六趣の苦報なり。是れ迷の果なり。集諦は貪瞋等の煩惱及び善惡の諸業なり。此二は能く三界六趣の苦報を集起すれば集諦と名く。滅諦は涅槃なり。道諦は八正道なり。是れ能く涅槃に通ずれば道と名く。是れ悟の因なり。苦集は迷の因果・滅道は悟の因果なり。此の四諦は聖者の見る所の理なれば聖諦と云ふ。(經集部九、通頁十七、註九八を見よ)

れ、汝の天妨礙あり善業盡きしが故に、放逸を行ひしが故に、汝の身心自在を愛するを以ての故に、異處に到らんとし、大生死の曠野の中に在りて、度ることを得可からず、彼岸に到り叵し。一切世間の愚癡なる凡夫は足力無きが故に、生・老・病・死に悲啼・號哭し、愁憂・苦惱し、愛樂す可きもの無く、恩愛・離別し、怨憎集會し毒蛇師子、種々の畏る可き(もの)彼の曠野に滿ち、日に遇ひて炙られ、愚癡の黑闇・無邊の欲染は以て妨礙を爲し、愚癡の凡夫、諸の獸充滿し、無量百千の分別の樹林は障閉・擁塞し、正法の水無く、善知識の說き給ふ所の正道を離れ、多く無量の邪見の外道有り、邪意・異路は彼の曠野に滿ち、遠離すること能はず。前際・後際の中間・寬遠にして、五道の苦は忍耐すべからず。闇苦は地を覆へり。汝、憍尸迦、此の生死の曠野の處に於て、心に怖畏を生じ、免れ離れられざらん。汝、先來より欲樂に染著す。是の故に覺らず。欲樂盡きしが故に、今や則ち汝の退き至る時を知る。欲は救ふこと能はず。退く時到るに臨み將に異處に墮ちんとせり」と。彼の憍尸迦、佛說を聞き已り、一廂を整服し、頭の天冠を去り、佛足を頂禮し、却きて一面に住し、白して言さく「世尊、頗に、方便の我れをして此處を退かせしめざること有りや、不や。我れをして退かざらしめ、復、此の三十三天に王爲るを得しむるや、不や」と。彼の佛告げて言はく、「我れに方便有りて、汝をして退かざらしむ。何を以ての故に。更に異人の能く是の如き(もの)無し。決定して業を作して、此中に生れ、汝の坐處に坐して、三十三天の王と爲る。是の如き因緣は是れ我が見る所にして、我れ今、汝の此の坐處に久しく坐して離れざるを見る。我れ今や因緣有りて、汝則ち退かざるを見る。所謂、我が說く所の法を聞くことを得ればなり」と。彼の憍尸迦、佛語を聞き已り、合掌して額に在り、心に歡喜を生じて、佛に白し言さく「唯、願くは世尊、善く我が爲に說き給へ、我れ今諦に聽かん」と。彼の憍尸迦、是の如く語り已り、彼の佛、世尊は爲に欲味の過患を出離することを說き、廣く是の如き修多羅を說き給へり。彼の憍尸迦、是の如く聞き

已り、即時に、〔一八〕須陀洹果を獲得せり。時に、憍尸迦、既に果を得已り、次第に退き生れて、惡道を閉塞せり。此の因緣を以て、夜摩の天衆、此の佛塔內の壁中にて、彼の憍尸迦の第八生の處を見ず。彼の帝釋王、涅槃を得しが故に、第七返を過ぎ、第八返の生は則ち得べからず。是の如き因緣を、我れ汝等天衆の爲に已に說けり』と。爾の時、天主牟修樓陀、偈を說きて言はく。

欲は則ち財物に非ず、資益せざるを以ての故に。　戒は信に財中にて勝れ、畢竟して涅槃を得ん。　此の欲は財物に非らずして、有の曠野に入らしむ。　若し欲を解脫せしめんには、乃ち是れ眞の財物なり。　若しは惡處を救はず、若しは寂靜ならざるを樂まんには、彼れ唯、大癡の故に、財に非ざるを財と名づけん。　是の如く物と言ふを得とて、示す所の欲は物に非らず。　若し物に非ざる欲を離れんには、彼れ眞の財物を得ん。　若し寂靜なる道を說んには、彼れの示す道は第一にして、彼の何者にも勝れし道は、智慧の者能く到らん。　若しは欲に近づかざること有り、若しは愛に誑かされざらんには、彼れ善道の處に行き、欲火に近づかざらん。欲は常に足る可からず、欲は亦、寂靜に非らず。愛と共に和合し、火の薪を得て熖ゆるが如く、天・人若しは龍等、足ることを知らずんば則ち失はん。　地獄の火の爲に燒かれて、彼れ失ひ、乃ち是れ失はん。

是の如く天主牟修樓陀、是の如き等の無量種の法を以て、天衆に敎示し給ひて、擁護し、救攝し給ふ。爾の時、天衆極めて厭離を生じ、欲を厭離し已りて、復、天王牟修樓陀に白して、是の言を作さく〔一九〕『唯、大天王よ。我れ已に他の未來世に生る處の諸道を觀ぜり、今、復、自ら我が未來の生の當に何なる道に生るべきやを觀ぜん』と。　牟修樓陀天王、答へて言はく『是の如く當に觀ずべし』と。天衆、聞き已り、彼の佛塔內の則ち異處の壁中に於て、觀察して、夜摩天の退墮する地獄を見る。謂はく、活・黑繩・合喚・大喚・熱・大熱等にて、無量に彼の地獄に墮つるを見るに、頭下に在

【一八】須陀洹果(Srota-āpanna)。小乘四果の初果なり。見道の終り卽ち第十六心の位を前の向位に對して須陀洹果と稱す。聲聞乘の四聖位の中正しく初位を果たせる位なり。

【一九】唯の字は宋・元二本及び宮內省圖書寮本に依れり、原文惟に作れり。

りて、是の如く墮つる者あり、兩臂を舒して、中に墮つる者あり、天身未だ滅せず、是の如くに預め地獄の生るゝ處を見、亦、天處を見るに、業盡きて退く時、彼の地獄の中にて身體爛れ、焰鐵の地上にて、無量の烏、鷲、彼の地處に滿ち、彼處に種々無量の怖畏あり、焰沙は地に滿てり。地獄の衆生、地獄の地に在りて、極めて燒かれ、極めて炙らる。彼天、是の如く地獄の中に墮ちて、頭則ち下に在り、是の如くに苦を受け、第一の急苦・第一の堅苦にて、無量種有りて諸の苦惱を受く。〔二〇〕閻摩羅の使は種々に呵責し、既に呵責し已りて、種々の苦を與ふ。彼の諸の天等は皆、自身の是の如き苦を受くるを見る。是の如く見已りて、彼の佛塔内の異處の壁中にて復、過去の夜摩天王を見るに、地獄の中に在りて、無量種の堅き苦の惡惱を受け、欲の爲に心亂れ、先に境界を樂しみ已に曾て破壞し、諸の惡業を作れり。云何にして作り、何等の相有りや。閻魔羅の使、皆悉く具に說き、之れに語りて言く『汝、本一切境界を愛するが故に、已に惡業を作り、今や此に受く』と。是の如き過去の夜摩天王の其の名は何等なりや。大業と名くる有り、具足衆賢と名くる有り、威德と名くる有り、不壞と名くる有り、意樂と名くる有り、善色と名くる有り、普樂と名くる有り。此の是の如き等の夜摩天王、七地獄に墮ち、善、不善の業果の如くに受く。已に第一の境界の樂を受け、心に未だ厭足ず、愛の爲に壞はされて是の如くに退き墮つ。

　彼の大業の者、何なる業を作りて、夜摩天に生れ、夜摩王と爲るや。昔、人中の時、淨き信心を以て、緣覺に食を施せし業の因緣の故に、身壞れ命終りて、善道の夜摩天處に生れ、夜摩王と爲れり。彼の天處に於て、無量種の境界の欲樂を受け、未だ厭足することを知らず。彼の天處を退き、本、偷盜せし故に、復、黑繩地獄に墮つ。彼れ前生の處にて曾て藥師を作し、他の病む者より、治と相應せずして、其の財物を取る。彼の惡業を以て、是の故に黑繩地獄に生る。彼の大業の夜摩天王の過去の業を觀已り、次に復、具足衆賢の善・不善の業を觀察す。彼れ何なる善業にて夜

【二〇】閻摩羅使（Yamarāja）。極惡の人には琰魔王より鬼卒を遣して之を引き取らしむ。

摩天に生れて夜摩王と爲りしや。彼れ佛塔內の異處の壁中にて、次に復、彼の過去世を觀見するに、淸淨き心を以て、己の財物を捨て、病める比丘に施し、思を以て心に熏す。彼業の因緣にて、身壞はれ命終りては、善道の夜摩天中に生まれて、天王と作れり。又復、更に、境界の河の爲に漂はされ、善業盡きしが故に、退きて［二］叫喚大地獄の中に墮つ。又復、前世の人中の時に、土地の主と作り、放逸を行ひ、心に憍慢を生じ、道行く人甚だ渴し汗を流すもの有り、彼の王見已りて甘蔗酒を與ふ。彼れ酒を飮むが故に、其の本の信を失ひ、卽便ち戒を犯し自らの利益を失ふ。是の如き酒を與へし不善業の故に、身壞れ命終りては叫喚大地獄の中に墮つ。彼天、是の如くに、第二夜摩天王の惡業を行ふを觀察し已り、一切の有爲の生死を見るに、焰と異らず、彼此迭互に相ひ向ひ、說きて言はく『此の大天王、善・不善の無量種の業に相應き果報の如く、是の如く我れに示せり。我等今や、此の天王の所に於て利益を得ることは、父母の所に於て利益を得るが如きと異ること有無し』と。

彼天、是の如く相向ひて說き已り、佛塔內に於て、次に復、異處の寶壁中に於て、迦那迦牟尼世尊の神力にて化せる夜摩天王を見るに、威德と名づくる者は、本、何なる業に因りて、夜摩天に生れて天王と爲りしや。彼の前世の人中の時を見るに、他を破壞して財物を得ず、夜闇中にて說法する處有れば、佛・法・僧の爲に、燈を然して照明せり。彼の業の因緣にて、身壞はれ、命終りては夜摩天に生まれ、天王と爲りて、名づけて威德と曰ふ。久しき時に王と爲り已り、命の長短に隨ひて、身壞はれ、命終る。次に復、四天王天に生まれ、彼より退き已りて［三］鬱單越に生れ、彼處を終已りて、次に復、三十三天に生まれ、彼處より退已りて閻浮提に生まれて、人王と爲るを得、大威德有り、大神通有り、彼處に生れ已りて、放逸を行ふが故に、欲の爲に誑らかされ、心輕く動くが故に、復、殺生・偸盜・邪［三］婬の是の如き等の三不善業を作す。是の如き惡業の因緣を作るを以て、身壞はれ命

【二】叫喚地獄。地獄の名なり。梵語樓獦(Raurava)の譯にして、或は啼哭號叫と云ふ。八熱地獄の第四にして。苦を受けし人、痛苦に堪へず號泣叫喚すれば、かく名づくなり。第五の地獄を大叫喚地獄と云ふ。

【三】鬱單越(Uttaravatti)。卽ち欝多羅究留(Uttarakuru)にして、又は北拘盧洲と云ひ、須彌山の北方に在る大洲の名なり。

【三】婬の字。宋・元・明・三本及宮內省圖書寮本に依れり。原本淫に作れり。

終りては、焦熱大地獄の中に墮ちて、譬喩すべからず。無量種の無量百千の異々りて分別せる地獄の業有るが故に、地獄の中にて諸の苦惱を受け、是の如く已に心怨の爲に誑かさる。爾の時、天衆復、天中にて無量に具足するを見、復、失壞するを見るに、或は樂しみ、或は苦む。是の如く見已りて迭互に相ひ向ひて偈を說きて言はく。

極惡にして復、甚だ惡、大力にして忍ぶべからず、癡なる心は此の業を造り、是の如くにして地獄に墮つ。一切の業は心に由り、因緣にて有の中に在り、癡の爲に壞はさるゝが故に、皆、流轉して苦を受く。種々の大力に苦み、遍く惱みて耐ゆ可からず、業に縛られて世間に在り、而も厭倦を生ぜず。天を退きて人中に生れ、人に死して地獄に入り、彼より出でて畜生に生れ、畜生を出でて鬼に生まる。是の如き業の輪の中にて、世間の業風に吹かれて、世間に流轉するをも、癡なる故に覺知らず。

是の如く彼の山樹具足の地處の天衆、迭に相ひ爲に、彼の迦那迦牟尼世尊の如實に化し給ひし所の無量種の業の佛塔內の壁中に在りて明了なるを說けり。

彼の業を觀已りて、次に復、夜摩天王の善・不善の業にて無量種に生るゝことを觀察し、彼の佛塔內の異處の壁中にて、復、善色夜摩天王を見る。彼れ何なる業に因りて、夜摩天に生まれ、天王と爲りしや。彼の前世の人間の時を見るに、婆羅門の種姓の中に生れ、正見にして邪ならず、他を熱惱さず、善く持戒を修む。獄中に繫がれて極めて苦を受くる者・依る主無き者・或は儉時に飢餓有る者に、多く淨潔なる美好の飲食を與へ、淸淨心を以て、或は齋日に、或は齊に非ざる日に、戒を受け、戒を持す。彼の因緣の故に、縛られし者を救ひて解脫を得せしむ。或は物を以て贖ひて、其をして脫るゝを得せしむ。彼の因緣の故に、身壞はれ、命終りては善道夜摩天中に生れて夜摩王と爲り、名づけて善色と曰ふ。長久き時に、彼の天王と作り、大威德有り、大神通有り。彼れ王と作り已

り、身壞れ命終り、次に復、三十三天に生れ、無量種に大快樂を受ること有り、終に盡くる時至り、彼の三十三天處より退く。次に復、阿修羅中に生れて、其の身は甚だ大にして、大神通有り。阿修羅中の報盡き終已りて人中に生れ、大長者と作り、大威德有り。彼處より終已り[二四]瞿耶尼に生れて人中に在り。彼處より終已りて、復、人中の邊地に生を受け、心輕く動くが故に、復更に、殺生し、諸獸を獵殺し、刀箭等を以て、多種に殺害す。彼の業の因緣にて、身壞はれ、命終りては地獄の中に生れて、地獄の大火に燒然かれ、無量種の堅く惡しき苦惱を受く。不善なる惡業を作せし因を以ての故なり。

山樹具足の地處の天衆、是の如く彼の業報を觀察し已り、復、無量種、無量に諸の善惡の業を分別す。是の如く見已りて、佛塔內に於て、復、異處に向ひ、彼の壁中に於て、迦那迦牟尼世尊の化し現し給ふ所を觀ず。既に往き到り已り、彼の壁中に於て、復、其の餘の希有なる事を見る。往世に曾て夜摩天王有り、名づけて普樂と曰ふ。何なる業を以ての故に、彼の天處に生れて夜摩王と爲りしや。彼れ是の如く見る。本の前に生れし處の人世界中の人身の時、曾て善き意有り、常に師長を禮し、心に敬重を生ず。見る時は則ち起ちて合掌し供養せり。若しは復、餘業にて、佛塔の地を掃き、掃き已りて泥を塗り、華を散き、香を燒き、常に一切の時に、力の如く、分の如くに、沙門、若しは婆羅門に布施し、常に病者の阿那含人に給施し供養し、淨き信心を以て、是の如くに供養す。是の善業の因緣力を以ての故に、身壞はれ命終りては、善道の夜摩天中に生れて、天王と爲り、名づけて普樂と曰ふ。身體皆樂しみ、彼身の光明に種々の色有りて、見る者は心樂しみ、安隱なり。淸涼の光明は遍く五百由旬に滿ち、一切寶の色なり。此の光明は勝れて端嚴・殊妙にして一切より勝れて、譬喩すべからず。閻浮提の人中の勝れし者の、謂はく、月の光明の端嚴殊妙なるが如し。是の如き一切の夜摩の衆の中、普樂天王の光明は最も勝れたり。長久き時に、五欲の功德にて樂を成就

【二四】瞿耶尼(Godhanya)。須彌山の西方に在る大洲の名、義譯して牛貨と云ふ。(經集部九通頁七註七を見よ)

し已り、彼處より退き、彼の業力の餘勢を以ての故に、閻浮提の人中に生れて王と爲れり。王たる所の處は五百由旬にして、中に於て自在なり。彼處に生れ已り、心輕やかに動くが故に、獵して諸獸を殺す。彼の業の因緣にて、身壞はれ、命終りては活地獄に墮つ。彼處を出で已り、不善なる惡業の餘勢の故に、鳥の中に生るなり。

巻の第四十八

觀天品之二十七

夜摩天之十三

彼の諸の天衆、既に是の如き業の果報を見已り、彼の佛塔内にて復、更に、異處の壁中を觀察して、希有の法を覓む。彼の壁中に於て復、天王牟修樓陀を見るに、法行に隨順し、習ひて欲に近づかず、法行を愛樂み、諸の衆生を利益する行を作し、善く一切の善惡等の業を知り、既に業を知已りて、放逸なる行せず、天王と作りしと雖も放逸せず。彼の諸の天衆、天主牟修樓陀の業の果報を觀見し已り、心に是の念を作さく『此の大天王の本の因は何なる業にして、此の天處に生れて天王と爲りしや』と。其の往世の人身の時を見るに、善法を修行し、[一]然燈佛の所にて佛法を聞くことを得、既に法を聞き已りて、攝取して受持し、思惟して修行す。聞きし所の法の如く、是の如く安住す。是の如く聞き已りて、乃至一念も心曾て亂れず、正しく信じて出家し、鬚髮を剃除り、法衣を披服る。既に出家し已り、乃至、微少なる塵許り等の惡にも、大なる怖畏を生じ、梵行を修行す。彼の業因を以て、身壞はれ、命終りては善道の天世界中に生る。謂く、他化自在天處に在りて、彼の天王と作り、名づけて不壞と曰ふ。彼處より退き已りて人中に生れ、[二]轉輪王と爲り、四天下に王たり。彼の業盡き已り、命終りては四天王天に生まる。彼處を退き已りて人中に生れ、復、王と爲るを得、王たりし所の土は一千由旬なり。彼れ命終りて已に[三]弗婆提に生れ、彼に於て王と爲り、大に勝れし身體なり。彼れ命終已りて、次に復、阿修羅の中に生れ、第一の神通にて大勢力有り。彼處にて命終りて復、更に、大富なる長者と作り、恒常に第一の大施を修行し、次に、持戒・智等有りて具足し、所生し處の何處・何處に隨ひて、施・戒・智等の三事を具足す。彼處にて命盡きて、施・戒・

【一】然燈佛(Dīpaṃkara)。提洹竭・提和竭羅と云ふ。錠光然燈と譯す。錠は燈の足なり。釋迦如來の因行中第二阿僧祇劫の滿時に此佛の出世に逢ひて五華の蓮を買つて佛に供養し、髮を泥に布き佛をして之を蹈ましめ、以て未來成佛の記別を受けしなり。

【二】轉輪王(Cakravartirājan)。又、轉輪聖帝、輪王とも云ふ。身に三十二相を具し卽位のときに天より金・銀・銅鐵等、種々の輪寶を感得し、其れを轉じて四方を降伏すと云はれ、人間世界の理想的聖帝とせらる。

【三】弗婆提(Pūrvavideha)。新譯には毘提訶(Videha)と云ふ。須彌山の東にある大洲の名なり。

智を修めて斷絕せざるが故に、身壞れ命終りては善道天世界中の夜摩天處に生れ、夜摩王と爲りて、牟修樓陀と名づく。彼れ是の如き法を次第に相續して、斷絕せざるが故に、彼の心善きが故に、善く調伏せるが故に、放逸を行はず、諸の欲の境界にて其の心を壞はさず。自他を利益し、無量なる善業に隨順して行ふが故に、多く天衆有り、欲に攝められず。爾の時、彼處の夜摩の天衆、偈を說きて言く。

　善き法行に隨順せんには、彼れ則ち常に善を得て、無量千億劫も善業は失壞はざらん。常に增長して戒を持し、智に於て轉じて習ひ行ひ、一切の時に布施し、念を繫けて常に斷たず。[四]施等の三を修行し、三種の過を除き斷ち、彼の過を捨離するが故に、勤めて功德を修行す。天・欲を具足すと雖も、境界の樂に壞はされず、彼れ放逸ならざるが故に、則ち地獄に墮ちず。法は常に斷絕せず、彼れ法行に隨順す。法行に隨はざる者は則ち是れ大愚癡なり。法戒の人に近づき、精勤て智行を修めんには、能く諸有の苦を滅せんこと、日光の闇を除くが如からん。能く法を增長する者は、天・人の爲に禮せられ、是の如くにして異處に生まれ、乃至、涅槃に到らん。若し是の如く法を知り、諦かに法相を思惟せんには、彼れ則ち有を解脫し、當に彼岸に到ることを得べし。智・忍にて、常に愛語し、一切衆生を愍み、或は種々の物を施さんには、此の道は涅槃に至らん。惡しき者は則ち惡に近づき、或は習ひて懈怠に近づき、堅き心にて惡法を增さんには、彼れ地獄道に行かん。何人を見るも皆喜び、何人を見るとも皆瞋り、處々に皆貪著せんには、是の如きが故に癡[五]と名づく。惡法に迷惑せられ、善法を捨離し、癡なるが故に、地獄に入りて、惡法の苦惱を受く。法を行ひて善を推求め、常に欲を捨離せば、牟修樓陀の處の天中は無垢に住せん。

彼の夜摩中の山樹具足の地處の天衆、彼此、是の如く迭に相ひ說を爲し、愛境界に於て怖畏を生

【四】施等の三。布施、持戒智慧の三を云ふ。

【五】癡（Moha）。莫何と音譯す。無明痴とも云ふ。心性闇昧にして事理に迷ふこと。一切の煩惱は之に由つて起るなり。三毒の一なり。

じ、一切の衰惱を皆現に見已り、復、天王牟修樓陀と共に、彼の佛塔內の異處の壁中にて次第に復、夜摩天王牟修樓陀、及び諸の天衆は此處を退き已りて、當に何處に生れて、何なる道に在りやと觀ず。時に、諸の天衆は、彼の壁中に於て皆自身幷に其の天主牟修樓陀の天處を退き已りて、閻浮提に生るゝを見る。一切皆、[六]彌勒世尊出世の時に諸根を具足し、一切皆大種姓中に生れ、共に同侶を爲し、一國土を共にし、迭に相愛念し、大種姓に生れ、皆悉く大富・尊重の姓に生る。是の如く壁中にて皆自身を見る。牟修樓陀は彼の國土に在り、生れて刹利の大種姓中に在り、大富・大力にして、一切人の爲に供養せられ、百千億の寶は其の舍內に滿てり。[七]刹利の家に生れ、以て長子と爲り、名けて善戒と曰ふ。爾の時、彼處の彌勒世尊、寂靜の法を說き、涅槃の城に向はしむ。謂く、四聖諦は功德を具足し、初・中・後善く、義善く、語善く、諸法を具足し、清淨にして鮮白なり。所謂、此は[九]色、此は色の集、此は色の滅、此は色の滅道なり。是の如くにして次第に、[一〇]受・[一一]想・[一二]行・[一三]識の總相を略說せり。一切衆生は安隱にして、濁を離れて涅槃の城に向ひ、障礙有ること無し。[八]諸の世間の爲に、是の如く法を說き給へり。

爾の時、善戒刹利王子、王の長子、彌勒世尊の說法を傳聞し、是の如く聞き已れり。前に說きし所の如く、諸の同侶等も亦、是の如く聞けり。前世に修めし所の善業の因の故なり。彼此、籌量り、一切皆共に彼の善戒刹利子の所に向ひ、二萬人有りて、彼の善戒刹利王子に詣ることは、前に說きし所の如し。爾の時、善戒其の語を聞き已り、本の善業の故に、心に歡喜を生じ、敬重心を生じ、面色清淨にして、一切和合し、同時に皆起ちて共に彌勒佛・世尊の所に詣る。是の如き衆人の善戒を旋遶ることは、亦第二の三十三天の帝釋を圍遶が如し。路に在りて、遙に彌勒世尊を見るに、三十二の大丈夫の相有り、廣く妙法を說き、一切の天・人・世間・幷に諸の[一四]沙門・婆羅門等を利益し、是の如き說を爲して涅槃に入らしむ。初・中・後善く、彼法は清淨にして猶ほし水池の如く、能く諸

【六】彌勒(Maitreya)。梅低梨、迷諦隸とも音譯す。慈氏と譯す。菩薩の姓にして、南天竺の婆羅門の家に生れ、釋迦如來の佛位を紹ぐ補處の菩薩となり、佛に先ちて入滅し、兜率天の內院に生れ、彼の四千歲、即ち人中の五十六億七千萬歲を經て人間に下生し、華林園の龍華樹の下に正覺を成ず。初め過去の彌勒佛に値て慈心三昧を修得せしより、慈氏と稱し、乃至、成佛して猶是の名を立るなり。「彌勒下生經」(竺法護譯)「彌勒上生經」(沮渠京聲譯)、委くば「佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經」)等所謂彌勒六部經參照

【七】刹利(Ksatriya)。印度の社會階級たる四姓の一。婆羅門族と共に、一般民衆の上に位する王士族なり。

【八】諸の字は宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依る。原本、獨に作れり。

【九】色(Rūpa)。以下の受・想・行・識を總稱して五蘊と云ふ。有爲法の用を作すに純一の法なく、或は同類、或は異類、必ず數多の小分相集りて其用を作せば、概して之を陰又は蘊と云ひ、之れを大別して五法となす。色は五根五境等の有形の物質を總該す。

【一〇】受(Vedanā)。苦樂を知

の苦を盡くし、能く一切生死の繋縛を除き、次第に、乃至涅槃に到らしむ。是の如き法を說けり。

爾の時、衆會は海より廣大にして、彌勒世尊は中に在りて說法せり。

爾の時、世尊、遙に善戒の人衆に圍遶しを見て、大衆に告て言はく『此は夜摩天主牟修樓陀并に其の大衆なり。此の夜摩主牟修樓陀は梵行を修行し、先に已に曾て善法の種子を種へ、今や根熟せり。此の夜摩主牟修樓陀、繋縛を已に緩め、多くの不善業を一切消滅し、欲を捨離し、諸の苦の盡る時は、今や將に至らんとせり』と。彼人、是の如く如來の口言の語を聞くことを得已りて、歡喜を生じ、心に敬重を生じ、一切の生死を皆遠離することを得たり。如來の色は甚だ希有を爲し、譬喩す可からず。牟修樓陀、是の如き希有なる佛を見ることを得已り、頭頂にて足を禮し、住して一面に在り、世尊に白して言さく『我れ世間に行き、生死に流轉して、疲倦れ厭離せり』と。

爾の時、世尊の應に法を說きし如く、十千人有りて、常に王に近づき、常に王と共に行き、先より同伴せる者は諸の漏を盡すことを得たり。後の夜摩主牟修樓陀は迦那迦牟尼世尊の壁中にて化せし所の如く、一切の未來を次第に見るに、一切智人の化せし所の種々なる希有なる事無量種に有り。餘の境界并に天世間・魔等の世間(見る)に非らず、及び諸の沙門・婆羅門等の能く見る者無し。正士、如來に近く住する者、善知識に近づきて生死の中を出ること最も第一爲るを除く。

時に、彼の天衆の一切、共に同く歡喜の心を生じ、佛・法・僧に敬重心を生ず。時に、彼の天王并に諸の天衆、復、更に、佛を禮して、彼の佛塔を出で、六經中に於て、彼の迦那迦牟尼如來世尊の化し給ふ所の第五已に竟んぬ。

爾の時、天主牟修樓陀夜摩天王、歡喜の心を生じ、欲の過患を見、復、怖畏を生じ、諸の天衆と共に、次に復、山樹具足の地處を觀察するに、天衆、歡喜びて行ひ、彼處に多く種々の天衆有り、多く園林・蓮華・水池有りて、彼の地處に滿ち、無量種に蓮華の滿てる池有り、愛す可き聲の種々の

覺識別する感情のこと。

【一二】想(Samjñā)。境に對して事物を想像する心の作用なり。

【一三】行(Samskāra)。身・口・意の三業・無明に依つて作りし善惡の行業なり。

【一三】識(Vijñāna)。境に對して事物を了別識知する作用なり。

【一四】婆の字は宋・元・二本及び宮內省圖書寮本に依る。原本波に作れり。

諸鳥有りて、彼の聲を聞く者は則ち快樂を受けん。山樹具足の地處に、多く無量百千の諸の天女の衆有りて、歌舞し喜笑し、種々に遊戲す。多く無量の功德有りて具足し、七寶の樹有りて華果を具足し、多くの山峯有りて皆是れ妙寶にて、彼の地處に滿ちて莊嚴を爲せり。自らの業の果報に下・中・上有り、天衆は自らの業にて、唯、欲樂を樂しみ、彼の地處に滿ちて、迭に共に同侶とし相ひ妨礙げず、彼此相ひ信じ、多くの天子有りて、多くの天女の衆と迭に相愛念し、多く諸の河有りて、河中に飲有り、味は甚だ愛す可し。復、種々の妙寶の堂殿有り、皆悉く行を作し、雜色にて愛す可く、五欲の功德を皆悉く具足し、衆寶の光明にて迭に相莊嚴り、彼の諸の寶殿は爭ひて勝れし光を出し、火煉金の如く、珊瑚・車渠・多くの靑寶有り、及つて山峰等の地處を莊嚴れり。山樹具足の地處の莊嚴は是の如く愛す可し。牟修樓陀夜摩天王は既に觀察し已りて、天衆に告て言はく『汝等、天衆。彼の天衆の歡喜の心にて行ふを看よ。山從り山に至り、一山峰從り一山峰に至り、歡喜びて遊戲し、五樂の音聲にて歌舞し戲樂す。汝等、皆當に彼の天衆を看るべし』と。是の如き天衆已に佛塔を種々に見來りて、天王に答へて言さく『我等、已に見たり』と。

爾の時、是の如き夜摩天王、天衆に告て言はく『如來は已に說き給へり。說き給ひしと相應する如くんば、天中にて衰惱せん。放逸を行ひし天の命、將に盡んとし、善業爛れんとし、退く時至らんとし、戒の果壞れんとせり。行業化するが如きを、癡にて覺知らず。放逸を行ふ天は覺らず、知らずして、地獄・餓鬼・畜生に墮つ。此の無量種の諸の苦にて衰惱し、生死に流轉するは皆本の業に由る。何を以ての故に、彼の命の行ずるや念々に流動して迴す可からざるを以ての故に、業力多くして離る可からざるを以ての故に、此の如き一切の有爲の三相の生・住・滅等の三の過患の故に、無量の諸の衰惱の事有りて、少の味も有ること無し。而も諸の天衆は知らず、覺らずして自ら大樂なりと謂ふ。念々に死に近づき、死時至らんとし、已に死の門に入りて而も覺知らず。此の如く一

切の有爲の法は念々に停まらず。一切の有の命は無常にして破壞し、少年は速に變る。彼天の退く時に苦惱を覺知り、無量種の恩愛別離有り』と。時に、彼の天衆既に天王を見、心に歡喜を生じ、速疾・速疾に、其身を莊嚴り、天衣・垂裓・寶冠・瓔珞・天の妙鬘等を以て其身を嚴り、自の身に光明多し。種々に莊嚴れる天女有り、百千の衆は天子を圍遶き、種々の樂音にて歌舞し戲笑して、第一の樂を受け、自らの善業の故に、是の如き莊嚴を具足し、無量百千種の色なり。往きて天主牟修樓陀に向ふに、爾の時、天王、是の如く見已る。隨順し、瞻觀て卽ち前に稍近づき、其の遊戲して諸の快樂を受くるを見る。爾の時、天王其の心に順ずるが故に、暫く衆中に入り、遊戲して樂を受く。自ら喜樂むに非ず、他天の中に在りて、須臾の間にして喜笑し遊戲す。彼天の心動きて、欲に樂を生じ、遊戲の樂已りて、餘の山峰に到るに、種々の珊瑚・金・銀等の樹は無量百種の妙色にて莊嚴り、無量種の衆鳥の音聲有り、無量種の光明有りて照曜き、無量種に分別する異念有り、無量種の天の妙寶の[一五]珠有りて山峰を莊嚴れり。彼の天往きて、是の如き山峰に到り、到り已りて、心に愛して樂を受く。彼の夜摩主、本曾て見し佛塔の諸天と與に、一處に同く行き、彼の天衆と共に、無量なる境界にて喜樂びて行く。

時に、夜摩天主、天衆に告て言はく『我れ汝等と共に、相隨ひて去り、自身を利益せん。境界を捨つが故に、則ち利益を得ん。境界を捨てずんば則ち利益せざらん。我等は決定して法に隨順して行ひ、乃至、畢竟して涅槃に到らん』と。彼の天衆に向ひ、是の如く說き已り、彼の天衆と共に、寂靜の心を以て、一切皆山樹具足の地處に向ひて行く。彼處に到り已るに、中の一處の種々の流水あり、妙へなる蓮華池に、蓮華林有り、多くの衆鳥有りて、彼池を莊嚴れり。復、種々の寶の蜂有りて莊嚴り、普く皆焰の如し。彼の是の如き處の愛す可き地處に、則ち第六[一六]迦葉佛の塔有り。天主、見已りて、希有の心を生ず。一切の諸寶の光明の中にて佛塔の光勝れ、空を穿ちて出でたり。

【一五】珠の字は宋・元・明三本に依れり。原本、性に作れり。

【一六】迦葉佛(Kaśyapa)。過去七佛の第六。

種々なる妙寶にて莊嚴を爲し、所有の光明は百千の日より勝れ、光明は寂靜なり。寛博き處に在りて、彼の佛塔を見る。爾の時、天衆、是の如く見已り、其の天主牟修樓陀に白して是の言を作さく『此れは是れ、何等の妙寶の光明なりや。前に見し所の如し』と。爾の時、天主夜摩天王、其の語を聞き已り、之に告て言さく『天衆皆聽け、今見る所の如き、此の種々なる寶の勝妙の光明は、前に見し所の如く、此れは是れ、大僊の第六【一七】如來・應正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊・天中の天なる迦葉佛の塔なり。此の佛塔は、諸天の本の業の修めし所の梵行にして本曾て心を修めて利益し饒益せしは、此の佛塔内の寶壁の上に化現して明了なり。餘の如來の所にて應に利益すべきが如く、此の佛塔内も亦復、是の如し。我れ汝等諸天の大衆と共に、佛の正法に於て敬重心を生じ、自らの利益を作さん』と。夜摩天主、是の如く說き已り、諸の天衆と共に往きて佛塔に向ひ、到り已らんには則ち、種々の妙寶の光明を具足せるを見たること、前に說きし所の如し。

爾の時、是の如き夜摩天主、其の天衆と共に、彼の佛塔に入りて、卽ち大僊迦葉佛の像を見るに、閻浮那陀眞金の像にして、妙寶の衣服は無量の光明なり。毗瑠璃寶は師子座を爲し、佛像は上に坐し給へり。現在時に說法し給ふ相の如く、等くして異有ること無し。彼像には則ち喩ふ可からざる色有り、是の如き色、彼天の色を形るに、螢火蟲の日に於けるが如くにして異らず、佛の威德の色も是の如く勝妙なり。爾の時、天王幷に彼の天衆、佛像を見已り、勝れし歡喜の心にて敬重し、深信し、頭面にて敬禮し、冠・瓔珞・鬘の莊嚴の具を去り、色の慢を遠離し、色樂を止め、光明の慢を離れ、一切の憍慢を皆悉く捨離し、心に欲の垢を離れ、頭頂を以て、彼の世尊の足を禮し、轉々して慢を離れ、重ねて復、更に禮し、是の如く禮し已りて、一切の天起きて、一心に動かず。業因を以ての故に、彼の佛塔中の寶壁の上の佛像の傍相に、文字有るを見る。此の修多羅は是れ佛の神力の

【一七】如來。以下世尊まで佛の十號なり。卷第二十二（經集部九通頁十五）註、八十三以下を見よ。

化現する所にして、天・人を利益し、一切世間を皆悉く利益する正字・正句・善義・善味にして、次第に乃至、涅槃を示せり。乃ち是れ、一切の諸の出家人の大和上なり。律・敎・學の如きは此は比丘に十三法有りて以て妨礙を爲すと謂ふ。坐禪し、經律を讀誦するを得ざれば、自ら利益することを障へて涅槃を得ず。若し諸の比丘にして是の如き十三法を捨てざらんには、病・老・死に於て、悲啼き、號哭び、愁苦・懊惱し、則ち脫るゝことを得ずして人中の凡下ならん。實の出家の身・口・意等に非ずして、常に正しき行せず、勤めて精進せず。是の如き比丘、若しは一日、他の臥具・病藥の所須を受けんには則ち、彼の是の如き物を消す能はずして、已に妨を爲さん。所謂、妨とは、能く身をして瘦・懈怠・怖畏せしめて、知曉る所無きなり。是の如きの人は、則ち大力の速力にして勇猛なる、甚だ深き大河を能く渡ることを得ざらん。是の如き人の自體は羸瘦て、懃勤こと能はず、心は調伏せずして、常に懈怠け、坐禪し、經律を讀誦するを知らず、怖畏れ、智無く、自體は[一八]無明に覆蔽せられん。是の故に、五河を渡ること能はず。境界に依止するが故に、渡ること能はずして境界に漂はされ、愛河の中に在り、愛河に漂はされ已りて生死の海に入り、流轉して常に行ひ、休み已むこと有ること無し。何等を十三とするや。所謂、多語の言說を喜樂ぶ。病を治む。工みなる畫。邪惡の事を聞きて歌詠して讚頌す。星を數へて思惟す。思惟して占相す。惟、飲食を貪る。諸の寶[一九]物を求む。王等に親近む。請呼を悕望む。他に諮問せず。多知識を樂む。惡と同處す。此の十三法は沙門の人の坐禪し讀誦するに則ち妨礙を爲す。是の如く妨ぐるが故に、自らの利益を失ひ、利益すること則ち少し。利益を失ふが故に、地獄・餓鬼・畜生に生る。虛妄の出家にて、是の如き人は、旣に出家に非ず、亦、在家に非ず、善法を捨離して、同き梵行の輕賤む所となる。唯、虛名のみ有りて、貝聾と相似し、涅槃の行を聞かず、知らず、憶念する所ろ有るも悉く意に隨はず。身を護る天は[二〇]捨離して去るなり。

【一八】 無明(Avijjā. Avidyā)。癡とも云ひ、過去世の無始よりの煩惱にして、卽ち盲目的に生きんとする根本欲望、渴愛のことなり。

【一九】 物の字は宋・元・明、三本に依る。原本性に作る。

【二〇】 捨の字は宋・元・明三本に依れり。原本、放に作れり。

彼の初の妨とは、坐禪を妨げて能く大亂を爲す。彼の初の多くの言語を喜樂ぶ者は初則ち愛す可くして、後則ち悔み熱す。一切の出家は應に此の法を捨つべし。所謂、多語の言說を喜樂は、多語するを樂むが故に、心調伏せず、正しく行ふ能はず、持戒すること能はず、心常に動亂す。心動亂するが故に、則ち疑の網多し。是の如きの人は喜びて惡人に近づく、彼の惡人とは所謂心を亂すなり。彼れ常に樂みて、伎兒の歌舞するを見、方より方に至り、處より處に至り、遊行して止まらず。若しは城、若しは村、諸の聚落等に常に行きて住せず。其の戲樂するを看て、常に節會にて遊戲する日に、處々を觀看し、諸の聚會處に恒常に往きて看、是の如き人に近き、以て伴侶と爲して自ら己が心と稱す。意常に動亂し、常に言語を樂しみ、晝夜恒に爾くして、休息有ること無く、彼人、意亂れて、聞かず、知らず。餘の同き梵行に常に輕賤られ、他の己を賤むを知り、彼の他人の持戒を行ふ者に、心に瞋忿を生ず。彼人、是の業の因緣を以ての故に、身壞はれ命終らんには、惡道の地獄・餓鬼・畜生の中に墮ちん。

又、彼の多くの言語を喜樂ぶ者に復、大なる過有り。彼の惡比丘、未だ曾て多聞せず、禁戒を毀破ち、多くの言語を樂しみ、自らを高くし、輕く動き、佛を見已ると雖も、心に慚愧無く、慚愧無きが故に、佛を恭敬はず、檀越之れを見て、恭敬を生ぜず、他に輕賤らるるを以て、戒を捨てて俗に還へる。

又、彼の多くの言語を喜樂ぶ者に復、大なる過有り。何なる過有りや。所謂、自ら多く言語を樂むが故に、復、他餘の出家の者を敎へて正法を退かしむ。彼れ自らを破壞して復、能く他を壞はす。彼人、是の如く自他を壞はすが故に、惡しき名聲有りて、四遠に彰はれ出で、僧衆知るが故に、驅遣して捨棄す。此の善き持戒の諸の比丘等は彼の惡しき者を畏れ、其をして失ふこと有らしめ、一切皆此の比丘を捨つと言ひ、此の比丘は是れ惡知識なりと言ふ。同き梵行の者は是の如く惡み賤しむ。

又、彼の多くの言語を喜樂ぶ者に、復、大なる過有り。種々なる言語を先に已に聞き來り、心に樂しみて樂と謂ひ、彼の惡沙門既に聞くことを得已り、心に大樂を生ず。彼れ心に樂むが故に、非法を信じ、非法の義を信じ、法を非法と爲し、非法を法と爲し、亦、其の餘の非法を行ふ人を信ず。此人、多くの語を喜樂ぶ人なるが故に、則ち邪見に入る。彼の邪見の因緣を以ての故に、妄語を言說す。彼人、是の惡業の因緣を以て、身壞はれ、命終らんには、惡道に墮ち、生れて地獄・餓鬼・畜生に在らん。此の多くの言語を樂む過に因るが故に、復、多くの過有り。爾の時、世尊、迦葉如來は偈を說きて言はく。

多く綺語の句を集め、能く心意をして亂れしめんには、梵行を破壞し、涅槃道を妨礙げん。常に、多くの語を喜樂び、凡鄙くして持戒せずんば、其人は、常に坐禪して諦を知る者を捨離せん。　調はざるを根本と爲し、能く善念を失ひ、亦、能く梵行を失ひ、涅槃道をして闇からしめん。　能く天道を妨げ、復、能く惡道を示し、餓鬼道に向はしめ、畜生道に生れしむるは、謂く、多く語るを樂むと名く。　此れを生死の母と爲し、坐禪して誦する比丘は、安隱を欲して則ち捨つ。

彼の佛・世尊・迦葉大僊は是の如く已に多くの言語を樂むに大なる過失有るを說き給へり。

又復、次に、多語を樂まざる所有功德を說く。所謂、比丘、善く心意を正しく、唯正法を樂しみ、唯、正法を知る。是の如く正しく說き、唯、正法を念じ、正法を思惟し、唯、正法を行ひ、恒常に佛を禮す。彼の是の如き等の諸の比丘の輩は未だ曾て見ざる處を能く之れを見る。能く多語の[二]者を捨離するを以ての故に、唯、一正行にして、生死を怖畏る。彼の語に果有り、所謂、若し人、四聖諦の言語を說かんには、彼身に果有り。所謂、佛・法・衆僧を禮拜して翹勤め、精進む。彼れ身に精勤すれば意に則ち果有り、意常に精勤して、[三]自相・同相・思惟を等しくする相は彼れ則ち是の果な

【二】者の字は宋・元・明三本、及宮内省圖書寮本に依る、原本、有に作れり。
【三】自相、同相。自相とは自らの相にて、個性又は特異性。同相とは他と同じ相の意味にて、共通性・一般性の意。

り。三種に精勤んには、涅槃を去ること近からん。若し其れ人有りて、一切方便し、一切精勤して、多くの言語を捨て、惡知識を遠ざけて、常に親近まず、正心・直心にて心を動亂せずんば是の如き三種は則ち涅槃に到らん。三種の道とは、何等を三と爲すや。所謂、心に[23]阿那波那を念じ、不淨界の無常にして破壞するを觀ずるなり。此の一切の道を正しき心は能く得、不正なる心に非ず。多く言語するを樂むは、心に正しく念ずるに非ず、此れ三道を妨ぐ。乃ち是れ惡趣の地獄・餓鬼・畜生の行なり。此の羂は人を縛りて將に地獄・餓鬼・畜生に入らしめ、三惡道と去らん。是の如き衆生は多くの言語する爲に誑惑せらる。是の故に、喜樂て多語を言說するは、毒の如く、刀の如く、火の如く、蛇の如く、險岸に墮ちるが如し。黠慧き比丘は坐禪して讀誦し、常に應に捨離すべし。

彼の多く言語するは能く多人を誑きて、地獄・畜生・餓鬼に墮せしむ。彼れ若し餘業にて人中に生れんには則ち伎兒の常に戲るる人と爲り、遶行・綱絕する力士にて舞戲し、種々の歌等にて他門の傍に在りて處々に行乞し、市肆にて貿易して以て自らの命を濟ふ。多くの言語するを樂まんには、惡蛇に齧まれ、多く言語するを樂まんには、大火に燒かれん。墮ちて是の如き多く言語を樂む[24]危嶮の處に在り、多く言語を爲して、惡毒に螫まる。是の如き癡なる人、樂みて多く言語し、所有の枝條に迷惑せらる。一切の迷惑するは、多く言語するに由る。多く言語するを樂しむは是れ大なる闇の聚にて、惡道を畏れん者は、一切皆應に是の如きを捨離すべし。捨て已りて、次第に精勤みて修行すれば則ち[25]見諦を得ん。是の故に、應當に、是の如く[26]學を作すべし。空閑なる曠野の寂靜の處にて、諸の妨ぐ聲無く、唱喚の聲・歌聲・鼓聲無く、智を修むる日處、山谷の巖窟・樹根等の處・福德の處にて聲の妨無き處に、獨りにて餘人無く、一處に在りて坐し、一心正念に煩惱の魔を壞はす。是の如く善く作し以て心を調伏し、心をして寂靜ならしむ。一切の多語の言說を離れ、一切の親舊・知

【二三】阿那波那(Ana-pāna)。安般法とも云ふ。入出息觀のこと。

【二四】危の字は、元本に依れり、原本臨に作れり。

【二五】見諦。眞理を證悟するなり。聲聞の預流果已上、菩薩の初地以上の聖者のことなり。

【二六】學(Saikṣa)。尙、學修を須ゐる境地なり。修道的見地より未だ修行を要する境地にして阿羅漢に至るまでの一切の聖者等に名く。

識・兄弟來去して相見るも、語言を皆離れ、心に悕望まず、唯、獨の處を樂み、以て安樂を爲し、常に禪、誦を行ひ、四顛倒を離る。彼れ十六種の阿那波那を皆悉く念知し、夜無く・晝無く、勤めて精進を發し、生死の縛の中にて、能く脫れ、能く走る。能く是の如き者は則ち勝れし處を得ん。若し本より未だ常に安隱の處を見ざらんには、彼人則ち應に多くの言語を離るべし。智慧有る人・善き心意の者・堅固に修行する沙門の人は懈怠を離れ、此の一法の所謂、喜樂て多語を言說するを捨つ。

又、第二の妨礙ぐる法を斷つ。應に行ふべからざる所の殺生を攝むるが故に。何なるは第二なりや。所謂、病を治むる醫師の比丘は坐禪する能はず、讀誦する能はず。是の如き行藥の醫師の比丘は異道にして異を作し、常に病人を覓め、常に病を治すを求め　是の如き業を作し、大いに貪を增長す。彼れ貪心の故に、是の如く思惟すらく『衆生に多くの諸病、無量の病有ることを悕望む。彼の病る衆生は多く我れに供養し、多く我れに與へん。是の故に、我、多くの處に行き、恒常に、藥を受け、村從り、村に至り、城從り城に至り、邊地の處より邊地の處に至らん』と。彼の惡比丘、旣に是の如き思惟を作し、念じ已りて、貪は則ち增長す。是の如き比丘、貪增長し已りて、心中に垢生じ、坐禪する能はず、讀誦する能はず、是れ善行に非ず。

又復、病を治せんに則ち垢の過を得ん。彼の惡比丘、自ら比丘と謂ふ。若し諸の衆生の病患の者有らんに、彼の惡比丘、其に藥を示して言く『速に將に油をもち來るべし。若し油無くんば則ち胡麻を壓せ』と。胡麻を壓すが故に、多く蟲の死すること有り、是の如きを名けて、疾く治す過と爲す。妄りに沙門と作り、唯、口に自ら我れは是れ沙門なりと言ふも、實は沙門に非らず。

又、病者を見、病を瞻ふの人に敕し、其に肉を與へしめて、是の如き言を作さく『新に殺せし者を須ひ、多の脂なるを用ひざれ、自ら死せるを用ひざれ、病死せるを用ひざれ、毒死せるを用ひさ

れ、蛇にて殺せしを用ひざれ、乾きし者を用ひざれ、瘦せたる者を用ひざれ』と。是の如く約敕し、約敕するが故に、彼れ則ち殺生す。殺生するを以ての故に、殺生罪を得。若しは殺生を敎へ、若しは殺生する者の彼の二種の人は、同一の殺業にして、活地獄に墮つ。是の故に、應に病を治する業を作るべからず。貪心を以ての故なり。

又復、更に、病を治する過有り。唯、口のみにて我れは是れ沙門なりと言ふ可くして、實は是れ大賊なり。是の大惡人、彼の衆生の多く病みて痛む(ものの)爲の故に、處々に種々の藥艸、若しは樹・樹枝・若しは樹果等を採拾し、財物の爲の故に、皆悉く採取す。彼の諸の藥艸は一切の蟲を攝め、蟲の依る所と爲り、蟲、其の中に在りて處々に皆滿てり。彼れ貪心を以て、物を得んと欲するが故に、地中より拔き取り、或は割り取る。拔き取るを以ての故に、地處の蟲を殺し、或は彼蟲の依止する所の處を破る。若し割り取る者は則ち內の蟲を殺し、彼處にて蟲死す。此れ病を治する過にして、彼れ心に是の如く不淨の命を樂しむ。何處にか禪を修め、讀誦すること有り得んや。彼れ心に恒常に病を治するを喜樂ぶ。

又復、是の如く病を治する比丘、惡心にて思惟して、大いに勝れし過有り。是の如き比丘、惡法を思惟して、是の如き心有り『多くの人をして皆病患有らしめんことを欲す。病者若し多からんには、我れ則ち多く財物・供養・飮食・臥具を得ん』と。是の如くに多く利し、彼れ欲に心壞はされて、善法を念ぜず、禪・誦を樂はず、尊長に近づかず、善き友に近かず、亦、佛を禮せず、不善の行を作し、身壞はれ命終らんには、惡道に墮ち、地獄の中に生まれん。彼處より出づることを得、餘業を以ての故に、彼の善業の如く人中に生れんには、則ち常に、病に痛み・貧窮・短命なり。彼れ惡・不善にして、病を治せし業の故なり。

又、病を治する過にて、法に依て病を治するも、亦復、過有り。無始より以來皆三種有り、謂く、

風・熱・冷なり。此の三を調停はんには、身則ち安樂にして惡道に墮ちざらん。是れ身分の故に、身滅するを以ての故に、彼の三も亦失す。而も彼の愚癡なる凡夫の人、未だ曾て聞き來らず、未だ智慧有らず、實には沙門に非ずして、而も自ら說きて、我れは是れ沙門なりと言ひて、彼の三種を治す。何なる義・何なる因にて、鬚髮を剃除り、法衣を披服て便ち出家せるや。何なる故に、此の無始より以來の欲・瞋・癡等を捨てて、身に攝むる所に非ざるや。若しは身を燒くとも、彼の三は燒かれず、失はず、滅せず、五道の中に於て隨逐し繫縛して、處々に共に行ず。何が故に、此の欲・瞋・癡等の三種の大過を、先に療治せずして、先に、彼の風・熱・冷等を治するや。此の妄に出家して、愚癡・無智・凡鄙なる人、自の心に誑かさる。癡有る人の如きは主無く、伴無く、貧窮物無く、彼人、乃ち大勢力の怨有りて、日日に惱亂す。彼の愚癡の者、若しは財物を以て大力の怨に與へて、遮障す可からず。若しは勢力を以て、亦、防ぐこと能はず。是の如き怨の大勢力を以ての故に、恒常に伺求して、來りて殺害せんと欲す。此の愚癡なる人は彼の怨を恐れずして、他の餘人の微小なる怨有るを知り、是の如き彼人の微少なる怨に則ち怖畏を生ず。愚癡の人と共に、以て同侶を爲し、愚癡なる者同侶に語りて言く『我れ今、相ひ爲に、彼の怨を除却せん』と。彼の愚癡の者の大勢力の怨は、其の愚癡を知り、其の懈怠にて放逸を行ふを知り、是の如く知り已りて卽ち往きて之を殺す。何を以ての故に。彼の癡人、他の事を作すを以ての故なり。是の如く、是の如く、彼の沙門の人にして、自ら沙門と謂ひ、沙門として立つとは自身の大勢力の怨にして、他の事を作すを捨離す。彼の欲・瞋・癡は無量に隨逐して離れず、生死の道を示し、大力の勢有りて、處る所無く、尋求す可からず、唯、智のみの知る所にして、癡と同行す。是の如き大怨の因緣を除くが爲に、自身の親舊・知識・妻子・兄弟を捨離し、剃髮して出家す。既に出家し已りて、而も是の如き大勢力の怨を觀察する能はず。財物の爲の故に、他に語りて言く『汝の怨家なる風・熱・冷等を、我れ爲に、除滅せん』と。是の如くに

【三七】「無伴貧窮無物彼人乃有大勢力怨」は宋・元・明三本、及宮內省圖書寮本に依れり。原本に缺く。

心を亂せし、愚癡の人に、死王來り至り、三種の怨家隨逐して離れざらん。彼の力ある大なる怨とは謂く、欲・瞋・癡なり。彼人、乃ち欲の繩に繋がれ、極めて放逸を行ひ、將に他世に向んとするも、樂みて他事を作し、大いに貪りて意を亂す。是の故に、若し人、此の過を知り已らんには、病を治すことを用ひざれ。若し人、病を治せんには、應に欲等を殺すべし、則ち常に病無けん。爾の時、世尊迦葉如來は偈を說きて言はく。

風等には多の過無し、欲等の過は則ち多し。風等は惡道ならざるも、欲等は地獄に墮つ。風等

心の過は是れ大なる過にして、常に、惡道に行かしむ。是の故に、除けば則ち樂なり。

を除くとも樂に非らず。若し、自らの作せし業を捨て、他の作せし所を喜樂ばんには、彼人、速に失壞て、智者の爲に笑はれん。風等失壞するが故に、衆生は則ち身を失はん。欲等は曾て失はずして、生死は無量に倒るなり。彼の欲等の滅せんには樂にして、風等の滅するは樂に非らず。欲等滅するを以ての故に、畢竟して勝れし樂を得ん。心を治するをば病を治すと名け、身を治するは、病を治するに非らず。心の病を治するは知り難く、風等を治するは解し易すし。

彼の佛世尊、迦葉如來は、此の因緣を以て、是の如くに、出家の人を遮障して、病を治するを聽さず。又、出家人の醫方にて病を治するに、無量の過有り。謂く、貪心を生じ、餘の醫師を見ては、心に則ち慢を生ず。善からぬ語を以て、餘の醫師を毀ち、作業を妨廢せしめ、心に嫉妬を生じ、餓鬼の業を攝め、是の如くに、餓鬼道の因を造る。彼の人、是の如く妬心にて心を動かし、大貪心を生ず。貪を生ずるを以ての故に、婦女を見る時に、善く觀察せず、以て自ら妨亂す。彼人、癡なる心にて他の婦女を見、欲發りて心を壞はす。他人の風・冷・熱等を治して、自ら身中の諸病の欲・瞋・癡の病を增長す。欲等を增すが故に、是等の因緣にて、地獄・餓鬼・畜生の種々の苦惱を增長す。彼れ

欲等の爲に破壞さる。不善の醫師には則ち惡見有り、大なる過に縛られて、將に地獄に入らんとせり。是の故に、一切の出家の人常に、應に精勤みて欲等の病を除き、風等を治すること勿れ。此れ[二八]第二法にして、沙門の人、涅槃を求めんと欲せば、應に是の如く醫藥にて病を治し、坐禪し、經律を讀誦することを妨廢すべからず。

又、第三の妨礙の法の應に行ふべからざる所を捨てよ。何なるは第三なりや。所謂、畫師にして、出家の業を畫きて則ち應しき所に非ず。云何にして是の如くに、欲を除かんが爲の故に、家を捨てゝ出家し、更に餘の欲を生じ、既に、世間の心業の畫を知り已りて、其の餘の種々の彩畫を作すや。若し心業の畫を知らざる者有らんには、種々の諸色にて彩畫を作す可し。彼の出家の人は常に應に、是の如く諦に彩畫を知るべし。五大の彩色にて五道を畫作す。心種雜はるが故なり。何等を五と爲すや。謂く、大彩色にて五道を畫作す。心の畫師は大白の勝れて淨き彩色を以て、天道を畫作す。信心を以ての故に、樂みて大施を行ひ、慳・嫉妬を離れ、第一白法なる施・戒の山起りて、諸天畫作して、心の畫師は、天道を畫作す。

又、出家の人、復、應に業の彩畫を觀知すべし。多種なる業の彩にて人道を畫作せんに、人は則ち差別して下・中・上有り。若し是れ富める人にして、能く持戒する者は、彼人則ち是れ、第一白業の彩色にて畫かる。若し人、大富にして持戒する能はずんば、彼人則ち是れ黑白の業の彩色にて畫かる。若し人、貧窮にして能く持戒せんには、彼人は則ち是れ赤白の業の彩色に畫かる。若し人、貧窮にして持戒すること能はずんば、彼人は則ち是れ垢黑の業の彩色にて畫かれ、若し人、懈怠にして復、多欲ならんには、彼人は則ち是れ黑黃の業の彩色にて畫かれ、若し人、端正なる大種姓に生れんには、彼人は則ち是れ白淨なる業の彩色にて畫かる。若し人、中の種姓に生れて在らんには、彼人は則ち是れ紅赤の業の彩色にて畫かれ、若し人、下の種姓に生れて在らんには、彼人は則ち是

〔二八〕第の字。宋・元・明三本及宮內省圖書寮本に依る、原本、等に作れり。

れ垢黒の業の彩色にて畫かる。心の畫師は善業の彩を以て人道を畫作し、人中に生れて、若しは國王と爲り、若しは大臣と爲るも而も復、不善の業を造作せんには、是の如き人、白業の彩滅して、黒業の彩色增長し出生せん。又復、若し人、卑賤き家に生れ、若しは極めて貧窮なるも、常に布施を行ひ、禁戒を受持せんには、是の如き人、黒業の彩滅して、白業の彩色增長し出生せん。

又復、若し人、中の種姓に生れんには、善妙の色有りて、或は中業を作し、彼の心の畫師赤白の業の彩色にて畫かん。是の如く無量の雜業を彩色せる。業の畫の師は、此の人世間の種々なる異業を雜色にて彩畫し、差別して同からず。又、出家の人、更に餘道を觀ず。所謂、復、地獄の衆生を觀るに、心の畫師は二種の業の彩にて畫作す。所謂、黄と黒なり。黄とは謂く火なり。黒とは謂く嫉妬にして、生れては下・中に在り、地獄の中に生れ、是の如き二種の彩色にて畫かる。彼の比丘、是の如く地獄の彩畫の色を觀已り、復、飢渇にて身を焼かるゝ餓鬼を觀るに、黒業の彩色にして、彼の一切の鬼の一一は各々の業の色にて畫かる。

又復、何なる業の彩色にて畜生を畫作するやを觀ず。謂く、黒と赤の色なり。彼れ若し第一の苦惱・第一の怖畏を受けんには、是れ黒色にて畫かん。若し相殺害せんには、是れ赤色にて畫かん。是の如き色は、是れ心の畫師の是の如き色を畫くなり。

又復、畜生の三處を略說せんに、迭に相怖畏れ殺さるを畏れ、縛らるゝを畏れ、他に肉を食はる。虛空を行く者は、所謂、孔雀・雉・鵝等の鳥にして、陸地を行く者は謂く、牛・水牛・猪・馬等の畜、水中を行く者は所謂、魚等にして、彼れ黒色にて畫く。若し殺さるゝを畏れずんば、彼れ赤色にて畫かん。謂く、天中の象なり。是の如く五道は五種の彩色なるも、彼人は是の如くに思惟すること能はず。一切世間は種々に苦惱し、天中にては五相、人中にては爲作し、畜生にては相殺し、餓鬼にては飢渇し、地獄の中にては大苦惱を受く。是の如くに種々の雜業の彩色にて畫作せらるゝも、

愚癡・少智にして忌まず、慮からず。是の故に懈怠にして、坐禪すること能はず、持戒すること能はず、讀誦すること能はず、心の畫師を知ること能はずして、餘畫を作る。第一の畫とは、謂く、世間中の生・老・病・死なり。怨憎集會し、恩愛別離し、寒熱・飢渴あり、迭に相破壞し、毀呰たれ供養さるゝ僮僕・人主あつて苦惱し安樂する地獄・餓鬼・畜生・人・天の業の色にて、雜へて生死を畫けるなり。（二九）種々に修行する能はず、思惟する能はず。心に念知し已りて厭離を生ぜず。彼の比丘、坐禪・讀誦の業を捨離し、餘心にて畫作するも沙門の法は禪・誦を本と爲すなり。

復、異法有り。生死の處を畫きて、思惟すること能はず。而も便ち思惟して更に異畫を作る。所謂、種々の根にて境界を緣ずるに若し衆生有りて、境界を樂む者は、長久き時に、地獄・餓鬼・畜生に流轉す。此の法は云何ん。謂く、眼色を見て、境界を愛樂み、欲心を生じ、彼の色中に於て堅固に染著し、彼人、則ち黑業の彩色の地獄・餓鬼・畜生等の處を攝めて、是の如き色にて畫かん。

若し、彼の衆生、眼に色を見已りて是の如くに思惟すらく『此の色は無常にして、動轉し變異す』と。彼人、是の如く喜ばず、樂まず、貪らず、著せず。是の如くんば則ち白色の業を攝むることを爲し、天人中に生れ、乃至涅槃せん。是の如き人有りて、眼に色を見已りて、樂まず、緣ぜず、（三〇）怖れず、念ぜず、心に受用すること無く、欲心を生ぜずんば、彼人則ち第一の白業の彩色を以て工畫し、天・人中にて快樂を受けん。彼の惡比丘は、是の如き癡なる心にて、思はず、念ぜず、禪ならず、誦せず。若し眼にて色を見んには、境界の中にて喜樂びて染著す。是の如くに縛らるゝ者は則ち是れ黑業の彩色にて工畫す。黠慧き人は則ち彼の黑業の彩色の惡しき意業の畫を捨つ。唯、應に坐禪して經律を讀誦すべし。

又復、畫師の沙門を觀察するに、思惟して畫く時、何なる像を畫作するや。謂く、耳に聲の若しは愛し、愛せざるを聞くに、彼れ如實に觀ぜんには、是の如き聲は無常にして、住せず、堅からず

【二九】種の字。宋・元・明三本、及宮內省圖書寮本に依る。原本、雜に作れり。

【三〇】怖の字。宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依る。原本、悕に作れり。

して破壞す。是の如く知已りて、心に喜樂ばず、歡喜を生ぜず、念ぜず、樂まず、聽かず、觀ぜず。是の如くんば白業の彩色にて工畫す。彼の白色の畫は天・人中に生れ、天中に生れ已らんには、是の如く第一の種々の畫勝れり。彼の畫師の惡き意の沙門は、自ら沙門と言ふとも、曾て心を起して、聲の畫の流るゝを思惟せずして、餘畫を作り、坐禪して讀誦するを思惟せず、禪、誦を捨離して、白業を修めざるなり。

又、彼の聲を聞く癡なる意の沙門は曾て聞き來らず、愚癡・無智にして、是の如く思惟すらく『此の聲は愛す可し、能く心をして喜ばしめ、能く我をして樂しましむ』と。彼の惡しき沙門、不善を觀察するが故に、彼の聲を觀じ、心に悕望を生じ、之れを因として、欲を生じ、彼の聲中に於て、心に喜樂を生ず。此れ黑の彩色なり。心の畫師は地獄・餓鬼・畜生を畫作し、彼の惡しき沙門は業の畫を知已りて、餘畫を作り、坐禪して讀誦する等の業を捨離す。

卷の第四十九

觀天品之二十八

夜摩天之十四

又、惡比丘、雜色の種々の畫を離れ已りて、更に餘畫を作る。何なるは餘畫なりや。所謂、餘とは根の境界に因りて、生死に繫縛さるなり。彼の根の境界は、或は愛す可く、或は愛す可からざる有り。謂はく、鼻に香を齅ぎて、彼れ觀察し了らんに、鼻に齅ぐ所の者は、若しは香、若しは臭なるも、香を樂しまず。不善を觀察するとも、心を壞はすこと能はず、是の如くに思惟すらく『此の香は無常にして、念々に住せず、堅からず、破壞せん。是の如き實の香も本無くして後に有り。已に有れば無に還らん』と。彼れ是の如くに、香・臭を樂む可しとせず、心も亦轉ぜざれば、彼れ白業にて畫かれ、善業にて畫かるが故に、人・天中に生まる。彼の畫師の惡意の沙門は、是の如き業を捨てゝ、餘畫を作し、禪・誦の業を離るゝなり。

又、餘香を齅ぎ、香を喜樂みて、心、迷惑するが故に、悕望みて迷はされ、不善を觀察すれば、心則ち破壞す。是れ黑色の業にして、常に是の如き黑業の彩を集むるが故に、地獄・餓鬼・畜生を畫きて、諸の苦惱を受く。彼の惡沙門は是の如き業の彩色の畫を捨離して、思惟する能はず、餘畫を作し、坐禪し、經律を讀誦するを妨廢ぐ。

又、雜業の種々の彩畫有り。所謂、舌にて味ふに、愛す可きと、或は愛す可からざると有り。彼の善き比丘は愛す可き味を得るとも、喜ばず、瞋らず、念ぜず、樂まず。此の美味を常に善く觀察して、不善の觀無し。此の如き味は本無くして、後に有り、已に有れば無に還らん。手にて彼食を捉へ、口中に內れ、舌を以て之れに觸る。舌、食を得已りて、彼食を甜と名づけ、卽ち美味を生じ、

熟爛せる惱涕は額頰の中に下り、斷の中に出で、舌頭に味を得、涎と和合して牙の關中に在り、咀して之れを嚼す。是の如くにして、愚癡なる凡夫を繫縛す。彼人、是の如くに舌に味を思惟し、正しく觀察する者は、是れ白色にて畫かる。此の白色の畫は、若しは人中に於て、若しは天中に於て、第一の樂を受く。彼の惡沙門は、是の如き業の畫を觀察すること能はず、餘畫を作り、坐禪し、經律を讀誦することを妨廢す。彼の愚癡の人、味を食して舌に在り、甜に舌觸れ已りて、乃ち其味を得、是の如き念を作さく『此の食は好き味にして、第一の好き味・勝れし味・美しき味・色・香を具足し、第一の淨潔なり』と。食に慢心するが故に、身・口・意等に惡業を行ふ。此れ黑業の畫にして、地獄・餓鬼・畜生に在り、三處は明了なり、彼の惡沙門、自ら沙門なりと言ふとも、正しく觀察せずして破壞せられ、以て自ら妨亂し、業畫を捨て已りて、更に、餘畫を作り、以て禪・誦を妨ぐるなり。

復、業の畫有り、業は世間を畫く。謂はく、唯、根有りて境界に相著し、身に觸・識有り。彼の實の觸を、心に善く觀察す。此の生ずる所の觸に則ち三種有り、常に非らず、住せず、破壞せざるに非らず。唯、薄き皮有り、之れを見て愛を生ず。唯、根有る處は是れ淨潔に非らず、常に非らず、樂しみに非らず、我法有るに非らず。唯、假に和合するが故に、名づけて身と爲すも、四大は篋の如くにして、箭の體に入るが如く、常に妨げ、常に病み、一切の過の處なり。是の如く、眞實に身の觸を觀察せんには、觸は則ち妨げず。此の觸は唯、客にして、能く妨礙を爲し、自己の物に非らず。若し能く是の如く善く觀察する者は、白色の業にて畫かれ、天・人中に生まる。彼の惡沙門、沙門として立つ者は、心業の畫師の種々の異異る業畫の世間を、是の如く思惟し、觀察するを作さず。彼の惡比丘は捨てて觀察せず、更に、餘畫を作して、坐禪し、經律を讀誦するを妨廢す。

又復、愚癡なる凡夫の人は善く觀察せず、此の觸を、正しく觀察せずして、是の如き心を生ずら

く『我が此の觸は、第一に樂しき觸にして、身體肥盛して則ち樂の因を集め、此の樂しき觸を得。我れは則ち樂を受く』と。是の如き愚癡なる凡夫の人は、此の觸を、善く觀察せず、善く思惟せずして、此の黑業の彩にて、地獄・餓鬼・畜生を畫作す。彼の惡沙門、沙門として立つ者、彼の業の畫を捨てゝ思惟せず、更に、餘畫を作り、坐禪し、經律を讀誦することを妨廢ぐ。

又、惡沙門・沙門として立つ者、世間の法を樂しみ、出世の法に非らず、出世の法を思はず、念ぜず。出世の法とは、四聖諦を謂ふ。滅・道の〔一〕十六種の行・阿那波那の出息・入息・及以び〔二〕四禪・四種の梵行・〔三〕四沙門果を修めず、行ぜず、此の法を捨て已りて、餘の鄙しき業を作して、心寂靜ならず、唯、少樂を爲し、少の彩色にて畫き、坐禪し、經律を讀誦することを妨廢げ、更に、異色を求め、寂靜の畫ならず。彼れ是の如く正しく觀察せざるに因て、身壞はれ、命終らんには、惡道に墮ちて地獄の中に生まれん。

又、彼の畫く者に、大なる過にて惡道の地獄に入る因緣有り。所謂、端正なる婦女を畫作し、種種に善妙の色にて嚴飾る。愚癡なるを以ての故に、心に喜樂びを生じ、他の餘人をして見已りて愛樂せしめ、欲を發して心を亂れしむ。何に況んや、作者に於てをや。是の如き人、能く自他の二をして倶に欲を發せしむ。身壞はれ、命終らんには、惡道に墮ちて地獄の中に生れん。爾の時、世尊迦葉如來偈を說きて言はく。

若し業畫を思はずして、餘の彩畫を作らんには、畫の火の爲に燒かれて、地獄の中に入らん。
無漏の法を思はずして、漏法を樂しまんには、彼人、心癡に染り、險岸に臨みて墮ちんとせん。　若しは人應に禪・誦すべく、若しは應に林に依つて住すべし。　癡なるが故に、所應を捨てゝ、則ち地獄に墮つ。　癡なるが故に、惡を思惟し、大力なる畫の羂を作り、畫の爲に誑らかされて、將に地獄に向ひて去らんとす。　彩色は雜を爲すこと非きも、心の畫は乃ち是れ

〔一〕十六種行。四諦を觀ずるに一諦に各四種の行相あり、合して十六行相なり。
〔二〕四禪（Catur-dhyāna）。四禪定又は四靜慮と云ふ。此の四禪定を修して色界の四禪天に生ずるなり。
〔三〕沙門果。沙門の行を修せしものの得果なり。

雜はる。彩畫は、雨ふれば則ち滅すれども、心の畫は失ふ可からず。若し人、心に畫かずんば、彼の畫は心に如かず。業畫は是れ大畫にして、三界の處を畫くなり。衆生は種々の色にて、五道中に流轉し、一切は是れ業の畫にして、心の畫師の作る所なり。此の心の畫師、業の羅網を畫作して、一切衆生を縛り、三界に流轉す。雨・塵を炙く烟等にて、畫の色をして失滅せしむるとも、彼の心の業畫は千億劫も失はざらん。一切の地は失壞し、海水も亦、乾し竭くるとも、若し心の畫の作る所は、畢竟して破壞せず。癡なる者は觀察せずして、種々に自らの業にて畫き、命・財物を以て、餘の畫の業を作る。

畫師の沙門は坐禪して經律を讀誦するを妨廢げ、是の如く分別して、無量の過有り。畫を作るを樂む者は、善人を愛せず、不善の者を樂しむ。是の故に、比丘は應に畫を作るべからず。畫は其の心を亂して、涅槃を得ず。乃至、善く觀察して一の善法をも行修すること能はず。是の故に、應當に是の如く正しく學ぶべし。若し諸の比丘、涅槃を求んと欲し、惡業を畏る者は、乃至、自ら手に畫筆を執らず。我れ今、呵責せん。此の三種の法を、沙門の人は應に作すべからざる所なり。彼法の是の如き過を知るを以ての故に。又、第四法を、沙門の人は應に作すべからざる所なり。何なるは第四なりや。所謂、邪に惡・不善法を聞き、歌詠して讃誦するなり。是の如き比丘は妻子・親舊・知識・父母・兄弟を捨離し、煩惱を斷たんと欲し、坐禪して讀誦す。是の故に、出家す。若し心を亂さずして、常に一心なる者は能く煩惱を斷ちて、能く妨亂無し。若し惡事を歌詠して讃誦し種々の憶念を作さんには、心意則ち亂れん。彼れ心を亂すが故に、善法を妨礙して、禪誦する能はず、師長に近づかず、正法を聞かず、佛・法・僧寶を供養することを樂まず、威儀を攝めず、善く威儀の戒を持する能はず。常に歌詠を作して、心に愛樂を生ず。是の如く歌詠し、彼の詠ずる所に依るに、過去の種々の曾て聞きし法・非法を攝むる所にして、唯、彼の法を聞き、耳の樂と爲し、善く觀察

するに非らず。攝むる所、集むる所は綺語と相應す。彼の是の如き法は是れ惡沙門の信樂する所にして、數々聞き已りて、彼の惡道を行ふ、惡道を行ふが故に、復、俗人と作り、自ら正法を壞はす。歌詠するを樂しむが故に、常に歌詠を作して則ち禪・誦するに懈怠して勤めず、乃至、應に衆僧中に入るべからざらん。一切の飲食を皆應に食すべからず。懈怠は尙爾り。何に況んや、破戒に於てをや。衆僧中に入りて、猶尙、應からず。何に況んや、牀敷・臥具・病藥・所須を受くるを得、或は復、他の禮拜・恭敬を受くるに於てをや。懈怠の人も應に受けざる所なり。是の故に、比丘にして常に歌詠する者は、歌詠するを以ての故に、坐禪して經律を讀誦するを樂しまず。歌詠するを樂しむ者は、唯、常に、勤めて心に歌詠を習作し、常に、一切時、歌詠に依るを樂み、種々に方便して心意を間錯へ、種々の癡の爲に破壞せられ、彼の歌詠、種々の味有りと讃ふ。彼人、是の如く自ら心意を亂し、命漸く盡んとし、老死の時到り、將に未だ曾て知らざる處に往至せんとす。獨行きて伴無し。出世の法を離れ、若しは常に歌詠する愚癡なる人は、死の至ることを覺らず、甚だ自らを誑すと爲す。人身は得難く、諸根は具し難し。出家を得しと雖も、徒に歌詠を作し、空しくして護る所無く、虛妄にして死し、自の利益を失ふ。又復、比丘にして歌詠を作す者、癡に破壞さるゝが故に、心を垢し、行を垢して、歌詠の業を作す。一切の癡の中、婦女の癡、大なり。彼の婦女の癡は比丘に應からず。婦女の癡は、少くして能く燒き、火の如くにして、少と雖も能く多く焚燒す。彼の婦女の癡は是の如くに能く愚癡なる軍衆を燒き、彼れ中に生じては、百千萬の處をも皆悉く能く燒かん。彼れ歌詠中の初めに婦女を讃へ、婦女初に在り。彼の婦女の癡は比丘を破壞し、種々無量に正しく觀察せず、愚癡にて心を壞はし、婦女の身を讃へ、以て供養を爲し、持して心中に在り、說きて淨潔なりと爲す。彼の惡比丘の一切は自身を正しく觀察するを失ひ、復、他人をして正しく觀察せざらしむ。自他を失ふ故に、身壞はれ命終らんには、惡道に墮ち、地獄の中に生れん。彼れ

聞く所の惡・不善の法を歌詠し讚頌して、繫縛さるゝ過の故なり。

又、邪法を聞きて、歌詠して讚頌するは、復、大なる過有り。謂く、惡沙門、邪惡の法を聞き、歌詠讚頌して、意をして愚闇ならしむ。若しは復、彼人、未だ曾て聞き來らず、未だ曾て見來らず、他人從り先に見聞し來らずして、直に自の貪心の故に、歌詠を作し、復、他人に敎へて種々に歌詠せしめ、我れ曾て見しと言ひ、我れ曾て聞くと言ふが故に、彼れ繫縛さる。彼の他人、是の如き人の先に見來らず、先に聞き來らざるを知るを以て、則ち是の如きは不善の人・是の如きは妄語にして、自心に思量りて歌詠を作すと言ふ。彼人、是の如き妄語の業の故に、身壞はれ命終らんには、惡道に墮ち、地獄の中に生れん。歌詠せし過の故に。又、邪法を聞き、歌詠して讚頌するに復、大過有り。所謂、邪に聞きて、歌詠するを樂しみ、從ひ聞きし所の先舊の人に則ち惡心を生じ、之を憎嫉て言はく『我が歌詠は勝れり』と。先舊の久しき時の論師を毀呰り、彼れは實に大能なるも、其れを不善と言ふ。彼の惡沙門、是の如くに坐禪し、讀誦するを捨離し、瞋恚を增長して具足し、不善なる垢業を增長す。白淨なる善業は未來世に於て、能く安樂を與ふるも此の善業を滅して、梵行の人に輕賤られん。是の如く邪惡の法を聞きて、歌詠する者、是の如き人の心は正しからざるを以ての故なり。

又、邪法を聞き、歌詠して讚頌するに、復、大過有り。是の如く邪なるを聞きて、歌詠する者は、若しは晝・若しは夜、心意正しからず、佛法を念ぜずして、歌詠するを樂しみ、恒常に、讚頌して、正法を思はず、坐禪すること能はず、又、精勤みて煩惱を除滅せず。是の如き人は實の沙門に非らず、沙門の意無く、正法を得難く、百千劫に於ても正法を得難し。彼の惡沙門の、沙門として立ちし者、是の如き法を得て、正しき行ならず、攝取せず。

又、邪法を聞きて、歌詠にて讚頌するは、復、大過有り。謂はく、彼の惡人、貪りて歌詠を作り、

未だ曾て聞き來らざるに、而も便ち讚頌し、或時は妄語す。彼人、常に、正しく行はざる者に近づき、猶し狂人の如く、心慢動が故に、一切處に皆悉く往き到りて、歌頌にて繫縛の邪語を讚詠す。妄語を讚ふる者、種々の說く所、有する所の口業は皆悉く妄語にして、曾て一の實不し。是の如き人は歌詠にて心を覆ひ、復、其の餘の富貴なる惡人に近づき、彼れに依止するが故に、不善の業を作す。是の如きの人は惡人に近づくが故に、酒の供養を得、酒を飲むを以ての故に、一の善をも作さず、其の心動亂して、自らの利益を失ふ。飲酒するに由るが故に、惡道の門開く。彼人、醉ふが故に、能く一切の不善の惡業を作す。婦女を見るが故に、正しく觀察せざるが故に、正念を失ふ。彼の惡沙門、梵行ならざるを作し、彼れ福德を燒き、爛れし臭き惡物にして、[四]毗頭羅の如く、華有りて果無し。猶し晝の燈の如く、光明の照すこと無く、又、晝の月の如く、涼冷の觸無し。是の如く、是の如くにして、彼の惡比丘は唯、袈裟を以て身を覆ふのみ、唯、沙門の形色有るのみなり。身壞はれ、命終らんには、惡道に墮ちて地獄の中に生れん。彼れ惡法を聞きて歌詠する過の故に、[五]讚頌する過の故に。是の故に、沙門は不善の法を聞いて、應に歌詠すべからず、應に讚頌すべからず。若し正法を作して讚歎し頌詠せんには、正法を增長せん。若しは讚詠して正法を損せざること有り、若しは佛を稱歎し、若しは三寶を讚へんには、正法を增長し、法をして光明あらしめん。是の如くに讚へん者は、是の如くに福德にして、次第に、乃至、涅槃に到らん。彼の口業の果を勸めて修習する者は、若しは人に讚へられ、身壞はれ命終らんには、善道の天世界中に生れん。彼人、是の如くに實に讚歎するが故に、正法を增長せん。是の如き歎詠は、是れ則ち應に作すべし。是の如く作さずんば、則ち地獄に入らん。

又、第五法は、坐禪し、經律を讀誦するを妨廢ぐ。何なるは第五なりや。所謂、比丘にして星を數へて思惟するなり。實には沙門に非ずして、自ら沙門と謂ふ。星を數へて思惟するは則ち應に作す

【四】毗頭羅。不詳

【五】讚の字宮內省圖書寮本に依れり。原本鑽に作れり。

べからず。是の如き比丘は、沙門の法を毀はし、坐禪し、讀誦等をするを妨廢ぐるが故に、彼れ思惟し已りて、福德・命行の損失するを覺らず。何すれぞ出家して、彼法を得ざるや。彼れ命終りて盡くるとも、作す所を辨ぜず、衰・老・病・死・悲啼・號哭・愁苦・懊惱を免れ離ることを得ざらん。彼人、常に、生死の道中に在り、流轉して行かん。彼れ星を數ふるとも利益を得ず、星を數へて思惟するとも、自らを救ふこと能はず、亦、他を救はず。何を以ての故に、唯、業の星を數へんには、能く自他を救はん。何を以ての故に、一の星、人を生じて、苦有り、樂有り、醜有り、媚有り、大種姓有り、小種姓有り、法に依る行・法に依らざる行有り、貧有り、富有り、王有り、臣有り、貴有り、賤有り、盜・不盜有り、聰有り、蒙有り、愚有り、智有り、男有り、女有り、或は持戒する有り、持戒ならざる有り、勤めて精進する有り、精進ならざる有り、人に愛され・人の爲に愛されざる有り、一切皆愛し、一切を愛せず、一種の星にして、異種の人生れて同からざる有り。若し星の因緣にて、彼の一星生ぜんには、何が故に、一切は皆一種ならざるや。向に說きし所の、前の功德と過の如きは一切を知らず、業の星を數へざればなり。空中の星を數ふる愚癡の人は、功德と過とを知らず、數へず、善・不善の業の二果を數へずして、空中の星を數ふるのみ。又復、彼人、星を數へて思惟するは、實に善からず、亦、寂靜ならず。所謂、一星にして、或は人に生れ、或は畜生に生れ、或は餓鬼に生れ、差別して等からざるは星の勢力に非ずして、業の勢力の故に、異異りて生ずるなり。此の星を思惟することは、是の如くに善からず、亦、寂靜ならず。業の星を思惟せんには、是れ、善にして寂靜、次第に乃至、涅槃に到らん。

又復、彼人、星を數へて思惟するは、實に善からず、亦、寂靜ならず。所謂、彼星の力は常に定まらず。更に妨有るが故に。勝劣有るが故に。此の星は、復、勝れし星の爲に覆はれ、彼星、異る時に、而も復、更に、異る星の爲に覆はれん。是の故に、當に知るべし、星を數へて思惟するは

義と相應せざることを。若し其れ、人有りて星を數へ、思惟して謂はく『星の因緣にて苦有り、樂有り。是れ自身に苦有り、樂有るに非ず』と。彼星、更に餘星に覆はるること有り、云何にして能く他に苦・樂を與へんや。故に知んぬ、業に由りて得ることを。是の如くに、善・不善の果は、星の能く與ふるに非らず。若し曜に由るとせんには、更に、曜の瞋有りて、是の如き初の曜は則ち苦惱を得ん。日と月との如きは、羅睺[六]之れを蝕せんには則ち苦惱を得ん。若し此の日月、自ら救ふこと能はずんば、何んぞ能く他を救はんや。是の故に、沙門の沙門として立つ者は、星を數へて思惟するも、應に是の如く星を數へて思惟すべからず。

三大曜有り、謂く、病・老・死なり。此れを最大と爲し、常に世間に住す。彼の惡沙門は此れを思惟せずして、更に、餘の世間の曜を思惟す。彼人、愚癡にして、聞慧有ること無く、世間の[七]二十八宿を思惟す。是の如く思惟せんには則ち罪過有り、彼の出世間の二十八宿を思惟せず。若し能く思惟して、實に觀察する者は涅槃に入らん。二十八とは、所謂、五陰・及び[八]五取陰・十八界等なり。此れを思惟する者は、涅槃に到らん。實の如く觀るを以て、欲を離れて持戒す。故に涅槃を得ん。星を數へて思惟せんには則ち得ること能はざらん。

又、惡沙門にして、沙門として立つ者に、復、異法有り。十二月を數ふなり。是の如く、數へ已らんには、利益を得ず、亦復、煩惱を斷除する能はずして、猶、故の有の中に在りて行ひ、十二入を數ふることを知る能はず、若し能く十二入を數ふことを思惟せんには、實の義を知り已り、欲に於て厭を生じ、寂靜なるを以ての故に、則ち涅槃を得ん。彼の惡沙門の、沙門として立つ者は、數ふること能はず、思惟せざるを以ての故に、他の染を思惟して、他事を數ふ。

又、惡沙門の沙門として立つ者に復、異種の惡の染を思惟すること有り。[九]六時を思惟し、既に思惟し已り、病・老・死を解脫することを得ず、無常なる染の爲に擾亂せられ、身の三十六種を思惟せ

【六】羅睺。羅睺羅阿修羅(Rāhu-asura)の略、四種阿修羅の一。羅睺羅(Rāhu)は執月と譯し、此の阿修羅王は帝釋と戰ふとき、能く其の手を以て日月を執りて其の光を障蔽する故に名づく。

【七】二十八宿(Nakṣatra)。これ日月の運行を區劃する爲に平常目に見る處の郡星を以て標據とし天の分野となしたるものにして、その數二十八を擧げたる所以は白月一日より黑月の終に至るまでの分野を一日一宿に劃したるものの如し。而も一一の星を以て神化したるを見る。これ其の吉凶を祈りたる所以なり。

【八】五取陰。五取蘊のこと。有漏の五蘊を云ふ。取とは取着の義。貪愛の煩惱は事物に取着すれば取と名け、五蘊は煩惱を因として生ずれば取蘊と云ふ。

【九】六時。晝三時、夜三時合せて六時なり。晝の三時は晨朝・日中・日沒なり。夜の三時は初夜・中夜・後夜なり。

ず。若し思惟する者は、彼れ實に觀察して則ち能く捨離して涅槃を得ん。

又、惡沙門の沙門として立つ者、世間の時を念ず。彼の時を思惟して、是の如き言を作さく『此の時は則ち善く、某念は善からず、某時は當に得べく、某時は得ず』と。是の如く惡しく念じ、惡しく思惟する者は、是れ寂靜に非らず、則ち樂に非らず、涅槃に近づくに非らず、涅槃を得るに非らず。應に念ずべきは心の時にして、心の相の攀緣に、善・不善有り、記・無記有り。〔一〇〕世の時を念ずる者は、心に此の三種の時を思惟せず。若し能く善・不善の心の攀緣する所有るを思惟せんには、是の如く思惟すらく『我れ某心の善に攀緣する者に生れんには、我れ未來世に、當に善道に生るべし。若しは我れ未來に當に涅槃を得べし。我れ某心の不善に攀緣する・不善の染心に生れんに、彼れ當に樂に非ざるべし、當に寂靜に非ざるべし、當に涅槃に非ざるべし。涅槃を得ざらん。我れ某心の無記に攀緣するに生れんに、無記の報を得ん』と。

又、惡沙門・沙門と相似して世間道を念じ、世の時を思惟す。唯一念の時にして候離多なし。若しは一日の時、半月・月時の善・不善の果にて、人中の命行盡くる時を思惟して、我れの命行は念念の中に盡き、彈指の頃に盡きて、候離多なきことを思惟せず。若し一日の時、半月・月時に我が命行の念々に盡滅して避く可からずんば。死時を避くべき方便有ることなし。

又、惡比丘に復、異法の數時を思惟すること有りて、坐禪し、經律を讀誦するを妨廢す。所謂、世間の染法を思惟し、星時を思惟す。彼人、思惟して樂しく行ひ、多く作す。念、心中に在りて、是の如く記說すらく『是の如き某星・某曜來りて覆ひ、能く與に妨を爲し、能く其れに惡を與へ、此の世間中を能く好くし、能く惡くす』と。彼の事を思惟せんには、則ち衰老・病死・悲啼・號哭・愁苦・懊惱を離るること能はず、生死を斷ぜざらん。是の故に、應に、是の如くに思惟すべからず。星の曜の覆ふが如きは、復、異法有りて、異法に覆はる。所謂、生星の死曜に覆はれ、無病の星の

【一〇】無記。三性の一。事物の性體の善とも惡とも記すべからざるもの。又善果を感ずとも、惡果を感ずとも記すべからざるものを云ふ。

【一一】候離多(Kṛta)所作。此一段斷見外道の說を述ぶ、卽ち人間の命は只一念にて一切の所行の把住するに由なきとき、善惡因果をかゝる思辯にて否定する也。

病曜に覆はれ、少年の星の老曜に覆はれ、愛と和合する星の、愛と離るる曜に覆はれ、天に生るる星の退く曜に覆はれ、人中に生る星の爲作する曜に覆はれ、樂を受くる星の苦を受くる曜に覆はれ、善心を生ずる星の不善の心を生ずる曜に覆はれ、不淨の星の欲曜に覆はれ、慈心の星の瞋の曜に覆はれ、觀智の星の癡なる曜に覆はる。彼の惡沙門の沙門として立つ者は、自らを思惟せんとするも思惟すること能はず、出世を思惟せんとするも、思惟せず。此れは是れ出世間の星を思惟するものにして、向に說きし所の如く、如實に、實法の星、實曜に覆はるることを觀察すること、向に說きし所の如し。既に思惟し已りて、如實に八聖道分を觀察し、是の如き曜星を思惟せんには、果を得て、寂靜にして快樂なり。乃至、涅槃せん。若し凡愚の人、是の如き世間の星曜を思惟し、或は曜を思惟し、或は星を思惟せんには、乃ち無量に多き百千人をして惡道に入らしめ、生れて地獄・餓鬼・畜生に在らん。此れは是れ、世間の生死の因縁にして、貪・瞋・癡を生ず。若しは出世間道の時節の星曜を思惟すること有り、若しは時を思惟し、曜星を思惟す。此れを思惟し已り、如實に觀察して修行する者は則ち、無量に多き百千人をして、老・病・死・悲號・啼哭・愁苦・懊惱より解脱するを得、不退の處、不老・不病・不死にして、盡きず、最勝にして、涅槃の不退の處に到らしむ。若し是の如く學ぶ比丘、沙門、沙門として立つ者、苦を盡くし、生死の苦を盡くすことを得んと欲せば、星を思惟することを修め、時を思惟することを修むることは、向に說きし所の如し。鄙たり、染たり、是の如く知り已り、畢竟に非ざるを知り、寂靜に非ず、涅槃を得るに非ず。唯、比丘の坐禪し、讀誦するを妨ぐるを知りて、比丘は應に星を數へて思惟すべからず。星を數へて思惟すれば則ち相應せず。又、第六法の應に思惟すべからざるは、所謂、沙門の沙門として立つ者、坐禪して經律を讀誦するを妨廢ぐ。何なるは第六の應に思惟すべからざるや。謂はく、思惟して占相するなり。沙門の人は應に世間の染法を思惟すべからず、欲・瞋・癡を增さん。彼相を思惟せんには、善法を妨廢せ

ん。若しは諸の沙門、沙門として立つ者、地の動く相、世間の染相を知り、或は晝・或は夜、是の如く思惟すらく『地は當に動かんとすべし。今、相有るを見る』と。所謂、地、水平等なれば定住す。風に吹かれんには則ち動き、動くと雖も濁らず。地動かんとするが故に、風吹けば則ち濁る。或は雨墮ちんとすれば、蟻子卵を運ぶ。月の當に蝕せんとすれば、油脂、水に沈み、鳥空中に在り、地に近づきて下を飛ぶ。日の當に蝕せんとするや、諸方則ち赤し。若し安隱ならんとせば、膩潤の風起り、諸方に垢無く、右に旋る行相の是の如き相を見れば則ち安隱なるを知る。若し惡有らんとせば、諸方赤・黃にして乾き、膩なる色無し。乾きて風起ること有り、赤・黃・青色の日の暈輪起りて、虛空中に在り。日の將に蝕せんとせば、諸方則ち赤し。當に善有らんとせば、彼方は則ち潤膩の風の吹くこと有り、清淨にして垢無く、塵霧等無し。復、善相を見るに、右に旋る行相にして相應き相なり。當に、不善有らんとすれば、則ち諸方を見るに、赤・黃色有り、乾きて、膩なる色無く、或は彼方を見るに、膩風の吹くこと無く、赤・黃・青の暈輪の日出でて虛空中に在るを見る。彼の惡沙門の沙門として立つ者は、是の如く占相して、是の如く見るが故に、坐禪し、經律を讀誦するを妨廢げ、思量して記說し、財利と種々の供養を悕望み、二王の勝・不勝を爲すを思惟す。彼れ、是の如く勝・不勝を求むるを以て、是の故に、心中に欲・瞋・癡を生ず。是の如き三種を、彼れ根本と爲す。是の如き比丘は三種の過を得、既に沙門に非らず、復、俗人に非らず。若し善き沙門の沙門として立つ者は、占相するを用ひず、此の相を見るは染欲を増すを以ての故に。

又復、更に、惡相を思惟すること有り。占相の師有り。王鬪はんと欲し、行きて其の時節を問ふ。彼れ決定して記さく『某日時中、彼れと共に鬪戰せんに、一切人破れん。若し一切人と戰鬪せんと欲する者、彼の何處に於て、多く無量百千の衆生を殺し、皆悉く散壞し、或は捉へて繫縛せん』と。是の如き城村・或は國土中、或は多人の處、彼の王所と、迭に共に鬪諍し、迭互に相破り、能く失

【三】膩潤。うるほひて滑なること。

壞せしめ・無量百千の衆生は苦を受けん。彼の惡沙門、王の爲に日を看、王の爲に時を占ひて言はく『某日好し。某時、最も好し。王必ず勝ることを得て、能く餘王を破らん』と。相を見已りて說く。彼の惡沙門、是の如く思惟すらく『此王、若し勝んには、我れ則ち王より多く財物を得、多く供養を得、當に王の所より是の如き事を得べし』と。彼の惡沙門の沙門として立つ者は善法則ち滅す。所謂、坐禪し、經律を讀誦するなり。或時は不善の法を增長し、其の勝・非勝を分別するを以ての故に、彼れ是の如き法を思惟するを以ての故に、身壞はれ命終らんには、惡道に墮ちて地獄の中に生れん。此の因緣を以て、若し善き沙門の沙門として立つ者は則ち世間の相を思惟せず。此の思惟は三種の過を生ず、善法を妨ぐるを以ての故に。若し此の世間の相を思惟せずして、餘法を思惟せんには、三種の過を離れん。出世間は正念の思惟を攝む。此の法とは云何ん。所謂、彼の地の動く相を知るが如し。或は晝、或は夜、是の如くに思惟すらく『地將に動んとす』と。是の如きの人、或は夜、或は晝、何んぞ心地の當に動くべくして、地の動く時の如きなるを思惟せざらん。一切世間の或は山・或は河・園林・樹木・若しは村・城等皆悉く普く動く。是の如く、是の如くに、心の地動くが故に、自餘の一切の大地の善法、及び餘法等皆悉く普く動く、是の故に沙門の沙門として立つ者は、應に先づ是の如き心地の當に必らず動くべきを觀察すべし。心地の轉動するは地の震動するが如し。是の如き心の地は三法の動く所にして、謂く、欲・瞋・癡は心の地をして動かしむ。地の當に動かんとするや、必ず先に相有るが如し。謂はく、水は本清く、風吹けば則濁る。是の如く、是の如くに、凡夫の人に、或は欲、或は瞋、或は癡の將に生ぜんとすれば、其人の面色、或は黑、或は赤、是の如く先に濁る。是の故に、沙門の沙門として立つ者は應に此相を觀じて、涅槃の相を攝むべし。此相を觀ずる者は苦惱を得ざらん。此の心地の相は、出世間の相なり。

又復、次に、世間法の相を觀ずるに、雨墮んとするが故に、蟻子卵を運ぶ。是の如くに、沙門の

沙門として立つ者は、是の如く出世間の相を觀察す。村城内の多饒の人の處の如きに檀越有るを見る。若しは諸の沙門・諸の婆羅門・諸の長者、佛を信ずるを以ての故に、法を聽かんが爲の故に、往きて佛の所に到る。是の如きは實相にして、彼の善き沙門の沙門として立つ者は是の如き相を見て、即便ち記說すらく『今、彼處に佛世尊有して、正法を說かんとす』と。此の如くにして檀越及び諸の沙門・諸の婆羅門・諸の長者等皆佛の所に到り、彼佛は決定して正法を說き給はんとする也。今、此の相を見たるは、下劣なる相に非ず。今、此相は是れ法雨の相なるを知りしなり。

又、惡沙門の沙門として立つ者、月の燿く相を見ては、決定して月の必當に蝕せんとするを知る。油を水中に置くに、下に沈沒するが故に。此の是の如き相は善に非ず、吉に非ず、亦、寂靜に非ず。此の是の如き相は沙門の相に非ず、寂靜の相に非ず、彼の沙門の相は則ち相應せず。出世間の相を觀察せんには相應す。世間の月を占ひ終らん時は則ち惡し。正法の月の當に必ず蝕せんとするを知るは、正法の油、邪見人の心の水中に沈沒するを以てし、此相は善に非らず、亦、清涼に非らずとす。此の第一の相は、是れ世間の月蝕の相に非らず。

又、惡沙門の沙門として立つ者は、更に、世間の月蝕の異相を觀ず。月の當に蝕せんとするや、鳥の空中に在るも、地に近づきて下を飛ぶが如し。此れ、沙門の沙門として立つ者に相應せざる相なり。復、好き相有り、出世間の相なり。所謂、正法の月蝕を觀察するなり。此れは是れ沙門にして正法の道を行くなり。謂はく、彼の沙門、下知識、下檀越等の、下人の邊を行くには、鳥の下を飛ぶが如く、彼の白衣にして正行ならざる人、邪見の人の門下に在りて行く等には近づき下りて語說すること、空に在りて行くも、地に近づきて下を飛ぶが如し。時の過失を以ての故なり。一切沙門の沙門として立つ者は、此の相の第一に勝れし相を觀察せん。應に彼の月蝕の相を觀察すべからず。則ち好き相に非らざればなり。

又復、相有り。若し惡沙門の沙門として立つ者は、日蝕の相を以て世間の相を觀ず。日の將に蝕せんとするや、諸方は則ち赤し。當に善き者有らんとすれば、彼方に則ち膩風に吹かるること有り、清淨無垢にして、塵霧等無し。彼の善き相を見るに、右に旋る行相、相應の相なり。彼の善き沙門の沙門として立つ者は、相應せずと見る。坐禪し、讀誦する業を妨ぐるを以ての故に。此の世間の相は則ち寂靜に非らず、則ち安樂に非らず。是の如く、是の如く、若し善き沙門の沙門として立つ者、寂靜を得んと欲せば、應當に、出世間の相を觀察すべし。菩薩の日を觀じて、一切智を爲し、[一三]菩提を當に攝むべし。或は一劫、或は二劫、或は三劫に、決定して當に攝むべし。是の如き沙門は出世間の菩薩の相を見る。所謂、精進・布施・聞智は赤色の方相にして、慈心にて一切衆生を憐愍する菩薩の身赤し。當に安隱なるべき者は、謂はく、菩薩にして、第一の功德を皆悉く具足し、一切智の相は當に必ず圓滿すべく、當に必ず說法すべし。諸方に垢無く、塵霧無きは惡時の過を離れ、當に善き者有るべし。如來の名稱は、膩風に吹かるるなり。彼の世間の相師の見る所の如く、此の出世間の是の如き相師は未來の相を見るに[一四]聲聞・緣覺・阿羅漢の相は右旋の相にして、謂ふに正しき觀察なり。

又、彼の相師は唯、是の如き世間法中の生死の相を見るに、當に不善有るべくんば則ち諸方に赤・黃色有り、乾きて、膩なる色無きを見る。或は彼方を見るに膩風の吹くこと無く、赤黃青の暈輪の日有りて出で、虛空中に在り。彼の惡沙門、是の如き相を觀て禪、誦するを妨廢す。若しは善き沙門の出世の相師は、諸の信人の爲に是の如く記說すらく『當に不善有るべし』と。何なるは不善なりや。謂はく、正法を障ふなり。此の如き相を見んに、彼方に赤・黃色有るを見るが如し。是の如き相とは、正法の滅せんとするなり。是の如き相有らんとは、謂はく、諸方の人、喜樂て惡口・妄語・兩舌・殺生・偸盜す。當に彼人、乾きし風に吹かるること有るべしとは、所謂、惡名なり。若し

【一三】菩提（bodhi）。舊譯には道と云ひ、新譯に覺と云ふ。道は通にして、覺は悟なり。佛の果德圓通して、涅槃の理を覺悟する義なり。

【一四】聲聞（Śrāvaka）。佛の小乘法中の弟子にして、佛の聲音の教を聞きて四諦の理を悟り、身心都滅の涅槃に入る者を云ふ。

衆生有りて、正法の行に非らずんば、惡名の風吹きて八方に聞え、四方、四維皆悉く普遍し。諸の衆生、正行を行はず、不善の業を作すを以て、惡名の風吹きて、是の如く遍く聞ゆ。世間の相師、赤・黃・靑の暈輪の日出でて虛空中に在るを見る。是の如き師は世間の相師なり。出世の相師の赤・黃・靑の暈輪の日を見るとは、謂く、惡沙門・惡婆羅門にして、是の如き衆會は一切智に非らず。智の慢を起すが故に、自ら言はく『我れは是れ一切智人なり』と。此の邪見の人は、是れ實の日に非らず、一切智に非らず、一切智を立つるも好き種姓に非らずして、凡姓中より出づ。彼の是の如き人に邪見の日出でて、一切の藥艸・園林・樹葉悉く皆乾き枯る。是の如くに、所謂、一切の善人の正見の藥艸・園林盡き乾くこと、是の如く、是の如し。此の出世間の正法の日出でては、禪・誦・第一義諦・光明・勝れし智を增長す。是の如くに、出世間の相を觀察す。先に觀察し已り、然る後、記說す。所謂、彼の信有る沙門・諸の婆羅門・諸の長者等の爲に、是の如く記說して、是の如き言を作さく『諸有、正法の日出づるに値遇しては、皆應に精勤すべし』。諸の善業を作さば、後時に、一切の正法皆悉く滅沒すること莫し。邪見の日出でては、是れ沙門に非ずして自ら沙門と言ひ、婆羅門に非ずして婆羅門と言ひ、一切智に非ずして一切智と言ふ。諸の惡沙門・惡婆羅門の暈輪の日出でては、汝、衰惱を得ん』と。是の如くに一切智の法を記說せんには、彼れ則ち相應し、是れ眞の相師にして、大に勝れし意有り。能く是の如き相を思惟する者有らんには、坐禪し、經律を讀誦するを妨げざらん。更に、異りて、世間の相を思惟する者は、則ち禪・誦を妨げん。此の世間道・出世間道は是の如くに勝劣す。世間の法は則ち生死を攝さめ、出世間の法は次第に乃至、涅槃に到らん。爾の時、世尊迦葉如來、偈を說きて言はく。

坐禪して讀誦するを離れ、常に占相するを喜樂まんには、彼れ善法を捨離して、涅槃を得可からざらん。若し自らの法を捨離して、他の法を樂しむ者は、彼れ二法を失壞して、惡道の處

に到らん。　若し人、自らの家を捨てゝ、他の舍を喜樂ばんには、人中にて輕んぜられ、笑はれて、速爾に、貧窮を致さん。　是の如くに癡にて惡しき意は、智を慢りて自ら勝れりと言ひ、自らの法を捨離し已りて、他の法を修行するなり。　出家して邪命なるは、法を失ひ、名稱を失ひて、人中にて輕んぜらるゝこと、艸の如く、未來には惡趣に入らん。　寂靜の法を捨離して、惡業を行んには、彼人、久[一五]間からずして、之れに因りて佛法を失はん。　心に欲を離るゝことを悕望み、餘の悕望有ること無く、勤めて精進し、足ることを知らんには、是の如きを禪を行ふと名く。　若し心に欲を喜樂び、常に飮食を貪らんには、是れ袈裟を著る賊にして、名けて比丘と爲さず。　若し、比丘にして相を說き、常に星・曜を思惟し、王に近づきて放逸を行んには、比丘に相應きことに非らず。　醫師・畫師の業あり、惡法を聞きて讃詠し、惡しき者と同處せんには、則ち比丘の法を失はん。　禪・讀誦するを憎嫉し、多くの語說を愛樂し、供養の財利を貪らんには、則ち比丘の法を失はん。　推して諸の寶性を求め、多くの知識を愛樂し、復、餘の財物を貪らんには、比丘の法を退失せん。　唯、諸の飮食を貪り、我慢にして他に問はず、人に讃歎さるゝを悕望まんには、比丘の法を退失せん。　若し、一切に近らず、惡しき衆を捨離し、水艸を食し、足ることを知らんには、是れ眞の比丘と名く。諸の境界を得已りて、之れを棄つることは火を捨つる如く、我慢の過を除斷かんには、是れを眞の比丘と名く。　內外倶に寂靜にして、智の光明にて莊嚴り、持戒の衣にて身を覆んには、是れを眞の比丘と名く。　世間法を遠離し、動かざることは須彌の如く、一切世間を愛せんには、是れを眞の比丘と名く。　三宿のみ城內に住し、饒くの人の處にては皆爾くして、山谷の中に止住せんには、解脫せる比丘と名く。　惡を畏れ、他に近かず、正行の心にて動かず、智、諦を審にし、寂靜ならんには、是れ獨行の比丘なり。　常に愛語を悕はず、惡知識を

【一五】間の字。宋・元・明、三本に依る。

捨離し、多くの所作を樂まずんば、解脱せる比丘と名く。　彼の是の如き比丘は有の過を脫ることを得、世間と涅槃とを知り、等しき心にて悕望せず。　心常に智を喜樂び、及以び善く寂靜ならんには、生・老・病・死の怖畏の中にて、脫るゝことを得ん。

是の如き比丘は阿羅漢を得ん。若し爾らずんば、唯、比丘と名くるのみにて、自ら妨礙を爲し、險岸に墮ちん。此の第六法は是の如くに妨礙す。若し善き沙門ならんには、應に爲作すべからず。

又復、沙門にして、沙門として立つ者、第七法を應に爲作すべからず。何なるは第七なりや。所謂、飮食を集めて藏を滿たすなり。此れ多く貪り瞋りて、一切の禪・誦等の業を捨離し、唯、大牀に在りて空く坐するのみ。衆僧の攝むる所の牀臥・敷具・病藥の須ふる所を虛妄に受用するのみ。本、家に在りし時、懈怠・懶惰にして、諸の作業するを畏る。是の故に、出家して唯、食味を貪り、常に他會を伺ひて飮食を求望み、或は境界を樂む。是の如き比丘は是れ死の比丘にして、所謂比丘なるも坐禪し、經律を讀誦すること能はず、淨戒を毀破す。自餘の死者は唯、其身を棄つるのみなるも、戒を毀つ比丘は、一切の善法を皆悉く破壞し、唯、能く牀に坐るのみにして、心に憍慢を生じ、自ら謂ひて『好し』と爲し、唯、比丘の形服有るのみにて、其の實は戒無く、正しき戒を離る。言ふ所の戒とは、之れ心の戒を謂ふ。彼れ持すること能はず、彼れ作すこと能はず。彼の戒とは七種にして、何等を七と爲すや。所謂、口戒なり。比丘は是の如く、或は比丘に於て、或は俗人に於て、口、共に語らず、唯、法事を除く。或は婦女の人と持戒の比丘は乞食行を除き、口、共に語らず。或は呪願を爲し、是の如き言を作さく『汝をして樂を得せしめ、涅槃等を得せしめん』と。若しは母を見る時、姉妹を見る時、唯、其の足を看て、其の面を看ず、其の服、及、莊嚴等を看ず。爾の時、世尊迦葉如來、偈を說きて言く。

手に觸るゝは風に吹かるゝが若く、此の火、久からんには乃ち燒かん。　婦女を見んには、火

起り、速に燒きて、久しく待たざらん。

是の故に、比丘、欲に燒かるゝを怖畏れて、一切の婦女と共に語言せず。此れは是れ一戒なり。

又、第二戒とは、所謂、不善の知識に近かず。一處に於て久しき時に住止らず、多くの利を取らず、多くの供養を捨て、病人を捨てず、妻子を見ず、何處に隨ふも、多くの利養有らんには則ち捨てゝ去る。貪を生ずるを畏るゝが故に。破戒の者を離れ、與に同く住せず。是の如き七種を比丘は攝めず。唯、飲食を貪りては、他の財利、他の供養を、若しは見、若しは聞かんには則ち憂惱を生じ、是の如くに思惟すらく『我れ今、當に何等かの方便を設けて、彼の利養を得べし』と。是の如く思惟して、心に貪著を生じ、是の如く心濁りて、貪心を増長す。彼の惡沙門は一切の善法を皆悉く破壞し、晝夜、常に愁へ、心、安隱ならず。彼の比丘、餘の持戒せる善行の比丘の他の爲に供養せらるゝを見んには、嫉を生じ、貪を生じ、便ち往きて、彼の檀越の家に到り、諂曲の形服にて少語し徐行するも、心寂靜ならず、外に威儀の寂靜の相を現はし、身に納衣を[一六]被、復、多人の不持戒の者と與に、以て朋侶を爲し、唯、貝聲のみ有りて惡法を行ひ、同伴し、相隨ひて、彼の檀越に造り、持戒の相を現はし、是の如く、是の如く心の隨に所行ふ。是の如き比丘は彼の檀越主に其の持戒せるを謂ひ、是の如く念言すらく『此等の比丘は第一の持戒なり』と。彼の惡比丘は持戒の相を現はして、彼の檀越をして心に信敬せしめ已り、諸の朋侶と共に、數數、往きて彼の檀越の家に到る。是の如き比丘は己れの聞きし所に隨ひ、少しく佛法を知り、其の同侶と共に、彼の檀越の爲に、知りし所の法を說き、是の如くに方便して、檀越をして彼の比丘の得る所の利養を迴らして、之れに施與せしめんと欲す。是の如き比丘の形相は沙門なるも、第一の大賊なり。檀越の家に到り方便して、他人の財利及以び供養を劫奪す。是の如き比丘の、他の財利を見、他の供養を見て貪嫉を生ずる者は、曾て少時く、眼を開きて合する頃、暫くも、善法を作さず。彼の

【一六】、被の字。宋・元・明三本に依る。原本、披に作れり。

悪比丘、破戒の沙門は坐禪し、讀誦する等の業を捨離し、一念の間も地獄・餓鬼・畜生を挿めざること無し。

卷の第五十

觀天品之二十九

夜摩天之十五

又、彼の比丘、已れの同侶と共に、檀越の家に於て、先に相識りし所の持戒の比丘を、諂誑の心を以て、其の過惡を說き、或は嫉心を以て、其の破戒を說き、或は嫉心を以て、其の聞くこと無きを說き、或は嫉心を以て、其の行相を說き、檀越に語りて言はく『汝の此の門師は禁戒を毀破てり。或は說くも懈怠にして、聞きしこと無く、智無く、愚癡なること鳥の如く、少しく聞き、少智なり』と。彼の惡比丘は他の檀越に向ひ、是の如く惡說し、恒常に、非法の境界に習近す。何處にて禪・誦等の業を修むることを得んや。彼れ空しくして、物無く、堅からず、實ならず、身壞はれ命終らんには、惡道に墮ち地獄の中に生れん。爾の時、世尊迦葉如來、偈を說きて言く。

妄語を言說する者は一切衆生を惱まし、彼れ常に黑闇の如く、命有るとも、亦死せると同し。語の刀は自ら舌を割る。　云何にして舌は墮ざらんや。　若し妄語を言說せんには、則ち實の功德を失はん。　若し人、妄語を說んには、口中に毒蛇有り、刀は口中に在りて住み、熖火は口中にて燃えん。　口中の毒は是れ毒なり。　蛇は上毒にして、毒に非ず。口の毒は衆生を壞はし、命終らんには地獄に墮ちん。　若し人、妄語を說かんには、自らの口中より膿を出し、舌は則ち是れ泥濁にして、舌は亦、熾んなる火の如し。　此の是の如き羂に縛られ、地獄の前使に、法の橋等を破壞せらるゝは、皆是れ妄語の過なり。　彼の妄語する人は則ち父母有ること無く、亦、持戒する能はず、惡道の中に墮ちん。　若し人、妄語を說かんには、彼人、速に輕賤られ、善人の爲に捨離され、天は則ち擁護せざらん。　自ら言語を攝めず、速疾に多く瞋恚

り、心慢て多く語說らんには、常に、諸の苦惱を受けん。常に、他人を憎嫉み、諸の衆生の惡きと與に、方便して他を惱亂せんには、是れに因りて地獄に入らん。

彼の佛世尊・迦葉如來は是の如くに、已に、禪・誦を妨廢する七種の惡法を說き給へり。彼の惡比丘、持戒せる者に不饒益を作す。是の故に、天捨つ。口中に刀を生じ、少利の爲の故に、他の實の功德を說きて無しと言ひ、彼れ實に過無きに、過有りと說く。是の如き人は是れ惡沙門にして、自ら沙門と謂ふも、妄語を言說す。彼人、是の如くに、常に、惡意、惡行、惡法有り。彼の檀越主、後時に知り已り、心に則ち輕薄し、其の諂曲なりしを知る。此れは第七法にして、是の故に、比丘は應當に此の第七の惡法を捨つべし。所謂、飲食・供養を悕望み、皆已に在らんことを欲するなり。

又復、第八の障礙する惡法は比丘の坐禪して讀誦するを妨廢ぐ。是の故に、沙門は應當に捨離すべし。何なるは第八なりや。所謂、種々の實性・造作せし諸の實を採集するなり。是の如き比丘、生死を怖畏れ、鬚髮を剃除し、法衣を被服し、信を以て出家せり。彼の生死の中には諸の苦惱多く、略して之れを說かんには、二種の苦有り。陰・界・入に依りて三界、廣くは五道に在り。又復、廣くは、八大地獄・餓鬼・畜生・欲界の六天なり。欲界中に、復、枝條の種々なる諸の苦有り、色界中に復、心の苦有り、無色界中に則ち退く苦有り。故に、退かんとする時は、三昧[一]則ち亂る。是の如く心に、無量種の分別の苦有り。彼の善男子、苦惱を觀じ已り、心に厭離を生じ、是の如き無量の過惡を怖畏れ、鬚髮を剃除し、法衣を被服して、信を以て出家せり。

又、彼の沙門、復、餘苦を觀じ、心に怖畏を生ず。所謂、身の苦なり。身苦の二處とは、謂く、欲・色界にして、身有る處に隨ひて皆苦惱を受く。彼の色界[二]中にて云何に苦を受くるや。謂く、禪中に於て、疲惓るゝが故に起ち、彼の禪を起已れば身則ち疲惓る。彼れ退かんとする時、身の威儀劣り、風其の身に觸る。是の如き風は本來觸れざるなり。是の故に、身に觸れんには則ち苦惱を受

【一】三昧(Samādhi)。又、三摩提と譯す。定・正受などと譯し、心を一處に定めて動ぜざるを謂ひ、正しく所觀の法を受くるを謂ふ。

【二】色界（Rūpa-dhātu)。身體國土等、一切の物質的の物は極めて精妙なる處にして、四禪・十八天の階級ありて、欲界の上方に在りとせらる。

く。唯、眼の觸を除くのみ、樂を受け、苦無く則ち是れ無記なり。是の如くに分別して苦を受くることは同からず。色身有るに依る。彼の善男子、是の如く聞き已り、生死中の一切の苦惱を知る。陰界入聚り、和合して皆苦なり。

彼れ、是の如くに無量無邊なる生死の苦を觀已りて、便ち出家せり。既に、出家し已りて、不善の人に近づく。彼人に近づくが故に、其の作業を同くし、寶性の方を聞く。何れかの性を畏るゝが故に、信を以て出家し、餘性を聞くが故に、更に、貪心を生ず。或は金性を聞き、或は銀性を聞き、或は寶性を聞き、是の如くに聞き已りて、厭足ことを知らず、貪火に燒かる。彼れ既に燒かれ已り、惡知識と共に山中に行き、山從り山に至り、一山峰より一山峰に至り、是の如くに遍く行きて隱密の處に在り。貪火に燒かれ、晝夜常に苦しみ、樂しき時、有ること無し。何なる因緣を以て、是の如く出家し、彼性を念ぜずして、異性を思惟するや。謂く、身性を捨てゝ思惟せず、向に說きし所の如し。彼人、是の如く心意正からず、心意亂るゝが故に、禪・誦を妨廢げ、善法を失ふ。彼れ沙門に非らず。亦、俗人に非らず。涅槃を求むるが爲に、是の故に出家し、性の鬼に著せられんには、則ち貪心を生じ、貪の羂に繫縛せられて地獄に入らん。爾の時、世尊迦葉如來、偈を說きて言はく。

身性を觀察するは卽ち是れ一切の性にして、涅槃を得んと欲する者は、身性を調ふ。　餘には非らず。　若し身性を捨離し、餘性に貪著せんには、彼人、眞性に迷ひて、苦惱を脫るゝことを得ざらん。　金性は則ち諸の苦惱を除捨すること能はざらん。　諦に眞性を知る者は、苦を脫るゝを得んことは、疑はざれ。　一切の苦は苦を生じ、此の苦は脫るゝこと得難く、財を王、賊、火に於て、一切皆怖畏る。　是の故に應に物を捨つべし、本來物無きが如くに、捨離せんには則ち樂を受けん。　攝取すれば則ち苦を受けん。　諦に身性を知り、復、諦に性の相を知り、禪・誦を喜樂ばんには、能く煩惱の山を燒かん。　是の故に、黠慧き者は觀察して身の

性を攝る。　衆生、自らの相を知らんには、則ち涅槃の樂を得ん。
智有る人は是の如くに勤めて、心に此の身の性を觀じて、金・銀等の性を經營するを樂しまず。此れは是れ一切の在家の人の怖畏の根本なり。況んや出家の人に於てをや。出家人とは一切を捨離し、彼の財物を一切怖畏る。[三]實の財物に非らず、是の如く樂を得、是の如き財とは則ち財物に非らず、財物の性に非らず。何なるは是れ物なりや。謂く、身の性を觀ずるなり。若し身性を捨てゝ餘性を樂まんには、禪・誦に於て勤めて精進するに非らず。是の如きの人は身壞はれ命終らんには、地獄に墮ちん。故に出家の人は常に應に禪・誦の財物を修め集むべく、應に世間の凡物を求むべからず。彼の因緣の故に、能く愛を增長す。是の故に、足ることを知るは第一の財物なり。餘の財物は能く衰惱せしむ。此の第八法は禪・誦を妨ぐ、出家の沙門は應當に捨離すべし。

又復、第九の障礙する法は、比丘の坐禪し、讀誦するを妨廢ぐ。是の故に、沙門は應當に捨離すべし。何なるは第九なりや。所謂、王に近づくなり。出家の人は應に王に近づくべからず。何を以ての故に。王に近づく沙門は一切世人に嫌はれて、供養せられず。彼の王に親近む惡沙門は財物を悕望み、或は城・或は村・或は多人の處にて、常に財物を求めて、厭足ことを知らず。若しは求めざる者も徒に王に近づきては、禪・誦するを妨廢ぐ。是の如き比丘は發心して、解脫の道を行はんと欲し、復、返りて繫縛の道の中に入る。是の故に、比丘は應に王に近づくべからず。

又復、比丘、何なる者に近づかざるや。所謂、比丘は惡人に近づかず。彼の是れは何なる人なりや。謂く、惡知識なり。或時は[四]五塵の境界に染著し、所謂、色・聲・香・味・觸等の不善を觀察し、懈怠、愚癡にして、村中等に住す。一切を除捨し、一切の懈怠の人に近づかず、一切の諂誑の人に近づかず、一切の食味を貪る人に近づかず、一切の商賈する人に近づかず、一切の屠する獵師等の惡命活の者に近づかず、一切本性妬む人に近づかず、一切邪見の人に近づかず、一切の審諦ならざる人に

【三】實の字。元・明二本に依る。

【四】五塵。色・聲・香・味・觸の五境なり。此の五は能く眞性を染汚すれば塵と名く。

近づかず、一切の我慢の人に近づかず、一切卒の富貴なる人に近づかず、一切博戲する人に近づかず、一切の酒を酤る人に近づかず、一切の酒を嗜む人に近づかず、一切の酒肆の處に近づかず、樂みて婦女を見る人に近づかず、一切の婬女の主人に近づかず、一切の儲畜して雜貨を販賣する人に近づかず、一切の廚宰の人に近づかず、一切の獄卒等の人に近づかず、一切の鳥を捕ふる人に近づかず、一切の戲論する人に近づかず、一切の外道を信ずる人に近づかず、一切の衆に憎まるゝ人に近づかず。比丘は應に是の如き人に近づくべからず。或は與に同く住し、或は共に語言り、或は同き道を行くは一切應しからず。何を以ての故に、多くの人、疑ふが故に。若しは出家せる人、若しは諸の過を離れし清淨なる人は、皆應に彼の疑を生ずる者に近づくべからず。謂く、彼の比丘も亦同く是の如し。彼の比丘、或は彼人に近づき、或は同き處に住するを以て、是の如き比丘は他の過に汚さる。是の故に、應に是の如き等に近づくべからず。何に況んや、王に近づくに於てをや。彼の王に近づく者は最も凡鄙爲り。爾の時、世尊迦葉如來、偈を說きて言はく。

比丘は林に住すべし。　王に近づくは最も凡鄙なり。　袈裟を著て他に近づくは、奴の主の命
に依るが如し。　比丘は他に近づくに非らず、尙、應に天に近づくべからず、鵝は應に狗に近
づくべからず、其の淨潔なるを以ての故に。　我無く、悕望むこと無く、心に一切を求めず。
生死を怖畏るゝ者は、王に近づかんには則ち善に非らざらん。
園林・塚間・若しは平地・若しは山に住せんには、則ち是れ善き比丘にして、王に近づかんには則
ち善に非らざらん。

是の如く、種々無量に方便して、王に近づくを捨離す。若し王に近づく者は、諸の梵行の人に悉く皆呵毀さる。應に近づくべき所の者は、其れ唯、智の王のみなり。是の如くに近づく者は畢竟して寂靜なり。智の王に近づくが故に、必らず涅槃を得ん。得る所の處に隨ひて、皆悉く退かず。彼の智の

王に近づかんには則ち方便有り。謂く、禪・誦を堅固に精進し、餘業の禪・誦を妨廢するを作さず、尊長に親近し、足るを知ることを修習し、其の心は調順にて、常に貪り求むること無し。尊長に近づくを以て、時に隨ひて諮問し、受持して忘れず、希有なる物を見聞することを求めず、奇特を生ぜず。智の王に近づく者に、此の方便有り。爾の時、世尊迦葉如來、偈を說きて言はく。

尊長に近づきて供養し、時に隨ひ勤めて請問し、施・戒・智を修行し、復、智の王に親近せば、天・人・世間中にて、能く安隱を示す者ならん。有の中にて苦に縛らるゝ世間の凡王に非らず、若し苦惱無き者を、此れ乃ち名けて王と爲す。若し常に苦惱を受けんには、名けて王と爲すことを得ず。

比丘は應に是の如き智の王に近づくべく、凡王に近づくこと勿れ。世の王に近づくが故に、禪・誦するを妨ぐ。若し禪・誦せざらんには、復、地獄・餓鬼・畜生に墮ちん。此れは是れ、世間の凡王の境界なり。是の故に、比丘は此の過を知已り、常に王に近づかず。林に住む人、若し王に親近せんには、則ち宜しき所に非らず。故に應に捨離すべし。此れ第九法にて禪・誦するを妨ぐるが故に。

又復、第十の障礙する惡法は比丘の坐禪し、讀誦するを妨廢ぐ。是の故に、沙門は應當に捨離すべし。何なるは第十なりや。所謂、比丘、請喚を悕望して、樂しき食味を貪るなり。既に、境界に於て正しく修行し已り、乃ち更に、後時に、人間に在り、林野の愛す可き處を捨棄し、復、人中にて處々に遊行す。是の如き比丘は、放逸にて家々村々に近づき、城從り城に至り、多くの人の處より多くの人の處に至り、是の如く遍く行きて、多くの言說するを樂しみ、妄りに人中に行き、世俗の語を樂しみ、親舊を見ることを樂み、親舊・知識に詳に共に請喚せられて好美き食を得。既に、種々なる美味を得、食し已り、妄に林中に於て禪・誦するを捨離し、放逸を行ひ、飲食することを悕望み、常に種々なる食に貪著するを以ての故に、身の盡くることを覺らず。是の如くに味に著し、請

喚せらるゝを悕望み、心以て樂と爲す。

又、若し比丘、境界中に於て、法の如く行はずして、眼好色を見、心に愛樂むが故に、則ち染欲を生じ、樂見ことを悕望み、轉じて復、愛著し、彼れ彼處に於て心に喜樂を生ず。是の如き比丘は人中に行きて、自らを利益する禪・誦の業を失ふ。是の如く失ひ已りて常に食味を悕ひ、常に他の舍に到る。眼に色を見るが故に、心に愛樂を生ず。是の如く、次第に、耳に聲を聞きて心に愛樂を生じ、鼻に香を得已りて心に愛樂を生ず。是の如くに、樂みて一切の境界に著し、一切の縛の爲に繫縛され、一切の羂の爲に繫縛されて、一切の欲に隨逐して行ふ。既に、在家に非らず、復、出家に非らず、是の如き人は身壞はれ命終らんには、惡道に墮ちて地獄の中に生れん。是の故に、應に他の請喚を樂むべからず。他の請喚を樂まんには、是の如き過有らん。是の故に、比丘は應に此の過を觀ずべく、應に常に人中に在りて遊行すべからず。若し行く須き者には、五の因緣有りて、人中に行くことを得。一に、病人の爲に、醫藥の資用を推求する因緣にて、人中に行くことを得。二に、尊長を饒益する爲の因緣にて、人中に行くことを得。三に、佛塔・寺[五]舍の破壞せるを修治する爲の因緣にて、人中に行くことを得。四に、衆生を饒益する爲の因緣にて、人中に行くことを得。五に、他王其の國土を破り、彼王を化し命を救はんと欲する爲の因緣にて、人中に行くことを得。是の如き因を爲さんには、人中に行くことを得ん。若し、是の如き五種の因緣無くして、人中に行く者は、是れ虛妄を行ひて禪・誦を妨廢げん。是の如く行ふ者は老・病・死・悲啼・號哭・愁苦・懊惱を脫るゝを得ること能はず。彼の惡沙門の沙門として立つ者は、徒爾に出家せるのみ。是の故に、比丘、若し心に愛を斷たんことを悕望する者は、心に應に正しく觀じて諸根を寂靜にすべく、尊長に依憑し、三寶に附近き、心を攝めて行ふ。三寶を攝むるが故に、一切の煩惱に使はる根を拔斷す。爾の時、世尊迦葉如來は偈を說きて言はく。

【五】寺の字。宋・元・明三本、及、宮內省圖書寮本に依れり。原本は自に作れり。

禪・誦の業を捨離し、唯、食味に貪著せんには、是れ、則ち比丘に非らずして、其心は餓鬼の如し。　禪を除きては更に樂無し。　智者は是の如く說き給へり。　禪定の樂を離れては、更に、樂の得可き無し。　愚人は上樂を捨てゝ、唯、諸の味に貪著す。　是の如き癡なる惡人は、則ち衰惱の事を得ん。　若し人、境界を樂み、常に、境界の樂に依らんには、不善の法を增長し、命終らんには惡道に墮ちん。　若し人、禪・誦するを離れ、持戒と布施を捨て、剛獷[六]にして調伏せずんば、命有りとも亦、死せるが如し。　若し、法に順じて行ひ已らんには、世間に在りとも死せず、法を離れて、常に、愚癡ならんには、命有るも亦、死せるが如し。　人の皮にて覆はるゝこと有りと雖も、愚癡にして、畜生と同じ。智の燈の光明を以て、其の心を照らさゞるが故に。　若し持戒を受けし者は、名づけて人と爲すを得可し、一切の戒を破りし者は、則ち狗の如きと異ならず。　若し貪りて布施せず、惡行して調伏せずんば、則ち名づけて人と爲さず、攝して餓鬼の數に在り。　若し人、戒・智無く、復、布施の寶無らんには、彼人、命有ると雖も、則ち死せると異らず。　若し戒・施・禪を行ひ、受持して三昧を念ぜんには、是の人を亦人と名づけ、應に天の爲に禮さるべし。　功德有るは是れ人にして、功德無きは羊の如し。

　功德ありて功德を知らんには、彼人則ち天と名けん。

是の如き功德ありて、功德の者を知る功德の人は、一切の處にて樂む。若し功德無からんには、常に苦を受けん。是の故に比丘、既に、是の如き勝れし功德を聞き已り、應に味を貪るべからず。此の第十法は禪・誦することを妨廢ぐ。　沙門の人、生死を畏るゝ者は應當に怖畏すべし。

又、第十一の障礙する惡法は、比丘の坐禪し、讀誦するを妨廢ぐ。是の故に、沙門は應當に捨離すべし。第十一とは、謂はく、癡なる比丘、我慢の心の故に、他に請問せず、內に智開かず、外[七]他に向ひて說きて『一切智なり』と言ひ、『一切智有るが故に、我れ能く說き、我れ能く義を解し、我れ

【六】獷。暴惡なること。

【七】他の字。宋・元・明三本、及、宮內省圖書寮本に依る。原本化に作れり。

輕賤さるるを畏れ、是の如く誹謗る。彼の邪見なる者は身壞はれ、命終らんには、惡道に墮ちて地獄の中に生れん。爾の時、世尊迦葉如來、偈を說きて言く、

時を知り、我慢を離れ、尊長に請問し、比丘、勤めて精進せんには、速に涅槃を得ん。諸の他從り聞く所を、皆他人の爲に說き、自ら知り、我慢を離れんには、彼の比丘諦に知らん。

慢を離れ、大慢を離れ、道を知り、非道を知り、是の如くに自他を知らんには、是れ足ることを知りて比丘なり。我慢の心は甚堅く、心惷く者は愚鈍にして、財利の供養を悕ひ、則ち寂靜なるを得ず。

彼れ是の如く他に請問せざる慢を以ての故に、心堅くして、禪・誦すること能はず。是の如き比丘は常に、他の食を食し、以て性命を存す。彼人、唯、比丘の形服名字有る比丘にして、身壞はれ命終らんには、惡道に墮ち地獄の中に生れん。或は心慢るを以て他に請問せず。是の故に、學ぶ者、乃至、命有りて未だ盡きざる以來は常に他に請問す。是の如き比丘は、心常に安樂にして、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生まれ、彼處に生まれ已り、次第に、乃至、涅槃に到らん。慢を離れしを以ての故に。

又、第十二の障礙する惡法は、比丘の坐禪し、讀誦するを妨廢ぐ。第十二とは、多くの知識を樂しむなり。多知識を名づけて饒益せずと名づく。是の如き比丘は唯、愛を增長するのみ。若し比丘にして多知識の者有らんには則ち多く妨亂せん。多く所作するが故に、心意を妨亂す。心意亂るるが故に、禪・誦することを得ず。出家の人は怨・親に平等なり。猶尙、應に一知識に近づくべからず、何に況んや、復、多知識有るに於てをや。若し懈怠ならんには、唯、比丘と名づくるのみにして、他の舍に到るが故に、即ち眼に見る時、心則ち動亂す、眼に色を見るが故に、眼・識は本を異にし、心は寂靜の法を攀緣せず。觀察するを念ぜず、心正直ならず、多く言說すること有り。知識を見已り、

次第に聲を聞き、心則ち亂れて緣じ、異なる觀察有り、心寂靜ならず。寂靜ならざるが故に、寂靜ならざるを觀じ、攀緣する所有りて、若し知識を見んには、一念にても亦妨ぐ。況んや、知識を見ること乃至久しき時に於てをや。是の故に、沙門、乃至、一知識をも有るを用ひず。況んや、多知識に於てをや。若し比丘有りて知識に近づく者は、饒くの人の處に行き、饒くの人の處より、饒くの人の處に至る。是の如く遊行し、念々に命盡くるとも、而も覺知らず、則ち善分を失ふ。若し善分を失はんには、最も是れ自ら誑むき、乃至、一念の間も禪を修め、讀誦すること能はざらん。是の故に、比丘の是の如くに學ばん者は、染愛を增長せん。應に俗人の知識に親近むべからず。

又、若し能く未來をして安隱ならしめ、涅槃道を示すは導師の知識にして、坐禪し同く行ぜんには、則ち應に親近むべし。何かなるは同く行ふや。所謂、一切の煩惱を除滅き、涅槃城に至るなり。此れは是れ、第一の勝善の知識なり。餘の知識は則ち是れ怨家にして、眞の知識に非らず。眞に非ざるを以ての故に、則ち知識に非らず。若し見、共に語り、共に行ひ、業を共にして、同き所作有らんには、善業を妨廢せん。若し未來世に其の力を得んには、乃、知識と名づく。若しは梵行を示し、若しは修行せしめ、或は怖畏ることを敎へ、未來の世に地獄・餓鬼・畜生に生るるを怖畏しむるを示すを、善知識と名づく。身・口・意をして惡業を造作せしめ、惡道に到らしむる者に、一切近づくこと勿れ。爾の時、世尊迦葉如來、偈を說きて言はく。

　若し未來世を示さんには、彼れは是れ善知識にして、若しは能く惡處を遮り、復、能く災禍を
　救はん。常に利益の法を說き、未來世を利益せんには、彼れは是れ善知識にして、知識にて
　利益を作さん。

此の勝れし知識には、無量種の無量の分別有りて、種々に說法し、多く飲食するに非らず、禮拜して舍に入り、聲・觸・味・香・色を愛することを示すに非らず。知識と名くるを得るも、是の如き知

識にして善き知識に非らざるは、善き比丘は應當に捨離すべし。尙、應に此の一知識に近づくべからず。況んや、復、多くに近づくに於てをや。是の如き知識には無量の過を生ず。若し知識有りて、未來世に不利益を作さんには、知識と名づくと雖も、實は是れ怨家なり。若し比丘有りて、彼の知識に近づかんには則ち自の業の坐禪し、讀誦するを妨げん。

又、第十三の障礙する惡法は比丘の坐禪し、讀誦するを妨廢ぐ。是の故に、沙門は應當に捨離すべし。第十三とは所謂、比丘、惡と同處するなり。一切の比丘、惡と同處せんには、禪・誦することを妨廢せん。惡と同處するに、凡そ五種有り。何等を五と爲すや。所謂、比丘、善く淨戒を持し、第一の善法にて、正直の心有り、而も第一の破戒の惡人と同處に止住らんには、自在を得ざらん。此れは是れ第一に惡と同處するなり。又復、第二に惡と同處すとは、所謂、比丘、自在ならざる過、或は自在の過なり。邪見の人と共に相隨ひて、若しは村、若しは城、若しは多人の處に同く行き、同く住す。此れは是れ、第二の惡と同處するなり。又復、第三の惡と同處するとは、所謂、比丘、常に、[一]數、親舊・知識を見んことを樂み、往かんと欲し、近づかんと欲し、與共に、相隨ひて、俗に在りし時の先に住せし家に至る。此れは是れ、第三の惡と同處するなり。又復、第四の惡と同處すとは、所謂、比丘、他に輕賤めらるるを畏れ、知見を求むるが故に、惡處に到り、論師の所に住し、共に相ひ習ひ近づく。此れは是れ第四の惡と同處するなり。又復、第五の惡と同處すとは、所謂、比丘、心意動亂して正しく行ふこと能はず、先に飲食し、或は臥具せし等を、或は先に食ひ來り、或は飲み來り、或は先に臥來り、婦人に近づき來り、或は先時に受用せし所の色・聲・香・味・觸を、是の如き種々を憶念し、思惟して、境界の處を念ず。境界の處を念ぜんには破壞されん。餘の一切の處は皆悉く避く可きも、此の境界の處は則ち避く可からず。是れ第一の最惡の處なるを以ての故に。一切の禪・誦等の業に於て最も妨を爲すを以ての故に。自餘の惡處は皆悉く避くべきも、唯、此

【一】樂數見の三字宋・元・明三本に依る。

の一處は最も避く可からず。境界の樂は、自の心に從りて起る分別せらるる悪處にて、最も避け難しと爲す。唯、坐禪の三摩提の樂を除く。正しく觀察して、是の如く念ぜんには、能く避けん。爾の時、世尊迦葉如來、偈を說きて言はく。

善く觀察せざる風に、吹かれて熾然たる火をも、彼の正しく觀察する雨は、能く滅して餘無からしむ。　衆生の先に起せし所の、久しき時の無明の闇も、如し、智慧の燈起らんには、能く滅して餘無からしめん。　欲、癡の火は能く地獄の愚癡の人を燒く。　智者は則ち爾らず。是の故に、涅槃を得。　是の如き十三法を、智の光明は能く除く。　是の故に、過を畏るる者は、常に應に勤めて持戒し、自身中の三種の過の根本を拔き出し、智慧の大火を以て、多くの煩惱の薪を燒くべし。

向に說きし所の如く、悪と同處するを、應に方便を設けて一切遠離すべし。出家せる沙門は寧ろ當に獨りにて行ふべし。多く憶念すること勿れ、亦、懈怠すること莫れ、本の村、本の城、本の多くの人の處、過去の樂しき事を憶ふこと勿れ、樂しむこと勿れ、本の時の節會の日の饒くの人の處を念ふこと勿れ。本曾て遊行せるを亦、憶念し悕望て見んと欲すること勿れ。亦、諸の悪弟子を攝受すること勿れ、諸の悪知識に亦、親近むこと勿れ、聲・觸・味・香・色を樂愛すること勿れ、染心を生ずること勿れ、正しからざるを行ずること勿れ、心驚き動くこと莫れ、亦、飮食・敷具・病藥の須ふる所を悕望むこと勿れ、種々の雜色の袈裟を著ること勿れ、亦、方便して推し搗きて平ならしむこと勿れ、若し洗浴の時は脚足を以て、身體を揩踏せざれ、種々の間雜の言語を作すこと勿れ。是の如くんば、無始よりの闇の聚を燒滅せん。極悪の生死、五道是れ門にして、六塵の境界にて、分別の焰起らんには、地獄・餓鬼・畜生の中にて常に燒かれ、常に炙られん。一切世間の愚癡なる凡夫は、處々に流轉し、燒炙かれ、失壞し、苦の海中に入りて、生死に轉行するも、猶、厭離せず、持戒を

行ふことを捨つ。若し人、天に生れんには、第一の放逸にて、後に彼天を退かん。先の同侶にて勝れし者と離別し、生れて地獄・餓鬼・畜生に在り、第一の苦を受け、悔の火に燒かるるとも、救ふ者有ること無けん。放逸に壞はされ、悔の火に燒かれ、生れて地獄・餓鬼・畜生に在り。是等を以ての故に、諸有の未來に退かんことを怖畏るる者は、一切皆應に正法を修行し、常に是の如き法律を斷絕せざるべし。一切の如來・[二]應正遍知は放逸なる天の爲に、放逸を斷除す。若し人、天に生れんには、一切皆是れ持戒の力の故なり。若し心を善く修め、善く調伏するもの有らんには、是の如きの人は、死すと言ふことを得ざらん。身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れん。汝等天衆の一切、未だ、此の天に生まるるは、戒の輕重に因ることを知らず。我れ饒益する爲に、汝に彼業を示し、是の故に、此の十三の法門を說けり。人・天の世間は迭互に因と爲る。人世界中にては則ち能く持戒す。天世界中にては則ち持すること能はず。人死しては天に生る、若し放逸ならずんば、退きて人中に生れん。是の因緣を以ての故に、此の經を說けり』と。彼の佛世尊・迦葉如來・天人を利益し、饒益し、安樂にし、乃至、涅槃せん。是の如くに一切世間を利益し給ふ。

爾の時、彼處の牟修樓陀夜摩天王、幷に天衆等、深く厭離を生ず。欲に處ると雖も、欲中にて放逸を行はず。皆悉く放逸ならざる行を成就し、世尊迦葉佛の塔を頂禮し、其の心淸淨なり。彼の一切の天、本來の時に還るが如く、是の如くに去んぬ。

迦葉世尊の第六經竟んぬ。

此の法を名づけて、六の修多羅の山樹具足の地處の流行と爲す。

爾の時、天衆の一切、皆迦葉佛の塔を出でて、天主牟修樓陀に問ふて是の言を作さく『天王よ、云何にして此の佛塔を知り給ひしや』と。爾の時、天衆、是の如く問ひ已り、牟修樓陀天主は告げて言はく『汝等天衆の一切皆聽け、我れ因緣有りて、先に此の塔を見たり。我れ先時に、始めて此の

【二】應正遍知。應と正遍知。佛の十號の中の第二號と第三號なり。應は應供の略。正遍知は又正等覺と云ふ、佛の十號を見よ。

天に生れ、放逸を行ひ、境界を喜樂み、五の羂に縛られ、周く此の夜摩の地處を遍行へり。五欲の功德にて遊戲し、樂を受け、處々に行き、一園林より一園林に至り、山從り山に至り、巖より巖に至り、崖より崖に至り、一華池より一華池に至り、一峰の處より一峰の處に至り、多く無量百千の天子有りて天女の衆の爲に圍遶る。彼の天女の衆は無量百千の服飾にて莊嚴りて天子の前に在り、歌舞し喜笑し遊戲して圍遶けり。我れ爾の時に、是の如く遍く觀ぜり。「此の天世間は樂みて境界に著し、五欲の功德にて、心に歡喜を生じ、愛に心牽かるゝ』と。我れ三處を行くに皆妨礙ず。所謂、水中にては鵝の背上に在り、一鵝の背より一鵝の背に至り、次に復、鴛鴦の背上に在りて、一鴛鴦より一鴛鴦に至り、次に復、鴨に乘りて、鴨の背上に在り、一鴨背より一鴨背に至り、次に復、蓮華の中に在りて、一蓮華より一蓮華に至り、水の波の中に在りて、波より波に至る。處々に遊戲し意の隨に行ひて障礙有ること無し。一切嬉戲し歌舞し歡笑して、心に極めて樂を受く。是の如くに遊行せり。

我れ既に是の如く種々に戲れ已りて、復、餘戲を念ぜり。謂はく、陸地に處りて殿堂に乘り、百千の天女に圍遶れ、相隨ひて、山より山に至り、一山峰より一山峰に至り、一山谷より一山谷に至り、一園林より一園林に至り、一山窟より一山窟に至る。我れ爾の時に、是の如き處に在りて行ひ、障礙せざりき。

是の如く次第に、虛空中に在りて、復、堂殿に乘ずる百千の天衆に圍遶かれ、諸の天樂を作し、妙なる音聲を出して歌舞し喜笑し、遊戲を行ひ、此の一切の天世間に遍し。說く可からざる種々の異處を見、多く七寶の光明に照曜ける勝妙の處有り。是の如く山峰の處々を遍く見るに、百千の樹有りて七寶にて莊嚴れり。是の如く次第に復、河有るを見るに、百千の蓮華集りて其の岸に在り、處々に皆微妙なる蓮華有り。我れ天衆と共に、皆是の如くに見、虛空中に在りて、是の如くに下を觀

るに、一切の諸の欲の功德を具足せり。

此の天世間の百千種の殿は、處々に皆饒くして、我れ常に中に行くも障礙すること無し。謂はく、三處の水・陸・虚空に在りて、是の如く遊戲し、種々に樂を受く。

我れ、復、時有りて遂に六山を見るに、六の光明有りて空を穿つて出づ。焰の色は分明にして、何なる物なりやを知らず。我れ時に見已りて希有き心を生じ、專念に思惟すらく「此の見る所の者は昔未だ曾て有らず、是れ何物爲るや」と。是の如く念じ已りしに、即、幷びに行殿の一切の天衆は速疾かに前を去りて、六の光明に詣る。我れ既に彼の六の光明の所に到るに、幷びに殿倶に墮つ。我が先に有せし所の光明・威德は一切損滅せり。我れ爾の時、心に自ら思惟すらく「此れは是れ何物なりや。是れは何なる勢力なりや。我れ自身、幷に此の天衆の一切をして皆墮せしめ、威德の光明を一切損滅せしむ」と。我れ爾の時、既に思惟し已りしに、天衆中に一舊天有りて、無垢廣と名づく。彼天、先に是の如き六山の六種の光明を見、我れに語りて言はく「天王、今や畏るる所有ること莫れ、王は則ち過無し、此の天王に不吉有ること無し。願はくは王よ、今、聽き給へ。何なる因緣を以て、天王、今、幷に此の天衆、空中にて墮ちしや。過去に、曾て無量の天王有りき。曾て此處の虚空中を行くに、過ぎるを得ること能はずして、皆是の如くに墮つ。天王先より來未だ曾て聞き得ず、知らざるを以ての故に、是の如くに過ぎんと欲して、卽便ち下に墮ち、威德の光明一切滅せんとす。此の因緣にて我れ今爲に說かん。此處に常に、六佛・如來・應正遍知・明行滿足・天中の天・一切世間の眞實の知見有て、此の山樹具足の地中に於て、六佛塔を作り、天人を利益せり。此の佛塔は是れ應に禮すべき所、應に供養すべき所にして、禮拜し供養せんには、力を得ざること無けん。何を以ての故に。更に勝れしもの無きが故に。是の如き佛塔を[一三]過ること得可からず。此の因緣を以て、天王、今、是の如く下に墮ちたり」と。

【一三】過の字。宋・元・明三本及宮内省圖書寮本に依れり。原本、遇に作れり。

我れ時に、彼の無垢廣に告げて言はく「佛、何處に在すや」と。彼の無垢廣、即ち我に答へて言はく「今や、悉く無し、世間の中に一切皆無し。彼れ一切を知り、一切を悉く見、欲の過惡を知り、生死中の諸の苦惱を知り已り、精勤して[一四]六波羅蜜を修行し、劫數は三[一五]阿僧祇を滿足し、一切智を得て、涅槃に入り給ふ。此れは是れ略して說けり、廣く聞くを得んと欲せば、此の佛塔を見よ。更に、廣く說んが爲に、此の六佛塔、今や山樹具足の地處中に在りて住す」と。

我れ、爾の時、彼の舊天の無垢廣の言を聞きて、希有の心を生じ、勢力を見已り、彼の宿舊き無垢廣天、幷に諸の天衆と共に、六塔の所に到り、到り已りて思惟し、法を聞きて生死を度らんと欲するが爲の故に、佛塔中に入る。佛塔に入り已りて、是の如き法の彼の佛世尊の宣說し給ふ所を聞けり』と。時に、彼の天衆、天主牟修樓陀の是の如き語を聞くことを得已り、各、天王を辭して自らの地に向ひて去りぬ。牟修樓陀夜摩天王、亦、先來に自ら住せし處に向へり。佛塔を說き竟んぬ。

【一四】六波羅蜜。波羅蜜(Pāramitā)は到彼岸度とも譯し、菩薩の大行に名づく。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六を六波羅蜜と云ふ。菩薩は此六法を修し自利利他の大行を究竟して涅槃の彼岸に到るなり。

【一五】阿僧祇(Asaṁkhyeya)。無數と譯す。

卷の第五十一

觀天品之三十

夜摩天之十六

又、彼の比丘、業の果報を知り、夜摩天の第七の地處の廣博行と名づくるを觀ず。衆生は何なる業にて彼處に生るるや。彼れ見聞して知り、或は天眼にて見るに、若し人、曾て持戒を知り、善心にて殺さず、盗まざることは、前に說きし所の如し。復、邪欲を捨つ。所謂、人有り、或は林中に到りて妙へなる聲の鳥に近づくに、彼の妙聲の鳥、迭互に欲心を生ずるが故に、欲の音聲を出し、雌鳥前に在り、雄鳥後に在り、相ひ隨ひて共に行ず。彼鳥の翅羽に種々なる色有りて、一切の見る者は、心に皆歡喜び、欲情內に發す。而も彼れ見已りて、欲念を生ぜず、心に思惟せず。況んや復、欲を行ぜんや。彼人、是の如く清淨に持戒して邪欲を捨て、持戒すること清淨なり。身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生まれ、廣博行の地處に在りて生る。彼處に生れ已り、一切の諸欲の功德和集して、諸の快樂を受く。勝れし園林有りて、銀・毗琉璃・青寶の樹、大青寶の樹、蓮華色寶、種々の寶樹にて園林を莊嚴り、種々の寶池に水流盈滿り。若し人、本より善業を作り來りし者は此の林中に行きて、種々に樂を受く。所謂、林とは、赤色林と名づけ、彼の林中に諸の天衆、諸の天女の衆有り、若し其中に入らんには、彼樹の光明增長して轉た勝り、種々の妙寶は莊嚴りて種々の衣服を成就せり。若し、諸の天衆、彼の林中に入らんには、彼樹の光明普く皆赤色なり。彼の樹林は其の色皆赤蓮華寶の如し。或は〔一〕迦鷄檀那寶色を作し、樹の色は柔軟にして、眞珠の鈴網は其の上を彌覆せり。念ずる隨に果を生じ、念ずる隨に酒流る。意に念ふ如くに行き、天の意念ふ隨に何處にても樂を受け、彼樹の枝葉は卽ち種々の勝妙なる樂音を出し、是の如くに行き去

【一】迦鷄檀那寶。赤色の寶名らしい。不詳

る。多くの天女有り、諸の天衆并に是の如き樹と共に、虚空中を飛び、心の向ふ所の隨にして、鳥の如きと異ること無し。彼の樹既に飛びて虚空中に在り、皆日の出づるが如くに、一切の虚空を普遍く嚴好れり。又復、彼樹を赤色樹と名づけ、水を出すことは雨の如し。虚空中に在りて甚だ愛樂すべし。彼の鈴の聲・天鳥の聲・天樂の聲・是の如き種々なる勝妙の聲は虚空に遍滿てり。

時に、彼の天衆、樹の飛行するを見、其の面前に天女の衆在りて圍遶れ已り、同一に心を樂しまし、多く無量百千の天女有り、共に歌聲を詠じ、虚空中を飛ぶ。樹は前に在りて道を示す者の如く、天衆は後に在り、樹と相ひ隨へり。天衆、是の如く心の念ずる所に隨ひて、是の如き意を起さく『我れ今や、彼樹の上に上らん』と。是の如く念ずる時、彼樹は倒迴れり。諸天卽ち上りて、枝上に在りて遊戲する者有り。彼天、是の如く彼の樹上に在りて、處々に遊戲す。是の如き枝上に枝在りて天住せり。心に念ずる時に隨ひ、卽ち彼の枝上に蓮華池を生じ、天及天女は彼の池中に在り、遊戲して樂を受く。是の如き樹上の枝に住する天は、天女の衆と共に赤林中に在りて、遊戲して樂を受く。皆念ずる所に隨ひて、是の如くに樂を受く。復、餘天の葉の中に住する者有りて、若し念ずる所有らんには卽ち樹の葉の中に妙へなる堂を出生し、彼の念ぜし時に、是の如き堂出づ。種々なる妙寶間錯りて莊嚴り、鈴網は彼の一切の堂を彌覆へり。蓮華池有りて莊嚴を爲し、眞珠の網有りて其の戸牖に篏れり。天、其の中に在り、諸の天女と共に歌舞して遊戲す。彼此迭互ひに相妨礙ずして共に相愛念す。是の如き諸天は善業の力の故に、迭に相親友にして、怨無く、害する[二]こと無し。此の多くの親友は是れ善業の果にして、大善業の果は謂はく多くの親友なり。爾の時、彼天、迭に共に同心にて、赤林中に在り、種々に遊戲す。彼の赤林中の是の如き諸天は一切の欲樂を皆悉く具足せり。大いに勝れし業の故に。意に念ずる所の隨に、虚空中に行きて無量の樂を受く。

又復、彼天、虚空に行かずして、還りて、本の處に向ふに、種々の流れは蓮華池に滿ち、是の如

【二】害の字。宋・元・明三本及び宮内省圖書寮本に依れり。原本、中に作れり。

き處にて、天女に圍遶れ、遊戯して樂を受く。又復、次に、稠樹林と名づくるに向ふに、彼の稠樹林は甚だ愛樂す可し。林中に河有り、河中に乳流れり。是の如き乳の河は彼林を莊嚴り、其乳の勢力は、若し、天の飲まん者は憶念すらく、『往世は何處に生れ、命を捨てて來り、此處より退きて、何處に生るるや』と。若し放逸を行はんには、種々の苦・無量種の苦を【三】被らん。皆憶念し已りて、心に愁惱を生ず。愁惱を生ずるが故に、則ち放逸を離る。放逸を離れ已りて法行に隨順す。此の大饒益は、彼の乳味を飲みし勢力の致す所なり。既に、是の如き勢力の乳味を飲みて、復、彼の稠樹林と名づくる林にに入るに、種々の流水・河池有りて莊嚴を爲せり。種々の鳥有りて彼の池中に在り、其鳥は甚多し。樹の枝には饒くの華あり、華重きを以の故に、皆悉く下に垂れて莊嚴を爲せり。七寶の蜂有り、其色平等にして、彼の華の汁を飲み、以て自適に樂しむ。蓮華池より蓮華池に至り、一樹の下より一樹の下に至る。彼樹の一切は皆毗瑠璃にして、蓮華寶の葉には金色の果有り。是の如き果は、天中の美味なる蘇陀の中にて勝れり。是の如き果は是れ念ずるに隨ふ果なり。若し味を須んとする時は則ち是の如き美味の果有りて生ず。彼果を食已りて、復、歌舞して行き、餘處に向ひ、心に歡喜を生ず。

復、飲林に向ふに、彼の林の樹は天酒を流出し、美味なる香・色にて、甚だ愛樂す可く、具には說く可からず。醉ふ過を離れり。是の如き勝れし酒は樹より流出し、雲の雨を墮すが如し。彼天、飲已り、復更に、轉た勝れし歡喜の心を生ず。彼天、是の如く歡喜を生じ已りて、種々の音を聞き、天の美酒を飲みて、種々の樂を受く。復、無量の光明有りて、自の身を莊嚴り、天女と迭に共に遊戯し、歌舞し、喜笑す。

又復、次に、蓮華龍林に向ふに、彼林の量は五百由旬にして、五寶の蓮華あり、蓮華は甚だ香り、以て莊嚴を爲せり。蓮華龍林に更に餘物無く、唯、蓮華及び諸の龍有るを除く。彼の蓮華中

【三】被の字。宋・元・明・三本及宮內省圖書寮本に依れり。原本、彼に作れり。

の是の如き龍は、迭互に相ひ欲心を起發し、彼の蓮華を食し、衆の龍は一心に迭に共に伴を爲し、龍女に圍遶れて、清水中に在り。水に七の功德ありて、水衣の過を離れ、泥の濁の過を離れ、長短の過を離れ、彼の觸の中に於て、自の意に樂を受く。是の如く、是の如くに龍は自らの意に念ずるに、是の如く、是の如くに意の隨に水生ず。彼の龍、中に在りて、諸の龍女と共に戲樂する時は、亦、諸天の諸の天女と共に樂を受くるが如きと異ならず。

爾の時、天衆は彼の蓮華龍林の中の諸の龍の戲むれ樂むを見、空中より下りて、蓮華林に向ふに、歌を詠ずる音聲・及び諸の天女の莊嚴の音聲・龍の池中に在りて出す聲は、雷の如く、彼の天處に普く、一の歌聲の如し。彼の天處の是の如き歌聲を以て、諸の山谷をして皆響聲有らしむ。餘處の諸天、其の聲を聞くが故に、一切皆來りて同じく蓮華龍林の所に向ふ。種々の光明にて其身を莊嚴り、饒の天女の衆も是の如く同じく蓮華龍林に向ふ。

爾の時、彼天は先に彼の蓮華龍林に在りて、種々に遊戲す。復、餘天有りて、山谷等の處の異異なる處より來り、彼の一切の天は迭に相見已りて歡喜の心、轉た勝れて增長す。是の如き諸天、并に天女の衆、及び彼の諸の龍・并に龍女等共に水中に在り、遊戲して樂を受く。彼の天、天女、龍・龍女等、是の如く樂を受ること久しき時に至り、是の如く遊戲し歌舞し喜笑す。彼天、是の如く放逸を行ひて、善業盡くるが故に、命盡きんとするが故に、彼の天・天女の善業の福德盡きんとする時、若し蓮華に上らんに、蓮華勝れず。是の如き蓮華は水中に沒して、即便ち破壞す。是の如きは、諸天若しは諸の天女の福德の盡くる相なり。是の如くに應に知るべし。

又復、彼天若しは彼の天女の福德の盡くる相は、謂はく、彼の諸天、若しは彼の天女、遊戲するを以ての故に、龍の背の上に上らんとするに、龍忍ぶこと能はずして、彼の龍の背より墮つ。此れは是れ、彼天若しは彼の天女の福德盡くる相にして、放逸を行ふ天は放逸に壞はされ、是の如き相出

き處にて、天女に圍遶れ、遊戲して樂を受く。又復、次に、稠樹林と名づくるに向ふに、彼の稠樹林は甚だ愛樂す可し。林中に河有り、河中に乳流れり。是の如き乳の河は彼林を莊嚴り、其乳の勢力は、若し、天の飲まん者は憶念すらく、『往世は何處に生れ、命を捨てて來り、此處より退きて、何處に生るるや』と。若し放逸を行はんには、種々の苦・無量種の苦を[三]被らん。皆憶念し已りて、心に愁惱を生ず。愁惱を生ずるが故に、則ち放逸を離る。放逸を離れ已りて法行に隨順す。此の大饒益は、彼の乳味を飲みし勢力の致す所なり。既に、是の如き勢力の乳味を飲みて、復、彼の稠樹林と名づくる林にに入るに、種々の流水・河池有りて莊嚴を爲せり。種々の鳥有りて彼の池中に在り、其鳥は甚多し。樹の枝には饒くの華あり、華重きを以の故に、皆悉く下に垂れて莊嚴を爲せり。七寶の蜂有り、其色平等にして、彼の華の汁を飲み、以て自適に樂しむ。蓮華池より蓮華池に至り、一樹の下より一樹の下に至る。彼樹の一切は皆毗瑠璃にして、蓮華寶の葉には金色の果有り。是の如き果は、天中の美味なる蘇陀の中にて勝れり。是の如き果は是れ念ずるに隨ふ果なり。若し味を須んとする時は則ち是の如き美味の果有りて生ず。彼果を食し已りて、復、歌舞して行き、餘處に向ひ、心に歡喜を生ず。

復、飲林に向ふに、彼の林の樹は天酒を流出し、美味なる香・色にて、甚だ愛樂す可く、具には說く可からず。醉ふ過を離れり。是の如き勝れし酒は樹より流出し、雲の雨を墮すが如し。彼天、飲已り、復更に、轉た勝れし歡喜の心を生ず。彼天、是の如く歡喜を生じ已りて、種々の音を聞き、天の美酒を飲みて、種々の樂を受く。復、無量の光明有りて、自の身を莊嚴り、天女と迭に共に遊戲し、歌舞し、喜笑す。

又復、次に、蓮華龍林に向ふに、彼林の量は五百由旬にして、五寶の蓮華あり、蓮華は甚だ香り、以て莊嚴を爲せり。蓮華龍林に更に餘物無く、唯、蓮華及び諸の龍有るを除く。彼の蓮華中

【三】被の字。宋・元・明・三本及宮內省圖書寮本に依れり。原本、彼に作れり。

の是の如き龍は、迭互に相ひ欲心を起發し、彼の蓮華を食し、衆の龍は一心に迭に共に伴を爲し、龍女に圍遶れて、清水中に在り。水に七の功德ありて、水衣の過を離れ、泥の濁の過を離れ、長短の過を離れ、彼の觸の中に於て、自の意に樂を受く。是の如く、是の如くに龍は自らの意に念ずるに、是の如く、是の如くに意の隨に水生ず。彼の龍、中に在りて、諸の龍女と共に戲樂する時は、亦、諸天の諸の天女と共に樂を受くるが如きと異ならず。

爾の時、天衆は彼の蓮華龍林の中の諸の龍の戲むれ樂むを見、空中より下りて、蓮華林に向ふに、歌を詠ずる音聲・及び諸の天女の莊嚴の音聲・龍の池中に在りて出す聲は、雷の如く、彼の天處に普く、一の歌聲の如し。彼の天處の是の如き歌聲を以て、諸の山谷をして皆響聲有らしむ。餘處の諸天、其の聲を聞くが故に、一切皆來りて同じく蓮華龍林の所に向ふ。種々の光明にて其身を莊嚴り、饒の天女の衆も是の如く同じく蓮華龍林に向ふ。

爾の時、彼天は先に彼の蓮華龍林に在りて、種々に遊戲す。復、餘天有りて、山谷等の處の異異なる處より來り、彼の一切の天は迭に相見已りて歡喜の心、轉た勝れて增長す。是の如き諸天、幷に天女の衆、及び彼の諸の龍・幷に龍女等共に水中に在り、遊戲して樂を受く。彼の天、天女、龍・龍女等、是の如く樂を受ること久しき時に至り、是の如く遊戲し歌舞し喜笑す。彼天、是の如く放逸を行ひて、善業盡くるが故に、命盡きんとするが故に、彼の天・天女の善業の福德盡きんとする時、若し蓮華に上らんに、蓮華勝れず。是の如き蓮華は水中に沒して、即便ち破壞す。是の如きは、諸天若しは諸の天女の福德の盡くる相なり。是の如くに應に知るべし。

又復、彼天若しは彼の天女の福德の盡くる相は、謂はく、彼の諸天、若しは彼の天女、遊戲するを以ての故に、龍の背の上に上らんとするに、龍忍ぶこと能はずして、彼の龍の背より墮つ。此れは是れ、彼天若しは彼の天女の福德盡くる相にして、放逸を行ふ天は放逸に壞はされ、是の如き相出

づ。爾の時、彼天の若しは、本來、大放逸ならざるもの有りて、先に彼相を知る。彼相を知るが故に、偈を說きて言はく。

久しき時は已に過ぎ去り、命の盡きる時到らんとし、死ぬ時到らんとせるに臨みしも、癡なる天は覺知らず。　而も心足ることを知らず、境界の樂に貪著し、根は足ることを知らざるが故に、境界の欲を增長す。　五根にて境界を樂しみ、欲の爲に心破壞され、福田の業將に盡んとせるも、癡なる天は覺知らず。　此の大なる運る時の輪は、常に衆生の命を割き、轉じて疾に至らんとせるに臨みしも、癡なる天は覺知らず。　此の死の火は甚だ惡し、業風の爲に吹かれ、命の盡くる時將に至らんとせるも、癡なる天は覺知らず。　生死の有爲の中には、親無く、非親無し、死の羂は甚畏る可くして、能く免れしむる者無からん。　諸有の死未だ來らず、諸有の命未だ盡きざるに、皆應に放逸を捨てゝ自らの利益を作すべし。　死の杖久しからざる間に、必らず衆生の命を破り、大力既に來り至らんには、能く命をして失壞せしむるも、境界の癡に盲にせられ、法の燈明を遠離し、是の故に見知せず。　大なる畏る可き死の羂を癡者は知ること能はずして、死ぬる時に怖畏す。　心、境界に著するを以て、愛の爲に誑らかさるるが故に退き退きて而も復生れ、道より復道に至り、衆生は癡に壞はさる。故に自らの業果を受く。　甚だ惡にして極めて速に、能く諸の世間を破る。　云何にして死ぬ時に怖畏を生ぜざらんや。　衆生豈心無くして、當に是れ畏るゝこと無しと爲んや。　是の如く癡にて知らず、死する時に怖畏す。　退く相は極めて顯現かにして、現に見る如きと異ならず、是の如く知りては、久しからずして、天中より則ち退かん。

彼天、是の如く退く相を見已り、諦に退く相を知りて心意愁惱む。其の餘の未だ退かざる天に向ひて說かず。退かんとせる天に說く。未だ退かざる者は五境界中にて諸の欲樂を受くるを以

て、其の後時には退くことを信ぜざらんことを恐るゝが故に。何を以ての故に、境界の中に於て放逸にて癡なるが故に、或は意迷ふが故なり。彼の天衆の命盡きんとせる者にても若しは放逸なる者には應に爲に說くべからず、亦、應に示すべからず。爾の時、彼天、是の如く知已り、默然として言はず。蓮華池を捨て、餘處に向ひて去んぬ。

彼天、後に復、境界を樂しみ、境界の樂を受く。彼の退かんとせる者は大に羞る相出で、大に畏る相出でしも、癡にて覺知らず、懼れず、畏れず。龍の中に遊戲して蓮華の中に在り。諸の天女と共に、彼處にて久しき時に快樂を受け已り、復、是の如き無量百千の諸天の衆と共に、更に一山に向ふ。彼山を名づけて常樂鬘山と爲す。到已りて上らんと欲するに、天の金銀・天の毗瑠璃・天の蓮華寶・最勝なる天寶の妙門の堂有り、百千の數有りて彼山を莊嚴れり。復、百千の勝妙なる蓮華有りて莊嚴を爲せり。是の如き山中に第一の勝れし樂を一切具足し、百千の樂音を恣に聞く。多くの種々の縷無き天衣を著、自身の光明にて迭に相ひ面を看る。妙へなる色・聲・觸・味・香等有り、心に愛する所の如くに快樂を受け、自らの意念を行ひて、說く可からざる樂を皆悉く成就す。天の河・流水・園林にて莊嚴りしを、見れば則ち樂を生ず。彼天、是の如く次第に、復、常樂鬘山に上り、既に山に上り已るに、堂中に在りて牀に坐る者有り、鵝に乘る者有り、天の蓮華臺上に在りて跏趺して坐せる者有り、天、天女と共に【四】鳩婆羅葉中に在りて住し、種々に嬉戲れ、若しは歌舞等の五樂の音聲にて坐して快樂を受く。其の心、虛空中に在りて行かんと欲すれば、諸の天女と共に處々に遍く行き、彼の天處の處々愛す可に、心の樂ふ所に隨ひ、意に稱ひて去る。處にして燄の如き金銀の蓮華の妙寶の光明なる有り、處にして多くの鳩婆羅華青色の膩なる影の有る有り、處にして則ち是れ天の毗瑠璃青寶の光明なる有り、處にして是れ銀・玻瓈・眞珠の光明の愛す可きもの有り。

次に復、河有り、眞珠の沙有りて、寶の山峰より出でゝ、七功德の清冷の水流有り。彼の峰の河

【四】 鳩婆羅華(Utpala)。優鉢羅華とも書く。青蓮華と譯す。

を見るに、水の旋流有りて、其の狀は猶し眞珠の瓔珞の如し。是の如く觀察し、彼處を見已りて虛空を飛ぶ。復、異處を見るに、七寶の蓮華は水池を莊嚴り、無量の蜂の衆は蓮華を莊嚴れり。是の如くに見已りて、復、異處を觀るに、園林の池有りて甚だ愛す可しと爲す。鳥獸有るを見るに、獸は種々なる色にて、銀色の者有り、金色の者有り。寶の角は愛す可く、蓮華寶の眼・眞金色の背にして、兩脅は白銀なり。玻瓈色の甲にして、背と脚は均しく平なり。復、餘獸有り、羣隊て相隨ひ、七寶の妙色なり。皆畏るゝ所無く、羣々に遊戲して自ら快樂を受け、業の作る所の故に、形體は殊妙にして、其の業を以ての故に、皆天食を食ふ。

又、園林中の餘處に復、孔雀・命々[五]を見る。無縷鳥と名づけ、戲論鳥と名づけ、大眼鳥と名づけ、動翅鳥と名づくる、是の如き等の鳥、羣々に遊行し、山峰の中に在りて園林に出入す。園林中に見て、既に是の如き常樂鬘山に到り、上らんとせる時に臨みて、是の如き鳥を見る。彼山の一廂は則ち是れ青寶、彼の第二廂は是れ蓮華寶、彼の第三廂は則ち是れ金寶。彼の第四廂は則ち是れ銀寶なり。青寶の廂の處に妙寶の堂有り、名づけて雜影と曰ふ。堂中に則ち毗瑠璃の樹有り、其の華は下に垂れて、猶し大なる蓋の如し。流水・河池にて莊嚴を爲し、蓮華の林は乃ち百千有り。百千種の鳥は雜色にて莊嚴て、多くの天女有り、甚だ端正を爲して彼の堂中に在り。

彼の第二廂の蓮華寶の處に笑林と名づくる有り、彼林は銀樹にして、其葉は是れ金なり。赤蜂の羣、無量百千の羣鳥の音聲有り、流水の河有り、河水に香有りて、微風に徐に動く。是の如くに普遍く笑林を莊嚴れり。彼の第三廂の金寶の處に、妙寶の林有りて、樂寶林と名づけ、玻瓈樹有りて莊嚴を爲せり。其樹は金の枝にして、枝の網普く覆へり。無量の鳥の百千の音聲有り、流水の河有りて莊嚴を爲せり。彼處に多くの歡喜せる天衆・歡喜せる天女有り、中に在りて歌舞し、一切の妙へなる欲の功德を具足して莊嚴を爲せり。彼の第四廂の銀寶の處は蓮華寶樹にして、青色寶の枝にて莊

【五】命々(Jivajivaka)。又、共命鳥、生々鳥とも稱し、一身兩頭の鳥なりと云はる。

嚴を爲し、多くの種々の妙へなる音聲の鳥有り。多饒の無量の天及び天女は無量百千の蓮華にて莊嚴れり。無量種の無量の分別有り、無量種に眼の見る所に隨ひて、見れば則ち樂を受くること有り。彼林・彼樹・彼河・彼水・彼の寶の枝等・彼の蓮華池・彼の鳥・彼の獸・彼の蓮華等の種々の色、香・種々の形相は甚だ端嚴爲り。常樂鬘山の處々に皆是の如き諸の天及び天女の衆有り、空に乘り、彼の常樂鬘山に上りて、彼の山處に普ねく、一切皆此の勝念の山を見る。雜色の光有りて、彼天既に見んには、眼則ち樂みて著す。普く山に上らんとし、天女の衆と共に、五樂の音聲・五欲の功德にて快樂を受く。勤めて善業を行ひ、樂みて修め、多く愛す可き善業を作す。持戒の善寶は聖の愛する所の果なり。是の如く樂を受けて、皆彼の常樂鬘山に上らんと欲せり。上らんと欲する時に臨みて、實語鳥と名づくるは、爲に偈を說きて言はく。

　此の河水は速に流る、善業の樂も亦爾なり。癡者は覺知ずして、境界に貪りて誑らかさる。

　是時の來る時の如くに、死も亦是の如く來るとも、樂に迷ひて放逸なるが故に、天、癡にて覺知らず。癡者は智無きが故に、命の已に過ぎしを覺らずして、亦、善業を[六]失ひ、而も愛は盡く可からず。衆生、愛を離れずんば、有の中にて隨順して行はん。彼の癡愛の衆生は、善・不善を覺らず。善果は甚だ愛す可くとも、若し天、受けて快樂せんには、是の如く不善を見て、惡處の苦處に在らん。若し、善・不善を捨て、復、能く諸の過を離れんには、則ち不退の處・生れず死せざる處に至らん。彼の樂とは解脫を得ることにして、欲の樂は脫るゝを得るに非ず。夜摩及び餘天は業盡くるが故に脫るゝことを得るなり。無常なれば則ち住せず、常なれば則ち第一と爲す。有の中の樂を悕望まんには、退き墮ちて樂む可からざらん。

彼の實語鳥は彼の天衆の山に上らんと欲する者し爲に、是の如く說已れり。彼天、聞き已りて、

【六】失の字。宋・元・明三本に依る。

天衆中に於て、若し其れ天の大放逸ならざるもの有らんには、彼天は則ち聞かん。若し放逸なる者は、放逸の過を以て、是の故に聞かざらん。猶、境界に著して、彼の放逸なる天は一切天鳥の說きし所を取らず。是の如き鳥の語は眞實に利益す。時に、彼の天衆、復、歡喜びの心にて第一の山上に向ふに、彼の山頂の峰上に堂有り。堂に在りて坐することは前に說きし所の如し。彼の一山峰を普見山と名づく。彼の普見山は一千の山中にて、最高・最上なり。是の故に、彼山を名づけて普く見ると曰ふ。天女の衆と共に、彼の山頂に上り、種々の樂音にて歌舞して樂を受く。多くの天衆及び天女の衆有り、彼の山峰に上りて、無量色の善業の化せし所の光明の水池を見るに、彼の光明池に愛す可き水有り、其水は清淨にして、中に金魚有り。見し者は眼樂しみ、水波亂れて動き、鵝・鴛鴦・鴨等の鳥羣有り、此の種々の鳥は愛す可き音聲にして、水中に甚多し。又、彼の水中に、多く蓮華・[七]拘婆羅耶・[八]拘物頭華・[九]尼那陀華・[一〇]迦吒摩羅有り、是の如き等の華は遍く池水を覆ひ、種々の蜂有りて種々の音を出せり。又復、多く[一一]曼陀羅華有り、多く金珠有りて間錯を爲し、其水は清淨なり。又、彼の是の如き愛す可き池中に、復、蓮華有り、名づけて沐鬘と曰ふ。百千の葉有りて、一一の葉の中に、無量の葉を出せり。蓮華の葉の青寶色の者有り、蓮華の葉の玻瓈色の者有り、蓮華の葉の金色の者有り、蓮華の葉の白銀色の者有り、蓮華の葉の是れ硨磲なる者有り、蓮華の葉の迦鷄檀那なる有り、金剛の葉に第一の善き香有り。彼の是の如き等の異なる色の葉の中に各々臺有りて、其の色の光明は初に出でし日の如し。彼の種々の臺に無量の色有り。無量なる色の葉は彼の池中に遍くして、所謂、靑・黃・赤・白・黑色なり。臺は白にして赤く、其の香は愛す可く、一の大なる臺に滿てり。爾の時、天衆、虛空より下りて光明池に向へり。下り已りて池に入るに、池に金鳥有り。天既に池に入りて鳥の背上に在り。天の蓮華臺上に在りて、多くの天女と共に遊戲して樂を受くるもの有り、天の拘婆羅耶蓮華の上に在るもの有り。復、餘天の水中に有る者有り、鵝の背に在

【七】　拘婆羅耶。華の名、不明
【八】　拘物頭華（Kumuda)。白蓮華と譯す。
【九】　尼那陀華。不明
【一〇】　迦吒摩羅。不明
【一一】　曼陀羅華(Mandārava)。又、漫陀羅と音譯す。花の名なり。意譯して、圓華、適意華、悅意華とす。

りて水中に入り、遊戲する者有り、陸地に在りて天女の衆と共に遊戲するもの有りて、五欲の功德を皆悉く具足し、迭に共に喜笑し遊戲して樂を受く。堂中に有りて諸の天女と共に異處に遊戲して、同く天酒を飲むもの有り、醉の過を離れ、現に功德を樂しみ、味・觸・色・香を皆悉く具足せり。其の中の諸天に、珠の器を以て酒を飲む者有り、所謂、青寶・銀寶・金寶・毗瑠璃寶・蓮華色寶、及び玻瓈等の種々の珠器なり。天女と共に、金の蓮華の葉にて酒を飲む者有り、開きし葉の穿せず、破らざる拘婆羅耶を以て、天酒を飲み、詠歌の音聲にて歡喜を生ずる者有り、天、蘇陀の食の色・觸・香・味を皆具足せるを受用せる者有りて、各各、別別に自らの眷屬と共に、種々に樂を受く。異處に於て、諸の天女と共に、五樂の音聲にて種々に歌舞し、光明池を遶りて遊戲する者有り、天女と共に水中に在りて遊戲する者在り。彼水の味は天の念ずる隨に轉じて、若し天心に、此の水の色・香・味・觸をして若しは冷、若しは煖ならしめんことを念ぜんには、善業の力の故に、念ずるに應じて有り。善・不善の果報は是の如くにして、作者有るに非らず。又復、彼天、若し是の如くに、此の水の酒と爲り我れをして飲むを得せしめんことを念ぜんには、卽ち、念ぜし時に、皆是の天酒の觸・味・香・色を皆悉く具足して、醉の過を離る。天、既に之れを飲みて勝れし樂みを增長し、善業力の故に、心に歡喜を生ず。然く、彼の諸天は自らの業力の故に是の如く樂みを受く。自らの業の化せし所なり。一切・作せし所の善業は失はざらん。業の羂の師は人身の機關を三界中にて種々に戲弄すれども、愚癡なる凡夫は覺らず、知らざるなり。是の如くに、諸天は五欲の功德を皆悉く具足して快樂を受く。彼の天中にて、實語鳥と名くるは、爲に偈を說きて言はく。

　油盡きては燈滅するが如く、身の命も亦是の如し、本の業盡くるを以ての故に、天中より必定して退かん。　壁の破壞する時に、壁に依りて畫も亦滅するが如く、是の如く業盡くるが故に、天の樂も則ち有ること無けん。　天、彼の天處より福業盡きんには則ち退かん。　一切法

は無常にして、衆生は悉く破壞せん。皆無常にして定まらず、命は速にして久しく住せざらん。死の力勢は甚だ大なるとも、天は覺知らず。

彼の實語鳥は天衆を利益す。彼の諸天の業力を以ての故に、是の如くに已に說けり。若し彼の諸天にして未だ多くの時に放逸を行はざる者は、既に鳥の語を聞きて、少時の間、正しく心に思惟す。若し放逸せる者は、亦、聞かざるが如し。心亂れしを以ての故に、聞きしと雖も受けざるなり。

彼の地處に於て、是の如く久しく境界の樂を受け已り、各、乘りし所の如くにして、彼の山頂に向へり。諸の天女と共に、空を飛びて往き、復、餘處を見るに、無量なる山有りて、種々の形相の一切の山の中にて、常樂鬘山を最も高く出づと爲す。復、一山有り、平等聚と名く。復、一山有り、名けて普見と曰ふ。此の三山の量は夜摩の處の一切山中に於て、最も高大と爲せり。天衆、是の如く彼山を觀察するに、其山の光明は彼の天處に遍し。天衆既に見て、卽ち彼の常樂鬘山に上ることを得たり。上り已りて則ち種々に間雜れる諸の妙寶の樹を見るに、金樹・銀樹・毗瑠璃樹にて彼山を莊嚴れり。彼樹の根々・莖々・節々・枝々・葉々は皆是れ七寶にて莊嚴りて殊妙なり。彼樹の根・莖は七寶にて莊嚴り、諸の節は次第し、寶は別にして同からず。一節は則ち是れ毗瑠璃寶、一節は則ち是れ蓮華色寶、次の節は銀寶、次の節は金寶、次の節は則ち是れ玻瓈の寶、次の節は則ち是れ硨磲の寶、次の節は則ち是れ迦鷄檀那なり。彼樹は是の如くに節々各々の莊嚴同からず、根莖より乃至葉の一切は皆是れ七寶にて莊嚴れり。

彼樹に遠からずして、復、寶堂有り、行りて亂れず。皆同一の色にして、人世間の日の光明の如し。彼の諸の天衆、戲れ樂むが爲の故に、次に彼堂に向ふ。彼堂の數は十百千有りて、心意に量りしが如く、意に念ぜしが如く行り、意に念ぜしが如く作れり。彼の天の中に、是の如き堂有り、

彼堂の處の近くに、蓮華池有りて、其の數の多少も亦彼堂の如し。是の如き蓮華の節々は次第に七寶にて莊嚴れり。

又、彼處に、復、衆の鳥有りて、三功德にて行く。何等を三と爲すや。一は是れ水を行き、二は是れ陸を行き、三は是れ樹を行くなり。水を行くと言ふは、謂く、鴛鴦・[一二]泥盧槃・[一三]大胡盧・鵝・鴨・[一四]摩鳩羅等に名く。是れは水を行く鳥なり。陸を行くと言ふは、彼の山頂の處にて、妙へなる音聲を出す。謂く、二[一五]枝と名け、歡喜聲と名け、一切忍と名く。鳥有り、名けて一切鳥聲と爲し、一切時に恒常に樂を受くと名く。是の如き等の鳥は是れ陸を行く鳥にして、天の音聲中、此の鳥の音聲を最も美妙と爲す。樹を行くと言ふは、謂く、[一六]倶翅羅、命命鳥と名け、孔雀鳥と名け、鸚鵡鳥と名け、普眼鳥・不眴眼鳥と名け、普行鳥と名け、實語鳥と名け、知時鳥と名く。是の如き等の鳥は是れ樹を行く鳥にして、人中に牛有り、彼天に皆有り。彼の天中に、是の如き等の無量の衆鳥の種々の音聲有り、是の如き天中の三種に行く鳥は妙へなる音聲を出せり。又、常樂鬘大山の頂上に更に、復、鳥有りて虛空中を行き、身は是れ七寶なり。若し、彼の諸天、放逸なる行を行ひ、放逸に壞はさる時に、彼鳥、偈を說きて之れを呵責して言く。

放逸に壞はされし天は、境界の爲に誑らかされ、愛心に迷亂されて、死王の到らんとせるに臨めり。　欲樂に染著するが故に、善・不善を知らず、一切衆生は癡にして、境界の欲に誑かさる。　種々の道に行きて、種々の業を造作し、種々の心の爲に使はれて、五道に流轉す。

是の如き彼鳥は、放逸なる天の放逸を行ふを見るが故に、已に此の偈を說きて、之れを呵責することは、猶し父母の諸子を調伏するが如し。而も彼の諸天、是の如くに聞きしと雖も、受けず、取らずして、猶故らに、樂しみを受け、遊戲・歌舞し、乃至、一切の善業を皆盡くせり。則ち後時には彼の天處を退き、天處を退き已りて、自らの業の行ひしが如く、地獄・餓鬼・畜生に墮せん。若し餘

【一二】泥盧槃。不明
【一三】大胡盧。胡盧は瓢簞のことなり。
【一四】摩鳩羅。不明
【一五】枝の字。宋・元・明三本及、宮內省圖書寮本に依れり。原本技に作れり。
【一六】倶翅羅(Kokila)。好眼鳥と譯す。

業の故に、人中の同業の處に生れんには、則ち第一の富樂の處に生れ、勝上の意有り、心常に歡喜び、好き國土の[一七]迦那那洲・若しは[一八]師子國に在りて富樂なる處に生れ、長者の家に生れん。餘業を以ての故に。

廣博行地の第七已に竟んぬ。

又、彼の比丘、業の果報を知りて、夜摩天の有する所の地處を觀ず。彼れ見聞して知るに、夜摩天中に復、地處有り、名けて成就と曰ふ。衆生、何なる業にて彼の地處に生るゝや。彼れ見るに、人有り、佛・世尊を信じ、善心にて持戒し、殺さず、盜まざることは、前に說きし所の如し。復、邪婬を捨てゝ、先に共に行ひし所の婬なる婦女を、心に憶念せず。彼の善男子、是の如くに持戒し、善意を心に熏ぜんには、身壞はれ命終りて、善道の夜摩天中の成就の處地に生れん。彼處に生れ已らんには、自らの業に相似して果報を得ん。所謂、園林・蓮華池水あり、池に種々の鳥有り、美妙なる音聲にて、種々に莊嚴り、妙へなる身の天女は圍遶けり。是の如き等の天樂の處に生れ、五樂の音聲にて種々に遊戲し、譬喩す可からず。勝妙なる聲・觸・味・色・香等にて快樂を受く。譬へば、水池の如きは、五の水[一九]瀆有り、皆是れ水にして、水池の畔に在り、水池中に入りて遮へず、礙へず。是の如く、是の如くに五根に愛著し、五愛の身は常に五處に隨ひて、厭足ことを知らず。譬へば、五處に皆悉く火を置くに、一切燄然とし、風に吹かれて普く熾なるが如し。若し乾きし薪を以て、是の如く、是の如くに、五火の中に著するに、彼火は是の如く熾然として增長す。是の如く、是の如くに、此の根の愛も然えて、火の如く增長し、憶念の風に吹かれ、正しく觀ぜざる燄・境界の乾きし薪・五根の火の燄も是の如く、是の如し。此の五根の火・境界の薪を得て、是の如く、是の如くに、根の火は熾然たり。世間の火に、飛ぶ蛾の中に入らんには則ち燒然るゝが如く、是の如く、是の如くに、若し愛境界の火に入るもの有らんには、則ち燒かるゝ所と爲らん。一切の愛に著する

【一七】迦那那洲。不明

【一八】師子國 (Siṃhala)。僧伽羅國、執師子國と云ふ。今の錫蘭島なり。

【一九】瀆。田畝、又は、邑里などの中の通水路、みぞのこと。

は、皆飛ぶ蟲の如くにして覺らず、知らず。一切の諸天は彼の飛ぶ蟲の火の爲に燒かるゝが如く、五境界に墮つ。天女の衆と共に、園林中に行き、蓮華池より蓮華池に至り、蘇陀の處より蘇陀の處に至り、飲酒の處より飲酒の處に至り、美音の處より美音の處に至り、香華林より華の香を齅ぎ已りて、次に、復、往きて勝れし香華林に到り、一林の處より一林の處に至り、林を見ては眼樂しみ、復、其の餘に向ふ。眼に樂林を見て、是の如く遍く諸の境界の火に入る。

彼山は活たるが如くにて、彼天之れを見るに、命ある物を見しが如し。彼の諸の天衆は是の如く山を見、是の如く、是の如くに處々を普く見るに、火の酥を得ては、其の燄の熾然たるが如し。是の如く彼處に始めて生れし天子は是の如き處の七寶にて莊嚴られしを見、無量種に見、心に則ち樂を生ず。彼の山の處に無量百千の諸の天女の衆を見るに、是の如き天女は甚だ多く、甚だ饒し。彼の一切の處に多く天女有りて、種々に莊嚴りて、彼處に遍滿せり。天衆も亦爾く彼處に遍滿し、歌舞し、遊戲して、迭に共に樂を受け、五樂の音聲にて遊戲して樂を受く。若しは下劣なる天には、是の如き種々に莊嚴れる天女、一萬有る可し。是の如く次第に三萬二千。是の如く次第に四萬の者有り、五萬の者、是の如く次第して、乃至百千の諸の天女の者あり。爾の時、是の如き諸の天女の衆、彼の天子と迭に共に相愛して、厭心を生ぜず。一切の天女の一一、各々是の如く知ることを作さく『天子我れを愛す』と。彼天、是の如くに欲樂を愛して、厭足ことを知らざることは、火の酥を得ては燄起りて熾然たるが如し。彼の放逸を行ふ諸の天子等、園林の樹木・蓮華池の中、河水の中に於て、愛す可き天女と共に快樂を受く。是の如く次第に復、後時に於て、彼の天女と共に、鵝林中に入る。是の如き林は彼の天中に於ても猶尙希有なり。況んや餘處に於てをや。謂く、彼林の中に鵝有りて莊嚴れり。是の如き鵝は彼林に在りて住せり。彼の鵝は銀の翅にして、金の翅の者あり蓮華寶の足なり。復、餘鵝有りて蓮華寶の嘴・金寶の間腹なり。金の身の鵝有りて、背は

則ち是れ銀・迦鶏檀那勝寶の足にして、其の嘴も亦是れ迦鶏檀那たり。復、餘鶏有りて、玻瓈を背と爲し、脊は是れ硨磲・腹は是れ青寶、足は則ち是れ金なり。復、餘鶏有りて、七寶の雜りし身なり。鶏の純色なる有り、謂く、銀色の如し。玻瓈色有り、純金色有り、硨磲色有り、青寶色有り。復、餘鶏有りて、大青寶色なり。復、餘鶏有りて、迦鶏檀那勝寶の色なり。業の如くに心〔二〇〕畫き、是の如くに樂を受く。是の如き鶏は復、勝妙にして端正なる雌鶏と共に、處々に遊戲し、或は池中に在りて、是の如く遊戲す。是の如くにして次に、蓮華林の中・山河等の中に在り。或は陸地の蓮華林中の柔輭き地處の種々の華有る（ところ）に於て、彼の雌鶏と共に、是の如くに樂を受く。爾の時、諸天、彼の鶏林に入るに、種々に莊嚴れる天女多饒くして、彼の天女と共に遊戲して樂を受く。彼天、既に是の如き鶏を見已り、希有の心を生じ、轉た勝れて歡喜び、眼を廻らして是の如き勝れし林を看る。彼の諸の天女は天心に隨順し、既に天子の心歡喜べるを知り已りて、天子に語りて言はく『天・今、當に知るべし。此れを鶏林と名く』と。是の如き鶏林は甚だ愛樂す可く、種種の寶樹の光明は殊妙にして、種々の寶有りて此林を莊嚴れり。希有なる功德を皆悉く具足し、種種の蓮華にて莊嚴を爲し、無量百千の山峰にて莊嚴り、種々の華有りて彼林を莊嚴れり。是の如き種々の名の倘說き叵き蓮華池有りて、彼林を莊嚴れり。

彼の林中に鵝王有りて住し、名けて善時鵝と曰ふ。天主牟修樓陀の如くに此の天中に住せり。彼の善時鵝は乃ち是れ一切の鵝中の王なり。此の林中に住して、廣池と名くる（ところ）に在り、遊戲して樂を受く。

牟修樓陀夜摩天王は恒常に此の鵝王の所に來至して、此の鵝王と共に種々に遊戲し、一切の天衆と共に戲むれる時に受くる所の樂より勝り、餘の一切の諸天と共に遊戲するは皆悉く鵝と共に遊戲するに如かず。彼の天子言く『何なる因緣を以て、夜摩天王は恒常に彼の善時鵝王と共に遊戲する

【二〇】畫の字。宋・元・明三本、及宮內省圖書寮本に依れり。原本盡に作れり。

や』と。天女、答へて言く『是の如き因緣は一切の天衆皆悉く知らず。天子、今や、是の如く心に念ぜよ。我れ今共に去りて、彼の善時鵝王の所に向はん。彼の林中に入り、乃至、池に到りて盡く林を見已り、彼の天王牟修樓陀を見、及鵝王を見ん』と。彼の始めて生れし天、天女の衆より是の如く聞き已りて、是の如き言を作さく『我れ今、共に去りて、彼の鵝王牟修樓陀天王の所に到らん』と。爾の時、是の如き諸の天女の衆は始めて生れし天と共に彼の林間の水池の中の鵝王の所に向ひて、未だ鵝王に至らざるに、已に種々なる天妙の樹林・多饒くの種々なる鳥獸の羣衆を見る。種々の色の種々の鳥獸有りて、鳥は雌鳥と共に、獸は牝獸と共に、所應が如く食して同からず、天の根・果を食して、皆七寶にて身を莊嚴れり。勝妙なる中間の平地・樹林の中・窟穴の中・若しは平地の處に於て・或は河岸・蓮華池の岸に於て、或は池中・或は山谷の中に在りて、羣々て遊戲し、或は音聲を出せり。彼の始めて生れし天、見已りて心喜ぶ。又、希有なる未曾有の心を生じ、眼は則ち眴動し、諸の天女の衆は之れを圍遶きて、詠歌の音聲にて是の如くに遊戲して、彼の鵝林に入る。

復、一處に、孔雀羣の園林中に在るを見るに、彼の諸の孔雀に咽起りし者有り、咽頂を以て相ひ揩摩る者有り、是の如くに露處にて種々に遊戲せり。復、孔雀有り、七寶の身にて闇き林中に在り、屛處にて遊戲せり。樹心と共に遊戲する者有りて、種々の孔雀は天に所應の如し。始めて生れし天子は諸の天女と共に是の如く見已り、鵝林に入らんと欲するに、多くの無量百千億數の諸の天女の衆の鵝林中に在るを見る。復、餘林を見るに、甚だ愛樂す可し。所謂、河有り、第一の淸水にして、普く河の兩岸に多くの諸の天及び天女の衆有り、七功德の水は彼の河に盈滿てり。所謂、河とは、欲水河・寂靜水河・歡喜流河と名け、酒流河と名け、河の名けて葡萄酒流と爲す有り、隨稱一切念水と名くる有り。鳥の音聲の愛樂す可き河と名く。彼の大林中の是の如き河流に

て、彼の岸に行る鳥は、冷水を飲み已りて、偈を說きて言はく。

故き業を盡きせしむること勿れ、數々新しき業を造れ。本の業盡くるを以ての故に、則ち天中より退く。若し人、新しき業を造らんには、三種に三時に生る、故き(もの)未だ盡きざるに、新を造らんには、則ち惡道に墮ちざらん。若し未來世を畏れて、現在に貪著せず、過去を樂まざる者は、久しからざる間に脫るることを得ん。若し心動轉せず、苦樂も心を經さざる　彼の智者は身を捨てて、餘處にて則ち樂みを得ん。若し、故き業の樂を受けて、新しき業を造らずんば、故き業を受け盡くし已りて、癡者は死ぬ時を知らん。若し、彼の癡なる心の天は、境界の樂を受行けん。若し、佛の功德を勸めんには、欲の爲に使はれざらん。若し是の如き大なる過患の身を得ること有るも、能く現樂に著せずんば、則ち是れ智慧の者なり。

若し欲の爲に使はれず、過を畏れて貪著せず、復、惡道を畏れんには、則ち是れ勇健の者なり。若し心樂に貪著して、惡道を畏れずんば、此れ癡なる愛樂の行にして、愛に由るが故に退失せん。諸の欲に貪著し、得已りて心に歡喜び、欲を修めて力を得ずんば、後時には惡道に墮ちん。電の如く、陽焰の如く、[三]乾闥婆城の如く、是の如く欲は惡くして、能く一切を誑惑はすと說けり。

彼の岸に行る鳥は、始めて生れし天の放逸なる行を見るが故に、是の如くに偈を說けり。彼の始めて生まれし天、新に欲に著すが故に、聞くと雖も受けず。爾の時、彼天、彼の鳥の語を聞きしも、既に受けずして、已に復、鵝林に入りて、更に、無量の境界の樂を受く。始め欲に著せしが故に、鵝林勝れしが故に、聞きしと雖も取らず。是の如き鵝林の枝の網に覆はるるが故に、實と實ならざるとを一切知らず。

彼の鵝林中にて、寶珠林を見るに、遠き處にて遙に第一の光明を見る。復、百千の光明の羅網有

【三】乾闥婆城（Gandharva）。又、犍闥婆城・健闥縛城とも書き、尋香城・蜃氣樓と譯す。樂人を乾闥婆と名け。彼の樂人巧に樓閣を幻作して人に覩しむるを、之を乾闥婆城と稱す、而て彼の空中に現ずる蜃氣樓のさま之に類すれば亦稱して乾闥婆城と云ふ。以て物の幻に有りて實には無きに譬ふなり。

るも、其處の諸天は尙看ること能はず。況んや、下地の天の三十三天・四天王天は能く看んや。彼天の珠林の是の如き光明は、若し天、欲を發さんには、是の如き寶珠を堂舍と爲作し、虛空中を行き、珠の內に孔有りて、天其の中に坐し、虛空を飛行し、遊戲して樂を受く。善業を以ての故に、珠を堂舍と爲して虛空を行く。是の如き珠中に天の園林、蓮華の水池・種々の樹林有り、分分の地處に多く山峰有りて、饒くの鳥の音聲あり。是の如く、彼天は虛空中に在りて、音聲にて娛樂み、六欲の功德を一切成就し、遊戲して樂を受く。

卷の第五十二

観天品之三十一

夜摩天之十七

又復、彼天、心に虚空より下らんと念ずること有らんには、卽ち心に念ぜし時に、諸の天衆と共に、空より下り、下り已り還りて、自らの住處に至りて住す。是の如き寶珠も還りて、復、本の如くに大光明有り。彼の諸の天女、始めて生れし天の爲に、是の如くに說き已れり。爾の時、是の如き始めて生れし天子、欲の羂の爲に縛られて、復、境界を樂みて、寶珠林に向ふに、遠からざる處にて黃・赤・白の無量百千の種々の光明有りて、珠林中に滿てるを見る。彼の寶珠林に遠からざる處に則ち鷄林有り。爾の時、是の如き始めて生れし天子は、天女の邊に於て、是の如く聞き已りて、寶珠林に向ひ、彼の天女と共に、是の如くに往き到れり。既に前み到已りて、珠の光明は乃ち無量に有るを見る。爾の時に當りて、始めて生れし天子は是の如く憶念すらく『彼の異天、寶珠林に入り、虚空中を行きて、遍く天處を見るが如くに、我れも亦、是の如くに寶珠林に入りて、是の如くに行かん』と。卽ち念ずる時に於て、心に念ずる所の隨に、珠は堂舍を爲して、虚空中に在り。彼の始めて生れし天、空中にて見已り、天女の衆と共に、寶珠の堂に入り、自らの善業の如くに、彼の堂中にて種々の愛す可きを見る。彼の寶珠の中に、流水の河有りて、蓮華の水池・園林・山峰は珠の堂内に滿ち、眼に見ては心樂めり。

復、諸の處に於て、諸の鳥有るを見るに、鳥の聲は愛す可し。是の如き處には、種々の色・形相・香華有り。復、異處には種々の鳥獸を見る。河の平なる岸のもの有り、河の峻き岸のもの有りて、皆悉く愛す可き彼の河邊に在り。復、異處を見るに、多くの天子及諸の天女有りて、歌舞し喜笑し

遊戲して、樂を受く。彼の是の如き處の諸の園林等の一切は、皆向來り說きし所の如し。天子始めて見、天女の衆と共に、遊戲して樂みを受け、放逸を行ひ、愛して足ることを知らず。又、異る處に行き、次に復、蘇陀の食の處に到る。食を食ふが爲の故に。自の善業の如く相似して食を得、彼の食を食已りては、境界の火の爲に燒然かる。復、酒の河に向ひ、諸の天女と共に、愛の波に漂はされ去りて、彼の河の飮酒の地處に向ふ。彼處に到り已りて、乃ち、珠の器を以て酒を盛りて飮む。彼れ既に酒を飮み、歡喜の心は轉た更に增長し、愛境界の火に燒然かれ、五境界の爲に迷惑され、復、天女と共に、歌舞して遊戲す。

彼處にて是の如くに天樂を受け已り、復、水池の蓮華林に向ふ。彼の池中に在りて遊戲し、天女の衆と共に、諸の欲樂を受けんと欲するが爲に、是の故に、彼の蓮華池林に向ひ、到り已りて、復、更に境界の樂を受け、諸の天女と共に、水中にて遊戲し、第一に勝れし樂みにして譬喩す可からず、是の如き樂を受く。又復、欲を發し、欲樂を悕望み、音聲を聞かんと欲し、境界に貪著し、五樂の音聲を心に念じ、悕望む。天女の衆の歌詠する聲・五樂の音聲を聞き、聞き已りて、心に樂むことは稱說べからず。更に、異法の以て喩を爲す可き無し。彼れ、是の如き五欲の功德の種々の勝れし樂みを受けて、厭足ことを知らず。愛有るを以ての故なり。愛の足ることを知らざるは、火の薪を得んには、足る時有ること無きが如し。是の如き欲の者の欲は足る可からずして、常に、無量種・無量に分別して諸の樂みを受け、長久き時に既に樂を受已り、而も復、更に、鵝林中の珠堂の上に坐せり。諸の天女と共に、彼の珠堂より下りて鵝林中に在り、復更に、未曾有の處を見る。是の如く、是の如くに彼處を見已り、是の如く是の如くに、心に喜樂を生じ、是の如く、是の如くに種々に見已りて、而も境界に於て、猶、足ることを知らず。是の如き流水・蓮華の河池・園林等の處にて、若しは天・天女、無量種に見、五樂の音聲にて是の如くに遊戲す。又復、鵝王は寬廣なる處に住せり。

天、天女と共に、彼の鷄の處に向ふ。是の如き彼處にて、種々の天、無量百千歌舞し遊戲して、天樂を受くるを見るに、更に、餘物として譬喩を爲す可きもの無く、世間の日を形りては、螢火蟲の如くにす。唯、光明を除きては更に譬喩なし。彼處の是の如き譬喩す可からざる境界にて、樂を受く。彼の樂みを受けし天は譬喩を得叵し。人世界中の第一の美味は、所謂、蜜味の藥と合せる酒・甘蔗・肉等にして、閻浮提中にて此の味は第一なれど、一切和合するも、赤蘇陀に於ては、極めて苦味なる[一]蘗の味の如くにして異ならず。人中にて勝れし味も、彼天の味より是の如くに劣減れり。是の如き味の勝れしことは、少分の譬喩にして、天中の味は譬喩す可からず、彼天の香も亦喩ふ可からず、人世間の第一の善き香の謂く、[二]梅檀香・若しは[三]沈水香・[四]末香・[五]塗香・[六]瞻波迦華・[七]尼居私帝蘇摩那華・是の如き[八]乾陀婆離師迦・[九]憂鉢羅華・[一〇]拘物頭華・[一一]尼朱羅等の如き此の一切の華を皆悉く和合するも、猶亦、天中の華に如かず。彼の天中の、[一二]荏婆色華に於ては十六分中の其の一にも及ばず。是の如き天中の香も亦、是の如くに譬喩す可からず。又、彼の天中の觸も亦、是の如くに譬喩す可からず。人世界中の一切國土の平等に勝れし觸の謂く、[一三]憍奢耶絹・及・[一四]烏拏・若しは劫貝(綿)等、是の如き種々の彼の人中の觸の一切和合するも、彼の天中に於ては、極めて微劣の觸なり。謂く金は最も堅くして、猶勝れし人中に有する所の勝觸なるがごときも、天中の觸に於ては、十六分中の其の一にも及ばず。是の如く天中に有する所の諸觸は譬喩す可からず。又、彼の天中の聲も亦、是の如くに譬喩す可からず。人世界中の第一の聲は、所謂、琵琶・箏笛・[一五]箜篌・齊ひる鼓歌等にして、是の如き諸聲の一切和合するとも、猶亦、彼の天の中の莊嚴の具の聲に如かず。彼の天中の莊嚴の具の聲に於ては十六分中の其の一にも及ばず。是の如くに、天中に有する所の音聲は譬喩す可からず。是の如き譬喩は唯、四天王天と以て譬喩を爲すことを得可しとも、若し第二の三十三天に於ては則ち譬喩に非らず。夜摩天に於ても亦譬喩に非らず。人中の欲樂は唯得可し。況んや、三十三天の受

【一】蘗。其の皮を染料となす一種の木、きはだにして、甚だにがしと。

【二】梅檀(Candana)。旃檀娜とも書く。香木の名なり。與樂と譯す。南印度摩羅耶山より出づ、其の山の形牛頭に似たれば牛頭旃檀と名く。

【三】沈水香(Agarus)。略して沈香とも云ふ。水を置けば沈む故に沈水と云ふ。

【四】末香。沈檀を擣て粉末とせるもの、以て塔像に撒布す。

【五】塗香六種供具の一。香を手に塗り以て佛に供養するなり。

【六】瞻波迦華(Campaka)。又、占婆、旃波迦・瞻博迦とも書く。樹の名にして、金色花樹と譯し。其花香氣ありて、遠く熏す。

【七】尼居私帝蘇摩那華。不明

【八】乾陀婆離師迦。不明

【九】憂鉢羅(Utpala)。青蓮華と譯す。

【一〇】拘物頭(Kumuda)。赤蓮華なり。

【一一】尼朱羅(Nicula)。植物の名。

【一二】荏婆色華。不明

【一三】憍奢耶(Koseya)。絹のこと。

【一四】烏拏。不明

くる所の欲樂に於てをや。四天王天の受くる所の欲樂は唯得可し、況んや三十三天の受くる所の欲樂に於てをや。三十三天の受くる所の欲樂は唯得可し、況んや夜摩天中にて受くる所の欲樂に於てをや。是の如く次第に、業力勝るが故に、六欲天の中次第に轉た勝れり。諸天の境界も[二六]悉く亦是の如く、天の樂轉た勝れり。意地の樂みに無量種有りて、一切和合せり。是の如き天子は彼の鵝林中にて遊戲して樂を受け、次第に漸く前み、遂に鵝王に近けり。彼の鵝王を見るに、廣池中に在りて、種々に遊戲し、彼の雌鳥と共に蓮華林に住し、天衆は彼の大鵝王を圍遶けり。一蓮華有り、一由旬の量にて、七寶の蓮華は金剛を鬚と爲せり。其の觸は極めて軟く、及、香色等は譬喩す可からずして、無量の光明は華より出で、百千の葉有り。彼の大鵝王は、彼の是の如き蓮華の中に在りて住し、節會の時・節會の時に夜摩天王牟修樓陀井に天衆等に、鵝は說法を爲せり。彼の鵝王は願力を以ての故に、夜摩天に生れ、是の如くに利益す。夜摩天に生れ、夜摩天の爲に是の如く法を說きて、放逸を離れしむ。爾の時、是の如き始めて生れし天子は次第に前に往きて、廣池に到れり。善時鵝王、既に是の如き始めて生れし天子を見、爲に偈を說きて言はく。

渴愛有るを以ての故に、欲に於て足ることを知らず。心に由りて諸根動き、時の已に過ぎしを覺らず。　愛著せらる、欲樂は、無常なる法に攝めらる。　婦女を見ることを樂を以て、時の已に過ぎしを覺らず。　愛の爲に迷はさるるが故に、生死に繫屬がる。　是の如き愚癡なる者は、時已に過ぎしを覺らず。　欲の爲に心牽かれしが故に、沒して癡なる闇中に在り。　瞋に繫縛されし者は時已に過ぎしを覺らず。　繫縛されて地獄に在り、厭離の心を生ぜずして、放逸の毒に迷はされんには、時已に過ぎしを覺らざらん。　調はず、羞を知らず、姓を恃みて憍慢を生じ、心貪りて足ることを知らずんば、時已に過ぎしを覺らざらん。　五の繩に縛られ、六法に迷はされ、三時中常に癡ならんには、時の已に過ぎしを覺らざらん。　惡趣の道を知ら

【二五】箜篌。樂器の名なり。所謂、濟琴のこと。二種ありて竪箜篌と臥箜篌なり。竪は其の體曲りて、長く、弦數は普通二十三條なり。竪に抱きて兩手にてかきならす。又臥箜篌は弦七條ありて、撥を以て彈ず。

【二六】悉の字。宋・元・明三本に依れり、原本、意に作れり。

ずんば、惡の羂に破壞されん。若し是の如き心有らんには、時已に過ぎしを覺らざらん。初に欲を得て則ち樂まんには、後は則ち利益せざらん。心欲に著するを以ての故に、時已に過ぎしを覺らず。前世の苦を知らずして、樂しみて天樂に著せんには、未だ愛別離を知らずして、時已に過ぎしを覺らざらん。業の網の爲に縛られんには、魚の網の中に在るが如くにて、是の故に善道を失ひて、時の已に過ぎしを覺らざらん。愚癡なる者は心無く、過患有ることを知らず。沒して癡なる闇に在りて、時已に過ぎしを覺らず。衆生、業の羂に縛られんには、獨にて伴侶無けん。天女を見るが故に迷ひて、時の已に過ぎしを覺らざらん。諸根の馬に乘騎し、善道に迷失し、三界の味に貪著せんには、時已に過ぎしを覺らざらん。戒と戒に非らざるとを知らず、或は復、多く瞋恚らんには、意を失ひ、亦、道を失ひて、時の已に過ぎしを覺らざらん。利益と不るとを知らず、作すと作さざるとを知らず、小兒の戲弄るが如くんば、時の已に過ぎしを覺らざらん。河水の速に流るるが如くに、園林の池處に在りて、常に欲樂を受くるが故に、時の已に過ぎしを覺らず。山頂の堂中に在り、若しは蓮華林に在りて、常に欲樂を受くるが故に、時の已に過ぎしを覺らず。業々の報の中に於て、未だ曾て知解すること有らず、唯、食味のみに貪著せんには、時の已に過ぎしを覺らざらん。業風に吹かれ常に此の三界に在りて、流轉することは、猶し輪の如きも、癡なるが故に、覺知らず。常に惡處に在り、高き梁の繩の上に上る。是の如き愚癡なる者は、勤めて過を捨離せず。若し能く欲を捨離せんには、是れ第一の精進にして、一切の悕望を離れんには、則ち諸の煩惱無けん。彼れ初・中・後時に、若し佛法を得已らんは、寂靜にして修行するが故に、是れ煩惱無き者なり。若し欲樂を得んには、彼の樂は必らず破壞せん。欲を因とせんには苦報を得ん。欲は勝れし法に非ざるを知る。是の故に、智有る者は心に欲を樂まず、彼れ則

ち、生死の苦の因緣を斷除かん。

彼の大鵝王は、始め生れし天の爲に、是の如くに偈を說きて、欲法を毀呰てり。是の如く說きしが故に、彼の始めて生れし天は漸くに前に進みて鵝王に近づけり。彼の始めて生れし天は、勝れし法を聞きたりと雖も、心に受けず。境界に迷ひしが故に。漸く鵝王に近づきて而も法を攝らず、猶、境界に著し、諸の欲樂を受け、現に鵝王の水中に在りて戲むるるを見ては、蓮華林に入りて、蓮華を割き取り、天女の衆と共に擲て之を弄ぶ。善時鵝王は之れに語りて言はく『此の安隱の語を肯受せずんば、汝、後に何なる所得を爲さんや』と。爾の時、〔一七〕鵝處の始めて生れし天子、復、遠き處にて勝妙なる聲有るを聞くに、天の聲より勝れ、彼の聲を聞き已りて心に愛樂を生ず。其の聲は普遍くして、琵琶・箜篌・齊へる鼓笛等の、是の如き種々の愛す可き音聲なり。爾の時、彼天は廣池の邊に在りて、種々に遊戲し、既に聲を聞き已り、一切面を迴し彼の聲に向ひて聞く。爾の時、遠くに百千の堂有りて、周匝を圍遶るを見る。天の歌ふ音聲は甚だ愛す可しと爲し、聞く者は欲を發す。端嚴にして殊妙なることは、星の月を遶るが如くにて、是の如く、是の如くに、堂行りて圍遶り。或は身の光明は周匝に輪(をなして)行なれり。一切の天衆は之れを見て心樂しみ、百千の天女の詠歌の音聲あり。夜摩天主は百千葉の七寶の蓮華の台上に在りて坐し、無量の天女に圍遶かれ、法を聽かんが爲の故に、彼の善時菩薩鵝王の所住の處に向へり。

爾の時、鵝王善時菩薩、見已りて〔一八〕近づき迎ふ。餘の雌鵝と共に幷に餘の雄鵝は無量百千の勝妙なる七寶を其の身に間錯せ、一切同時に皆虛空に在り、飛びて天主牟修樓陀に向ふ。復、餘鵝の詠歌する音聲有り。是の如き二王の一は是れ鵝王、二は是れ天王にして、迭に相敬重し、美妙なる語を出し、迭に相問訊す。鵝王善時は本願を以ての故に、夜摩天の爲に放逸を除かんが故に、夜摩天に生ぜり。善時王、言はく『天王久しき時來りて此の廣池の所に在らず。我れ餘天より是の如き言

【一七】鵝の字。宋・明本に依る。

【一八】近の字。宋・元・明三本及、宮内省圖書寮本に依れり。

を聞けり。牟修樓陀夜摩天王は放逸なる行をせず、諸の天衆と共に、彼の山樹具足の地處に在りて、六佛塔を看、禮拜し供養せり。化す力の書經は彼の佛塔に在りき。彼の經を讀說して諸の天衆に示せりと。此の因緣の故に、我れ今來りて迎へたり。汝彼處にて說法せし時に於て、我れも亦、此の廣池の側に在りて、遊戲せる天の爲に、應しきが如くに說法せり。謂く、第一義は寂靜・安隱にして、能く放逸を除き、畢竟して利益すと。此の因緣を以て、我れ今是の如くに來りて天王を迎ふ。我れ法を愛するを以て、慢心を離れ、敬重するが故に來れり』と。

彼の時、是の如くに牟修樓陀夜摩天王は是の語を聞き已りて、是の如き言を作さく『鵝王は普く一切の夜摩の諸天を饒益し、一切の夜摩の諸天を利益するが爲の故に、此處に在り、今共に迴り還りて廣池の所に到らん』と。是の語を說き已りて、牟修樓陀夜摩天王は無量の天衆、諸の天女の衆に圍遶れ、善時鵝王は無量百千の鵝の衆に圍遶れ、是の如き二王、各幷に其の衆の彼此和合し、虛空中に於て、種々の音聲あり、心に皆垢無く、猶し寶珠の如し。放逸地にても放逸の行をせずして、大威德有り。共に廣池に向ひ、廣地に到り已るに、彼の廣池の所の一切の天衆旣に天王を見、暫く放逸を止め、音聲を作さず、相ひ娛樂せず、水中にて種々に遊戲せずして、敬重心を生ぜり。

夜摩天王、彼の天衆の心の調順せるを知りしが故に、鵝王に語りて言はく『善時鵝王よ、此の時、最も善し。今や法を說く可し。天衆、我を見て心皆慢を離れ、幷に天女の衆の一切も慢無し。說法を爲す可し』と。爾の時、鵝王自ら本生を念ずるに、曾て往世に佛有り、名けて迦迦村陀と爲す。彼の佛の所に於て、諸の法門を聞けり。聞きし所の法中にて唯一法を以て天衆の爲めに說き、天王に語りて言はく『天王、善く聽け、我れ今、爲に五種の法有るを說かん。若しは天、若しは人にして、放逸を行ふ者は是れ根本の過なり。何等を五と爲すや。謂く、放逸の者は其の心則ち亂れ、意に異法を念じ、口に異言を宣べ、若し說く所有らんには、實ならず、義無く、前後相違し、動轉し

て定まらず、他は則ち受けず。何を以ての故に、其れ放逸にて心動亂せるを以ての故に、自ら知ることを能はず、何ぞ說く所を爲さんや。誰れの爲に說かんも、彼れ則ち輕毀し、彼れ則ち受けざらん。是の如きを以ての故に、則ち一切に於て便ち自ら輕を爲す。是れ放逸の過にして、放逸の過の故に、惡道に墮ち、[一九]三惡趣に[二〇]墮ち、相應して生る。此れは是れ初の過なり。

又、彼の放逸に第二の過有り。何なるは第二なりや。所謂應に作すべきと作さざるべきとを知らず。放逸なる意の故に、何なるは是れ應に作すべき所なるやを知らず、何なるは應に作すべからざる所なりやを知らず、何なる業なりやを知らず、何なる果なりやを知らず。業を知らざるを以ての故に、果を知らず。彼の愚癡なる者は業果に迷ふが故に、身壞れ命終らんには惡道に墮ち地獄の中に生れん。放逸なるを以ての故に、是の如き過を得るなり。此れは第二の過なり。

又、彼の放逸に第三の過有り。何なるは第三なりや。若しは人、若しは天、放逸なるを以ての故に、惡知識に近づきて三寶を敬はず、智を求めず、尊長を敬せず、過と功德とを覺らず、知らず。生死の苦に厭離を生ぜず、雜業を知らず、謂はく、種種の業なり。翹ひ勤むること能はずして、常に睡眠ることを喜び、持戒すること能はず。身壞はれ、命終らんには、惡道に墮ちて地獄の中に生れん。放逸なるを以ての故に、是の如き過を得るなり。此れ第三の過なり。

又、彼の放逸に第四の過有り。何なるは第四なりや。天中に於て、若しは人中に於て、即ち初に生れし時に、命行住せずして、即ち生じ、即ち滅す。善業も亦爾くして生じ已りては即ち盡く。死王の至らんとしては、誰と共ならんも、放逸なる彼れ必ず別離せん。此の四法有らんも、必定して離別す。何等を四と爲すや。一は少年、二は安隱、三は壽命、四は具足なり。是の如き四種は必定して離別せん。智者は常に是の如き四種を觀ず。若し放逸なる者は則ち知ること能はず。若しは天、若しは人、放逸を行ふ者は一切知らず。知らざるを以ての故に、惡道に墮ちん。放逸なるを以

【一九】三惡趣。地獄・餓鬼・畜生の三惡界をいふ。
【二〇】墮の字。宋・元・明三本及び宮內省圖書寮本に依る。原本隨に作れり。

ての故に、是の如き過を得、此れは第四の過なり。

又、彼の放逸に第五の過有り。何なるは第五なりや。謂はく、第一に信ず可からざる處に於て而便ち之れを信ず。信ず可からざる中にて、最も信じ叵きは、所謂、婦女にして、愚癡なる者は婦女を信ず。彼の愚癡なる者、婦女を信ずと雖も、然も彼の婦女は其れを信ぜず、乃至、命盡くるとも、心誑を離れず。一切の婦女は皆諂誑多く、皆幻僞多く、垢多くして破壞す。其の心は慢多く、戒を破りて心濁れり。是の如き等の過を一切の婦女は心に皆離れず。火の熱きが如くに、一切の婦女は此の法を離れず。若し愚癡なる者、彼の婦女を信ぜんには、唯、語言のみ有りて然も一の實無からん。愛貪を以ての故に、欲の爲に牽かれ、是の故に、之れに近づくなり。是の如くに略して放逸なる行の五種の過患を說けり。是の如き五の過は放逸を離れず。是の故に、天・人は應に放逸を捨つべし。此の放逸なる行は涅槃の門を障う。放逸を行う者、身壞はれ命終らんは、惡道に墮ちて地獄・餓鬼・畜生に生れん。放逸なるを以ての故に、是の如き過を得、此れは第五の過なり。是の故に、智者は應に放逸を離るべし。若し放逸を捨てんには、五の功德有り。何等を五と爲すや。所謂、正行にして、心意に正しく信じ、應に作すべき所を作し、應に作すべからざる者は則便ち作さず。恒常に意を用ひて一切時に皆利益を作し、放逸を捨離することは、毒の如きと異ならずして、善く三世を知る。此れ放逸ならざる最初の功德にして、放逸ならざるが故に、此の功德を得るなり。

又、放逸ならざるに第二の功德あり。何なるは第二なりや。謂はく、輕重を知り、善知識に近づきて常に善業を行ひ、惡知識を遠ざけて惡業を作さず。彼の惡業を以て、善人嫌毀す、若し惡人を見れば則ち皆捨離し、功德の人を見れば則便ち親近し、是の如くに修行し、善き意にて行ずるが故に、惡道に入らず。此れ放逸ならざる第二の功德にして、放逸ならざるが故に、此の功德を得るなり。

又、放逸ならざるに第三の功德あり。何なるは第三なりや。所謂、謹愼にして、乃至、命を捨て、

も婦女に屬せず、其の言を信ぜず。常の一切の時に形相のみ見る可き婦女に、二種の縛有りて世間を繋縛す。唯、其の色のみ見て、其の語を信ぜず。智有る者は、是の如く、實の如くに婦女を觀察す。是の如く實の如く正しく觀察し已りて、歌舞・喜笑・遊戲・莊嚴の具等を見ると雖も、心に貪著せず。一切の放逸は皆婦女に因る。一切の婦女は是れ放逸を半とす。若し能く婦女の放逸を離るゝものの有らんには則ち能く生死の大海を渡らん。人世界中の人皆說きて放逸ならざる者と言ひ、好人と名づけらるゝことを得ん。此れは放逸ならざるの第三の功德なり。放逸ならざるが故に、此の功德を得。

又、不放逸に第四の功德あり。何なるは第四なりや。所謂、謹愼なり。放逸ならずとは謂はく、富・樂・欲等を信ぜず、無常を觀知して、是の如き知を作さく『此の欲は無常にして轉動し、定まらず。則ち信ず可からず。久からずして破壞し、久からずして失滅せん』と。是の如くに安隱の事を信ぜざるが故に、放逸ならず。一切の安隱も病の爲に壞はされん。是の如くに少にも亦信を生ぜず。一切の少年も、老の爲に壞はされん。是の故に、少くとも慢心を生ぜず。是の如くに命にも亦信を生ぜず。慢心を生ぜず、惡業を作さず。何を以ての故に、必ず、死王の爲に刧奪せらるゝが故に。是の故に、一切の有爲の生死の法を信ぜず。信ぜざるを以ての故に、放逸なる行をせず。此れは放逸ならざる第四の功德にして、放逸ならざるが故に、此の功德を得るなり。

又、不放逸の第五の功德あり。何なるは第五なりや。所謂、恒常に聖人に親近し、智を愛樂むが故に、[三]三寶に歸依し、法を聞きて義を思ふ。彼れ死せんとする時に臨みても怖畏を生ぜず。死相を知り、退相を知るを以ての故に、怖畏を生ぜず。義を聞きて天子則ち退相を知り、人の死せんとする時に則ち死相を知る。是の如くに知るが故に、惡道に生るゝことを知り、善道に生るゝことを知り、是の如き知を作さく『我れ善道に生れ、我れ惡道に生れん』と。若し死せんとする時に、惡道

【三】三寶(Tri-ratna)。即ち佛(Buddha)法(Dharma)僧(Saṅgha)をいふ。此等の三は一切世間の尊重すべきものなれば之れを三寶といふ。

の相出でんには則ち能く方便して、心をして清淨ならしむ。心清淨なるが故に、惡道の相も滅して善道の相現はる。此れ不放逸の第一の勝果にして、甚だ得難しと爲す。諸の善に親しき中、此れは亦最も勝れたり。此れは不放逸の第五の功德にして、放逸ならざるが故に、此の功德を得るなり』と。爾の時、彼處の善時鵝王は彼の如來迦々村陀佛の說き給ふ所の偈を頌して言はく。

已に欲を離れし如來は放逸ならざるを讃歎し、放逸なる行を毀呰り給ふ。至れる所の生死處にて、放逸ならずんば解脫し、放逸なるが故に苦を受く。此の放逸の繋縛を、愚者は斷つこと能はず。放逸ならざる善人は則ち天中に生れ、天中にて放逸なるが故に、退く時心悔ゆ。一切の放逸なる者は生死を脫るゝことを得ず。放逸は第一の羂にして、能く縛りて流轉せしむ。應に作すべからざる所を作し、應に作すべき所を作さずして、一切の放逸なる者の作す所は皆顚倒せり。尙、世法を作さず、何に況んや出世の法に於てをや。是の故に、諸の智者は放逸なる行を讃へず。是れを以ての故に、應に放逸なる行を行ふべからず。是の如き放逸なる行は是れ惡道の初の使なり。若し能く苦惱の藏處を捨離すること有らんには、是の如き勇健なる者は能く有の大海を渡らん。

善時鵝王は彼の天主牟修樓陀幷に諸の天衆の爲に、是の如く已に過去の舊法を說きて天・人を利益し、又、彼の鵝王、現に天主牟修樓陀の爲に、復更らに說法して、是の如き言を作さく『五種の法有りて、沙門の放逸なる行を對治す。何等を五と爲すや。所謂、一切の放逸を行ふ者は皆苦惱を受く。是の如き人は、何なる放逸に隨ひても、能く苦惱を致さん。彼の放逸を捨て、彼の過を知り已りて、功德を修行せん。彼れ捨離するが故に、饒益せざること無くして、苦惱を受けず。不善の惡業は則ち增長せず、正行を修行せん。此れは是れ沙門の初の對治の法にして、放逸を對治す。

又復、沙門の第二の對治は放逸を對治するなり。何なるは第二なりや。謂はく、實義を見るなり。

實に見る人は、一切の心意は皆悉く決定して、實の如くに見ん。實の如くに見る故に、放逸を行はず。實の如く放逸の過を見るが故なり。此れは是れ第二の放逸の對治なり。

又復、沙門の第三の對治は放逸を對治するなり。何なるは第三なりや。所謂、不放逸なる者に親近み、戒を受け、戒を持し、彼れの行ふ所の如く、是の如くに行ひ、彼れの作す所の如く、亦、是の如くに作し、持戒せる者と常に與に同く處り、戒を破りし者を捨てゝ近づかず。是の故に、放逸は一切皆無し。此れは是れ第三の放逸の對治なり。

又復、沙門の第四の對治は放逸を對治するなり。何なるは第四なりや。謂はく、智を求むるが故に、常に智者に近づき、常に智者を樂しみて放逸を捨離し、不放逸に近づく。是の如くに謹愼して放逸ならさる者には、樂近づき、苦遠ざからん。彼の善男子は、恒常に、是の如くに放逸の行をせず。此れは是れ第四の放逸の對治なり。

又復、沙門の第五の對治は放逸を對治するなり。何なるは第五なりや。所謂、王若しは王大臣有りて、放逸の者を執らへて、其れに罪罰を與へ、或は其の命を斷つ。或時は一切の財物を奪ひ、或物は杖を與ふ。或は其の手を截り、是の如く種々に、放逸なる者に異異る刑罰を與ふ。彼れ既に見已りて、心に怖畏を生ず。怖畏るゝを以ての故に放逸を捨離し、放逸の行をせず。是の如く對治して放逸を捨離す。他人の是の如き罰を受けしを見て、怖畏れを生ずるを以ての故に、法行に隨順し、放逸を行ひて地獄に墮つるを畏れ、是の故に、一切の惡行を作さず。此れは是れ第五の放逸の對治なり。是の如く放逸ならんには、天に於いても、人に於いても則安隱に非らず』と。彼の多くの天衆、是の經を聞き已りて放逸を捨離せり。牟修樓陀夜摩天王、既に鵝王の說きし所の經を聞き已りて、隨喜の心を起せり。復、天衆と共に虛空に飛昇し、其の本來りし如くに還へり、是の如くに去れり。自餘の諸天は廣池に在りて更らに樂を受くる者有り、林中に向ひて樂を受くる者有り。既に

園林に入りて種々に樂を受け、是の如くにして乃至、善業を[三]受け盡くし、善業盡きしが故に、彼處より退く。彼處を退き已りて、自の業行の如くに、或は地獄に墮ち、或は餓鬼に墮ち、或は畜生に墮つ。若し餘業を以て人中に生れんには、則ち第一の富樂の處に生れ、黠慧き利根にして、知見する所多く、智慧の命有らん。智慧有るを以て、是の故に、大富にして王の爲に愛さる。餘業を以ての故なり。

成就地竟んぬ。

又、彼の比丘、業の果報を知りて、夜摩天に有する所の地處を觀ず。彼れ見聞して知るに、復、地處有りて、光明園と名づく。衆生は何なる業にて彼處に生るゝや。彼れ見聞して知り、或ひは天眼にて見るに、若し善男子、曾つて法義を聞き、戒を受け、戒を持し、正見にて邪ならず、他を惱亂せず、心意正直にして殺さず、盜まざることは、前に說きし所の如し。復、邪婬を捨て、邪行を畏るゝが故に、乃至、畫きし婦女の像を觀ず。常に善業を行ひ、善く淨き命を修む。是の如きの人、身壞はれ命終らんには善道の天世界中の光明園の處に生れ彼處に生れ已り、善業の力の故に、天の妙れし境界の五欲の功德にて、種々に樂を受け、六根に使はれて園林を樂見む。是の如く是の如くに種々の法を見、是の如く是の如くに六根增上す。六根增上するを以ての故に、則ち能く驅使さる。地處は平正にして第一に柔輭なり。七寶は間雜りて甚だ愛樂む可し。彼地の中に、若し樹有りて觸を生ぜんには極めて輭滑なり。金の果、銀の葉にして、勝れし觸・香・味を皆悉く具足せり。是の如きの天果は意の如の香を出し、意の如の味を生ず。

彼處の諸天、若し是の心有りて、彼の果をして意の如に酒を出さ令めんと欲せば、即ち觸・香・色・味を具足せる天の美酒有りて、果從り流出し、樹下に在り。時に、彼の諸天、天女の衆と共に、珠寶の器を執り、承けて之れを飲む。是の如き天酒に、下・中・上の香・味・觸等有り、業無量なるが故

【三】受の字。宋・元・明三本に依れり、原本、愛に作れり。

に、彼の業因の如く、是の如くに酒を得て、下・中・上有り。又復、餘天は無量種に五欲の樂を受くること有りて、放逸の爲に燒かれ、樂見園林にて歌舞し、喜笑し、處々に遊戲し、相隨ひて行きて彼の園林に向ふに、是の如く、是の如くに、道を行く所に隨ひて、異異たる種の微妙の色を見、彼の得る所の味に、無量種の無量に分別せる種々の勝れし味有り、彼の鼻ぐ所の香に、無量種の無量に分別せる種々の妙れし香有りて、心と相應せり。彼觸を憶念するに、無量種の無量の分別有りて、樂と相應する天妙の觸を受く。彼天の聞く所の天の妙れし音聲に、無量種の無量の分別有りて、心の樂と相應せり。聞き已りて歡喜し、第一に持戒し、勝れし善業の故に、五欲の功德を皆悉く具足して、樂行を受く。彼天は是の如くに樂行を受くるが故に、乃ち久しき時を經て、是の如く樂を受けて、厭足を知らず。復更らに、遠く、心樂しむ林と名づくるを見るに、無量百千の寶樹にて莊嚴れり。彼の心樂しむ林は是の如くに愛す可くして、枝・葉・根・莖は各各別々にして、一廂は銀林なり。其の白きことは雪の如くにて、銀樹林と名づけ、其の光は猶し閻浮提中の月の光明の如し。彼の一一の樹は端嚴殊妙なり。天、若し見ん者は心に則ち樂を受けん。又復、一廂は赤色にして、猶ほし迦鷄檀那の如く、甚だ赤くして比無く、赤き光明有りて、其の葉も亦赤し。是の如き葉等は和合して林を成せり。是の如き赤林は極めて愛す可しと爲す。彼林は赤きが故に、遍く虛空を照らして一切皆赤し。又復、一廂を常樂林と名づけ、其の林の一廂に青き園林有り、其の林は普く青くして、青き影の光明なり。彼林の一廂の是の如き光明は端嚴にして、閻浮提の虛空の如きと異ならず。是れ毗瑠璃寶の光明なり。是の如き彼處を常樂林と名づく。復次に、一廂は是れ玻瓈林にして、光明淸淨なり。根・莖・枝・葉にして、多く無量の流水・河池有りて皆悉く具足せり。又、彼の大林の次の復一廂は青寶の樹林にして、根・莖・枝・葉は青色の光明なり。樹の枝の中に、種々の鳥有り、鳥に種々の聲多し。種々の妙蓮華池有りて莊嚴を爲せり。彼天の園林は是の如き光明にて端嚴にして勝妙な

り。

爾の時、彼處の光明園地の一切の諸天の自らの身に光明あり、遊戲して諸の樂を受けんと欲するが爲の故に、心樂しむ林に向ふ。彼の林中に於いて遊戲して樂を受く。愛林に繫がれ、五欲の功德にて天の快樂を受けて、厭足ことを知らず。又復、遊戲して種々に樂を受け、心樂林に入るに、彼林の內には種々の色有り、種々の味有り、種々の香有りて華果を具足し、多く妙へなる蜂有りて、其林を莊嚴り、處々に普徧し。又復、多く愛す可き鳥の衆、種々の愛す可き妙蓮華池、種々の愛す可き樹の枝の屋舍有り、華を散きて地に徧ねし。地の觸は柔輭にして甚だ愛樂す可く、多くの無量百千の天衆有り。是の故に、彼處は是の如くに端嚴にして、樹の枝の屋舍には多くの蓮華・流水・河池・種々の山谷有り、多くの諸の樹有りて、歌舞し、喜笑し、種々に遊戲し、莊嚴は、聲を具して猶し歌音の如くにて、微風は林を動かし、枝の華・垂れし[一三]柳あり。是の故に彼林は是の如く嚴好れり。爾の時、彼天は彼の林の中に入り、轉た勝れて歡喜び、復更らに、歌舞し遊戲し、喜笑して、迭ひに共に樂を受け、一切の時に、心境界を樂しみ、其の心恒常に放逸を行はんことを念ず。

彼の諸の天衆は是の如くに樂を受け、乃至久しき時に復、七寶の曼陀羅林に入るに、彼林は愛す可くして、林の中は最も勝れ、猶し山王の有する所の光明の如く、百千日より勝れ、蓮華池を遶りて以て莊嚴を爲せり。曼陀羅林に孔雀王有り、名づけて雜色と曰ひ、種々の七寶間錯りて斑に雜はり、出す所の音聲は彼林に普徧し。實は是れ菩薩にして、願力を以ての故に彼の天中に生る。放逸なる天の放逸を除くが爲の故に。彼の諸の天は五境界の火に燒かるゝを見るが故に、樹枝の中に住し、勇猛にして畏無く、憐愍の心を生じて、彼天に告げて言はく『此の諸の天等は放逸なる行多くして、後に退かんことを慮はず。此の樂は盡きんとし、無常にして住らず。一切の天の樂は速疾に已に過ることは、山中の河は其の流迅速なるが如きも、而も覺知せず、心常に樂に著す。惡

【一三】柳の字は宋、元二本に依れり。

を愛するを以ての故なり」と。爾の時、雜色の孔雀鳥王は偈を說きて言くは。

作す所は夢見るが如く、住處は焰を見るが如く、城は乾闥婆の如きも、天は是の如くに欲に著せり。　天は愛の爲に生ぜしめられ、終竟には必ず破壞せん。　樂は盡く可からずと謂ひて、天は是の如くに欲に著せり。　樂は久しからずして則ち失んことは、河流の速に過るが如し。欲の城の爲に誑かされて、天は是の如くに欲に著せり。　風吹きて水を動かすに、彼の水中の月を見るが如く、猶し旋る火輪の如く天は是の如くに欲に著せり。　電の流動するが如く、鹿の愛の焰の如く、水沫の堅からざるが如く、天は是の如くに欲に著せり。　芭蕉の葉の動くが如く、又亦、象の耳を善からぬ人の愛するが如く、天は是の如くに欲に著せり。　金波迦果の如く、鐵の鉤を食むこと有るが如く、幻の無常なるが如く、天は是の如くに欲に著せり。皆虛誑にして、物無く、暫時も停住らざるも、初時の味則ち甜にして、天は是の如くに欲に著せり。　唯、放逸の一味こそ、是れ有の縛の因にして、速に惡道に入らしむるも、天は是の如くに欲に著せり。　惡物を愛して好と謂ひ、常に畏る可く常に妨ぐることは毒の如く、刀等の如し。　天は是の如くに欲に著せり。

彼の心樂林の是の如き孔雀を雜色王と名づけ、天を調伏するが爲に、是の如くに偈を說けり。善く意の願の故に、天の中に生じて、彼の孔雀王は人中の物を用て以て譬喩と爲し、天衆の爲に說けり。何を以ての故に。天をして聞かしめ已りて本生を憶はしめんが故に。本生を憶ふを以て、業の果を知るが故に、無常を修行し、無常を修むるが故に、放逸なる行をせず。是の故に、雜色孔雀鳥王は人中の喩を以て、天の爲に法を說けり。何等の法を說けるや。謂はく、無常法なり。欲の過を說かんが爲に、欲の無常なるを說けり。

爾の時、天有りて說く所の法を聞き、本の前生を憶へり。本生を憶ひて業の報を知るを以ての故

に、少時の中に放逸なる行をせずして、善き意を生ぜり。彼天少時く善意を生じ、放逸なる行をせず。少時く利益し、少時く安隱なり。未來世に無量百千の安隱なる處に生まるゝ善業の種子を種ゑたり。是の故に、菩薩の雜色鳥王は是の如き法を説けり。爾の時、天衆、猶故樂に著し、彼の林中に入り、蓮華の鬘を以て、身の首を莊嚴り、自身の光明にて其の身を莊嚴り、五樂の音聲にて種々に樂を受く。彼の林中の無量なる河池は水流盈滿れ、莊嚴を具足せり。天衆は見已りて放逸を行ひ、生・老・死に怖畏を生ぜず。歌舞し遊戲して、厭足を知らず。更に、餘林に入るに、彼の林を鬘と名づく。鬘林の樹は無量百千にして、其の樹枝の華は種々の異色間雜りて同からず、無量種の形相・色・香有り。種々の妙華を枝々に具足せり。是の如き妙なる華は大小均等にして希奇く得る所なり。彼の林中に、七寶の蜂有りて、其の音は愛す可く、彼の華の中に在りて天と共に遊戲せり。彼の諸天等は彼の華鬘を取りて天女の衆と共に相擲ちて嬉戲す。天及び天女は本より自ら端正なるも、是の如き妙なる華鬘を著けたるを以ての故に、十倍に本より勝れたり。迭互ひに一心に彼の林中にて遊戲して樂を受け、華の枝を折取す。其の華の香氣は五由旬に徧く、十由旬・二十由旬・三十由旬なる有り。是の如き彼の林は天香を具足し、無量種の華を和集して有せり。

爾の時、彼天、是の如く遊戲して諸の樂を受け已りて、復、酒の河に向ふに、河を歡喜と名づく。其の河、甚だ大にして、彼の酒は音聲・觸・味・香・色を皆悉く具足し、河に在りて流れたり。彼天見已り、河岸の上に坐し、取りて之を飲む。彼に、復、鳥有りて名づけて常樂と爲す。彼の諸天の歡喜河に在りて酒を飲むを見るが故に、爲に偈を説きて言はく、

放逸い海に沒入し、諸の境界に貪著す。　此の酒は能く心を迷はす。　何んぞ用ひて復酒を飲まんや。
境界の火の爲に燒かれ、作すことゝ作さざることゝを知らずして、園林にて貪心を、生ず。何んぞ用ひて、復、酒を飲まんや。

彼の常樂鳥、酒を樂しむ天の、河に在りて酒を飲むを見、調伏せんが爲の故に、是の如くに偈を說けり。彼天は聞き已りても猶故、酒を飲みて休まず、止まず。心に歡喜を生じ、自身の光明にて周圍は鬘の如し。復、華鬘を以て身體を莊嚴り、酒を飲みて遊戲し、厭足ことを知らず。五欲の功德・五樂の音聲にて歌舞し遊戲して、次第に復、華の枝の舍林に向ふ。欲樂を悕望むが故に、彼林に到り、天女の衆と共に歌舞し喜笑す。

爾の時、彼の天、彼の樹林に衆の華を具足せるを見、心に歡喜を生ず。先に聞きしを以ての故に、見れば則ち歡喜ぶ。是の如き勝妙なる愛す可き園林に七寶の蜂有りて莊嚴を爲せり。天衆は見已りて希有の心を生じ、眼を廻らして普く看て厭足を生ぜず。彼の天女の衆は、皆亦、是の如く五千種の百千に分別たる華の舍を具足せるを見る。彼の諸の天女は見れば則ち中に入りて歌舞し遊戲して快樂を受く。彼の樹の枝葉は甚だ愛樂す可くして、密に覆ふて屋の如し。彼の衆の樹枝は是れ種々の寶にして、所謂、枝は毗瑠璃の枝にして金の葉に覆はる。若し金の枝の屋ならんには毗瑠璃の葉に覆蔽せられ、迦鷄檀那の妙好色の果を具足して有せり。迦鷄檀那青寶の樹枝は銀色の葉に覆はれ、若し玻瓈樹ならんには金の果を具足す。若し、彼に樹有りて迦鷄檀那を以て枝と爲す者は、青寶の葉に覆はれて金の果を具足す。若し玻瓈樹の、玻瓈の枝の屋は、金の葉に密に覆はれ、大青寶の果を具足して有せり。念ずるに隨ひて莊嚴り、皆悉く愛す可し。蜂の衆は圍遶き、音聲は美妙にして、華の枝の屋を遶る。彼の枝の舍の內は是の如くに嚴好れり。天樂を受けんと欲して則ち其の中に入りぬ。善業を以ての故なり。

又、枝の舍の外は種々に具足し、蓮華池有りて、蓮華は金の葉にして、皆毗瑠璃青寶を鬚と爲し、白銀を臺と爲し、林の外に周遍せり。無量なる蜂の衆にて莊嚴を爲し、鵝鴨・鴛鴦・迦曇婆羅[二四]は妙なる音聲を出し、聞く者は心樂しむ。是の故に甚だ微妙と爲す。彼の蓮華林の其の外の華池は鬘の如

【二四】 迦曇波羅。不詳

きと異ならず。寶の華の枝の舍は彼の林を周圍みて處々に普徧ねし。

蓮華[二五]林の外に復樹林有り、是の如き林に鳥獸有りて住せり。心皆歡喜びて、樹の下に在りて樹に依る者有り、遊行する者有り、林中に在りて、天の美果・華・根等を食する者有り。果・華・根等は第一の色・香・味・觸等ありて、和合して具足せり。是の如き鳥獸の雄雌・牝牡は皆各相隨へり。又、彼の鳥獸は天の歌を聞き已り、眼を開き耳を張り、羽毛皆竪ち、歡喜の心にて樂しめり。又、彼の鳥獸の雄雌・牝牡は各々相ひ隨ひて樹下の柔輭き觸の地に在り、迭ひに相ひ面を看て快樂を受け、或は共に遊戲せり。

諸の獸の嚼[二六]哃し、牝牡は同處して迭に相ひ面を看、共に快樂を受く。其の身は皆是れ七寶を間雜めて林中に在りて、是の如くに樂を受く。

【二五】林の字は明本に依れり。原本輪に作れり。

【二六】哃の字は宋・元・明三本に依れり。原本には咽に作れり。かみかへすこと。

巻の第五十三

觀天品之三十二

夜摩天之十八

又復、彼の鳥は種々の形相にて、見ん者は愛樂し、種々に憶念して、種々に樂を受けん。所謂、樂とは蓮華を銜みて耳に歌音を聽き、周廻て行き、雄雌相隨ひて遊戯する者有り、鳥の羣れて住し、身を縦め、低く縮めて、彼の樹枝の屋舍の中の聲を聽き、一心に聽く者有り、嘴を以つて勝れし光明の寶を銜みて、處々に在りて徧く遊行する者有り、七寶の身にて、山中從り歌音を聞かんが故に翅を揚げて飛來し、歌音を聽かんが爲に、華の枝の舍に向ひて、虛空に普遍ねく、皆悉く嚴好り、心に歡喜する者有り。復、餘鳥の餘林中に在りて、種々の妙寶にて兩翅を莊嚴り、嘴を以て種々の敷らける華を折取し、銜み來りて、彼の華の枝の屋に向ふ者有り。復、餘鳥にして歌音を聞き已り、共に寶鬘を銜み、種々の色の勝妙なる光明あつて、是の如く來りて華の枝の屋舍に向ひ、虛空に普遍く、皆悉く嚴〔一〕好て、是の如くに來る者あり。

是の如き彼の林の内外の鳥獸に、種々の色・種々の形相有りて、種々に具足し、皆愛樂す可し。彼の林は殊妙に嚴好り、是の如き彼の諸の天衆は彼の林中に在りて種々に樂を受く。

爾の時、彼天は五樂の音聲にて彼の林中に在りて久時く遊戯し、愛火に燒かれて厭足を知らず。復、餘林に向ふに、彼林を名づけて鳥音聲樂と爲す、無量の天女を以て自ら圍遶き、是の如くに歌舞し喜笑して遊戯し、虛空の中に在りて、手に箜篌を彈じ、是の如くに飛行せり。鵝の背に在りて、是の如くに去る者有り、復、餘天の孔雀に乘る者有り、空中に在りて蓮華の臺に坐し、是の如くに去る者有り。復、餘天の七寶の鳥に乘り、虛空中に在りて是の如くに去る者有り。一切は皆鳥聲樂

【一】好の字は宋・元・明三本及宮本に依れり。原本妙に作れり。

林に向へり。彼れ是の如く行きて、路に在りて未だ至らざるに、種々の勝れし樂を皆悉く具足せり。彼林に至らんとするに、實語鳥と名づくるは、爲に偈を說きて言はく。

乘の中にて業の乘は勝れ、餘の乘は則ち然らず。人、業の乘を以ての故に、能く徧く三界を行く。何の誰、何處に於て、何なる業を云何に作さんも、彼は則ち彼處に於て、作せし如くに苦・樂を受けん。業は種々に雜々り、心の因緣の作す所は物として得叵き者無く、久しき時には必ず皆得ん。種々の異々る樂は業の因緣に由りて起り、業の因盡くるを以ての故に、種々の樂も亦無けん。諸有は亡失せず、先に善業を所作せんも、若し常に樂を得んと欲せんには、皆應に餘業を作すべし。若し、心常に懈怠ならんには、放逸の毒に悶められ、放逸なる天は未來の苦惱の處を覺らざらん。一切の樂と離別して、大苦惱の處に到らん。能く陰界を破るを以て、是の故に名づけて死と爲す。彼れは速疾に來らんと欲して、能く命をして盡く滅せしむ。天、境界に迷はされ、是の故に覺知らず。

彼の實語鳥は善心を以ての故に、天衆を憐愍み、是の如き偈にて眞實の法を說き、彼天を利益す。而も天取らずして、愛に心覆はるゝが故に、轉た復、歡喜びて、更に前みて鳥聲樂林に入りて、一切の天衆は心に皆、鳥音聲林を樂見む。是の如き林を名づけて既に是の如く、復、是の如き鳥の音聲の樂有り。彼林の中の樹は一切是れ寶にして、所謂、金銀・毗瑠璃樹なり。白銀樹有り、玻瓈樹有り、靑寶樹有り。是の平澤の中の蓮華の林の彼の諸の蓮華は、猶し燈樹の如く、一切の種々は甚だ愛樂す可し。種々の鳥有りて、無量なる色・無量の形相有り、寶を間雜める翅は具に說く可からず。何を以ての故に、心の善業は無量種なるを以ての故に、鳥の形相も、是の如くに種、雜はれり。心雜りしが故に、善業を雜作す。善業雜はりしが故に、是の如き果を得たり。具には說く可からず。心は微細に速に流轉するを以ての故に、是の因緣を以て具に說く可からず。一切の天の法は

皆說く可からざるも、天の業の果報を、今、少分說かんに、好妙なる欲の境界には放逸有り。園林・流水・蓮華の河池・種々の山峰・蓮華の林・鳥及寶等あり、天女は愛す可し、業の果を以ての故に、天世界中に是の如くに化現す。彼此の因緣にて、天は愛す可しと說けり。彼の善業の作所の果報の如きは失はず、滅せず。若し作さざる者は果も得可からず。復、此の因を以て、是の如く樂と說けり。又復、彼天は是の如くに種々の鬘にて身を莊嚴り、香を以て身を塗り、自身の光明にて快樂を受く。勝れし歡喜の心にて是の如く鳥聲樂林を觀察し、是の如くに觀じて七寶の諸樹を見るに、光明は燄の如し。種々の鳥有りて彼林を圍遶み、彼鳥は詠歌せり。若し、天の之を聞きて昔より未だ曾て聞かざる是の如き音聲を既に聞くことを得已らんには、心喜びて樂を受けん。彼の一切の天は聞き已りて皆樂めり。彼の是の如き鳥、樹の中に住して詠歌する者有り、鳥の蓮華林中に在りて詠歌する者有り、華の中に在りて詠歌する者有り、鳥の蓮華の池中に有りて詠歌する者有り。彼天は聞き已りて心に喜樂を生ず。若しは天・天女は迭に共に和合し、種々の歌音を一切皆止めて、鳥の歌聲のみを聽き、心に愛樂を生ず。是の如き彼鳥の詠歌する音聲は山峰に普徧し。諸の山峰中の一切の諸の獸の自體の本性は歌音を喜樂び、彼歌を聞き已りて、或は百、或は千皆悉く前に近づき、既に前に近づき已りて耳[二]眼動かずして其の歌音を聽く。樹の底に在りて住して歌を聽く者有り、天の草に對して無心に食はんと欲して、歌音を聽く者有り。彼の林中にて、鳥の歌ふ音聲は是の如くに愛す可し。鳥聲樂林の愛す可きことは是の如し。又、彼の林中の香も甚だ愛す可く、種々の華の香には種々の色有りて、念ずるに隨ひて皆有り、香・色・聲等は念ずるに隨ひて皆得。箜篌・齊鼓・箏笛・歌等は種々の美音なり。是れは天の音聲にして、彼の鳥の音は彼の天の聲より勝れたり。一根の境界是の如く勝るるが故に、彼の林は愛す可し。

又、彼の林の中に復、一根の境界の愛す可きもの有り。所謂、天味にして、意に念ずる所に隨ひ

【二】眼の字は宋・元・明三本及宮本に依れり、原本明に作れり。

て勝れし果味・或は天酒の味・天の藥艸の味を得、是の如く彼林は念ずるが隨に味を得。是の如く林の中に諸の味を具足せり。

又、彼の林中に、復、勝れし法有り。所謂、山有りて彼の山にて遊戯す。枝の網にて普く覆ひ、種々の重樓は皆是れ枝の網にて行びて亂れず。無量種の七寶の雜はれる壁有り、無量種の彩畫有て、皆遍く、多く種々に莊嚴れる天女有りて重樓の上に在り。彼の林は是の如く種々に莊嚴れり。又、彼の園林に、復、莊嚴有り。彼林に功徳を具足せることは已に說けり。今復、山の莊嚴の愛す可きを具足せる相を說かんに、謂はく、毗瑠璃にて其の山を莊嚴れり。山に七種の功徳有りて具足す。何等を七と爲すや。所謂、色・聲・觸・味・香等にして、念ずるに隨ひて皆得。念ずるに隨ふ樹有りて七種を具足す。彼處の諸天は彼の功徳を見て、癡にして惑ひ、迷亂して彼の鳥の法を說くを見ず、聞かず。彼の法を說く鳥は、猶し父母の說く所の法の如く、皆悉く決定するも、天は境界に著して聞かず、覺らず、境界に迷ふが故に、鳥の語を受けずして、愛の曠野にて行ふ。復、大林に向ふに、三種の火に燒然かれ、五怨に使はるるが爲に、喜愛に誑らかされ、實道に迷ふ。唯、苦樂有りて、苦と相似せる樂なり。是の如き虚妄の樂に著するを以ての故に、覺らず、知らず。利益する說法を受けず、取らずして、其の餘の三處を行く鳥の詠歌する聲を聽くのみなり。謂はく水を行く鳥とは、天の愛す可き色・愛す可き形相にして、七寶の身は種々に間雜はれり。鵝鴨・鴛鴦の是の如き等の鳥なり。種々の音聲・幷に水の音聲ありて、彼の天は美妙なる聲の歌を聞くことを樂しみ、一切の時に樂みて放逸を行ふ。一切の諸天は彼の音聲を愛し、是の如き彼天は更に餘鳥の種々なる音聲を聞きて法音を聞かず。所謂、林を行く種々の諸鳥とは孔雀・白鴿・樹を莊嚴る鳥・山谷の巖窟に住する鳥にして、美妙なる聲を出し、一切の鳥の聲は皆與に相似せる妙へなる聲の鳥なり。七寶身の鳥は以て山を莊嚴り、兩々並び飛びて虚空の中に在り、同く共に聲を出せり。彼の諸の鳥を觀ぜんに

は、荘厳を見るが如くにして、彼の鳥の光明を見ん者は、常に樂みて愛著の心を生ぜん。是の如き勝れし衆鳥の音聲を彼天は樂みて聞くに、語聲の者有り、歌聲の者有り、響聲の者有り。是の如く無量種々に分別せる跋求の聲ありて、種々に異りて聞こゆ。天は欲心有りて、天女の衆の爲に圍遶れ、彼の音聲を聽けり。

長久き時に聲を聞きて樂こ受け、更に勝れし愛有りて其の心を覆蔽へり。復、天酒を飲むに、第一の味・香を皆悉く具足し、天に所應しき如くに巖窟中より是の如く流出せり。多くの妙へなる蜂有りて皆酒の上に集れり。彼の諸の天等は迭互に一心に同く天酒を飲みて、相妨礙げず。復、餘天有りて蓮華林に向ふに、蓮華の葉中に多く天酒有りて、第一の天の味・香・觸を具足し、念ずるが隨の美味なり。諸の天・天女は意の恣に共に飲みて歌舞し、戯笑し、迭互に一心に共に同く欲意む。彼の諸天等は勝れし林の中に於て遊戯して樂を受け、境界の中にて心厭足ずして、復更に、毗瑠璃寶にて荘厳れる山に向ふに、彼の山に多く鵝鴨・鴛鴦有りて、普く皆青き影にて萬由旬を覆ひ、皆是れ青き影にて、其の山の擧高さは三百由旬なり。多くの園林有り、蓮華池も饒く、流水は盈滿て、第一の鳥有りて、見る者は皆愛す。彼の山中に好き平地有り、好き山谷有り、好き巖穴、河泉の源の窟有り、多くの行る林有りて、蓮華の水池には諸の華を具足し、三種の鵝有り、岸に在りて聲を出せり。所謂、鵝有りて玻瓈色なると、七寶間錯れると、或は白の體は白なるとなり。是の如き鵝は山中に甚だ饒くして、彼の山を荘厳れり。毗瑠璃の山に普く流水有り、水の色は清淨にして猶し寶珠の如し。彼の山に多く種々の香華有り、多く無量百千の諸鳥・種々の雜鳥有り、此の諸の鳥を以て蓮華池を厳れり。彼の種々の物は勝れて希有、上上に希有にして、愛す可き妙へなる色、彼の山を荘厳り、聲・觸・香等の無量種の物、以て山を荘厳り、六根に受くる樂、普く山を荘厳れり。

彼の諸の天衆は樂を受けんと欲するが爲に、往きて彼の山に到りて、普遍く處々に歌舞し遊戲す。蓮華の鬘を以て其の身の瓔珞とし、一切の時に樂みて、心常に歡喜び、心常に愛樂む。五境界の怨は、五の火の燒くが如くにて、愛は其の咽を縛る。彼の山頂に向ひ、樂を受けんが爲の故に、悕望みて見んことを欲し、種々に憶念し、種々に分別して漸々に到らんとせり。漸く彼の山に近づきて、山窟有るを見るに、是れ毗瑠璃なり。彼の山窟は靑色の光明にて一萬有る可く、以て莊嚴を爲し、普く第一の樂の勝妙なる光明なり。若しは山に住せし天は彼の窟の中に入りて種々に遊戲す。若しは彼の諸天の窟中に入らんには、彼の是の如き窟は是の如く是の如くに轉々として寛博し。彼天の心の如く、是の如く是の如くに種々に憶念するに、是の如く、是の如くに皆窟中に於て具足するを得たり。彼の窟を名づけて念ずるが如く得る窟と爲す。彼の窟に住せる天は天女の衆と共に、恒常に樂を受けて厭足を知らず。彼の諸の天女は種々に莊嚴り、善業を以ての故に、彼の天女を見るに心極めて愛樂しむ。形服は莊嚴して、姿の媚しきことは殊絕たり。歌舞し喜笑して天の樂を受く。夜摩天王牟修樓陀は天を利益するが故に、佛の說き給ひし所の偈を書して、彼の山の寶の窟の門上に在り。偈にて是の如くに言へり。

死王は衆生を呑み、衰・老は少年を飮む。　病至らんには强健を滅せんも、　世間に知る者無し。　無量種の生ること有り、無量種の退くこと有りて、　生れし如く老も亦然るとも、　世間に知る者無し。　一念の間有ること無く、一時・一日も無く、　死するには時・處と住と無しとも、　世間に知る者無し。　已に數々生を受け、亦曾て數々退き、　癡なる天は境界に迷ふとも、　世間に知る者無し。　此の有の輪は籠の如くにて、愛欲に貪著すれば、　愛の繩縛りて、將き去らんとするも、　世間に知る者無し。　愛の過の旋の波の中に、多くの分別の鳥有り、　此の愛河は寛廣とも、　世間に知る者無し。

彼の寶宿の門に、天を利益するが爲に、佛の偈頌を書せり。其の法は是の如く、天有りて之れを見れば則便ち、尋ね讀み、彼の偈を讀み已りて、自の本生を憶ひて、少時の間、放逸なる行せず。善業を以ての故に、須臾の間正しき心にて思惟し、未來の無量百千の多生の樂を增長し、淨分を增長し染分を減損す。彼の天は是の如く少時く正しく念じて、能く無量百千の生の數を滅す。若し彼の寶の宿の門上に書きし所の偈を見し者は則ち厭離を生じて、放逸なる行をせず。若し天の宿に入りても偈を讀まざる者は則ち唐く入ると爲さん。

若しは見・見ざる一切の入りし者は皆放逸を行ひて內に在りて、一處に寶珠の聚を見る。謂はく、金剛の聚・青寶珠の聚・摩伽羅多寶の聚・大靑寶の聚にして、而も彼の寶の宿の體性は自ら明にして、寶珠を以ての故に、光明は更に勝れたり。第三に復、天の中に入るを以ての故に、天身の光明は、彼の寶宿の光明をして轉た勝れしむ。是の如き彼の宿は甚だ愛す可しと爲す。彼の寶宿中にて天・天女の衆は五欲の功德にて、諸の欲樂を受け、安隱にして惱を離れ、熱惱を離れ、憂悲を遠ざけ離れたり。自らの善業の故に、無量種の天の勝れし妙樂を受く。彼天は既に彼の寶地を見已りて歡喜の心を生じ、歌舞し遊戲して、五樂の音聲にて快樂を受く。

又、彼の寶宿の、其の中に入りし者は則ち河有るを見る。第一の香・觸を具足せる天酒は其の中に盈滿てり。酒の河の兩岸には、酒を飲む鳥饒く、以て莊嚴を爲せり。是の如き鳥とは、謂はく、歡喜と名づけ、常樂と名づくる有り、常に戲るると名づくる有り、無異味と名づけ、見て愛す可しと名づけ、審諦心と名づく、鳥有りて名づけて。異處を樂しますと爲す。此れ等は諸の鳥なり。復、餘鳥有り、彼の酒の河に在り、遊戲して酒を飲む。天、善業の故に、鳥は偈を說きて言はく。

初め美味の酒を飲み、飲み已りて多く惡を作さんには、未來に惡果を得て、地獄の中に在らん。飲已らんには能く癡ならしめん。癡なるが故に、惡業を造る。癡にて惡業を作るが

【三】摩伽羅多寶。

故に、地獄の中に入らん。初の時には歡喜を生じ、後には乃ち惡報を得ん。初の時には能く渇を除き、後時には甚だ大熱なり。初の時には口・意に適ひ、後時には則ち樂を失はん。是の故に智有る者は則ち應に酒を飲むべからず。若し常に酒を飲む者は則ち鳥の如きと異ならず。酒を飲まんには能く癡ならしめん。酒を說きて大毒と爲す。若し酒を毒の如く見んには、彼れ不退の處を見ん。若し飲みても酒を味はずんば、則ち鐵の汁を飲むと爲さん。一切の惡の一分と、酒を(一分と爲すと)說くは、是れ心の過の作す所なり。一切の戒は心を根とす。酒を飲まんには、心正しからず、法を思惟すること能はず。比丘、酒を飲むが故に、阿蘭若の行に非らず。酒を飲まんには心をして亂れしめ、調はざらしめ、羞を知らざらしむ。法を失ひて空しく、福無く、現在・未來を失はん。威儀を修むることを知らず、時及び處を知らず。正法を障礙し、唯、言にて說くのみにして、義無し。自ら既に知ること能はず、何なる所說なるやを知らず。自ら口に語りても尿の如く、亦自ら知ること能はざらん。世間をして輕賤せしめ、法をして增長せしめず。貪る者の酒を飲むを見んには、火の燄然たるが如し。過し事を皆忘失し、現の事に皆迷ふ。況んや未來を思惟せんや。酒を飲まんには、三時を失はん。能く名色を失壞ひ、或は衆生身を失ひ、能く無量の過を生す。酒を飲むことは法を障礙す。

是の如く、彼處の山窟に住む鳥は、心常に歡喜て、業の因緣を以て天の爲に偈を說けり。彼天は聞き已り、若し善業有りて法行に隨順して、彼に生れし者は、本の前生を憶ふ。本生を憶ふが故に則ち酒の過を知る。酒の過を知るが故に則ち酒を飲まず、放逸なる行をせず。自餘の天衆は鳥の偈を受けずして、猶故に、酒を飲みて歡喜の心を生じ、五樂の音聲にて歌舞して樂を受く。乃至、久しき時、彼の山窟の中にて種々に樂を受く、既に樂を受け已りて、入り

【四】適の字は明本、宮本に依る。原本失に作る。

【五】阿蘭若(Araṇya)。又、阿練若とも書く。閑靜處・遠離處等の譯あり。人家を遠く離れ、閑靜にして修道に宜しき處なり。

【六】貪の字は宋・元・明三本、及宮本に依れり。原本貧に作れり。

【七】三時。過去・未來・現在のこと。

【八】名色(Nāmarūpa)。有情の身心を組成するの五蘊のこと。

し時の道より還りて是の如くに出でたり。是の如くに出で已りても、猶、境界に厭足を知らずして、放逸を行ひ、園林を樂見み、天女の衆と共に。復、一切の園林の中、河岸、山谷に於て種々に遊戯す。是の如き諸の天は、善業を以ての故に、是の如くに樂を受く。彼處は、是の如くに譬喩す可からざる天樂を具足し、彼の諸天等は境界の中に於て、諸の欲樂を受けて厭足を知らず。廣く多き愛の故なり。言ふ所の廣しとは、自らの體廣きが故に、彼れ曾て攝めずして恒常に開舒なるが故に、廣しと名づく。又、境界に於て、厭足を知らず。諸の境界は廣くして無量なるを以ての故に、根常に渴きて、曾て斷たざるを以ての故なり。是の如き彼天は、五欲の功德を轉轉增長して斷たず、絕たず、常に欲樂を受け、心に希有を生じ、愛す可き功德は譬喩す可からず。是の故に彼天は厭足を知らずして、海の流れを呑みては、足る時有ること無きが如く、天の足ることを知らざるは、亦復、是の如し。常に一切の時に、彼の天處に於て是の如く樂を受け、種々の園林の中に於て、欲水に漂はされ、諸の天女と共に遊戯して樂を受く。彼天は是の如くにて、乃至、作集せし愛善の業盡きんには、後時に至りて彼の天處より退き、自らの業行の如く、業の繩に繫縛されん。是の如き樂しき處より業盡き、退き已らんには、地獄・餓鬼・畜生に墮ちん。若しは餘天有りて、餘の善業の故に、人中に生れては閻浮提の大富樂の處に在り、第一の種姓にして歌舞し喜笑し、種々に遊戯して常に快樂を受く。身の色は殊妙、形服は端嚴にして、種々に具足し、勝れし國土の中にて、或は國王と爲り、或は大臣と爲り、或は[九]迦奢國、[一〇]憍薩羅國にて、安隱なる洲に在り。彼の餘業の故なり。

夜摩天の攝むる勝れし光明園の處の第九地は竟んぬ。

又、彼の比丘は業の果報を知りて、夜摩天に有する所の地處を觀ず。彼れ見聞して知り、或は天眼にて見るに、復、地處有りて名づけて正行と曰ふ。衆生は何なる業にて彼處に生るるや。彼れ見る

【九】迦奢(Kāśa)。又佉沙とも書く。國の名なり。
【一〇】憍薩羅(Kosala)。舍衞國の本名なり。

に人有り、法に隨ひて正しく行ひ、第一に清淨なり。報も亦清淨にして、業清淨なるが故に、樂しき果報を受け、聖人に愛され、勝善の布施にて、智慧少きも、布施するを以ての故に、天中に生れて天の愛果を受く。所謂、天處にて、何なる人は彼の天中の果報を得るや。所謂、人有りて善心清淨にして敬重の心・柔軟の心を生じて、殺さず盜まざることは、前に說きし所の如し。復、邪婬を捨つ。所謂、耳に先時に人有りて曾て婦女と共に婬欲を行ひしことを聞き、是の如く聞き已りて心に喜樂ばず。先の欲事を心に思念せず、覺觀を生ぜず。復、能く他を遮へて思念するを聽さず。是の如くに清淨なる業行を成就し、身壞はれて命終らんには、善道の夜摩天中の正行の地處に生れて、本と修めし所の善業の果報を受けん。彼處に生れ已らんには、種種の香・味・觸等の無量の境界を愛樂み、園林中の天の蓮華池に行き、百千の天女に供養せられ、園林・蓮華の池・流水の處に在りて行ひ、時、暫くも住すること無く、先に未だ見ざる所にして、譬喩す可からず、具に說く可からざる種々の天樂を具足し、彼の無量種の樂を受け、境界の中に於て心足ることを知らず。

又、彼處に無量種の天の妙なる園林有りて、是の如き彼處に始めて生れし天子は、少き婦女の衆之れを圍遶く。餘の園林に天女の衆有り、中に在りて遊戲し、始めて生れし天を見て、心に則ち欲を發し、行きて則ち本と異り、天の衣鬘を以て種々に莊嚴り、始めて生れし天を見て卽便ち前に近づく。始めて生れし天子は彼の天女を見て五倍に欲を發し、卽ち前に往きて近づく。彼の諸の天女と始めて生れし天子は迭に相ひ雜り合し、彼此共に無量種の樂を受け、同心、一意にて相ひ違返せず。是の如くに天女は一切共に歌ひ歡喜び、舞笑せり。彼の諸の天女は是の如き心を生ずらく『此の始めて生まれし天は是れ我が夫主なり』と。始めて生まれし天子は是の如き心有り。『此の諸の天女は是れ我が婦なり』と。是の如くに天子は諸の天女と共に、彼此相ひ信じて、相ひ疑慮はず。喜笑し歌舞し迭に相ひ愛樂して園林の中に在り。一園林より一園林に至り、一山峰より

一山峰に至り、蓮華池より蓮華池に至り、一の枝の舍より一の枝の舍に至り、一の叢樹より一の叢樹に至り、一池より去りて、復、一池に至る。是の如き池とは青寶の色にして、彼の池には多くの鵝鴨・鴛鴦の種々の音聲有り、是の如き等の無量の諸鳥に種々の音聲有りて、耳に聞きて心に樂しむ。心意に念ふ如く、是の如き水生じて、色・香・味を具へて、彼の池中に在り。無量種の歌舞・遊戲有りて、諸の快樂を受く。既に樂を受け已りて復、餘處を見るに、異る天衆有りて歡喜て遊行せり。始めて生れし天子、之れを見れば卽ち往き、天女の衆と共に、五樂の音聲にて歌舞し遊戲し、是の如くにして去る。爾の時、彼天、既に是の如き始めて生れし天子を見て、偈を說きて言はく。

山の園林中、或は蓮華池在りて、一切の重樓の處にて、天女と共に樂を受け、或は金山の中、或は毗瑠峰、或は園林の叢樹に於て、天女と共に樂を受く。念ふが隨の愛す可き樹なり。

或は流れの河に在り、或は寬廣なる池に在りて、天女と共に樂を受く。七寶の間雜れる處なり。或は山河中、或は平地の好き處に在りて、天女と共に樂を受く。曼陀羅樹林・青優鉢羅林・種々の鳥の音する處にて、天女と共に樂を受く。種々の地分の處なり。或は寶林中に於て、或は愛す可き堂に在りて、天女と共に樂を受く。或は五樂の音聲にて、心をして樂しく清涼ならしめ、常に歌舞し遊戲して、天女と共に樂を受く。

彼の諸天等は、始めて生れし天の爲に、是の如く偈を說けり。始めて生れし天子は偈を說くを聞き已りしに、彼處に、復、實語鳥と名づくる有りて、法の如く利益して、正行ならしむるが故に、爲に偈を說きて言はく。

山の園林等の中、或は蓮華林に在りて、癡にて愛の爲に迷はされんには、天女と共に倶に墮ちん。或は金山の中、或は毗瑠璃の峰に在りて、善業を食ひ盡し已らんには、天女と共に倶に墮ちん。念ふが隨の愛す可き樹、或は流水の河に在りて、遊戲して善業を盡さんには、天女

と共に倶に墮ちん。七寶の間雜れる處、或は山河中に在りて、境界の爲に迷はされんには、天女と共に倶に墮ちん。曼陀羅樹林・青憂鉢羅林にて、樂に著し癡にて盲せられんには、天女と共に倶に墮ちん。種々の地分の處、或は寶林中に於て、善法を修行せずんば、天女と共に倶に墮ちん。或は五樂の音聲にて、心をして樂しく清涼ならしめて、貪り著するが故に、時過ぎて、天女と共倶に墮ちん。

彼の實語鳥は天を利益し、隨順して饒益し、天をして安隱ならしめ、正行ならしむるが爲の故に、是の如くに偈を說けり。彼の天は放逸にて聞きたりと雖も受けず。彼の諸の舊天は猶尙取らず。況んや始めて生れし天をや。

彼の新・舊の天、放逸の毒の爲に傷けらるるが故に、普く皆歌舞して、心に歡喜を生じ、園林中に在りて、處々に遊戲し、境界の樂を受け、自身の光明は餘照を假らず。彼の一切の天は、天女の衆と共に、復、一山に向ふに、山鬘山と名づく。彼の山鬘山に多く無量種々の寶性有り、種々の寶有りて莊嚴を爲し、普く山に光明ありて、百千の蓮華の、日の初めて出でしが如きを以て、莊嚴を爲し、百千億の流水・泉池有り。彼の山の四廂に四の叢林有り。所謂、一を百の池・流水と名けづ、二を大光と名づけ、三を巖山と名づけ、四を普香と名づく。此の名の四林は彼の山の廂に在り。彼山の一廂の百の池・流水の叢林の中に、念ふが隨の樹有り、百千の池有り、金銀・青寶・迦鷄檀那の諸寶の色の魚は池中に普遍く、其の池の水は清淨・涼冷にして、意に念ずるが如き水は彼の池に盈滿てり。多くの園林有りて、彼の池を圍遶み、鵝鴨・鴛鴦の音聲は愛す可く、聞く者は心に樂しむ。一切の時に常に歡喜ぶ鳥有り、彼の天衆を見て、偈を說きて言はく。

一切の命は無常にして、少年は停まり住せず。此の天處も亦爾り。而も天は覺知らず。諸法を念ずるも住せず、次第に皆失壞す。業の繩に繫縛されて、世間は覺知らず。十億の

諸の天衆、園林に在りて遊行び、退く時の將に到らんとせるも、世間は覺知らず。六欲の諸天等、放逸にして愛樂を受け、一切は皆失滅するも世間は覺知らず。樂は水沫の聚りの如く、夢に得し物の如く、速に滅して、久く停らざるも、世間は覺知らず。

彼處の諸天、山に上らんと欲する時、彼の一切の時に常に歡喜ぶ鳥は、利益の心を以て、天の善業の故に、是の如くに偈を說けり。彼の諸天等は、境界を樂しむが故に、聽かず、取らず、覺らず、知らず、見諦ること能はず、彼の鳥を看ずして、生盲者の如くに、道有るとも見ず。

爾の時、彼天、次に、第二の大光の叢林に向ふに、彼林の光明は一百の日の光明より勝れ、彼林の諸樹に、勝れし光明あり、或は樹の光明、或は寶の光にして、勝妙の功德を皆悉く具足し、光明は焰然たり。彼の大光林の三種の光明は彼林に普遍くして、彼の是の如き林は普く皆愛す可き流水・河池にて莊嚴を爲し、念ふが隨の樹有りて、林の處を莊嚴れり。是の如き林の處は各各差別し、彼の諸の天衆は各異る處に在り、五樂の音聲にて歌舞し遊戲して種々に樂を受け、善業漸く盡く。彼の山中に於て、復、異る處に在りて境界の樂を受け、大に醉ひたる象の如く、是の如き林中にて、久しき時に樂を受く。

又、彼の天衆は山中に於て、自の心動くが故に、次第に、復、[二]嚴山の林に向ふ。中にて、復、五境界の樂を受け、放逸の怨の爲に迷惑せられて、退くを畏るることを知らず、方便して脫るるを得可きこと有ること無し。唯、初の時に樂しまんには、後に則ち衰惱せん。聲・味・色・香にて、諸の欲樂を受け、愛にて亂れし心の故に、處々に遊行す。

復、餘林を見るに、普き彼の林の外に蓮華林有りて、周匝を圍遶けり。念ずるが隨の樹有りて彼林を莊嚴り、百千種の華にて莊嚴を爲せり。餘の大樹有り、殊妙なる香有りて之れを莊嚴れり。又復、多くの流水の河池有りて莊嚴を爲し、又復、多くの種々の鳥獸有り、七寶の枝の舍にて莊嚴を

【二】 嚴の字は。元・明・兩本に依れり。原本巖に作れり。

爲せり。又復、多く種々の香美の飲食の河有り、彼の諸の天衆は是の如き山に到り、或は百千たび到りて、歌舞し遊戲し、迭に共に伴と爲り、同一の欲心にて倶に彼林に到り、天女の衆と共に、久しき時に樂を受け、彼此迭互に境界を悕望む。

又復、彼天は未だ厭足を知らずして、彼の山處に於て、次に復、更に、大に愛す可き林を見るに、名づけて普香を曰ふ。彼の林は甚だ香り、樹枝の華香る。金枝の華の蓋にて彼の林の上を覆ひ、[二]居戸奢の第一の妙香有り。又、彼林の中の曼陀羅華は第一の妙香にて、香氣は流布して百由旬に普し。天、彼の香と聞きて希有の心を生ず。彼の諸の天衆は是の如き等の無量の妙香を齅ぎ、彼の林の中に入りし彼の諸の天衆は迭に相ひ愛樂し、同一の心欲にて境界の樂を受けて、厭足を知らず、處々に遊行し、無量種に行ず。

彼天は是の如く處々に遊行し、遊戲して行き、是の如くに漸く山鬘山の頂に向ひ、遂爾に前て、百々千々の彼の山の頂上に到り、大城有るを見る。城は甚だ愛す可く、其の城の縱廣は五百由旬にして、普く彼の城中に、行る重樓・金寶の殿舍・銀寶の殿舍・毗瑠璃の舍・硨磲の舍有り。是の如き種種の妙寶の殿舍にて莊嚴を爲し、[三]街巷に相當せる門の狀は愛す可くして、皆是れ妙寶なり。普く彼の城中に蓮華池饒く、彼の諸の天衆は是の如き城に入りて心に歡喜を生じ、種々の功德を具足して樂を受け、寶舍中の寶の園林中に在り、或は復、蓮華池中の枝の華の舍の中・或は華の林の中に在り、或は復、蓮華池の中に在り、或は復、饒くの華の地處に在り、或は復、山窟の中に在り、或は復、山谷の中に在り、或は復、山の脇の處に在り。彼天は是の如くに或は城中に在り、或は餘處の山頂の上に在りて、諸の天女と共に、處々にて樂を受け、無量種[四]種・多種に樂を受け、五樂の音聲の功德を具足せり。是の如く遊戲して種々に樂を受く。彼れ樂を受くる時に、鳥、之れを見るが故に、爲に偈を說きて言はく。

【二】居戸奢。不詳

【三】街の字は。宋・元・明三本に依れり。原本、行に作れり。

【四】種の字。宋・元・明三本及、宮本に依れり。原本、樂に作れり。

諸天の本の善業も一切必ず當に盡くべく、後に苦惱を受くる時、乃ち放逸の過を知らん。心樂しみて欲に著する者は、唯、微少の樂のみ受けん。彼れ樂しみて未だ久からざる間に、後時には必ず當に壞るべし。境界の樂を樂む者は、常に悕望む心有り、婦女を見ては放逸にして、後時には必ず當に壞るべし。天、境界の樂しみに著して、退く時の苦を慮らざれば、後に破壞さるる時に至りて、乃ち退く苦惱を知らん。天、若し婦女に近づき、共に放逸を行はんには、終ひに後に退く時至りて、彼の一切を捨離せん。一切の天より退かんとせば、與共に行く者無く、唯、一切の業のみ有りて、後に隨ひて與に同く行かん。常に應に善業を修さめ、常に不善の業を捨て、常に放逸を離れ、常に不放逸を行ふべし。放逸には是れ根有り、不放逸は寂靜なり。放逸と不放逸は、其の相を說きし所の如し。勇者は常に思惟して、善業を修行するを樂しみ、常に法を修行する者は則ち諸の苦を受けざらん。

彼の鳥は是の如くに、天を利益するが故に、已に此の偈を說けり。彼の諸天等は放逸を行ふが故に、聽かず、受けずして、復、更らに、境界の爲に盲にせられ、園林の中に行きて、種々に遊戲し、或は園林に在り、或は愛す可き寶の城等の中に在りて、種々の樂を受く。彼天は山鬘山中に在りて、既に樂を受け已り、復、更に、千峰の山に向へり。悕望みて彼の寶山を見んと欲するが故なり。天の境界を樂み、是の故に、次に往きて、天の善業の因にて快樂を受けて、彼の寶山を見るに、勝れし愛心を生ず。一切の欲樂を皆悉く具足し、一切の時に、多くの華果・流水・河池・蓮華の林有りて具足して有す。彼の一切の天は、彼の樂しき處を見れば則ち樂を受け、行きて亦樂を受け、食して亦樂を受け、彼の勝れし山を見ては希有なる心を生ず。山鬘山と謂ふは、彼の大に勝れし山にして復、衆山有りて周匝を圍遶き皆是れ寶の山なり。是の故に、彼山を名づけて、山鬘と曰ひ、彼山に多く園林の華池有り、流水の河有り、多く寶の蜂有りて、無量の衆鳥は種々の音聲なり。是の如き諸

鳥は皆是れ寶身・種々の形相にして、皆悉く愛す可く、山峰を莊嚴れり。普く彼の山峰の光明は悉く遍くして、彼の諸の光明に百千種有り、是の如き寶山は諸の山中に在り、彼の寶山を見るに、頂は虛空に埵れ、大光明有りて微妙殊勝なり。彼の諸天等は是の如き山に上り、天女の衆と共に、五樂の音聲にて遊戲して樂を受け、心に歡喜を生ず。彼の山上に上り、意に念ずるが如く行ひて、空中に有りて遊行する者有り、天女と共に同一の欲心にて、五境界にて諸の欲樂を受け、愛河に漂はされ、暫くも停らざる者有り。若しは寂靜の樂とは則ち是れ常の樂なり。未來世を捨てんに、是の如きは寂靜にして利益し安樂す。天樂を樂むに、是の如き天樂は毒を雜べる蜜の如くにして、諸の天衆は心に樂に著することを生ず。初の時、賢に似たるも、後には則ち善からずして、賢は是れ樂に非らずして、樂と相ひ似しのみなるも、彼天は知らずして、心に樂に著することを生じ、天女の衆と共に、五樂の音聲にて、心の隨に遊戲して、彼の山頂に上る。是の如く、是の如くに彼の山上に上り、是の如く、是の如くに、彼の山の處を見、何處を見るに隨ひても、轉た勝れて愛す可し。是の如き寶山には普く皆愛す可き樹林・河池あり。種々の諸鳥は園林の中に在りて、彼の山の處に滿てり。無量百山の種々の園林は彼山を莊嚴り、七寶の光明は周匝りを圍遶き、普く彼の天衆は諸の天女と共に、歌舞し遊戲し、徐に彼山に上り、竝びて行き、並に看、天及び天女は種種の形服にして、鬘にて身を莊嚴り、更に異心無く、心常に樂樂みて放逸を行ふ。彼の諸の天衆は、自らの身に光明あり、自らの光明と共に、無量の形服にて莊嚴り、天女に圍遶れて同く行き、安安・詳々に、心意の如に行きて彼の山上に上る。善業の力の故に。自ら善業を作さんには、自ら樂しき報を得、決定して自ら受けん。遊戲・歌舞して、河池の中に在り、無量種有りて諸の快樂を受く。徐に彼山に上り、五樂の音聲にて病を離れ、倦無く、心に歡喜を生ず。是の如く遊戲し、彼れ是の如く行ひて、無量種の山谷・谿澗を見るに、各各差別し、自らの意行に隨ひ、何處を行くかに隨ふも、

畏る所無し。是の如くにして次第に漸く山上に上る。
彼の山鬘山に復、異る處有り。大鵝王有り、住みて其の中に在り。彼の鵝王は資にて身を莊嚴り、名づけて善時と曰ふ。彼の諸天の放逸なる行を行ふを見る。彼の諸天等、は勝れし善業の故に、彼の樂しき命を得たり。應に怖畏るべき時に、便ち喜笑す。爾の時、菩薩の善時鵝王は彼の一切の天を利益するが爲の故に、山窟中に住し、隨順修行して寂靜の善業あり、天を饒益するが故に、放逸を除き、畢竟して彼の諸天を利益するが爲の故に、第一に勇勝にして、種々の微妙なる一切の天の愛する美しき音聲の語にて、一切の天の有する所の音聲を覆ひ、偈を說きて言はく。

愛欲の染心は癡にして、常に樂みて境界に著す。彼天は則ち未來世を利益することを知らず。此の餘は少しの福德にて、退く時至らんとするに臨めり。退き已らんには異處に到りて、自らの業の果報を受けん。百千の生の中間にて、業の鎖の爲に縛らる。此の業は衆生を縛る。須く道の資糧を集むべし。若し天、恒に樂を受け、常に不善の業を作らんには、彼の因に相ひ似ずして、癡なる者心中に住せん。欲の爲に迷惑せられ、唯、食して死を待ち、若しは諦に知ること能はずんば、衆生を利すること能はざらん。欲の爲に迷惑せられて、唯、食して死を待ち、若しは身の樂の爲の故に、法を壞るは是れ愚癡なり。一切の時に、一心に常に勤めて善業を修め、不善を捨離する者は、此れは是れ智慧の相なり。放逸は持戒せず、本の前業を食ひ盡し、放逸なる行を以ての故に、久しからずして天處より退かん。彼れ常に是の如き意にて、時の爲に催驅れ、後には悔の火の爲に燒かるゝとも、能く救ふ者有ること無けん。惡は避ることを得可からず、衆生は決定して受く。後に死ぬ時に到らん。知り已りて寂靜を行ぜよ。

善時鵝王は第一勇勝にて、自體は是の如く美妙なる音聲にて、彼の天衆の爲に、是の如き偈を說

けり。是の如き鵝王菩薩の音聲にて、一切の天の爲に、無量種・無量の音聲を作り、章句を示現し、皆悉く相應き菩薩の聲にして、美妙なる勢力あり、勇くして復勝れ、天の音聲を蔽へり。彼處の是の如き一切の天衆は、復、遠き處に大音聲有るを聞く。無量の天女に圍遶れ、種々に莊嚴る勝妙の寶殿ありて、一切の時の華・一切の時の果を皆悉く具足す。無量なる蓮華は遍く其處を覆ひ、多くの天女の衆の歌聲は愛す可く、妙寶の瓔珞の光明は照耀き、七寶は間錯り、園林・水池にて莊嚴を爲し、幢幡・拘欄は種々に莊嚴り、百千の天女の妙音の聲歌・五樂の音聲を聞く者は心樂しむ。毗瑠璃の寶・大青寶の寶の柱、眞金の柱等にて莊嚴れ、大師子座にて莊嚴られり。是の如き寶殿は虚空中を行き、夜摩天王は彼の殿上に在り。多くの無量百千の天女有りて、天王を供養し、百千たび合掌し、天王を讃歎して、虚空中に在り、分明なること晝の如し。勝れし歡喜の心にて、山鬘山に向ひ、爲に往きて善時鵝王を見んと欲せり。是の如き鵝王は大願力を以て、天を利益せんが爲に、生れて夜摩に在りて、本の前生を憶へり。是の故に、天王は敬重心を生じ、來りて之に向ふ。法を聽かんが爲の故にして、自身の爲に、幷に天衆の爲に、利益し安樂にし、自他を饒益し、惡道に墮ちず、放逸を離れんが故なり。

爾の時、彼天は山鬘山の中に遊戲して樂を受け、種々の處・山・園林の中に在り、或は平なる處に在りて住める者有り、或は山谷の中に在る者有り、或は蓮華林に在る者有り、或は池水の中に在る者有り、或は殿堂の上に在る者有り、或は寶舍の中に在る者有り、或は山峰の中に在る者有り、或は河岸の處に在る者有り、或は上頂の上に在る者有り、或は華林の中に在る者在り、或は果林の中に在る者有り、或は念ずるに隨ふ樹に在る者有り、或は毗瑠璃、金の念ずるに隨ふ樹に在る者有り、或は無量に到りて數見れば則ち愛す可き樹林なるものゝ、中に在る者有り。一切は皆悉く天女の衆と共にして、或は多くの衆と共なるか、或は少き衆と共なり。一切の天衆は速に喜の心を生じ、

歌舞し、嬉笑して彼の天王を看、大天王の勝れし殿上に坐せるを見て無比の天の快樂を成就し、見已りて疾に走り、一切の天衆は力を盡くして走る。既に天王牟修樓陀を見、竝びに看、竝びに走りて、心も眼も倶に樂しみ、眼に觀て捨てず、轉々して前み近づく。彼の諸の天衆は是の如くに思惟すらく『夜摩天主牟修樓陀は法を聽かんと欲するが爲に、是の故に、來りて善時鵝王に詣れり。我れ今、往きて見え、天王を供養せん』と。彼の諸の天衆は是の如くに思惟し、既に思惟し已りて、一切皆夜摩天王に近づくに、五欲の功德・境界の樂を一切具足す。天衣・天鬘を以て莊嚴を爲し、彼の一切の天は皆悉く前みて牟修樓陀に向ふ。夜摩天王は虛空の中を行けり。

若しは天の一千の峰山に在りて遊戲して樂しむ者は、是の如く見已り、天衣にて莊嚴り、一切皆前みて天王の所に到りて、禮拜し供養す。既に供養し已りて、轉た勝れて歡喜び歌舞し戲笑して、王の面前に近づき、一切皆夜摩天王と和合し、一處に共に鵝王菩薩の所に向ふ。彼の鵝王菩薩は第一に聰明くして、大智慧有り、本願力を以て、彼の諸天の爲に、放逸を除くが故に、生れて夜摩に在り。彼の一切の天は皆鵝王菩薩の所に到る。夜摩天王は既に菩薩を見て敬重心を生じ、法を敬重するが故に、天女の衆と共に殿より下る。鵝王菩薩は常に大法を說き、常に法吼を作し、既に天王牟修樓陀を見れば則ち正法を吼ぶ。彼の大鵝王は法の勢力の故に、一切の天より最も勝妙と爲し、光明は勝絕たり。法の威力の故なり。」

卷の第五十四

觀天品之三十三

夜摩天之十九

爾の時、鵝王は彼の天王牟修樓陀を見て、是の如き言を作さく『今や、善く來れり』と。種々の語言にて問訊し供養せり。既に、供養し已り讃へて言く『善き哉、夜摩天王よ。乃ち能く、是の如くに放逸なる行せず、甚、希有と爲す。此の第一の放逸なる處に在りて、能く是の如くに、放逸を行はず、放逸なる行をせず。此れ希有と爲す。復、希有なること有り、(夜摩天主は)一切の天主は皆天中に於て、百倍に樂を受くるも、放逸を行はず。此れ甚だ希有にして樂の因緣を離れんこと則ち得可からざらん』と。

是の如くに、菩薩の善時鵝王は、自らの本生を憶ふ。[一]尸棄佛の所にて曾つて經法を聞きたり。彼の經を念じ已りて、天主牟修樓陀の爲に、是の如く說きて言へらく『汝、大天王よ、善き利を獲得して、放逸なる行せず。我が聲を聞かんが爲に、是の故に、此こに來れり。甚だ、希有と爲す。汝、今、善く聽け、我れ、汝が爲に說き、彼の世尊尸棄如來の說き給ひし所の如くに說かん。當に爾の時にあたりて、我れ人王と作り、如來の說き給ひしを聞けり。本、聞きし所の如くに、今、汝が爲に說かん。汝、今、諦に聽き、善く之れを思念せよ。一の法門有り。王法の行と名づく、是の如き法門は則ち能く利益し、灌頂して位を受け、刹利大王たらん。王は此の法を得て、現在世に常に安樂を得、常に利益有り、正しく國土を護り、能く自身を護りて、善人に讃へられ、身壞はれ、命終らんには、善道の天世界中に生れて、[二]夜摩王と爲らん。

灌頂して位を受けし刹利大王は、何なる業を成就するや。現在世に於て常に安樂なるを得、常

【一】尸棄佛 (Sikhin)。過去七佛の第三佛。

【二】夜摩の二字は、宋・元・明三本に依れり。

に利益有り、正しく世間を護り、大富、大力にて、能く自身を護りて、善人に讃へられ、身壞はれ、命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。大神通力有りて大いに富み、大力なり。所謂、此の王は三十七法を具足し、成就し、現在世に於て、常に安樂を得、常に利益有り、正しく世間を護る。世間を護るが故に、大富・大力にして、一切の餘王も破壞すること能はず。能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞れ、命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。

何等を名づけて、三十七法と爲すや。一には軍衆は一切淨潔し。二には法に依りて税を賦し、受け取るなり。三には恒常に忍を懷きて怒らず。四には平直にして、事を斷じて偏らず。五には恒常に尊長を供養す。六には舊に順じ前に依りて與ふ。七には布施の心にて、慳悋ならず。八には非法を行ふ者を攝めず。九には不善の知識に近よらず。十には貞謹にして婦女に屬せず。第十一には、諸の語言を聞くとも一切を信ぜず。第十二には、善き名稱を愛して、財物を貪らず。第十三には、邪見を捨離す。第十四には恒常に惠施するなり。第十五には愛語し、美しく說く。第十六には實の如く語說る。第十七には諸の臣衆を、若し因緣無くんば、擧げず、下げず。第十八には、人の好惡を知る。第十九には、常に定めし一時に、數、衆人を見る。第二十には、多く睡臥す。二十一には、常に懈怠せず。二十二には、善き友に堅固なり。二十三には、一切の無益なる友に近よらず。二十四には、瞋・喜に動かされず。二十五には、飮食を貪らず。二十六には、心に善く思惟す。二十七には、後時を待たずして安詳に作す。二十八には、法にて世間を利す。二十九には、恒常に十善の業道を修行す。第三十には、因緣を信ず。三十一には、常に天を供養す。三十二には、正に國土を護る。三十三には正に妻子を護る。三十四には、常に智を修習す。三十五には、境界を樂まず。三十六には、惡人をして其の國內に住せしめず。三十七には、一切の尼に、若しは祿・若しは位を、前の法に依りて與ふ。是れ等を名づけて三十七法と爲す。若し此の三十七法を成就せんには、位を受けし

刹利大王と名づくるを得ん。現在の世に於て、常に安樂なることを得、常に利益有り、大富・大樂にして、多くの財寶有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞はれ命終らんには、善道天世界の中に生まれて、夜摩王と爲らん。是の如き等の三十七法の善業の因を以ての故なればなり。

何なるを名づけて、刹利大王の軍衆は淨潔なりと爲すや。所謂、善心にて、他人を利益し、對に諍ふ者を、法に依りて事を斷じ、法律に違はず、法に依りて正しく護り、本の要に違はず。忠心にて王を諫め、王は利益を行ひ、順じて成し、善を讃へ、法に依りて國を護り、設くる所の言教は、量に依りて利益す。且つ、直心を起して、他を惱まさず、法に依りて主に事へ、唯に罰を畏るのみならず、心に貪・慢無く、一切の法に皆順ひて違はず。未來世の爲に、法に隨ひて行ひ、生・死を怖畏れて、業の果報を信ず。三惡業を捨てゝ、多くの欲を樂まず。罰を行ふを喜ばず、正しき意にて亂れず。是の如く自他の二を皆能く度し、能く王を利益す。若し是の如くんば、是れ王の軍衆なり。是の如き軍衆は王と相應す。是の故に、王をして現在世に於て常に安樂を得せしむ。(是の如き王は)常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞はれ、命終らんには、善道天世界中に生まれて、夜摩王と爲らん。諸の軍衆は一切淨潔なるを以て、是の故に、王をして惡心を生ぜざらしむ。善業の因の故なればなり。

又復、位を受けし刹利大王は、次に第二の法を應に勤めて修習すべし。成就し相應せんには、現在世に於て、常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞はれ、命終らんには、善道の天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。何なるは第二なりや。所謂、法に依りて税を賦して受け取り、以て衣食を供す。云何に法に依るや。或は國土、或は城、或は村、或は邑、或は人の集る處にて、一切の時に、常に舊則に依り、道理に依りて取る。彼の王は、是の如くにて、

若しは國壞れし時、若しは天儉の時は、則ち稅を賦せず。取る時も、理を以て逼らず、罰せず。先の舊來に依り、常に用ふる所は升、尺に稱ひて均平なり。是の如く受け取り、法に依りて違はず、逼らず、罰せず、侵さず、奪はず。是の如き國王は則ち是れ、一切衆生を憐愍む。王、若し是の如くに法に依りて受け取らんには、功德の因緣にて、現在世に於て、常に安樂を得、常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられん。身壞はれて命終らんには、善道の天世界の中に生れて、夜摩王と爲らん。常に法に依りて稅を賦し、受け取りし善業の因を以ての故なり。

又復、位を受けし刹利大王に、第三法有りて、應に勤めて修習すべし。成就し、相應せんには、國土に逼られず、現在・未來の三世を利益せん。何なるは第三なりや。所謂、恒常に、忍を懷きて怒らず。心に是の如くに念ずらく「何なる因緣に隨ひて、我をして瞋恚らしむるや」と。是の如き因緣を一切皆捨てゝ、身、自在なりと雖も、他の瑕疵を見て、譏らず、調べず。諸の臣僚・眷屬・僕使の罪過有る者に、重き刑罰せず、他の怨人、若しは他の親善に、其の過を說かず、其の惡を說かず。若し軍衆に於て、瞋心を起せし時は、則ち忍辱を念じ、忍辱を念ずるが故に、瞋心則ち滅す。口に美しき語を說き、更に異なる言を說きて、彼の軍衆をして憂ざらしめ、怖れざらしむ。恒常に、是の如き一切の法の中にて、一切の時に忍び、自體實に忍にして、因緣に非らざるが故に、是の如く瞋らず、是の如く恚らず。王、若し是の如く心に忍辱を懷かんには、功德の因緣にて、現在世に於て、常に安樂を得、常に利益有り、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身懷はれ命終らんには、善道天世界中に生まれて、夜摩王と爲らん。能く人に於て恒常に忍を懷きし善業の因を以ての故なり。

又復、位を受けし刹利大王に第四の法有りて、應に勤めて修習すべし。成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。何なる は第四なりや。所謂、平直にて事を斷じて、偏らず。王は善き

心意にて、一切の民に於て、猶し父母の如くにて、物の故を以てせず、用の故を以てせず、親しき故を以てせず、恩の故を以てせず、友なる故を以てせず、貴勢に囑及すること有るが故を以てせず、是の如き一切の因縁を用ひずして、法に依りて事を斷じ、偏らず、諍對ふ者に黨せず。怨親に平等にして、利益の語を說き、實の語を說く。王、若し是の如くに平直に事を斷ぜんには、功德の因緣にて、現在世に於て、常に安樂を得、常に利益有りて、國土を失はず、名稱を失はず、一切の軍衆に皆罪罰無く、能く國土を護り、他の論を畏れず、他王は勝たず。久しき時に王と爲り、王は國土を領して、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞はれ、命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。心、平直にて事を斷じ、偏らざりし善業の因を以ての故なり。

又復、位を受けし刹利大王に第五の法有りて、應に勤めて修習すべし。成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益し、是の如くにて乃至、涅槃に到らん。何なるは第五なりや。所謂、恒常に、尊長を供養するなり。何なるは尊長なりや。尊長と謂ふは、實の如くに見、持戒し、智にて行ひ、衆生を利益し、常に善業を作し、身・口・意等は恒常に寂靜なり。自らの心に垢無く、他をして福を攝めしむ。是の如き尊長に、王は應に親近むべし。旣に親近み已りて、法を聽き、法を聞き、常に往きて供養して、其の說く所を受け、其の言敎を受く。其の說く所の如くに、王は應に受持すべく、說く所の如くに行ふべし。一切の時に、尊長を供養せし功德の因緣を以て、現在世に於て、常に安樂を得、常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞はれ、命終らんには、善道天の世界中に生れて、夜摩王と爲らん。一切の時に、尊長を供養せし善業の因緣を以てなり。

又復、位を受けし刹利大王に、第六法有りて、應に勤めて修習すべし。成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。何なるは第六なりや。所謂、舊に順ひ、前に依りて與へ、若しは父に

先に與へ、若しは祖に先に與ふ。或は復、先祖・先舊に、若しは地・若しは金・若しは銀等の物を與ふ。彼の位を受けし王は、濁らざる心を以て、清淨なる心を以て、隨順ひ歡喜て、彼の法を愛樂む。是の如くに舊に依りて隨順ひ、善を讃へ、他を敎へて與へしむ。王、若し、是の如く前に依りて與へんには、功德の因緣にて、現在世に於て、常に安樂を得ん。常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞れ命終らんには、善道天の世界中に生れて、夜摩王と爲らん。常に舊に順ひ、前に依りて與へし善業の因を以ての故なり。

又復、位を受けし刹利大王に、第七法有りて、應に勤めて修習すべし。成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。何なるは第七なりや。所謂、布施の心ありて慳悋ならざるなり。何なるは布施なりや。布施とは、若しは少壯・老時に、恒常に布施し、一切を布施し、一切種の施、一切時の施にて一切を利益し、一切を饒益し、一切を安樂にし、常に、地獄・餓鬼・畜生の一切の道中にて、飢渴等の種々の苦惱を受くるを念ずるなり。布施する時に、是の如き等の三趣の衆生の早く解脫を得て、人、天中に生れんことを願ず。王、若し是の如くんば、現世の報を得ん。何なるは現報なりや。所謂、名稱にして、若し遭難の時に、奴僕・軍衆、則ち捨離す。他の國土の人、常に來りて供養し、餘人、見已りても破壞すること能はず。一切の怨敵も乃至、其の少しの便をも得る能はず、他より常に勝るゝなり。是の如くに布施して、現世の報を得、[三]福田に非ざる處にて、是の如く布施して、尙、是の如く現世の果報を得。況んや、福田に於て、物・思の具足せる勝れて善き布施にをいてをや。常に、惡道を閉ぢ、常に、樂報を受く。彼れは無量種に布施して與ふ。何に無量なりや。謂はく、法を布施し、資生を布施し、無畏を布施す。王は是の如き等を種々に布施し、若しは沙門に施し、婆羅門に施す。是の如き布施せし功德の因緣にて、現在世に於て、常に、安樂を得、常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れ

【三】福田。田は生長を以て義とす。應に供養すべき者に之れを供養すれば、能く諸の福報を受く、猶、農夫の田畝に播種して秋收の利ある如し、故に福田と名づく。

て、夜摩王と爲らん。彼の布施せる善業の因を以ての故なり。

又復、位を受けし刹利大王に、第八法有りて、應に勤めて捨離すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。何なるは第八なりや。所謂、非法を行ふ者を攝めずして、國に在らしめず。刹利王自ら法行に隨ふを以て、是の故に、非法を行ふ者を攝めずして、國に住せしめず。何なる者を名づけて非法を行ふ者と爲すや。所謂、人有りて、種々に方便して他物を劫奪し、或は他の咽を扠み、其をして悶絶せしめて、其の物を取り、或は惡しき藥を與へ、覺知無からしめて、其の物を取る。或は方便を設けて他物を盜偷み、或は復、私竊に他物を盜み取り、或は道路に在り、或は市中に在り、諸の方便を作して他物を取る。買に眞にして、賣に僞り、種々に欺誑きて他物を取る。或は復、人有りて姧欺り無道にして、善を〔四〕抑して、惡を擧げ、非を進めて是を退く。賢良を誣枉げ、黨して不肖を助け、或は邪見有り、或は〔五〕斷見有り。或は復、人有りて衆生を〔六〕屠殺して、解脫を得んことを望み、若しは、外道の齊の大會中に於て、羊等を屠殺して、福德有らんことを望む。或は復、人有りて、衆生を〔七〕犍割して男ならざらしめ、或は復、人有りて男子を婬す。或は復、人有りて、父母・師長に供養すること能はず。是の如き等の人をして、國に住せしめず。何を以ての故に、若し共に國を同くせんには、諸の善人の心意をして壞はれしむるが故にして、相ひ倣ね習ふが故に、同き處に住むが故に、善人壞らるゝが故なり。王をして無力ならしめ、增上力を失はしめ、非時に雨降り、時に則ち雨らず、五穀の熟する時に、五穀熟せず。所有る國土の一切破壞するは、惡人の過の故なり。此の因緣を以て、惡人をして國內に住在せしめず。此の因緣の故に、一切の非法を行ふ者を攝めず、國に住ませしめず。法に依りて行ふ者は攝めて國に在らしむ。法の人を攝むるが故に、時に隨ひて雨降り、日の觸は時に順ふ。是の故に、五穀の至る時には善く熟し、國土を壞はさず、怖畏を離れ、憂愁を生ぜず、一切國土に利益の事あり、是れ法を攝めし人の因緣の力の故なり。

【四】抑の字は。宋・元・明・三本、及び宮內省圖書寮本に依れり。原本壓に作れり。

【五】斷見、有情の心身は死後には斷絕すと見るを斷見と云ふ。之れに反して身心共に常住不滅と見るを常見と云ふ。此の二を邊見と云ふ。

【六】屠の字。宋・元・明三本に依れり。原本苦に作れり。

【七】犍。虛勢すること。

能く一切の生死の苦惱をして斷たしむるは、福有る人をして已が國に在りて住せしめ、是の如き福德の人に近づくを以ての故に、法を行ふ人の故なり。第一の梵行にして、所謂安住、福德有る人・福德に近づく人・法に順ひて行ふ人なり。是の故に、一切の智慧有る王は法を行ふ人に近づきて、國内に住せしむ。王、若し是の如くに一切の非法を行ふ者を攝めざらんには、功德の因緣にて、現在世に於て、常に安樂を得ん。常に利益ありて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられて、身壞はれ、命終らんには、善道天世界中に生まれて、夜摩王と爲らん。彼の非法を行ふ者を攝らざりし善業の因を以ての故なり。

又復、位を受けし刹利大王に、第九法有りて、應に勤めて捨離すべく、成就し、相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。何なるは第九なりや。所謂、不善の知識に近づかず。不善の知識とは是れ惡知識なり。彼の惡知識に略して八種有り、一切の王は皆應に捨離すべし。何等を八と爲すや。一は斷見にして、所謂、人有りて、是の如く心に言へらく『業無く、施無く、此の世有ること無く、他世有ること無し』と。此れは是れ初の惡知識なり。又復、第二の惡知識とは、所謂、人有りて、是の如く心に言へらく『一切の婦女と、時に依りて共に行ふとも、梵行を破らず』と。又復、第三の惡知識とは、所謂、人有りて、是の如く心に言へらく『若し、火を以て燒かんには、大なる福德を得ん。若し、衆生に與へんには則ち福德無けん』と。又復、第四の惡知識とは、所謂、人有りて、是の如くに心に言へらく『乃至、未だ死せずして、命有りて以來、名づけて人と爲すを得たり、若し、身死し已らんには、善・不善の業は一切皆失ふ。風・雲を吹くが如くんば、更らに、集る可きもの無けん。衆生も是の如くに罪福有ること無し』と。又復、第五の惡知識とは、所謂、人有りて、常に他人を敎へて父母を破壞せしめ、亦復、尊長を供養するを聽さず。又復、第六の惡知識とは、所謂、人有りて、殺生するを善と云ひ『若しは老人を殺し、若しは、盲人・惡病の人・長き病の人等を殺し

て、其の命を奪ふが故に、樂しき處に生るることを得ん』と。又復、第七の惡知識とは、所謂、人有りて、是の如く心に言へらく『山の崖の上より、自ら身を投げて下り、若しは火にて身を燒き、若しは自ら餓死し、或は五處の火を以て、其の身を炙き、是の如くにして、死を取らんには、無量の福有りて、後には天上の無量の眷屬・無量の天女に供養せらるるを得ん』と。又復、第八の惡知識とは、所謂、人有りて、是の如く心に言へらく『一切は天に由りて、業の果報に非らず』と。是の如き八種の惡知識の者の一切住みて、國內に在るを聽さず、眼、亦、看ず。唯、一切の實語を說く人を攝め、是の如き人從り、正法を聽聞し、聞き已りて、攝取し、受持し、修行す。王、若し是の如くに、一切の不善の知識に近づかざる功德の因緣あらば、現在世に於て、常に安樂を得、常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讚へられて、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。彼の不善なる知識に近づかざりし善業の因を以ての故なり。

又復、位を受けし刹利大王に第十法有りて、應に勤めて捨離すべく、成就し、相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。何なるは第十なりや。所謂、法有りて應當に捨離すべし。何なる法を捨つるや。所謂、婦女なり。智有る人は婦女に屬せず。一切世間の婦女に屬する者は、世間中に於て、最も凡鄙と爲す。若し餘の凡人にて、婦女に屬する者は猶尙凡鄙なり。豈、況んや、國王の人中の第一なるに於てをや。一切の婦女は能く人を破壞し、一切の國土、一切の人民、一切の王者も皆婦女に由りて破壞を致す。貪る心を以ての故に、能く王等をして皆利益を失はしめて、能く其の物を奪ひ、非法を行はしめ、布施するを聽さず、貪心を以ての故なり。能く王等の一切をして、懈怠ならしめ、樂欲するを以ての故に、常に近づきて離れず、能く丈夫をして自ら利益を失はしむ。婦女は雹の能く善き苗を害するが如くにして、一切の婦女は破壞の語を樂み、慢妬の藏に婦女の人に屬し、行を婦女に同くし、婦女の人に屬せんには、國土も亦失はん。是の故に、應に婦女に繫屬すべから

す。若し婦女に屬せんには則ち凡鄙と爲らん。婦女の法は是れ鄙惡なるを以ての故に、婦女の人に屬せんには、亦鄙惡と爲らん。婦女に屬する者は一切の法を失ひ、婦女に屬する者は、常に苦しき處に入らん。若し婦女に屬せんには、善人に捨離せられん。欲の過を以ての故なり。是の如きの人は、婦女に誑らかされん。一切の婦女は皆悉く欺[八]凌・軟弱なる人の體性なるが爾故なり。恩養を知らずして、能く衰惱を與へ、多く貪りて妬嫉なり。婦女は是の如くにして、皆信ずべからず。若し婦女に屬せんには、彼人は則ち城邑・聚落の一切の人中に於て、最も凡鄙と爲らん。何に況んや、王者に（於ては）其の損更に深し。是の故に、應に婦女に繫屬すべからず。王、若し、是の如くに、婦女の過を畏れば、功德の因緣にて、現在世に常に安樂を得、常に利益有りて能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讚へられて、身壞はれ、命終らんには、善道天世界中に生れて夜摩王と爲らん。婦女を離れし善業の因を以ての故なり。又、刹利王に、復、一法有り。是れ第十一にして、應に勤めて修習すべく、成就し、相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。第十一とは、言語を聞くとも一切を信ぜざるを謂ふ。一切世間の人、心同からずして、迭に相ひ破壞す。性は破壞するを喜び、作る時に能く壞はし、成る時に能く壞はし、本性の自體は垢なるが故に破壞す。常に諍鬪するを樂しむが故に、相ひ破壞し、近づき親しむを以ての故に、共に相ひ破壞し、自らの體を破壞す。國土の過を以て、是の故に破壞し、自ら輕んずる因緣の故に、相ひ破壞す。彼此、迭互に闇き地にて相ひ說き、各、自ら[九]朋を爲すが故に、相ひ破壞し、自ら勝れて、他をして如かざらしめんと欲するが故に、相破壞す。是の如き等の語を、王は皆信ぜず。道理に違ふが故に、前後相違す。惡心より次第に來るを以ての故に、自らの朋を愛して是の如くに說くを以ての故に、先に敎を被りて來り、先に囑され來り、先に恩有りて來り、先に怨有りて來り、迭に相ひ破壞し來りて、王に向ひて說く。此の是の如き等の前に說きし因緣にて、迭に相ひ瞋るが故に、是の如き說を作するも、王は普く信ぜ

【八】凌の字は宋・元・明三本及宮内省圖書寮本に依る。原本陵に作る。

【九】朋の字は宋・元・明三本に依り、原本明に作れり。

ず。是れを以て國土は則ち破壞せず。是の如き王は心性は本より好く、違はず、亂れずして、道理に依り、心、横に瞋らず。破壞の語に於て、心に信を生ぜず。彼の王は自ら是の如き功德有りて、他を信ぜず。自ら心に樂む所は瞋恚の少きことなり。一切衆生は王を愛樂す。心に善く思量し、法行に隨順し、心意は正直にして、多くの州土を攝む。王若し是の如くに一切を信ぜずんば、功德の因緣にて、現在世に於て常に安樂を得、常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられて、身壞はれ、命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。普く信ぜざる善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に、復、一法有り、是れ第十二にして、應に勤めて修習すべし。成就し、相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。第十二とは、謂く、善き名を愛し、財物を貪らざるなり。王の心、財物を貪らざるを以て、急に手を擧らず、眉面を動かさず、眼目を怒らさず、惡語を說かず。其の心終に因緣無くして瞋らず。又、心、亦、因緣無くして喜ばず、心意堅固なり。王、若し是の如くに、善き名稱を得んには、亦、財物をも得ん。是の如くに得已りて、財物の中に於て、大に歡喜す。名稱を得るが故に、勝れし歡喜の心にて、王法を妨げず、一切人の愛、怨の便を得ず。財物多きが故なり。又復、更らに、十種の因緣有りて、美しき名稱を得。何等を十と爲すや。一の美語、二は能く捨つ。三は審かに諦かにす。四は他國の遠き人來りて看る。五は之に近づけば則ち安樂を得ん。六は時を以て左右に給施す。七は尊を敬して、須る所を奉施し、善人に供給し、孤獨を拯濟ふ。八は淨き行。九は好き心にて、他を惱亂さず。十は正見にて邪見を生ぜず。此の十法を得て、是の如き法を行ひ、復、他人に教へて是の如き法を行はしむ。是の如く行ひて、此の法を得しを以ての故に、善き名稱を得。王、若し、是の如くに、善き名稱を愛し、財物を貪らずんば、功德の因緣にて、現在世に於て、常に安樂を得、常に利益有り、法行に隨順ひ、他勝ることを能はず。異人之れに近づ

かんには則ち安樂を得ん。彼人、久しき時に、人中の王と作りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞はれ、命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。善き名を愛して、財物を貪らざりし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に、復、一法有り、是れ第十三にして、應に勤めて捨離すべし、成就し、相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。第十三とは、謂く、邪見を捨つるなり。邪見とは、一切衆生の安隱ならざる本に名く。此れ顚倒の見にして、一切の因緣に皆、信を生ぜず。彼の不信の處、一切の憎惡、一切の毀訾を王は則ち應に捨つべし。若し、王捨てずんば、則ち邪見を行はん。一切人に憎まれ、一切信ぜず、一切の諸の人、皆順ひ行はず。順ひ行はざるが故に、一切の人に捨られて、衰惱の時を得ん。法に依りて行ふ天の一切に捨離せられ、天に捨て去られ已らんには、能く爲す所無けん。是の故に王は應に邪見を捨つべし。王、若し、是の如く正見にて邪ならずんば、功德の因緣にて、現在世に於て常に安樂を得、常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、一切の時に、正しき利益を作し、一切人の爲に供養せられ、一切人に愛され、法に依りて行ふ天は捨離せず。一切の國人は王の意の如くに行ひ、一切の分別・一切の心念を皆悉く具得へり。彼の王の心意の本性は亂れず、久しき時に、王の領する國土は、安隱にして患無く、身壞はれ、命終らんには善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。邪見を捨てし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に、復、一法有り、是れ第十四にして、成就し、相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。第十四とは、謂はく、世間の法・出世間の法にして、王の根本の法なり。所謂、惠み施す。王、若しは大臣、能く惠施を行はんには、一切の國人、敬愛して捨てず、心に敬重を生じて、其の國を捨てて餘の國土に向はず。若しは餘の國人、王能く施すを以て、自ら妻子・幷に其の軍衆

と共に一切皆來りて、王に歸屬せん。多くの人來るが故に、王の國人をして增長して、更らに多からしめ、自餘の諸國は破壞すること能はず。人多きを以ての故に、能く破壞さること無し。是の如き施とは、世間の布施にして、世間の中に於て、第一安隱なり。又復、更に、出世間の施の第一の好き施有り。若し人、布施せんには、天の爲に攝められて、大力能有り、大威德有り。沙門若しは婆羅門・貧窮人に布施せんには、未來を莊嚴り、現在は好き色なり。何を以ての故に。心清淨なるが故に。食則ち清淨なり。食清淨なるが故に、面色清淨なり。面色淨きが故に、端正にして喜ぶ可し。此れ等は皆是れ布施の力なり。又復、法有りて、現に果報有り。何なるは現法なりや。所謂、布施なり。心に〔一〇〕憍慢無く、貪を離れ、嫉を離れて、因緣を信ず。因を信じ、報を信じ、未來世を信じ、尊長を供養す。其の心は柔輭にして、正しき意にて思惟し、種々の物を捨てて大富の因を攝め、攝めて慳・嫉を離れ、福田・福田の功德・福田の種子を信ず。王、若し是の如くに善き語にて心に熏じ、第一に淨き心ならんには、功德の因緣にて、現在世に於て常に安樂を得、常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、久しき時に王と爲り、王の領する國土は久しき時に樂を受け、國土亂れずして、恒常に安隱なり。怖れず、憂へず、身壞はれて命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。能く惠み施せし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に、復、一法有り、是れ第十五にして、應に勤めて修習すべく、成就し、相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。第十五とは謂く、勤めて愛語するなり。愛語する王は一切に皆愛され、一切皆近づく。若し財物を與へんも、能く是の如くに衆生を攝取すること、此の愛語の如くならず。更に能く歡喜し清淨ならしむること愛語の如きもの無し。一切衆生に是の如き因緣の故に、愛語を說く。先に愛心生じ、然る後に語を發す。此の因緣の故に、口に愛語を說く。是の如き王は、能く他の城・他の國土等を取り、自國の自らの城は他得ること能はず、一切人に愛さる。王、

〔一〇〕憍慢。煩惱の名、自ら高ぶりて物を凌ぐ心なり。

若し實語し、[一]親しくして愛語有らんには、設へ、怨家有るとも亦親友と爲らん。何に況んや中人・本來親しき者にをや。王、若し是の如くに愛語を言說らんには、功德の因緣にて、現在世に於て常に安樂を得、常に利益有りて、怨も親友と成りて中人と作らず、一切人に愛され、一切供養し、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、一切人の中にて久しき時に王と爲り、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。彼の愛語せし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に復、一法有り、是れ第十六にして、應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。第十六とは謂く、實語を修むるなり。實語とは、一切生死の解脫の因に名づく。物を買ふことを須ゐず、窮盡す可からず、乃ち是れ大なる藏にして、能く劫め奪ふこと無く、心の海の中に生じ、第一に見回し。一切の善人に讃歎せられ、一切の世間に次第に流出す。此の法は是れ涅槃の城門にして、一切の時に用ひて盡くす可からず。功德を增長し、能く諸の過を滅し、一切人に信ぜられ、能く貧窮を除く。若し能く實語せんには、復、醜陋しと雖も、餘の一切の端正なる人の所に於て則ち最勝と爲らん。實の光明を以て自ら莊嚴り、一切の下姓も、若し能く實語せんには則ち一切の大姓の人より勝れん。是の如くに實語は種姓を莊嚴り、一切人に信ぜられ、一切人に近づき、一切人、兄弟を見るが如くに見、何處にも隨ひて行き、彼れ彼處に於て、人の爲に供養さるることは父の如く母の如く、王の如きと異ならず。曠野の險惡の處を行くと雖も、猶故、樂みを受く。何なる國に行くに隨ひても、王の爲に供養さるることは、主を供養するが如し。自餘の國若しは村、若しは城、多くの人の住む處にて、一切の諸人、及び大長者は皆悉く供養す。自餘の國土の行かざる處にも、名流れて遍滿し。彼處の諸人、是の如き言を作さく『彼處の、若しは王・若しは王・大臣、實語し善く行ふ』と。高き幢旛の如くに、名、[二]六天に聞ゆ。彼の善男子を天常に供養し、後に隨ひて行く。惡夢を見ず、第一の勝れし天の供養することは天の如し。若し、更に、貧窮

[一] 親の字は 元・明兩本に依る。原本、雜に作れり。

[二] 六天。六欲天のこと。欲界の六重の天なり。四王天、忉利天・夜摩天・兜率天・樂變化天・他化自在天なり。

なりとも、實語を以ての故に、後に還りて大富にして、一切の憶念を皆具足して得。念々に漸く老ゆるとも、諸根は衰へず、好き神通を得て、大力の身體なり。長命の業を作し、成就し相應せんとは、一切の諍對は其を以て量と爲し、其を以て證と爲す。若し、王法を犯して收縛られし者、物を以て之れに寄するとも、唯、之の一人を最も信ず可きと爲す。是の如き富者は、物を以て之れに寄するとも、實語を以ての故に、心意動かず。怨・親の人も動かしむること能はず。唯、實相を以て自ら娛樂して、歡喜の心を生じ、實語の食を以て自ら充飽く。實語の愛を數々思惟し、或は瞋、或は喜も、其の心を動かさず。此の王は則ち是れ第一の大仙にして、常に、世間及び出世間の二種の利益を作して、作す所を越えず。實に畫きし文は常に實の水を以て澡浴ぎて清淨なり。常に鮮白なる縷の無き寶衣を著け、實の名の香は十方遍く熏ぐ。一切世間の未だ相見ざる者も皆知友と成る。何に況んや見る者に於てをや。善き名の流布せることは須彌峰より過ぎたり。是れ年少しと雖も、老人にして之れを見て供養することは父の如し。實、老ひたるを以ての故なり。亦復、能く長命の業を作し、乃至、無上菩提の大智の業を造作す。何に況んや、能く夜摩天王の世間の業を造るに於てをや。王、若し是の如くに如實の語を修めんには、功德の因緣にて、現在世に於て常に安樂を得、常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讚へられ、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。實語を修めし善業の因を以ての故なり。

又、剎利王に、復、一法有り、是れ第十七にして、應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。第十七とは、謂はく、臣衆を若し因緣無くんば、擧げず、下げず。是の王は意を重んずるなり。彼の王は他の戒の形相を知らず、及、意を知らずして、則ち信を生ぜず、王の法を爲すや、意を細にして思惟し、然る後に乃ち作す。王にして、臣衆を、若し先に深く細に思惟せずして、或は下げ、或は擧げんには、彼れは則ち王に非らず。若し王と爲らんには、則ち久し

からずして滅せん。唯、單に王の名のみ有る可きのみにして、思惟せずして作し、心意少しく動き、意輕くして住せず。若し舊き法を說かんには、衆則ち信ぜず。王にして妄語を言ふ。是の故に、王に愛心を生ぜず、或は餘人を以て其の王位に換ふ。是の故に、王は此の過を知り已りて妄語を作さず。是の如き妄語は現在・未來に利益すること能はず。是の故に、現在に無量種に過る。此の過を知り已らんには、妄語を說かざらん。餘人、若し爾るとも亦相應せず。況んや復、王をや。是の如く、是の如くに、王、法を失ひ、是の如く、是の如くにして亦世間を失ふ。若し王に福有らんには、世間人に勝れ、一切皆勝る。王、常に實語すれば則ち世間を護り、彼れ樂を護るが故に、王法を妨げず、一切の善法は實を根本と爲す。若し不實を說かんには則ち、臣衆を因緣有ること無くして、或は擧げ、或は下ぐ。若し實語せんには、則ち仕人を若し因緣無くんば擧げず、下げず。王、若し是の如くんば則ち王位を動かず、失はず。一切の臣衆は王の是の如きを知れば則ち捨離して他の國土に向はず、深く敬重を生じて、父の如く、母の如し。一切の時に樂しみて、歡喜の心を生ず。彼の王は則ち堅き意・住せる意有り、動かざる意有り、一廂の意有りて、臣衆に樂を與ふ。王、若し是の如くに因緣無くして或は擧げ、或は下げずんば、功德の因緣にて、現在世に於て、常に安樂を得、常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讚へられ、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。因緣無くして擧げず、下げざりし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に、復、一法有り、是れ第十八にして應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。第十八とは、謂く、能く人の善惡を識知するなり。此れ大智慧にて數數修むるが故なり。若し能く知らん者は、則ち第一の最勝の大王と爲らん。王にして、彼人は是れ智なりや、智に非らざるやを知り、若し是の如く知らんには則ち是れ世間の一切の地の器にして、

任ぜられて王と爲らんには、一切の他王も破壞すること能はざらん。若しは勤めて作す所は所應き處の如く、安置せしむ。彼れ是の如き業を皆成就することを得て、財物を失はず、作す所の法を次第に増長す。王、人中にて若し非法を行ふを見れば、王は則ち攝めず。貪り食ふ人・恩を知らざる人を王は則ち攝めず。多くの人・怨人・邪見の人・憐愍の無き人・妄語する人・他王の怨人・惡律儀の人・時を知らざる人・調伏し難き人・常に惡業の人・境界に著する人・因を曲げて說く人・其の體の本性は足ることを知らざる人・恒常に利益なる行を作さざる人・常に他の所に於て先に惡を作す人・慢心の人・常に怨を樂しむ人・踴躍る人・語動く人・意動く人・是の如き等の人を王は則ち攝めず。何等の人を攝むるや。所謂、法に隨ひて修行する人・諂曲ざる人・我慢ならざる人・實語の人・聰明なる智の人・柔輭なる心の人・他を惱まさざる人・他を謗らざる人・三寶の所に於て能く供養する人・信を得し人・足ることを知りし人・調伏せる人・懈怠ざる人・常に作業する人・少食の人・一切を愛する人・慈心有る人・悲心有る人・精進の人・正見の人・智慧ある人・法律に依る人・生來清淨なる身・口・意の人・因緣を信ずる人・業報を知る人・飮酒せざる人・多く睡らさる人・善友に近づく人・惠み施すことを樂む人・戒有る人・智有る人・是の如き等の人を王は則ち應に攝むべし。是の如き等の人を王は其の中に於て輕きを知り、重くして堪へて何なる業を爲すやを知りて則ち營作せしむ。彼の王は是の如くにして更に、餘王の能く破壞を爲すこと無く、無量の財寶・富樂を具足し、法行に隨順す。法行に隨ふが故に、則ち能く布施す。能く福德を爲して三寶を供養す。王、若し是の如くに、人の好惡を知らんには、功德の因緣にて、現在世に於て、常に安樂を得ん。常に利益有りて能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讚へられ、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて夜摩王と爲らん。人を識別せる善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に復、一法有り、是れ第十九にして應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現

在・未來の二世を利益せん。第十九とは謂はく、定めて一時に數衆人に見ゆるなり。若し刹利王、常に定めて一時に、數衆人を見んには、是の如き王は久しき時に王と爲り、一切の國人、皆嫌恨せず、能く一切人の善惡を知り、能く國人の一切をして、法を行はしめ、强は弱を凌がず、一切の國人は時に隨ひて王に見え、財物を具足し、此の方便を以て增長して熾盛なり。財法富むが故に、他王に屬せず、安隱なるを以ての故に、法行に隨順し、沙門・婆羅門等を供養し、其れより法を聞き、既に法を聞き已りて、法を行ひて轉た勝れ、定めし時に數人を見るが故に、法を修めて行ひ、轉た勝れて增上す。是の如く、是の如くに法に隨ひて行ふが故に、是の如く是の如くに富樂を增長す。大富樂なるが故に、能く大いに布施し、廣く福業を作し、精勤みて持戒す。王にして若し見ること難ければ、彼王則ち是の如き功德なし。是の故に、王者は應に定めし一時に、常に數人を見るべし。王者にして若し能く常に定めし一時に數人を見れば、則ち能く法を行ひ、是の法を行ふ人には大福德有り。王、若し是の如くに、常に定めし一時に數衆人を見んには、功德の因緣にて、現在世に於て、常に安樂を得ん、常に利益有りて能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讚へられ、身壞はれて命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。定めし一時に數衆人を見し善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に復、一法有り、是れ第二十にして、應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。第二十とは、謂はく、少き睡眠なり。少き睡眠の故に、心に善く思惟し、意錯謬はず、愚ならず、鈍ならず、怨は便を得ず、恒常に一意にて作す所を決定す。決定して作すが故に、善く思惟して作す。王、若し是の如くに善く思惟して作さんには、何等の法に隨ふも、皆速に成就して、久しき時を經ず。彼王は晨朝に則ち放逸ならず。放逸ならざるが故に、壽命則ち長し。善く思惟するが故に、一切の國人心に則ち慕ひ樂しみて、厭惡を生ぜず。國內の人民、一切

の軍衆、一切の僮僕、左右の百官、諸の大臣等皆悉く熾盛にして、財物は豐饒なり。多くの臣民なるが故に、則ち財物多し。財物多きが故に、大威德有り。威德有るが故に、則ち能く布施し、福業を修行し、能善く持戒す。王、若し是の如く睡眠少からんには、功德力の故に、現在世に於ては常に安樂を得、常に利益有り、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞れ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。少しく睡眠りし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に、復、一法有り、是れ二十一にして、應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。二十一とは、謂はく、一切の時に、常に懈怠ならず。懈怠ならざる王は堅固にて精進し、法の如く修業し、何なる所作に隨ふも、一切皆能く究竟し成就す。心に隨ひて制御し、皆悉く己れに屬し、他も壞はすこと能はず、他も奪ふこと能はず。一切の國人は王を愛し、心意に皆敬重を生ず。其の王の國土の一切皆善く、一切を具足す。若しは城・若しは村は多くの人の住する處にして、國內に遍滿し、間は空しく曠からず。懈怠ならざる王は堅固にして、精進し、大勢力有り、是の如く、是の如くに、何なる所作に隨ふも、彼彼の所作の一切を成就す。何を以ての故に、懈怠ならざるが故に、法・時・處等の方便を具足するなり。懈怠ならざる王は、世間の業・出世間の業を皆能く成就し、乃至能く涅槃の業を成ず。何に況んや、餘業をや。若し勤めて精進し、懈怠ならずして、時・處の方便にて所作を具足せんには、彼王は則ち一切の餘人に勝れて、種々に具足せん。彼王は是の如くに世間の所作を皆悉く成就し、是の如くに共に智にして、復、能く出世間の業を作して、皆悉く成就す。出世間とは、謂はく、施・戒・智なり。王、若し是の如く常に懈怠ならずんば、功德の因緣にて、現在世に於て、常に安樂を得、常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、施・戒・智等は猶し香氣の如く、身壞れ命終らんには、善道天世界の中に生れて、夜摩王と爲らん。懈怠ならざりし善業の因を以ての故なり。

卷の第五十五

觀天品之三十四

夜摩天の二十

又、刹利王に、復、一法有り、是れ第二十二にして、應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。二十二とは、善友に堅固なり。友に堅固なる王は能く思惟して作す。久しき時に王と爲り、諸の過を遠離して、他も壞はすこと能はず。樹の多くの根の如く、長くして深く入り、堅牢にして善く住し、傾き轉ず可からずして、風も壞はすこと能はず。彼の牢き樹を風も壞はすこと能はざるが如く、王も亦是の如く、知友に堅固にして、好き心・善き意なり。一切人に愛され、共に敬重さる。世間法の中にて堅固にして壞はれざる功德あり。善友に、十三種の功德ありて具足す。何等を十三とするや。一は善く知るなり。王に若し惡有らんには、能く清淨ならしむ。二は堪能にして、最も作し難きを能く王の爲に作す。三は智有るなり。若し彼の善友に復、善友有らんには、則ち友と爲らしむ。四は心を盡くす。所有る財物を善友は皆知る。五は意を盡くす。善友に利益なること有るを知らんには、心を勤めて之れを作す。六は心舒かなり。忽爾に相見るとも威儀を撿めず。七は究竟す。若しは衰惱を得、乃至、命失はんとも、則ち捨離せず。八は意に稱ふ。心の須る所に隨ひ、心の如に爲作す。九は匿さず。家に有する所に隨ひ、一切を隱さずして、其の須る所に隨ひ、索る者に吝ならず。十は心を共にす。若し、善友多く有りて具足せるを見れば則ち、歡喜を生ず。第十一は、若し、苦惱を得んには、則ち共に同く苦み、設使、大に瞋るとも、心亦變ぜず、何なる食有るに隨ひても、一切同く食し、同く共に遊戲す。第十二は、有する所の物を劣ならざる根にて求めず、若し、自ら有する物ならんには、苦しまずして求め與ふ。

第十三は、若し家中の消息の好惡・乃至諍鬪を知らんには、是の如き等の事を一切盡く說きて忌まず、難せず、自家中の事・乃至・諍鬪をも亦皆盡く說く。是の如きは十三の功德にして、善友は是の如き功德を具足す。善友は則ち是れ世間にして、是の如き世間の功德を具足す。十三の善友にて、王、一を成就せんには則ち大力有り、況んや復、多く有るに於てをや。是の故に、智なる王は應當に勤めて是の如き善友を攝むべく、王、若し勤めて是の如き善友を攝めんには、一切の所作・愛す可き事を皆悉く成就せん。又、善友に因りて、復、能く出世間の道を成就す。略して之れを言んには、十の功德有りて善友に具足せり。何等を十と爲すや。一には能く非法の行を遮ふ。二には能く敎へて布施を修行せしむ。三には能く敎へて戒を受け戒を持せしむ。四には、智を示して能く智を修めしむ。五には、好き心にて惡友に近づくを遮ふ。六には正しく信じて業の果報を示す。七には、若し惡道に迷ひしを見る時には、敎へて善道に住せしむ。八には、若し戒を毀犯するを見る時には、能く除き滅せしむ。九には、敎へて父母に供養せしむ。十には恒常に數々敎誡す。是の如き十種は出世の善友にして、一切の惡道を皆能く擁護ることは猶し父母の如し。善友に堅固なるは常に、善友・若しは善友の朋に慢心を生ぜず。是の如き善友は現在世に非らずして、是れ未來世なり。是の故に、王者は應に善友に堅かるべし。王、若し是の如く善友に堅固ならんには則ち善業を修めし功德の因緣にて、現在世に於て常に安樂を得、常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。善友に堅き善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に復、一法有り、是れ二十三にして、應に勤めて捨離すべくして、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。二十三とは所謂、無益の友に近づかざるなり。無益と言ふは、所謂、一切の誑惑せる人にして、一切の博戯する人・惡行に導く人に近づかず。若し、惡しく思惟し、

思惟し已りて作す、是の如き人に近づかんには、大いに饒益せず、失ふ所甚大なり。失ふこと中大とは、所謂、誑惑にして、誑惑に二有り。一は私密にして、二は公彰なり。彼の公彰とは、謂はく、博戲等にて種々に誑惑するなり。彼の私密とは、詐りて形服を設け、猶し惡人の如くにして、識別せざる者は、心に之れを好しと謂ふ。是の如き人は外道の攝むる所・幷に實の外道・外道の[一]棘刺にして、自らの親を誑惑し、亦、他人を誑し、後世を畏れず。善き形相現はるゝとも、實は是れ大賊なり。是の如き等の人は尙、應に見るべからず、應に共に語るべからず。何に況んや、親近して以て知識と爲すに於てをや。善人は應に捨つべし。彼れは、尙自身を利益すること能はず、況んや、他を利すること能はんや。王者は應當に、是の如き等の不善の知識・無益の友を捨てゝ、一切の誑惑の人に近づかず、一切の博戲の人に近づかざるべし。是の如き等の人と與に相識らず、正念にて所作し、正しき思惟にて作す。王、若し、善知識に親近みて行はんには、善知識に熏ぜられし、功德の因緣にて、現在世に於ては常に安樂を得ん。常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞はれて命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。無益なる友に親近せざりし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に、復、一法有り。是れ二十四にして、應に勤めて修習すべく、成就し、相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。二十四とは、所謂、瞋も喜も動かすこと能はざる所なり。若し、刹利王、能く瞋・喜を持せんには、彼の王の國土は牢固にして壞はれず、一切の國人は皆悉く務を樂しみ、厭惡を生ぜず、能く破壞すること無く、能く便を得ること無し。王、若し、瞋らずして思惟を作し、不思惟に非らず、因緣無くして人の職位を退くるに非らず、因緣無くして其の官爵を進め、財利等を與ふるに非らず。瞋らざるを以ての故に、密語を彰はさず。因緣無くして他を擧げ下げするに非らず。歡喜の處に於ても、心高擧らず。是の如き王者には、身に實意有りて、諸

【一】棘刺。

の惡を作さず、惡人を擯めず、平等に意を重んず。彼王は是の如くに世間法の中にて、瞋にも喜にも動かされずして、安隱を得。云何にして復、出世間道に於て、瞋にも喜にも、動かされずして安隱を得るや。王、若し瞋らずんば、則ち能く生死の一垢を持すと爲す。王、若し喜ばずんば、能く力の垢を持す。彼王は是の如くに能く力の垢を持し、生死の垢を持す。若し、人、能く是の如き二垢を持せんには、彼人は則ち能く癡力の垢を持せん。王、若し、是の如くに能く三垢を持せんには、智・忍・堅き意にして、決定の意有る功德の因緣にて、現在世に於ては常に安樂を得ん。常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。瞋にも喜にも動かされざりし善業の因の故なり。

又、刹利王に、復、一法有り、是れ二十五にして、應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。二十五とは、所謂、飲食の二法に著せず、多く貪著せざるなり。何を以ての故に、多く[二]飲食を貪るは、王に於て則ち妨ぐ。常に飲食の腹內に在ることを念ずるが故に、彼の諸の國人・左右の軍衆、心に厭賤を生じて、是の如き念有り。『彼王の心意は同く畜生の如くにして、唯、飲食を除きて、更らに、餘心無く、餘業の心無し』と。恒常に、是の如くに貪りて飲食を樂み、心に常に飲食の味を愛樂むが故に、則ち、法と非法とを思惟せず、國土の事を籌量ひ思惟し計校ること能はず、人を思惟せず、一切の左右・內外の軍衆を調伏すること能はず。大臣等の一切の國人に、次第に彼れに相應きが如くに、其の官爵を與ふること能はず。作す所の事に於て輕重を知らずして、彼の王の財物に、唯、損減のみ有り。財物減ずるが故に、則ち財物少く、財物少きが故に、飲食すれば則ち盡き。飲食無きが故に、一切に輕毀さる。飲食を貪るが故に、貧窮を致し、多くの飲食を貪り、自ら節し[三]量らずして、是の如くに、世間を饒益することを妨礙ぐ。云何にして、復、出世間の妨を爲すや。謂はく、心に貪り著して、多く飲食を樂しみ、常に諸の味

【二】飲食。飲料食物なり。欲界の有情は必らず飲食に依りて肉身を養ふ。

【三】量の字は宋、元、明三本及宮內省圖書寮本に作れり、原本、王に依れり。

を愛し、正しく思惟せず、身を念ふこと能はず、受を念ずること能はず、心を念ずること能はず、法を念ずること能はず、苦・集・滅・道を思念すること能はず、自餘の一切を皆思念せず。是の如くに、飲食の境界に貪著し、同く畜生の如くにて、差別有ること無し。是の故に、應當に、道理に依順し、相應く飲食し、相應きが如く行ひ、相應き語を說くべし。諸根を清淨くし、應しき如くに轉動し、正道を思惟し、身受、心法、苦・集・滅・道是の如き法の中にて、心、善く調伏し、能く思ひ、能く念ず。心正しく念ずるが故に、根轉じて清淨にして、相應しく飲食す。身は則ち調停ふ、身調停ふが故に、心亦調順なり。心、調順なるが故に、能く善法を念ず。是の故に、應に諸の味に愛著すべからず。若し飲食を以て、內、身中に調適し相應せんには則ち安隱を爲さん。恒常に法に依りて之れを修習せんには、是の如き彼王は能く心を調伏し、心則ち正しく念ず。心に正しく念ずるが故に、能く善業を作す。王、若し是の如くに飲食を貪らずんば、功德の因緣にて、現在世に於ては常に安樂を得ん。常に利益有りて能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讚へられて、身壞はれ命終らんには、修めし所の善業は唯、香氣の如くにして、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。飲食の二味に貪著せざりし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に、復、一法有り、是れ二十六にして、應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。二十六とは謂はく、善く思惟するなり。善く思惟する王は則ち世間及び、出世間の安隱の事を一切皆得。何を以ての故に。心の功德の故に。善く思惟する者は、現在世・若しは未來世に於て、常に勝れし樂しみを得、何等の事に隨ふも、善く思惟して作し、則ち諸の過無く、意に是の如くに念ずらく『貪欲等の垢は常に惡道を行ふ。應に盡く滅せしむべし』と。不淨の法を以て、貪欲の垢を除き、慈悲の法を以て、瞋恚の垢を除き、觀智の法を以ては愚癡の垢を除く。是の如く、皆心に善く思惟するを以ての故に、能く除滅し、不善の意にては能く

除くに非らず。若し、惡く思惟せんには、世間の法を成就すること能はざらん。要を善く思惟せんには則ち能く成就せん。是の故に、當に知るべし。一切の諸法を善く思惟して作さんには、則ち成就することを得ん。王、若し、是の如く心に善く思惟せんには、功德の因緣にて、現在世に於て常に安樂を得、常に利益有り、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられん。身壞はれて命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。善く思惟せし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に復、一法有り、是れ二十七にして、應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。二十七とは、謂はく、時を待て安詳に作さざるなり。若し、世間を作し、出世間の利益の法を作さんに、久しき時に、乃ち作すは作すべからず。既に、作すべからずして之れを作す者は成就せず。譬へば、病有るが如く、時速に治せずして、久しからんには、乃ち治者も則ち治すべからず。治すべからざるが故に、則ち能く人を殺す。是の如くに、復、無量の作法有りて、時速に作さずして久しからんには、乃ち作者も作し難く、作し叵く、作すことを得べからず。是の如くに能く出世間道を障ふ。微少なる煩惱も亦、彼の病の如し。速に治せざるが故に、煩惱斷ぜず。斷ぜざるを以ての故に、則ち惡道に入る。是く久しくして乃ち之れを作さんには、大過患なり。是の如くにして出世間道を障礙す。微少なる煩惱は時に斷ぜざるが故に、漸時に增長して、猶し毒芽の如し。久しければ則ち增長して、一切の身を燒き、能く衆生をして若しは地獄・餓鬼・畜生に墮せしむ。是の故に、應に安詳に後を待ちて久しき時に乃ち作すべからず。是の如くに王者・若しは諸の餘人・若しは諸の比丘・若しは諸の俗人・若しは大富の人・若しは貧窮人の一切は、應に安詳に後を待ちて久しき時に乃ち作すべからず。若し、人、後を待ちて久しき時に乃ち作さんには、彼人、過を生じて速に衰惱を得ん。乃ち久しき時を經ては、除き滅すること能はず、破壞すること能はず、斷絕すること能はず。斷ぜざるを以ての故に、自ら衰惱を得ん。若し、人、觀ぜずして、

久しき時に乃ち作さんには、則ち速に失壞し、幷に根普く拔かれん。是の如き人は、彼の過無きが故に、畢竟して樂を得て、世間道・出世間道に住せん。是の如きの人は、若し過の始めて生ずるも則ち能く除き滅することは、毒芽の生ぜしを見れば卽ち除く者の如し。彼の毒芽とは煩惱の如きに喩ふ。久しければ則ち增長して、過の生ぜんことは則ち多からん。是の故に、若し、始めて生ぜし過を斷ずること有らんには、則ち眞知と爲し、安隱なることを得て、彼人は常に樂しまん。王、若し是の如くに、後時を待ちて安詳に作さざらんには、功德の因緣にて、現在世に於ては常に安樂を得、常に利益有りて能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられん。彼人、常に樂しみて、身壞はれ命終らんには、善道天世界の中に生れて、夜摩王と爲らん。時を待ちて安詳に作さざりし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に復、一法有り、是れ二十八にして、應に勤めて修行すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。二十八とは、所謂、法を以て國土を利益するなり。是れ非法に非らず。彼の法多く王は、能く自らを利益し、能く他を利益す。自らを利益するとは、若しは王にして、持戒せんには能く國土を護らん。不持戒には非らず。是れ自らの利益するなり。他を利益するとは、謂はく、人の法に隨はずして行ふもの有るを見んには、法の中に住せしむるなり。王者にして、是の如くんば、正に國土を護らん。國土を護るが故に、法・財・名の三を皆和合して得ん。既に、能く是の如くに他をして法に依らしむ。何に況んや、自身は法に隨はずして行はんや。是の如き王者は則ち財物を得ん。云何にして物を得るや。所謂、決定して國土中の一切の財物を六分して一を取るなり。是れを以て、國土は則ち大富と爲る。正しく護るを以ての故に。若し、國、大いに富まんには、王に急事有るとも、一切の人民は王を愛するを以ての故に、王に急有ることを知り、用ふべき財物を皆悉く多く與ふ。此れは是れ、王者の第二の功德にして、具足し成就せんには、是の如き

王者は國土を護り、左右の軍衆は王を敬愛し、一切の方處にて王の善き名を稱へん。王、若し、是の如き法・財・名等を和合して具足せんには、現在世に於ては常に安樂を得、常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられん。身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。自他を利せし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に復、一法有り、是れ二十九にして、應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。二十九とは、謂はく、常に〔四〕十善業道を修行するなり。彼の十善道とは第一の樂しき報にして、要を以て之れを言はんには、則ち三種有り、謂はく、身・口・意なり。身に則ち三有りて、殺・盜・邪行なり。口に則ち四有りて、妄語・兩舌・惡口・綺語なり。意地に三有りて、貪・瞋・邪見なり。是の如きは十種の不善業道にして、顚倒すれば則ち十善業道と名づけ、名づけて慧道と爲し、名づけて正道と爲す。不善業道には則ち慧有ること無く、善道に慧有るが故に、慧道と名づけ、人・天の生を攝め、次第に、乃至、涅槃に到る。彼王は是の如くに自身能く住し、復、他人・軍衆等をして住せしむ。是の如き王者は、諸の衆生に於ては猶し父母の如くにして、能く涅槃に到り、自らの願ふ所に隨ひて、何なる道をも皆得。彼王は是の如くに一切の念ずる所を皆悉く成就して、常に天の爲に護られ、刀劍・怨敵等の畏れ有ること無し。一切の國土は常に壞亂ず、一切の五穀は時に隨ひて善く熟し、天の時節の如くに、日月調和し、普く一切の國土を照らし、用ふべき所を一切具足し、人衆多饒し。彼王は是の如くに正しく國土を護り、後時には無常にして、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れん。何なる業報を受け、何等の樂を受くるや。略して、之れを言はんには、夜摩天中にて、殺さざりし業の故に、天の命則ち長くして、下・中・上有り。是の如き天の命は、偸盜せざりしが故に、天中にて大富にして、七寶を具足し、園林・山峰は種々に愛す可く、是の如き處に在りて、遊戲して樂を受く。邪婬せざりしが故に、諸の天女衆は、餘の天子に悉く皆

【四】十善業道(Daśa-kuśalāni)。欲界の樂果を感ずるに由りて善業と云ふ。卽ち、不殺生・不偸盜・不邪婬・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語・不貪欲・不瞋恚・不邪見を云ふ。

往かず、乃至、未だ退かざれば、命有りし以來往かず、近づかず、彼の諸の天女は一切端正にして、一切の好き色の光明は勝妙なり。眼に見んには、心樂しまん。若し、人、邪行して、彼の天中に生れんには、所有天女は餘天と共に行き、是の如くに、異異たる業報を成就す。此の是の如き等の身の善業を行ひ、善く護りて犯さず、樂みて修め、多く作さんには、天中に生れて、天の樂しき報を受けん。次に、復、第二の口の四の善業を樂しみて修め、多く作さんには、天中に生れん。口の何なる業にて天處に生れ、何なる樂報を受くるや。謂はく、四種の口の正行の戒を修むるなり。[五]妄語せざるが故に、滿語・美語・種々の實語にして、常に一切時の第一の妙語は口に說く所に隨ふ。彼の語は則ち樂にして、語に隨ひて皆得るなり。妄語せざるが故に、兩舌せざるが故に、有する所の軍衆は常に破壞せず。一切の時に隨順して供養す。惡口せざるが故に、常に美妙なる歌舞・遊戲・喜笑等の聲、第一に耳を悅ましむる美妙なる聲を聞く。綺語せざるが故に、常に義語を出す。一切の諸天は其の語を愛樂みて、皆其の語を信ず。彼れ天中に於て、是の如くに口業の果報を成就す。何なるは意業なりや。是の如き天處にて何なる樂果を受くるや。貪らざるを以ての故に、一切の憶念・一切の須ふる所は念ずるに隨ひて皆得。得已りて失はず、自餘の諸天も侵し奪ふこと能はず、唯、自ら此の果報を受用する者は、貪らざりし業の故に、瞋らざるを以ての故に、一切の天に愛され、第一端正にして、喜ぶべき妙色なり。邪見ならざるが故に、求むる所を皆得、求むる所の如くに得て、變らず、異ならず、念ぜし所の如くに得て、未だ曾つて得ざることなく、常に具足して得。是の如くに、略して、十善業道の得る所の果報を說けり。若し、布施せん者は則ち勝れし報を得ん。布施するを以ての故に、富樂は轉た勝れ、智勝れるを以ての故に、一切の天より勝れり。一切の樂受の、願は、是れ根本なり。若し、癡にして、樂む者は則ち是れ樂に非らず。心、自在なるが故に、福田の力の故に、時、自在なるが故に、物自在なるが故に、信解力の故に、自在なるを以ての故なり。

【五】妄語。十惡の一にして、他を欺く意を以て不實の言を作すものを云ふ。

一善業有りて、亦、天中に生る、乃ち衆生有らんには、涅槃に入らん。何に況んや、天に生るゝに於てをや。是の如き業報は第一の微細にて、何なる人も、知らざらんには則ち業報に迷はん。業報に迷ふが故に、地獄に入らん。此の所說の如きは十善の業道なり。若し、王、修行せんには、或は國土人、或は王の軍衆、王の因緣を以て、皆十善を行ふ。王、若し、是の如くに十善業を修めんには、功德の因緣にて、現在世に於て常に安樂を得ん。常に、利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讚へられ、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。十善を行ひし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に復、一法有り、是れ第三十にして、應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。第三十とは、謂はく、因緣を信ずるなり。因緣を信ぜんには、王、若しは大臣等業報に迷はざらん。意、常に正しく念じ、境界の中に於て、放逸なる行をせず。彼の因を名づけて、果の種子の因と爲す。時・處を緣じて具足し、和合せり。彼れを因を信ずると名づく。若し、因を信ずる者は、亦、果を信ず。彼れ是の如く諦かに因果を見るを以て、惡業を作さざることは、猶し種子の芽を與ふる因爲るが如し。是の如く諦に見て因緣を信ずるが故に、業報に迷はず。彼の是の如き業に、善・不善有り、生死相續して種々の苦樂を斷たず、絕せず、能く衆生をして處々に生を受けて、有の中に流轉せしむ。是の如く有の中にて相續して輪轉り、地獄・餓鬼・畜生・天・人の中に在り。三種の行有り、一は福業の行、二は罪業の行、三は不動の行なり。四禪の行と謂ふは、彼の福業の行にして、是れ天・人の因なり。彼の罪業の行は地獄等の因にして、彼の不動の因は是れ[六]色界の因なり。彼の三種の果にて、王、若し中に於て、唯、諦かに因を知らんには、彼王は生死の曠野に迷はざらん。是の如き一切は、此れ有爲の中の所謂因果なり。王、因果を信ぜんには、過も壞はすこと能はざらん。能く過を畏るゝを以ての故に、不善の業を造作せず、常に善

【六】色界。三界の一、身體と云ひ、宮殿・國土と云ひ、物質的の物、總じて殊妙精好なれば色界と云ひ、四禪・十八天あり。

業を作す。王、若し、是の如くに因緣を信ぜんには、功德力の故に、現在世に於て、常に安樂を得ん。常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讚へられ、身壞はれて命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。因緣を信ぜし善業の因を以ての故なり。一切の衆生の第一の勝れし法は、謂はく、因緣を信ずるなり。是の故に、王の應當に精勤みて此の法を修習し、此の法を受持すべきは、謂はく、因緣を信ずるなり。

又、刹利王に復、一法有り。是れ三十一にして、應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。三十一とは謂はく、天を供養するなり。何なる因緣を以て、彼天を供養するや。善業を行ふが故に、天中に生るることを得て、大神通有り。(彼天は、)若し、我れ不善の業道を造作せんには、能く、我れを遮止せん。若しは夜、若しは晝、恒常に供養せば、一切の所在を皆能く調伏し、能く、夢中に於て、善・不善を示し、一切の國土の饒益せざる時に、能く爲めに護を作して、善法に入らしむ。彼天は是の如くに能く不善を遮へて、若しは夜・若しは晝、常に能く擁護することは、猶し父母の無量の方便にて種々に擁護するが如し。應に天を供養すべし。彼れ能く善を作さん。是の故に、王者にして彼天を供養せんには、法を愛するを以ての故に、惡業を離れ、他を侵すことを爲さざらん。邪見に非ざるが故に、是の如き意無し。『天を離れては業無く、此の天は一切世間を造作す』と。是の如き心無し。『一切の苦樂は皆天の作す所なり』と。是の如き心無し。『天を供養せんには、是の如き供養は我れに利益を爲さん』と。饒益を失はず、因果を謗るに非らず、邪見の心に非らず、彼王は是の如くに天を供養するが故に、他の供養を得。王、若し是の如くに常に天を供養せんには、功德の因緣にて、現在世に於て常に安樂を得ん。常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讚へられて、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。天を供養せし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に、復、一法有り、是れ三十二にして、王は應に作すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。三十二とは、謂はく、一切の時に正しく國土を護り、正しく國王を護り、法行に隨順することは、猶し父母の如くにて、一切の畏る處にては、無畏を施與す。無畏を施すが故に、晝夜常恒に善法を增長し、一切の軍衆は皆悉く敬愛して、心に捨離せず。國內の人民は或は財物を獻じ、或は復、讚歎して王の善き名を稱へ、或は、時、晝夜に心常に思惟し、其の人をして安隱なる樂を得しめんと欲す。彼王は是の如くに、一切の諸の衆生を利益するが故に、是れを以て、王をして自在を增長せしむ。自在多きが故に、五穀成熟し、國土增長し、一切の軍衆は皆悉く增長し、國內の耆宿は王の熾盛ならんことを願ふ。彼の是の如き王は國土を護り、法・財・名の三は日々に增長し、和合し相應す。王、若し是の如くに正しく國土を護り、一切の時に國土を利益し、瞋を離れ、貪を離れんには、功德の因緣にて、現在世に於ては常に安樂を得ん。常に利益ありて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讚へられ、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。國土を護りし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に復、一法有り、是れ三十三にして、王は應に作すべく、成就し、相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。三十三とは、謂はく、一切の時に、正しく妻子を護るなり。妻子を護るが故に、妻子は樂を得。王、若しは大臣、無量の福德・多種の福德を和集し、增長し、若しは財物有りて、何なる物有るも、何なる處・何なる時にても、物有れば惜まずして、妻子に給與し、若しは財物を與へ、若しは飲食を與へ、若しを牀敷を與へ、若しは衣服を與へ、若しは、或は抱き持ち、愛語し、信任し、心をして歡喜ばしめて、無畏を施與し、力の如くに分ち與へ、妻子に施與して舍內に福を得、無量種の舍內の福德を作す。此く妻子を護りて、大福德有り。若しは復、人有らんに、憐愍の心無く、或は貪の爲に覆はれて、妻子を憐まずんば、彼人の心は惡獸の殺生して肉を食ひ屎

を食ふ獸等より甚し。若し、人、出家して法に住すること能はずんば、彼人は應當に力の如く、分の如く正しく妻子を護りて安樂を得せしむるべし。若し、自ら力有りて憐愍の心無く、妻子を護らずんば、是の如き人を在家と名づけず、出家と名づけざらん。是の故に、應に資生を以て布施し、及び餘物を施し、若しは敎へて持戒せしむべし。王、若しは大臣、能く妻子をして戒を受け、戒を持せしむべく、敎へて布施せしめ、敎へて智を習はしめ、更餘に、次第に、正しく其の樂を護りて、次第に力の如し。王、若しは大臣、是の如くに作す者は、久しき時に樂を受け、久時き壽命ならん。王、若し是の如くに正しく妻子を護らんには、功德の因緣にて、現在世に於ては常に安樂を得ん。常に利益有りて能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられて、身壞はれ、命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。妻子を護りし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に、復、一法有り。是れ三十四にして、應に勤めて修習すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。三十四とは、謂はく、常に智を習ふなり。智を習ふ者を、一切の苦を滅すと名づけて、一切の生死の因を出離す。若し能く決定して智を習はん者は好し。彼の智者を、大闇に入り、墮ちて闇中に在り、無量種の衰惱を得し者を照明すことは燈の如しと名づけて、生死の曠野、險道の資糧、盲者と眼目、力無き者の力、伴無き者の伴、救無き者の救、病める者の良藥、迷ひし者の導師、生死の曠野、險道を遠く行きて飢渴して乏しき者の淸き冷水の飮食なり。生死の牢獄に繫縛せられし者の出要の因にして、親友無き者には則ち能く與へて利益を作す親友、目無き者には與へて光明の眼を作し、能く死時に於ては强き伴と作り、閻摩羅人[七]の來り近き至る時、死滅する時に於ては大力の伴と作り、一切の惡處にては能く閉塞を爲し、大險[八]岸に墮墜ちんとせる者には手を接して取るが如く、若しは同き侶と作りて、一切の樂を得、裸露なる者に於ては、是れ好き衣服にして、能く劫奪するもの無し。若しは破戒の罪火に怖畏し、熱惱の逼る者有らんには、能

【七】閻摩羅人。琰摩羅(Yamara,a)の人、即琰魔王より使者なり。極惡の人には琰魔王より鬼卒を遣して、之を引き取らしむるなり。

【八】岸の字は宋、元、明三本及宮內省圖書寮本に依れり。原本昰に作れり。

く無量に多き枝葉・華・淸冷なる蔭影を具足せる樹を作し、一切衆生の眼に觸[九]る所の者は皆愛樂を生ず。是の故に、智は無始より來の流轉せる世界の諸の衆生等に勝れ、能く現在・未來世の樂を與へ、餘法の能く樂の因を作すことは一の智に如くもの無し。常に應に識知を種々に修習すべく、心に正道を行ひ、心に善く思惟し、心中に安住し、餘法と共に動き、無量種の意・初・中の不善なる智を則ち能く除きて、能く實道を示さんには、此れ則ち安隱にして、一切を饒益し、皆能く成就して、涅槃の城を示さん。常に應に修習すべく、修習するを以ての故に、善き識知の故に、人・天中に生れて王と爲り、爲に勝れん。智の火は能く一切の煩惱を燒き、乃至、後時には寂滅の樂を得ん。更らに異法の能く一切の生死を出離せしむること、此の智に如く者無からん。是の故に、一切地を悕望するものは、應當に思惟して此の智を修習し、他人の爲に說くべし。王、若し是の如く常に智を修習し、他の爲に說き、樂みて修め、多く作さんには、功德の因緣にて、現在世に於ては常に安樂を得、常に利益有りて能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讚へられん。後に正しく流轉し、身壞れ命終らんには善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。能く修習し多くの智の因を以ての故に、終に涅槃を得ん。

又、刹利王に、復、一法有り。是れ三十五にして、應に勸めて捨離すべく、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。三十五とは所謂、一切の境界を樂まざるなり。若しは刹利王、境界を樂まんには、是の如き王は安隱を得ざらん。若し、王、聲・觸・味・香・色を樂しまんには、一切の方便にても安隱を得ざらん。亦復、正しく國土を護ること能はず、亦復、正しく自身を護ること能はず、常に境界を樂しみ、常に著する心の故に、法・物・名を失ひ、三、皆退壞す。境界を樂しむ王は餘王も能く破り、他に破壞せらるるが故に、自の軍衆等は皆厭惡を生じて、復、愛樂せず。厭離るるを以ての故に則ち王の位を失ひて、衰惱を得ん。衰惱を得るが故に、或は壽命を失ふ。是の故に、王

【九】觸の字は宋、元、明三本及宮內省圖書寮本に依れり。原本、羈の字に作れり。

は心を縱にして樂しみ、境界に著することを用ひざれ。若し心を縱にして大いに境界を樂まずんば、彼王は則ち能く正しく自らの法を護り、或る時は心淨くし正しく色・聲・香・味・觸等を攝めて、心を動かすこと能はず、久しき時に王と爲り、王は國土を領し、一切の軍衆は厭はず、捨てざらん。是の故に、他王も破壞すること能はず、命は久しき時に住し、熱惱を得ず、久しき時に樂しみを受け、今、既に樂を受け、後に樂しき處に生れん。王、若し是の如くに境界を樂まずんば、功德の因緣にて、現在世に於ては、常に安樂を得ん。常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて夜摩王と爲らん。境界を樂しまざりし善業の因の故なり。

又、刹利王に、復、一法有り、是れ三十六にして、王は應に作され、成就し、相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。三十六とは、所謂、惡人を國に住せしめず、調伏せざる者を國に住せしめざるなり。若し諸の惡人の惡業にて戒を破りしを、國に住せしめんには、彼王は則ち久しき時に王と爲らずして、則ち彼人は必らず殃禍を得ん。彼の大なる過の故に、國人破壞し、自在劣減り、五穀は登らず、人は業を作さず、王は則ち正しく國土を護ること能はず、一切の國人は王を樂まず、國土に住せる天は憐愍を生ぜず。其の國內に惡人住せるを以ての故に、其の國に調はざる人有るを以ての故なり。彼の調伏せる人も亦調伏せず、第一に業を修めし福德の人を惡人に近づくが故に、彼れに則ち失有り。是の故に、王は調伏せざる人を國に住せしめず。若し王、調伏せざる人をして、其の國に住せしめざらんには、惡法を行ふ人は則ち國に住せざらん。國に住せざるを以て、則ち上の過無し。又復、常に能く正しく國土を護らんには、一切の國人は皆悉く王の惡人をして國內に住在せしめざるを知りて、則ち惡を作さず。一切の國人は皆法を修行し、非法を作さず、彼れ能く是の如くに、法を行ふ王に隨ひ、一切の意念を皆悉く成就し、一切の國人は皆法律を知り、法律に依

りて行ひ、餘の不饒益は、生せず、起らず。彼王は是の如くに法を以て、救を爲し、法を以て伴と爲す。若し是の如くに、法を以て本と爲さんには、惡人をして其の國內に住せしめざりし、功德の因緣にて、現在世に於て、常に安樂を得ん。常に利益有りて、能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。惡人を離れし善業の因を以ての故なり。

又、刹利王に、復、一法有り、是れ三十七にして、王は應に勤めて修め多く福德を獲べく、一切の國人は皆厭惡せずして、成就し相應せんには、現在・未來の二世を利益せん。三十七とは、所謂、前の過去の舊法に依りて、先に得しを斷たず、法に依りて與へ、人、軍衆をして一切人民の先來より得し者を斷たず奪はざらしむ。若しは地、若しは物を本に依りて常に與へ、若し何人の種性次第有るも、先より得來りし者に隨ひ相應しく與ふ。一切の人民は則ち其の王に厭惡を生ぜず、左右の軍衆の一切は迭ひに相妨礙げず。王は憂ひ悔まず、熱惱を生ぜず。王位は動かず、國土亂れず、恒常に正しく住し、一切の職人は偏せずして、事を斷じ、强は弱を〔〇〕凌ず、法律に違はず、一切の國人は自の業を作すが如く心に歡喜を生じ、天、心に喜ぶが故に、時を以て雨降らし、寒暑は時に隨ひ、常に豐にして儉ならず、刀兵に劫らるること無く、龍は心に瞋らず、一切の善き天は其の國を捨てて餘國に行かず。彼王の國土は法を行ふを以ての故に、餘天壞はさず、人の因緣を以て、是の故に天有り、人力を以ての故に、天に則ち力有り。彼王は既に、是の如き過を知り已り、先舊に依りて與へて斷たず、奪はず。若し、王、善く行ひ、第一の法を行ひ、國內の人には、次第に來りしに依り、相應しきに隨ひて與へ、祖父より來りしに依り、應しき所に隨ひて與ふ。若しは王の國土に法をして久しく住せしめ、法に依りて正しく護り、彼れ次第の如く分に依りて與ふ。是の如く次第に法に依る王は、一切の天衆其の便を求めずして、其の國土を護り、彼王は大富の國土を具足す。

【〇】凌の字は、宋、元、明三本及宮內省圖書寮本に依れり、原文は陵に作れり。

大富なるを以ての故に、布施して福を作し、戒を持し、智を修さむ。王、若し是の如くに、法に隨ひて行ひしに依る功德の因緣にて、現在世に於ては常に安樂を得、常に利益有りて能く國土を護り、能く自身を護り、善人に讃へられ、身壞はれ命終らんには、善道天世界中に生れて、夜摩王と爲らん。法に違はざりし善業の因を以ての故なり。

若し、王、此の是の如き等の三十七法を成就して、彼の法を攝取し、彼の法に安住せんには、一切の功德を皆悉く具足し、彼の樂しき處より、復、樂しき處を得ん。爾の時、彼の善時と名づくる鵝王は爲に過去に尸棄如來の說き給ひし所の偈を說きて言はく。

若し、王の軍衆は淨よく、法を行ひ、諸根を制せんには、彼れ則ち法慧有りて、天世界中に生れん。　若し王、時に稅を賦し、法に依りて受け取らんには、彼れ則ち貪を捨離して、夜摩天王と爲らん。　若し王、忍びて愛語し、瞋りも喜びも動かすこと能はずんば、彼れ國土を護るが故に、天中に生れて最も勝れん。　若し王、朋と諍はずして、友と友に非らざるとを看ずんば、彼れは則ち心平等にして、天衆中にて勝ることを得ん。　若し王、勤めて宿を敬し、諸の尊長を供養せんには、彼の意堅くして貪らず、天中にて王と爲るを得ん。　若し王、先世に依り、祖父の法に隨ひて與へんには、彼れ衆生を奪はずして、天中の王と爲るを得ん。　若し王、施・戒を修めて、法を說き、諸根を制せんには、彼れ國土の人を護りて、天世界中にて貴とからん。　若し王、非法を捨てて、法を行ふ者を攝取せんには、彼れ正法にて持戒して、天中に生れて最も勝れん。　若し王、婦女を離れて、唯、善人に親近せんには、彼れ則ち無垢の意にて、天中に生れて王と爲らん。　若し王、普く信ぜずして、唯、善人を攝取せんには、彼れ命終り、眞の見にて、夜摩天中にて勝れん。　若し王、善き名を愛して、財物に貪り著せずんば、彼れ貪の垢を離るるが故に、夜摩天王と爲らん。　若し王、邪見ならずして、心正見を愛樂せ

んには、彼れ浮き見にて動かずして、夜摩天王と爲らん。　若し王、施・戒を勸め、亦、常に智を修行せんには、彼れ諸の國土を得て、後に生れて天王と爲らん。　若し王、常に愛語して、他人に最も樂を生ぜんには、彼の〔一〕國土清涼にして、天中に生れて最も勝れん。　若し王、實の語を説きて、動かざること須彌の如くんば、彼れ實の階梯を登り、天衆中にて幢の如からん。　若し王、因緣無くして、軍衆を擧げ下げせずんば、彼の王の民、厭はずして、命終らんには天王と爲らん。　若し王、好惡を知り、亦、力有ると無きとを知らんには、彼王、慧力有りて、夜摩に生れて王と爲らん。　三界にて第一に勝れたるを、所謂、三寶と名づく。王若し能く供養せんには、彼王、則ち天に生れん。　若し王、時に人を見て、能く國土を利益せんには、彼れ慢心を離れ、儉にて、天中に生れて最も勝れん。　若し王、睡の垢を離れ、則ち癡の過を離れんには、彼れ智の境と相應し、決定して天王と爲らん。　若し王、懈怠を離れて、常に堅固に精進せんには、彼れ過の海を竭し、來世には天王と爲らん。　若し王、友に堅固にして、常に法に隨ひて行はんには、彼れ善友に圍遶れ、天に生れて天王と爲らん。　若し王、惡友を離れて、常に捨離し、近づかずんば、彼れ則ち諂の毒を離れて、天に生れ、天王と爲らん。　若し王、瞋の害を持して、惡業を作ることを樂まずんば、彼れ惡の垢を離るるが故に、常に天中にて王と爲らん。　若し王、味を貪らずして、唯、善法を愛樂まんには、彼れ能く善道を示して、黠慧く、勝れし處に生まれん。　若し王、善く思惟し、善き法に隨順して行はんには、彼れ法の如く道を見て、夜摩天の處に到らん。　若し王、時を速に作し、是の如き法に依りて行はんには、彼れ速に諸の苦を離れて、夜摩天王と爲らん。　若し王、法にて國を利し、或は王法を以て護らんには、彼れ人の爲に讃へられ、天に生れても亦讃へられん。　若し王、十善を行はんには、是れ如來の説き給ひし所にして、彼れ是く法を修行せんには、天に生れて

〔一〕國の字は宋、元、明三本に依り、原本は得に作れり。

天王と爲らん。　若し王、因緣を信ぜんには、是の如き道・非道にて、彼れ則ち見の垢を離れ、黠慧くして、天に生れて勝れん。　若し王、天を供養し、應しき所の如くに作さんには、彼れ天の供養を得て、天中に生れて最も勝れん。　若し王、妻子を護らんには、心意濁亂れず、彼れ自らの妻は足るを知りて、天中に生れては最も勝れん。　若し王、境界にて愚癡の愛する所を遠ざけんには、彼れ則ち是の持戒にて、當に天に生れて王と爲らん。　若し王、惡人を捨て、法に依りて行ふ者に近づかんには、彼れは是れ善き法王にて、應に夜摩王と爲るべし。　若し王、法に依りて行はんには、是れ國土を護る主にして、應に一切地の主たるべく、亦、夜摩王たるに堪へん。

是の如き彼の善時と名づくる鵝王は、願力を以ての故に、彼の天中に生れて、鵝王と作り、既に、天主牟修樓陀を見て、本生の時に、尸棄佛より聞きし所の經法を念じ、天主牟修樓陀の心をして歡喜ばしむるが爲の故に、是の如くに說き已りて、天王に語りて言はく『天王よ當に知るべし、業、是の如きが故に、此の天處を得、大法勝れしを以ての故に、此處を得たり。若し此處を得ても、放逸を行はずんば、後に退く時に於ても心に悔を生ぜず。命盡き死する時、醜面畏る可き地獄の使も來り現前れざらん。汝、夜摩王、愼みて放逸すること勿れ、放逸なる行をする勿れ。汝、彼處に於て、我が音聲を聞きしが故に、來りて此こに至れり。汝、既に一切の境界を捨離して、法を聽かんが爲の故に、來りて此こに至れり。若し苦惱せる者の、法に隨順して行はんには、則ち奇特に非らざらん。若し天の樂みを受けて、放逸なる行をせざるは、此れ則ち難しと爲す。汝、夜摩主牟修樓陀、若し欲に著せずんば、則ち大樂を爲さん。若し、更らに餘天の汝に近づかんには、汝を愛し、汝に隨ひて行はん。軍衆と爲りし者は、善き生るる處を得、汝、善知識に近づくを得しを以ての故に、恒常に、樂を得ん。惡知識に近づかんには、樂は得べからざらん。汝、夜摩主牟修樓陀よ、此の天

衆に於て多く利益を作せ。此の諸の天衆は汝に近づくを以ての故に、二種の樂を得ん。謂はく、今世の樂、後には涅槃の樂なり。汝等、諸天、一切の軍衆は各各、還へりて自らの地處に向ひて去れ。我れ今、復、更に其の餘の放逸なる天の處に向はんと欲す。放逸を除かんが爲なり』と。

善時鵝王は是の如くに說き已れり。彼の諸の天衆は山頂の上より虛空に飛昇し、牟修樓陀夜摩天王は說法を聞き已りて、隨喜し讃歎して、天の宮殿に上れり。天衆に圍遶れて虛空に上昇り、諸の天衆と共に、諸の天女の衆に圍遶れたり。復、餘天有りて、山鬘山の千峰の中に住し、遊戲して樂しみを受け、是の如くに放逸なり。放逸を行ひて、境界に迷はされ、境界を愛樂みて、愛の爲に壞はさる。園林の中の蓮華・水池・意念の樹林に於て、是の如く、是の如くに迭ひに共に同伴し遊戲して樂を受け、五樂の音聲・天樂の音は譬喩すべからず。飲食の河に在りて遊戲して樂しみを受け、一切時の華・一切時の果・衆鳥の音聲を皆悉く具足し、蓮華饒き池を具足せる處にては、自らの業の化せる果にて、第一の樂を受く。是の如くして、乃至、善業を〔三〕受け盡くし、作り集めし業盡き、善業盡きしが故に、自らの業行の如く、或は地獄に墮ち、或は餓鬼に墮ち、或は畜生に墮つ。若しは餘業を以て、人中の同業の處に生るることを得んには、第一の富樂にて、或は海の畔に近く、或は其の餘の流水饒き處に在りて、大富の人と作り、廣多に商賈せん。或は國王と作りて、常に海の畔りに在りて、船舶を具足し、多くの財物有り、多くの人衆有りて、一切の人に愛されん。

【三】受の字は、宋、元、明三本、及宮內省圖寮本に依れり、原文愛に作れり。